二度目の転生はネギまの世界

翡翠色の法皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二度目の転生はネギまの世界

【Ｎコード】
Ｎ６２９１Ｎ

【作者名】
翡翠色の法皇

【あらすじ】
俺はある事件で死を迎え、天使の力によって「されど罪人は竜と踊る」の世界に転生した……はずだった。だが気がついたら、俺の目の前には天使が……っておい！　転生はどうなった！　努力なしに力を得ることを嫌う俺は、三度目の生に「ネギま」の世界を選択するが……はあ、いったいどうなる事やら。
ＰＶがミリオンを達成しました！　ご声援に感謝します。

第一話「転生したはずだよね、俺？」（前書き）

初めまして。この作品はネギまの二次創作になります。
原作にされ竜とありますが、呪式以外はほとんど関係ありません。
され竜のストーリーを見たい方はお戻りください。

第一話「転生したはずだよね、俺？」

今俺の前には、頭を下げ続けている金髪の女性っぽいヒトガタがひとつと、その横でため息をついて眼鏡の位置を直している黒髪の男性っぽいヒトガタがひとつ。どちらも、白を基調とした服を着ている。

「ねえ、確か俺って転生したんですよね？　なのにどーして、またこんなところにいるんですか？」

「ですからそれはこちらのミスだと謝っているでしょう、そんな目で見ないでください」

やや敬語を混ぜつつ、頭を下げ続けるヒトガタではなく、立っているだけのヒトガタに刺のある言葉を投げかけている俺の名前は、ジル・ドリイエ（仮）である。ああ、自分の名前なのに（仮）が付いているのには理由がある。それを説明するのには結構長い時間が必要だ。

それは二年ほど前の話になる。とりあえず転生の時に記憶のほとんどを失ったためよく覚えていないが、俺は死んだ。そしてこの空間につれてこられた。ええと、確かその時の説明は……そうだ、『世界の歪みの修正の犠牲になりました』だ。

世界の歪みってのは、頻繁に発生するようなものらしい。ただ、それが世界の危機に陥るようなレベルにまでいかないだけで。だけどそれは、たまに世界を崩壊させ得るまでに膨れ上がることもあるらしい。そうなったとき、その世界の管理者はその歪みを修正しなければならないそうだ。

その歪みの修正者、世界の管理者のうちの二人が今俺の目の前で頭を下げ続けているヒトガタとその横に立っているヒトガタ、他称『天使』だ。なぜ自称ではなく他称なのか聞いたら、どうやら彼ら

は自分たちを呼ぶのに、目の前で立っているだけの天使なら『第三統括世界管理者』といったように、番号管理されているからしい。天使とは、どうやら彼らが管理している世界の住人がそう呼んだのが始まりであり、説明を楽にするためにしか使わない称号だからだそうだ。

「でもねえ、まさか二年でこっちに来ることになるとは思ってなかったんですよ？　どうしてですか？」

「ですからそれは……」

「それは？」

そして本来、この管理世界に管理される側の存在が来ることはあり得ないらしい。関係者以外立入禁止（スタッフオンリー）ってやつだろう。だが、ある条件を満たした被管理存在は召喚される。それが、世界の歪みの『修正の』犠牲になった者、らしい。

歪みの犠牲者は呼ぶことはないそうだ。世界中の戦争や紛争のほぼ全てが世界の歪みだという。その犠牲者をすべて呼ぶなんて、確かにきりがないな。

だが、天使が責任をもってその歪みを修正する際に犠牲になった者には、責任問題が浮上するそうだ。そしてその清算の為に、被管理者は召喚される。そして俺は二年前、ここに召喚された十七人の被管理者の一人というわけだ。

「ちょっとした手違いだって「この馬鹿、第七統括世界管理者のせいなんですけどね。あなたが告げた条件をもとに転生させておいてくれと頼んだら、まさかあれほどひどい条件で転生させるなんて……いえ、馬鹿に頼んだ私も悪かったですね。すみません」第三統括世界管理者！　言い難いことを真実だけ告げないでください！」

「丸投げにしたんですか！？　まあそれはいいとして俺の告げた条件？　ええと……」

確かに俺は、転生時に条件をいくつか告げた。ただ、同時に転生することになった十六人全員が無欲すぎると言い、目の前の第三統括……言いにくい。第三天使が近代稀に見る無欲さだと驚愕したほどに謙虚な条件で。『されど罪人は竜と踊る』の世界に転生させることを選んだあとに付けた四つの条件は……確か。

一つ、三歳で前世の記憶を取り戻すこと。ただし名前や前世での生きざまといった記憶は、転生の仕様上の問題で消失は避けられない、と言われたが。

二つ、呪式士としての才能を与えてほしい。

三つ、鍛えた分だけ強くなる代わりに、最初の状態は低くていい。

四つ、原作メンバーの誰かと強い接点を持つようにしてくれ。

うん、この四つだったと思ったが……どうすれば二年で命を落とすようなことになるんだ？

「そうです！　あの条件を満たすなら、苦難があればあるほど強くなるだろうと考えたんですよ？　だから、神聖イージェス教国に、アルリアン人として転生させました。イーギー・ドリイエの弟として！」

「申し訳ありません。こんな馬鹿で」

「確かに馬鹿だ。大馬鹿だ」

おいおい、いくらなんでも、イーギーの弟はありえん。あいつは、強制収容所に入れられた過去を持つ。おそらくだが……

「あなたが想像していると思われる事と同じことが起こりました。あなたの転生先であるジル・ドリイエは二歳で強制収容所に入れられ、そのまま命を落としました」

「で、三歳で覚醒するはずだった俺の魂は、ジル・ドリイエって仮の名前だけ持って舞い戻ってきたってことか？　ふざけるなよ」

「な、なんで怒るんですか！？　私は良かれと思って「そろそろ黙りなさい、第七統括世界管理者」どうして！？」

第三天使が第七天使を制止させる。確かにこれ以上は（この管理世界にあるかどうかは別だが）時間の無駄だ。

だが、困ったことに、転生にもいくつかルールがある。そのうちの一つが、前世の記憶を持っている場合、同じ世界に転生することを禁ずる、というものだ。つまり、元の世界には戻れない、ということだ。

俺がされ竜の世界に行きたかったのは、呪式を使ってみたかったからだ。別の世界に転生して使ってもいいのだが、ここで第二のルールが立ちふさがる。その世界の法則から外れた能力を扱うことを禁ずる、というものが。

つまり俺は、この先呪式を扱うことは期待できない、ということになる。もしも転生先の世界法則と呪式法則が一致すれば呪式は使えることになるが、それは運任せにも程がある。

だから俺は、二番目に行きたかった世界の名を告げることにする。

「さて、もう第七統括世界管理者の言葉は無視しましょう。ところで次の転生はどうしますか？　本来ならば転生先の容姿や種族や年代の設定はこちらが決定するのですが……前回のお詫びです。四つの願いの一つで、これら全てを決定してもよいですよ」

「え、いいんですか？　では、転生先はネギま。性別は男性、見た目はＦａｔｅの英雄王だけど眼は翡翠色で。前世の記憶は前回と同じく三歳で思い出すようにしてもらって、年代は……真祖になることを条件で、原作開始七百年前にしてください。真祖化が無理ならもっと後にしますが……」

俺の好きな外面は、こんなところだ。一言で言えば旧セイバーだが、わかりやすく言えばこうだろう。ネギまなら、金髪に翡翠色の

眼でもおかしくはあるまい。

「転生先は第十八統括世界管理者の管理するネギま世界、見た目は緑眼の英雄王、三歳で前世の記憶を思い出す、年代は原作開始七百年前、と。真祖になる年齢はどうしますか？」

「え、そんなところまで決めていいんですか！？」

「ええ、あなたは他の転生希望者よりも圧倒的に欲が小さい。この程度は前回の余剰分とすら言えますから。それで、幾つで真祖になりますか？」

困った、こんな要求は通らないと思っていたから、考えていなかった。が、いちいち迷う必要もないか。

「二十歳くらいで。若すぎても悲しくなりそうですから」

「二十歳で真祖化、と。これで基礎となる情報の入力は終了しました。あと三つ、願いを叶えてから転生させます」

「あと三つ、か……」

まあ、一つは決まっている。駄目だったら駄目で、また考えればいい。

「呪式を使用できるようにするって、可能ですか？」

「呪式ですか？　ええ、大丈夫ですよ。あれは科学方面からアプローチした魔法ですから」

「え、そうだったんですか！？」

いや、確かに異世界からエネルギーを取り出す魔法である、って言うこともできるからなぁ、呪式は。

「それじゃあ、呪式士としての才能とある程度の呪式理論をくださ

い。独学で何とかするのはきつそうなので」
「そうですね。では、呪式理論を前世の記憶と一緒にお届けします。呪弾はないでしょうから、物理干渉能力もセットにしておきます。では、次の願いをどうぞ」

物理干渉能力。呪式士は呪弾を構成する物質を媒介にしなければ呪式を扱えない。この常識を覆す、というよりは、呪式理論が完成する前から呪式を扱っていた存在が持っていた、呪式を扱うために本来なら必須である特殊能力である。
なるほど。これがなければ呪式士にはなれそうにないな。さて、次の願いは……やっぱこれだろ。

「次はじゃあ、魔力や気、体術、呪力の最大値を青天井にしてください。鍛えれば鍛えるだけ強くなるって形で」
「前回も望んだものでしたね。ですが一つ言っておきます。呪力と魔力は同一のものとなります」
「ああ、呪式は魔法の一種でしたっけ」
「そういうことです。本来なら魔力の最大量は変わりにくい世界ですが……才能として、変化率を最大にまで引き上げておきます。さて、最後の願いをどうぞ」

最後の願い。これも既に決まっている。俺が俺であるための、一つの条件。

「転生したばかりの魔力量・気の量・魔法の腕・呪式の腕は一般魔法使い程度でお願いします」
「それは初期条件から変化させないことに等しいため、却下します。最後の願いをどうぞ」
「む……」

しまった、それは考えていなかった。確かに俺にとっては必要条件でも、天使からすればそれが当然であるのだ。

となると……前回の過ちを繰り返さないために使うべきか。

「では、少なくとも二十歳までは人として過ごせるように。つまりは、四肢の欠損や酷すぎる病気などが起きないように運命を調節してください」

「二十歳に真祖になるように調節しましたので、その願いはすでに受理されています。最後の願いをどうぞ」

……しまった。マジで最後の願いが思い浮かばない。第二のルールに抵触しないように能力を選ぶのは、以外と辛いんだぞ！

ええい、こうなったら、否定されてもいいから言ってみるか。

「じゃあ、時間操作能力は可能か？　東方の十六夜咲夜の能力だ。魔法系にしてもいい」

「時間操作能力、ですか？　どこまで可能になるか調べますので、少々お持ちください」

そう言うと、第三天使は何やら空中からレポートのようなものを呼び出してはひたすら読んでいく。確かに、時間操作能力は大抵の世界では不可能に近い。できてもかなりの制限がつくだろう。

ややして、ようやく顔を上げた天使の顔には、かすかな笑顔。

「結果が出ました。超鈴音が時間跳躍を使用しているため、魔力の消費を無視すれば、ほぼ全ての時間操作が可能となります。どこまでを可能としますか？」

「え？　マジで？　じゃあ、時間の加速から遅延までは、時間当たりの消費魔力量で速度が強く変化するように。あとは自分限定で時間への停滞。他者限定で時間停止と時間逆行。ただし、タイムパラ

ドックスは発生させたくないから時間軸逆行は不可能にしてくれ」
「時間操作能力（操作対象：時間軸逆行以外）、と。魔力消費量はかなり莫大ですが、修練および術式の改良で魔力消費量は減らせます。おそらく、これがお望みですよね？」
「もちろん」

どうやら第三天使は、俺の好みを覚えてしまったらしい。うれしいが、好みを覚えてくれるなら、隣で声もなくさめざめと泣いている女性型である第七天使のほうがいい。男性型に趣味を覚えられても、ねえ。

「ですが、良いのですか？　前回も確認しましたが、わざわざ自分を弱く設定する必要はないのですよ？」
「はっ、前回も言っただろう。俺のモットーは……」

本来の口調に戻し、わざと少しため、笑顔を作ってから言い放つ。

「『進化をやめた生物に、生きる価値はない』だ。自分の足で進むことを忘れ、自己を磨きあげることを忘れ、停滞することに意味はない。そのためには、最初は弱くなくちゃいけないんだからな。それはそうと、こっちも聞いておきたいんだが」
「なんでしょうか」
「前回も確認したが、マンガや小説の、物語の世界の人間って、生きているのか？　生きていないのか？」
「前回も言いましたが、物語の世界とは……」

第三天使も、俺と同じようにわざわざためを作り、表情を変えずに言い放つ。

「世界があって、その世界を疑似観測できた者が、物語にするので

すから。世界があって、そののちに物語が生まれる。あなたが転生する世界でも、全ての存在は生きています」

「そんな世界に、イレギュラーを入れてしまっていいのか？　原作なんて跡形も無くなるかもしれないのに？」

「その世界のコピーに転生させますので大丈夫です。あなたの知るタイプムーン的にいえば、並行世界ですね。安心して原作破壊してください」

ここまでは、ほぼ前回と同じ。まあ、ここから去る俺からの、最後の確認ってやつだ。

「……第三統括世界管理者……ネギま世界のコピー……持ってきた……はい」

声が聞こえたので左を向くと、銀髪に翡翠と琥珀のオッドアイをしたロリ巨乳という、二次創作で扱われるような要素をこれでもかと言わんばかり詰め込んだ天使が、ビー玉程度の大きさの何かを持ってやってきた。

先ほど第三天使が口にした、第十八天使だろうか。

「ありがとうございます、第十八統括世界管理者。さて、転生者、ジル。あなたの人生に幸あらんことを」

「そうだな。んじゃな、何事も無ければもう会うこともないだろうな」

第三天使の手に渡ったビー玉が発光し、俺の視界が光にのまれていく。意識が遠のいていく。

さあ、第三の生の始まりだ！

第一話「転生したはずだよね、俺？」（後書き）

うん。文才がないのはつらい。
稚拙な文章で申し訳ありませんが、応援よろしくお願いします。

第二話「ネギまの世界……だよな？」（前書き）

文才が足りない……誰か、分けてくれ。

第二話「ネギまの世界……だよな？」

やあ、俺の名はアルトリウス・ノースライト。つい先日七歳になったばかりの転生者さ！　なんて挨拶はどうでもいいとして、どうやら転生には成功したようで、前世の名前やらなんやらは思い出せないが、ネギまの世界に来たようだ。きちんと見た目は英雄王。ただし英雄王（子供）だがな。

ん？　どうして発言が曖昧かって？　そりゃ、俺の姉や幼馴染の名前を聞けばいやでもわかるさ。さて、それはいいとして、時間操作術式の改良でもするか。今のままじゃ、半秒も時間を停止できずに魔力が尽きるほど効率が悪いからな。目指せ、瀟洒なメイド長。

「……びに来……よ、……ウス。アルトリウス？」

……っと、ついつい夢中になっていたが、姉さんが俺を呼んでいるな。集中しすぎるってのも考え物だな。さて、術式はほんの少し改良できたおかげで、消費魔力を０．１％程度は軽減できたし。この程度でやめて姉さんのところに行くか。

「遅かったけど、何かしていたの、アルトリウス？」

「ちょっと魔法の練習をね、レナ姉さん。それで、何か用？」

そう、俺の姉の名前はレナ・ノースライト。ＲＡＧＮＡＲＯＫの登場人物だ。性格こそ違えど見た目はそのままだから、最初俺はＲＡＧＮＡＲＯＫ世界に転生させられたんじゃないかって思った。

だが、それは思い違いだった。それを、幼馴染の名前を聞いたと

きに思い知らされた。

「アリステルちゃんとディートリッヒちゃんが遊びに来たから、呼びに来ただけよ」

「ふうん。わかったよ」

アリステル・シュナイダーとディートリッヒ・シュルツ。共にオイレンシュピーゲルとスプライトシュピーゲルに登場する少女だ。こちらは見た目と性格はそのままだ。二人以外の四人はいまだに見かけないし、ＲＡＧＮＡＲＯＫの登場人物も二人以外は見かけないことから、偶然か共通人物として存在しているかだろう。

両方とも女の子、それも二つ年下だ。小さな村だから、同年代は意外と少なく、遊ぶにしても彼女たちくらいしかいないのは事実だが、釈然としない。

だから仕方なく、少しだけ姉さんをからかってから遊びに行くことにする。

「で、その間に姉さんはリロイ・シュルツさんとお話しするんだね？　ごゆっくり～」

「そ、そそそ、そうだけど、ごゆっくりって何よ！　そういうのはリロイに言いなさい！」

顔を真っ赤にして姉さんは叫ぶ。リロイ・シュルツ。ファミリーネームこそ違うが、やはりＲＡＧＮＡＲＯＫの登場人物、リロイ・シュヴァルツァーその人だ。ちなみに姉さんと同い年で、ディートリッヒの兄にあたる。

「え？　リロイ義兄さんがどうしたの？」

「ア～ル～ト～リ～ウ～ス～！」

そして、姉さんの婚約者でもある。まだ二人とも十二だから結婚はしていないけど、二人ともまんざらではないようだから、もう少しすれば甥の顔を拝めるかもしれない。

それじゃ、姉さんが完全に怒る前にとんずらさせてもらいますか。

「それじゃ、二人を待たせるわけにもいかないから、行ってきます！」

「待ちなさい！」

ダン！　と踏み込みの音だけを残して家の外へ逃げる。捕まって姉さんに叱られたあげく、幼馴染に責められるのは勘弁だからな。

「ったく、アルトってば遅いっすよー。オレを待たせるって信じらんねー」

「あたしは別に待ってる気はしないけどな」

「ごめんごめん。姉さんをからかってたら少し遅れた」

口調が悪く、少し間延びした感じに喋るのがアリス。男勝りに喋るのがディー。基本的にはアリステルをアリスと、ディートリッヒをディーと呼んでいる。

だってさ、ディートリッヒって男性に付ける名前だし。性格的に男勝りになったのはこの名前のせいじゃないのかと俺は睨んでいる。

「それじゃ、いつもと同じく近くの森で魔法の練習でもしようか。杖は持ってきた？」

「とーぜんっす」

「ああ」

そして三人とも魔法使い見習いだ。俺以外は初心者用の始動キー（プラクテ・ビギ・ナル）を卒業してはいない。とはいえ俺も、始動キーはまだ使っていない。

少し長めに設定したから、言い慣れるまでは使用しない方が良いからな。

で、森までやってきたわけだが。いつも思うことだが、二人とも飲み込みが早い早い。魔法の射手程度なら失敗することはまずない。アリスは飛行術に優れ、ディーは身体強化に優れている。ネギまの原作に従うなら、アリスは移動砲台型の魔法使い、ディーが魔法剣士だろう。

俺？　俺はそこまでの才能はない。神に願ったのは成長性であり、才能ではないからだ。だがあえて言うならば、後方支援型の魔法使いだろう。成長し、体術もまともに使えるようになれば話は変わるだろうがな。

「プラクテ・ビギ・ナル　『魔法の射手　光の三矢』！」
「プラクテ・ビギ・ナル　『魔法の射手　雷の三矢』！」
「あっはは、ドキドキしてきた～！」

俺の光の矢とディーの雷の矢を、アリスは飛んでかわす。飛行術の適性が高いため、通常ではありえない速度・角度で曲がるアリスに、俺たちの矢はかすることすらできない。まあ、簡易障壁すら突破できない程度に威力を抑えているから、直撃してもかすり傷一つないはずだ。

「ザーフィア・フォイ・エル・スプライト　『魔法の射手　火の六矢』！」

「お、個人用の始動キーか……かっこいいじゃん」

おい、始動キーを個人用に変えるのは構わないが、森の中で火属性の魔法を使うな！　ディーも、森が燃え始めているのに落ち着いて、いや、現実逃避して批評するな！

あああああ、俺の得意属性は光と火だから鎮火できない。氷と闇にも適正はあるが、鎮火できるほどの威力はまだ出せない。呪式には一応水を出すものもあるが、瞬間発動できるほど演算に長けているわけでもない、ってか、瞬間発動なんかしようとしたら脳神経が焼き切れる。

どうすれば、どうすればいい！？

「チク・タク・ク・ロック・オクロック　来れ氷霊　大気に満ちよ白夜の国の凍土と氷河を　『こおる大地』」

「アル・イル・ル・ディア　『魔法の射手　戒めの風矢』」

森林火災になりかけたところで、高速詠唱された『こおる大地』が全ての火を包み込み消し去っていく。ついでに飛び回っていたアリスは捕縛されて空中に固定される。

この声にこの始動キー。どう考えてもあの二人だ。俺、逃げてもいいでしょうか？

「あれ、兄貴にレナさん。あたしたちに何か用か？」

「まあそれもあったのだけれど。とりあえず全員そこに座りなさい」

……遅かった。姉さんは怒らせると本当にやばい。冷徹で容赦がなくなる。リロイさんに期待したいけれど、リロイさんはリロイさんで『あきらめろ』と目で訴えている。

「森で魔法の練習をするのはいいけれど……」

「……だから。わかった？」
「「わかりました、ごめんなさい」」

大体一時間に及ぶ長々とした説教が終わりを告げる。俺たちのことを思いやっての怒りであることは分かっていても、あの冷え切った眼で見られると背筋が凍るような錯覚に陥る。

「さて、俺から言わなきゃいけないことがある。村の男大半、しばらく村を空けることになった」

……ん？　男が総出で村を空けるような出来事なんてあるのか？　しばらくったって、リロイさんのしばらくは数日ってわけじゃないだろうし……

「ルドルフ・ハプスブルグがこのあたりにまで手を伸ばしたらしいわ」
「で、俺らのような野良魔法使いまで駆り出された。よかったな。まだ幼いあんたは選考外だ」

ルドルフ……ハプスブルグ！？　１３００年ごろにドイツ王になった、あのルドルフ一世か！？　まだ無名に近いルドルフ一世が侵略する土地なら、ここはドイツからほど近い場所だ。だとすると、ここはオーストリアかそのあたりだろう。

やべー。しばらくって、数年単位の可能性が出てきたぞ。それまではほとんどこの村の守りがなくなるってことじゃん。

「で、だ。戻ってこれたら……」

なんだ？　リロイさんと姉さんが顔を赤らめるとは。まさかここで告白するわけでもあるまいし。

「私たち、結婚するわ」

「「「……ええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」」」

まじか、マジで告白しやがった！　むしろここに来る前にプロポーズしてたな！　最大級の死亡フラグをありがとう！　リロイさんなら死にそうにないがな！

「まあ、その、なんだ。俺が帰ってくるまで、村を頼んだ」

「あ、はい。わかりました」

転生前は、魔法使いなら女でも何とかなる気がしていたが、最後は体力勝負になる。女よりは男のほうが、最終的には有利になることが多い。ならば数少ない男である、俺が頑張るしかない。

村に俺たちが帰る頃には、リロイさんを含めた男性陣のほとんどがもういなかった。

しばらく、さみしくなるな。

第二話「ネギまの世界……だよな？」（後書き）

七百年前の登場人物

アリステル・シュナイダー　スプライトシュピーゲルより。ＭＳＳ要撃小隊＜？の妖精（フォイエルスプライト）＞隊員で通称『青の火（ザーフィア）』。

この世界ではオリ主の幼馴染。火属性に長けており、飛翔もうまい。

始動キーは『ザーフィア・フォイ・エル・スプライト』。

ディートリッヒ・シュルツ　オイレンシュピーゲルより。ＭＰＢ遊撃小隊＜？（ケルベルス）＞小隊長で通称『黒犬（シュヴァルツ）』。

この世界ではオリ主の幼馴染。風と雷に秀でている。始動キーは『アイン・ベレンダー・シュヴァルツァー』。

リロイ・シュルツ　ＲＡＧＮＡＲＯＫより。傭兵ギルド元Ｓ級傭兵『疾風迅雷のリロイ』。原作での名前はリロイ・シュヴァルツァー。

この世界ではシュヴァルツつながりでディートリッヒの兄に。妹と同じく風と雷に秀でている。始動キーは『アル・イル・ル・ディア』。レナの婚約者。

レナ・ノースライト　ＲＡＧＮＡＲＯＫより。フリーの暗殺者『冷血のレナ』。優しい性格は生来のもの。

この世界ではオリ主の姉で氷に長けている。始動キーは『チク・タク・ク・ロック・オクロック』。

第三話「そんな原作再現はいらん！」（前書き）

意外と時間がかかってしまいました。
待っていてくださった方には申し訳ないです。

第三話「そんな原作再現はいらん！」

さて、時が経つのも早いもので、俺は十五になった。リロイが戦争に出たのが七つのころなので、あれから八年経ったことになる。戦争自体は一年前に終結しているが、リロイが狩りだされた戦場はこの村からかなり離れている。別に切羽詰まった用事があるわけでもないから、ゆっくりと旅をしながら帰ってくるだろう。

その間に俺はかなり魔法の腕を上げた。戦争のあおりで山賊と化した兵士相手に魔法を使うこともあったからだ。とはいえ、才能の差で年下であるディーやアリスには負ける。あの二人に勝てるのは魔力量だけだ。それすらも生まれつき魔力量の多い姉さんには負けるが。

……やはり才能も貰うべきだったか？　これほどまで差がつくとは思わなかった。

「あのさ、どうしたの、アルト？」

「何でもないさ、アリス」

そして（個人的に）一番変化があったことと言えば、俺とアリスが婚約したことだろう。さすがに結婚するにしても十三は早すぎるとのことで、あと二年したら結婚することになっている。

そういえば、二十歳で真祖化する運命を固定したとか言われたが……アリスも真祖になるのだろうか？　まあ、それはその時でいいか。

「さて、時間術式もそれなりに形になったな。この一週間で１％は消費魔力を軽減できるようになったからな」

「さすがに加速中にぶっ倒れるとかはもう無いっしょ？　なら大丈夫だって」

五年前、山賊が村への大規模侵攻してきた。その時に俺は時間加速を限界まで使って村を守ったが、体感時間で二分弱、実時間で三十秒程で魔力切れでぶっ倒れてしまったのだ。

それからは時間術式の強化に励み続けた。あのころに比べれば、消費魔力は３０％ほど軽減できているし、操作可能限界も四倍から十倍まで上がっている。魔力量上昇もあるので、四倍加速なら実時間で四十五秒は持つはずだ。体感だと百八十秒だから……三分か。時間停止はいまだ一秒も止められないし、止めたらそれで魔力切れ。まだまだ改良の余地があるな。

そして呪式だが……これは未だに、実戦ではまともに発動することができない。魔力量は十分だが、呪式の構築に時間をかなり費やさないと脳が壊れる。最下級の第一位呪式ですら一分ほどかけてようやく、ひどい頭痛がするレベルで発動するほどだ。まったくもって実用的ではない。法珠が欲しい、切実に。

「……ん？　なんか騒がしいな」

「なんかあったんじゃねーのか？　あたしは知らないけどな」

まあディーの言うとおり、何かがあったのだろう。俺も知らないが。

しかし、山賊の襲来でもあったか？　それならば騒がしくなる前に『襲来だー！』とかそんな声が聞こえるのが先になるだろうから……

「たっ、大変だ、ディートリッヒ！　リロイが、リロイが……！」

「お、兄貴が帰ってきたのか？　にしては」

「死ぬか死なないかの瀬戸際だ！」

その言葉で、俺たち三人の間にも緊張感が走る。あの殺しても死

ななさそうなほどタフなリロイが、瀕死？

「兄貴！」

ディーが慌てて駆けていく。アリスも飛び出そうとするが、俺は確認すべき事を聞いておく。

「今、どこで治療を！？」

「教会だ！　治療系術師を集めている！　君たちは使えないだろうが、治療を使える術師を集めてくれ！」

俺は脳裏で一つの呪式を構築する。さすがに生体生成系呪式第四階位と比較的高位に位置する、未分化細胞を用いた治療呪式である＜胚胎律動癒（モラックス）＞はまだ使えない。だが、化学練成系呪式第一階位に属する増血剤を生成する治癒補佐呪式の＜殖血（ゾーチ）＞なら可能だ。

教会まで走れば五分ほど。五分あれば、脳へのフィードバックなしに第一階位呪式を扱える！

「アリスは治療術師を集めろ！　俺はこれでどうにかしてみせる！」

呪式の組成式をわずかに見せ、教会へと急ぐ。アリスと姉さんには呪式については少しだけ教えてあるから、組成式を見せれば何をするか分かるだろう。

教会に到着したが、リロイの姿は見えない。てっきり礼拝堂で治療していると思ったが、違ったか？

「む、アルトリウス君か？　こっちだ」

奥からリロイの父が出てくる。その手が血に濡れていることから、必死で治癒を使用していたことが想像できる。あまり得意ではなかったと記憶しているが……父親の愛だろうか。

シュルツさんに連れられて礼拝堂の奥、神父様の自室となっている部屋まで行くと、村人が三人ほど倒れていた。ぱっと見た限りでは、魔力切れだ。

部屋に入れば、何やら考えている神父様に、青い顔で横たわるリロイに泣きついているディーと姉さん、そして治療を続けている二人の術師がいた。術師はどちらも魔力切れが近いのか、息が上がっている。

俺は彼らの後ろから近づき、こっそりと＜殖血（ゾーチ）＞を発動する。青白いリロイの顔に赤みがわずかに戻ったから、発動には成功している、と思いたい。

しかし、この調子じゃリロイは死ぬ。腹部が未だにぐしゃぐしゃであることに加え、どう考えても治療魔法の効果があまり出ていない。おそらく魔法攻撃、それも治癒妨害の呪いがたっぷりと込められたものを受けたのだろう。

「……一か八か、わが教会に伝わる儀式魔法を使用してみますか？　禁呪として封印されていたものですが、瀕死状態からの蘇生も可能であると書かれていました」

「なんでそんなものが禁呪として封印されているのですか……」

「蘇生が神の定めに反する行為だからでしょう。しかし、未だに死していない彼になら、使用しても神は文句を言いますまい」

もう、俺に出来ることはこの場ではないな。

姉さんとディーに一声かけ、俺は教会から立ち去ることにした。

ん？　雲行きが怪しいな……今晩、一雨来るかもしれないな。

そして夜になった。夕方頃にディーが家に来て、儀式魔法は無事発動したと教えてくれた。

だが、未だに姉さんは帰ってきていない。婚約者の務めとして、目が覚めるまでそばにいたいそうだ。アリスも姉さんを心配して教会に泊まり込むと言っていたな。そして対照的に、ディーは自宅に戻っている。『あの兄貴のタフさなら、明日にはもうピンピンしてるさ』とは、彼女の言だ。

確かに、あのリロイなら明日には元気になっていると信じられる。だが……どうにも妙な胸騒ぎがする。何か見落としているような、奇妙な違和感。

だがまあ、こんなことは日常茶飯事だ。胸騒ぎがよく当たるとは、胸騒ぎがしたときに何かが起きたことは、胸騒ぎがして何も起きなかったことに比べて忘れにくいからだ。今回もまた、何事もないだろうな。

ああ、雨が降り始めたな。この嫌な考え事も押し流してくれればいいのに。

おやすみなさい。

Ｓｉｄｅ　Ｌｅｒｏｙ

っつ――ここは……ああ、村の教会か。

たく、あの魔法使い達、何が目的だったんだ？　まさかあの戦争で俺が何かしたのか……つっても多すぎて心当たりが分からないな。

っと、ダイオラマ魔法球は無事……だな。せっかく頂いたものなのに、壊れでもしたら目も当てられないからな。

……あれ？　死にかけたせいかな、やけに喉が渇く。

しかもこの音は、外で雨が降ってやがるな。

ああ、ちくしょう――雨がいつまでも降っているせいで、余計に喉が渇く。

……ん？　なんで雨が降ってると喉が渇くんだ？

……考えても答えは出ねえな。

くっそ、考えてたら余計に喉が渇いてきやがった。

……お、いいところに喉の渇きを潤せるものがあるじゃねーか。

早速いただきますか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして一夜明けた、なんて言うとかっこよさげだが、結局はただ寝て起きただけだ。っと、まだ姉さんは帰ってきていないみたいだな。どうせリロイと一緒に教会にいるのだろう。

……うーん、なんだか昨日の胸騒ぎがまだおさまっていないな。何だかわからないのも嫌だし……書き出してみるか。

「えーっと、まずは……『封印されていた禁呪』だよな。そして『未知』に『儀式』に『蘇生』といったところか」

つっても、この程度じゃ何なのかわかるわけないよな。教会の神父にもう少し詳しく聞いとけば……『教会』？　まて、今何か繋がった気がしたぞ。『教会』が『禁呪』とし、『封印』しなければならない『未知』の『儀式』、だよな。

十年以上見てないから思いだせるかわからないが……ネギまで未知の儀式で、教会が禁呪指定するもの。それに該当するものは――くそ、やっぱり出てこない。

本編で出てきて、確実に読んだことがあるやつなのは思い出せているんだけどな……本編を思い出せるだけ順に書き出すか。

「『ネギの麻帆良入り』、『アスナへの魔法ばれ』、『頭の良くなる魔法図書事件』で……次は『桜通りの吸血鬼事件』だったよな……って、あああああああああああああ！！！？」

そうだよ、何で出てこなかったんだ！　教会が嫌悪するものと言えば、吸血鬼。吸血鬼の真祖になるためには秘伝とされる魔法を使う。その秘伝の魔法が儀式であってもおかしくはないし、むしろ肉体を根本から変える以上、儀式である可能性はとても高い。そして真祖化すれば、大抵の傷は治るから蘇生と言えなくもない。

つーか、神父。それ禁呪として封印された秘伝儀式じゃなくて、異端指定されただけじゃん！　秘伝ってのも、真祖狩りのために研究するために、『秘密裏に伝える』的な感じの。

「って、呆けてる場合じゃねぇ！」

真祖化してすぐの精神状態がどうなっているのかは、俺には想像できない。だが原作のエヴァは、自分が人から外れたことを知り、犯人を恨みを持って殺したと言っていた。もしリロイもそうなら……姉さんが危ない！

「でき……るか！？　契約執行　１２０秒　アルトリウス・ノースライト！」

自己契約執行。自分自身を魔力でブーストする荒業だ。魔法適性はあれど魔法才能のない俺には荷が重すぎる技術だが、そうも言ってられない。

限界を超えないギリギリの速度で、教会に向けて一直線に駆けだした。

自己契約執行時間が切れる前に教会に着いたのは良いが……なんだこの人の集まりは！？

「なぜだ……どうして俺は死なない！？　なんで死ねないんだ！？」

教会の中から響く、嘆くようなリロイの声。くそ、遅かったか……！

人をかき分けて教会内部に入ると、涙こそ流していないが、死ぬ

ほどの絶望感を味わい悲しんでいるといった顔をしたリロイの姿が。彼の服や周囲はすでにボロボロで、魔力切れか息も絶え絶えに倒れている魔法使いもいる。

そして、そんな彼を無視してリロイを寝かしていた部屋に入る。そこには、きょとんとした顔のまま瞳を濁らせているアリスと、どこか悲しそうな、だけど慈愛を感じさせる表情で目を閉ざした姉さんが、首筋に二つの孔を空けて倒れて……

「あ、ああ、あああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

絶望する。吸血行為をしたリロイと、気付けなかった愚かな自分に。

「……イグネ・ナチュラ・レノヴァトール・インテグラ　全てを抱擁す　氷雪の女王　彼の者に　命散らす凍える吐息を　『氷葬の棺』」

アリスの目を閉ざし、二人に永久凍結魔法を使う。石化魔法のように解呪すれば戻るのではなく、最低でも食らった場所は凍傷。最悪は壊死し、全身に回れば死が確定する。つまり、成功すればそれで終わりという、効果だけ聞けば極悪の魔法だ。しかし魔力量の少ない一般人程度の魔力があれば完全にレジストされてしまうため、死者か極限まで弱らせた相手にしか使えない、使い勝手の悪い魔法である。

だが今回は、死した二人を永劫に残すために『氷葬の棺』を選んだ。俺はあと五年で不老不死の真祖になる。俺が死ぬであろうその時まで、彼女たちと共に在りたいから。

と、氷に反射して、俺の背後に来ていた存在に目が行く。

「なあ、神父様」

俺は背後にいる人物――神父に語りかける。ほとんど独り言のように、だけど聞こえるように。

「リロイを吸血鬼に変えた術式、教えてくれないか？　姉と婚約者の仇を取りたいし、リロイの望むように、殺してやりたい」

「……これは私の罪でもあります。もしも不死殺しを完成させたら、私と秘伝書も、消し去ってくれますかな？」

「ああ。約束しよう」

そして――俺は真祖を殺せるだけの術式を、作り始めることとなった。

第三話「そんな原作再現はいらん！」（後書き）

原作再現：大怪我を負ったリロイの怪物化＆暴走

ちょっと聞きたいのですが、木乃香の魔力量って、一般魔法使いの何倍くらいなんでしょうか？
原作では言われていなかったような気がするんですが、見逃しただけかもしれないので、わかっている方がいれば教えてください。

第四話「そういえば、真祖殺しって可能なのか？」

Ａｒｔｏｒｉｕｓ’ｓ　Ｄｉａｒｙ

一年目　事件当日＆収穫祭直後

これから真祖殺しの魔法を開発する。その記録として日記を書くことにする。

それに先立ち、永久凍結魔法処理したレナ・ノースライトとアリステル・シュナイダー両名を、リロイの所持しているダイオラマ魔法球内に保存することとなった。このダイオラマ魔法球、スノーグローブサイズと結構小さいが、墓地としてしか使用することはないだろうからそこはどうでもいい。

リロイ自身もそのダイオラマ魔法球内に篭っているが、どうせ自責の念に駆られているのだろう。

まずは開発にあたり、真祖化の魔法を調べつくすことにする。

理由としては、

1. 真祖化のメカニズムから、真祖の弱点を探る。
2. 真祖化の解除方法の模索。
3. 真祖の再生能力の限界を知る。

以上三点があげられる。

次に、存在する魔法を可能な限り調べることにする。

理由は、

1. 真祖殺しを可能とする魔法が存在するかどうかの確認。
2. 存在する場合、それを発動するのに必要な魔力がどれくらいかを調べる。
3. 存在しない場合、効率よく真祖を狩るための新魔法を開発する

基礎とする。
以上三点があげられる。

一年目　もうすぐ年が明ける

真祖化の魔法を調べ、本日発見したことがある。
本来の肉体と魂の関係は、『肉体とは魂を入れる器であり、器が破壊された場合、特殊な才能と状況がないと魂をこの世に維持できないため死に至る』ものである。
この原則があるため、通常ではどれだけ超再生を誇ろうとも、魂を留める核たる脳が破壊されると再生不能に陥るのである。
しかし真祖化すると、全身の細胞一つ一つが魂を留める核になる。事実上、細胞一つでは魂の維持が不可能なので、数十から数百の細胞が残っていると全身の復元がなされるということが分かった。
ここから、細胞を一つ残らず破壊すれば真祖を殺せることとなる。

しかし、同時に見つけたものが厄介である。それが真祖流の自己保存である。
先ほども記述したが、真祖は細胞がある程度存在していれば、時間はかかるが完全再生することが可能である。そして生物全てが所持する自己保存が、真祖では厄介なものとなってしまう。それは、生命の危機に瀕している際、無意識下で自らの一部をコウモリとして分離するというものである。
つまり、小規模魔法で滅ぼそうとすると、滅びきらない肉体の一部が勝手に分離し、新たな肉体を勝手に組み上げてしまうということだ。大規模魔法でも、万一肉体の一部が吹き飛ばされて放置されるとそこから再生してしまう。これらから真祖殺しは難しいとされているようだ。
過去の真祖殺しは、多くの魔法使いが逃げ道を塞ぐように広域殲

滅魔法を使用することで成していることから、難易度の高さは一級であることが分かる。

この村には高位の魔法使いは少ないため、内々に処理するには新たな魔法の開発がほぼ必須であることが証明された。

この日記においては、年が明けた時に何年目かを変えることとする。よって数日後からは二年目と記述することになる。

二年目　夏の盛り

今日は久々にリロイがダイオラマ魔法球から出てきたが、日光に焼かれて苦しがっていた。どうやら伝承にあるように、吸血鬼は日光に弱いようだ。

さらに詳しく調べるためにリロイに協力を依頼したところ、快い返事が得られた。ここからはリロイを用いた人体実験の様子を記す。

実験１　日光でダメージを受けるが、なぜランプの光は大丈夫なのか

■■■の利点としてある程度の知識があるので、それを用いて実験を行う。

光の■■を少しずつ変えていき測定したところ、■■領域に至ってしばらくしたところで強いダメージを受けていた。

ここから、吸血鬼が苦手とする光はＵＶ、すなわち■■■であることが分かった。

そこで呪式を用いてリロイの腕に強力な■■■を浴びせたところ、ダメージを受けて苦しむようだが、肉体的にはわずかな変化しかなかった。それもすぐに再生して消失した。

リロイに聞いたところ、真祖化したばかりのころは今よりも変調があったようだが、今ではそれほどでもないそうだ。

結論：■■■では真祖に嫌がらせはできても殺害に至ることは不可

能。時間がたてば、純粋■■■でも嫌がらせをすることは不可能になるかもしれない。

実験２　吸血鬼の代表的弱点、ニンニクの効果はあるのか
　嗅覚が鋭くなっているためか、拒否反応を示したが、それだけであった。葱も同様であることが判明した。
結論：これも嫌がらせの域を出ない。

実験３　吸血鬼は流水を渡れない。これは真実かどうか
　リロイを水に入れてみたところ、リロイが虚脱感を感じたと報告。さらにリロイからの魔力流出を確認できた。
　どうやら真祖の魔力は水に対して親和性が高く、触れているだけでどんどん魔力を失ってしまうようだ。
　しばらく放置したら水への魔力流出は確認されなくなり、リロイの虚脱感も消失した。どうやら水が保持できる最大魔力量に達したものと思われる。
　近くの湖に突き落とすと長期間にわたり魔力流出が続いた。この状況下でリロイの体を破壊してみたが、水に触れている場所・触れていない場所問わずコウモリに変わり、水上にて再生を行った。
　水属性の魔法使いに水球を作成してもらいリロイを入れたが、変化はなかった。しかし呪式では効果はあった。
結論：流水もしくは湖や海のような莫大な水に落とせば、真祖から魔力を奪うことができると同時に反撃を封じることができる。しかし殺害には至らないため、これも嫌がらせの域を出ない。魔法的に生み出した水では元々魔力が満ちているためか効果は得られないため、真祖殺害に水属性は無意味である。呪式の水は非魔法的であるためか、魔力はないようだ。

実験４　白木の杭を心臓に打ち込む・銀の銃弾といった、伝承の確認
　どちらも、通常の武器でのダメージと同じであった。

結論：やはり真祖の再生メカニズムからして、致命的ダメージは期待できなかった。真祖ではなく通常の吸血鬼に対してなら、退魔に特化させた聖銀（ミスリル）でのダメージは期待できるのだろうが……残念ながら、現状では作成不可能であるので検証不能である。

以上で今回の実験に関する記述を終了する。

三年目　そろそろ収穫祭

あの事件から二年が経った。さまざまな情報を整理してみれば、火属性魔法が最も真祖狩りに適していると断言できる。

真祖流自己保存を無効化するには氷属性魔法が適しているし、永久石化状態で完全破壊という手もあるが、どちらも理論上復活の可能性がある。（以下、十数行に渡り復活の可能性が示唆されている）

上記の理由も含め、火属性を採用することにする。しかしどうにも新たな魔法を構成する方向性が定まらない。真祖にコウモリ化することをさせず、細胞を一定以下に減らすなど、どういった魔法を使えばいいというのだろうか。

三年目　翌日

今朝、リロイに魔法が定まらないことを告げたところ、おもしろい答えが返ってきた。曰く『永久石化魔法みたいに相手に作用し続ける、永久燃焼魔法は無理なのか？』だ。これは盲点だった。永久石化のように全身を蝕む炎であれば、たとえコウモリになって逃げたところで、逃げたコウモリごと燃やし続けることができる。

これで魔法の方向性は定まった。火属性の永久魔法。これだけではまだ足りないが、リロイに言われて思いついた、さらに属性を足

すことで逃げを封じる方法を取り入れよう。
そのためには闇属性だろう。しかし――（以下、書き殴られていて判別不能）

五年目　収穫祭翌日

ようやく魔法が完成した。闇属性の『侵蝕』の概念を火属性の『燃焼』と『高熱』の概念と組み合わせた新たな魔法、『蝕みの焔』だ。
机上の空論でだが、発動時の攻撃性が高すぎるので、そう簡単に発動できないように呪文を長めに設定した。これならば誰にも使用できないだろう。念のため、呪文は日記にも書かないことにした。万一知られて広められたら厄介だ。
次に発動時の消費魔力を計測する。（以下、書き込まれた形跡はない）

五年目　翌日

ディートリッヒが火傷を負って倒れている俺を発見したらしい。らしいというのは、俺は『蝕みの焔』を使用して魔力が空になって気絶してしまったから、本当は誰が発見したのか分からないのだ。
今回の実験でこの魔法の欠点がはっきりした。消費魔力が多すぎる。いや、正確には消費魔力量は少ない。無駄な機能を省いたおかげで、単位時間当たりの単位面積の破壊では。しかし、永久燃焼は永久石化と違い、常に魔力を注がなければ途中で炎が消えてしまう。通常の魔法は発動時に魔力を込めれば終わりなのだから、これでは効率が悪い。さらには、蝕みという効果が後押しをしてしまう。魔法が広がるにつれて消費魔力が侵蝕した体積に比例して上がってい

くため、恐ろしい魔力消費量になってしまう。これではどうにもならない。
魔法に慣れ、ついでに効率化することで消費魔力を減らしてみるか。

六年目　雪がようやくなくなった

駄目だ。どれだけ消費魔力を減らしても、人間を焼き尽くす、つまり真祖を殺しきるために必要な魔力が、どう考えても俺の所持する魔力では足りない。リロイで実験したが、俺はぶっ倒れてしまい、リロイは時間をかけて再生してしまった。状況を鑑みるに、現在の五倍はないと人を完全に灰にすることはできないだろう。
俺の魔力成長という■■■■■■■才能も、年成長は約１％。人の寿命では、どう考えても現在の五倍には到達できない。
くそ、どうすればいいんだ……？

六年目　涼しくなり始めた

リロイから面白い事を聞いた。真祖化で、魔力量が増えたというのだ。
そうだ、■■で■■■の魔力量はかなり多かったはずだ。それが偶然ではなく、それなりに多かった子供を選び、さらに真祖化の影響で倍増したとすれば、俺も同じことをすれば何とかなるかもしれない。
リロイは体感で十倍はなくとも五倍以上に増えたと言っていたから、机上で必要とした五倍を確実に超える。真祖殺しは可能になる。
だが……いや、これも予定調和だろうな。
あの事件からもうすぐ五年。俺も二十歳になった。ちょうどいい

だろう。

収穫祭の翌日。あの事件からちょうど五年。それが、俺が人間をやめる日だ。

以下、白紙のページが続く

第五話「俺は人間をやめたぞ！」

さて、月日が経つのは早いもので。二十歳になって数週間、とうとう俺が真祖になる日がやってきた。

こういう場合はやっぱ、あれを言ったほうがいいのかな。『俺は人間をやめるぞ、Ｊ○Ｊ○！』って。でも別に鉄仮面――材質は石だったか？――をかぶるわけでもないし、必要ないか。

「本当に、よろしいのですか？」

「ああ、神父。こうでもしなきゃ、俺の手であいつを殺してやれないんだ。っと、魔法陣はこれで間違ってないか？」

「ああ、大丈夫だよ。それでは、儀式を始めよう」

神父はゆっくりと、一言ずつ噛みしめるように呪文を唱えてゆく。その口調はミサを行う神父より、懺悔する信者のほうが正しい気がする。やはり罪の重さは彼にとって重いものなのだろう。

予め聞かされていた呪文は、あと少しで終わる。僅かに悪寒と嫌な予感がしているが、それは人をやめることへの抵抗なのかもしれない。だが、どこかで感じたことがあるような……どこだったか？

少なくともここ十年以上は経験していない感覚だが……

そして。

「！？」

最後の一句と同時に、悪寒が増大する。そして、思い出した。この感覚は、二つ前の俺が死んだ遠因、世界の歪みだ！

「しまっ……！」

意識が遠のいてゆく。まずいまずいまずい。どうにか意識を繋ぎ止め、咄嗟に時間を弄る。歪みは直接人を殺すことはない。歪みが何かを狂わせて異変を起こす。何を狂わせているのかを知れば、対処は、可能、に……く……そ……

再び意識が鮮明になったとき、目の前にいたのは銀髪オッドアイのロリ巨乳。つまり、第十八天使。

「……久しぶり」

「久しぶり、じゃねえよ」

というわけで、また管理世界にやってきてしまった。いや、確かに二十歳まで無病息災に生きて真祖化したけどさ。真祖化と同時にゲームオーバーって笑えねえよ！

「……ごめんなさい……第七統括世「またあいつか」……そう……あれが貴方のパーソナルデータを弄ったから……歪みが生じた」

……そろそろあいつは死んだほうがいいんじゃないか？　管理される側から言わせてもらえれば。そう思わないのかな、天使どもは。

「……すでに降格が決まってる……被管理者に」

「つーことは、俺と同じ人間になるってわけか？」

それはそれは大変なことで。お悔やみ申し上げます。（棒読み）

「……畜生や虫けらになっても……文句は言えない」
「へ？」

……すまん、第七天使。本気で祈ってやる。さすがに虫や獣になるのは俺も嫌だ。
って、そんなこと言ってる場合じゃねえ！　二度目の転生もこれで終了かよ！？　早すぎる！　姉さんと婚約者の敵がまだ取れてねえのに！

「……大丈夫……まだ貴方の肉体は死んでない……ぎりぎりだけど……だから蘇生させる」
「蘇生って……大丈夫なのか、管理者って管理だけで基本は手出し禁止だって言ってなかったか？」

そう、管理者は基本的に世界を管理するだけで、例外として業務上の過失時にのみ動く。今回は……過失と言えば過失か。

「今回はこちらの責任ですから、私たちの権限でどうにでもなります。死んでいたら別世界へ転生させることくらいしかできませんが、生きているのなら蘇生という形をとれます。ああ、歪みに関しては、すでに消去しましたので安心してください」

第十八天使の言葉をさえぎるように、横から第三天使が口をはさむ。第七天使はいないようだが……はて？

「すでに彼女は降格済みかつ転生済みです。最初の転生先は、マンボウだと聞いています」
「万に一つも生存できないとか、事実上の極刑じゃねーか」

確かマンボウは、一億分の一程度しか生存できないはずだ。極刑と言い換えてもおかしくはない。

「そんなことはどうでもいいですね、話を続けましょう。蘇生にあたり、こちらから二つまで願いをかなえることになりました」

「……業務上過失致死未遂……しかたない」

仕方ないって言われてもなぁ……それほど困っているわけでもな——いや、その前に確認すべきことがあったな。

「弄られたパーソナルデータってのは何なんだ?」

「魔力成長率です。現在の魔力成長率は年に最大1%となっています。これに手を加え、真祖化と同時に最大5%まで成長率が上がるように仕組んだようです。転生時に決定される基礎データなので、戻すには願いを一つ消費しますね」

「どうでもいいことか。でも願いなぁ……あ」

そうだ。普通の二次創作では無視されているが、実際にはどうしても無視できない事柄があった。

「ネギま原作開始……二十年前の大戦時に、いなければならない人物は全員揃うようにしてくれ」

「原作が始まるように運命を調整することですか。分かりました。あと一つはどうされますか?」

「すまん。今はまだ思いつかないから、保留ってことにしてくれ」

ある程度の問題は時間が解決してくれるから、今ここで叶えてもらうような願いって無いんだよな、俺って。

それを告げると、天使二人は頷いた。

「では、次に会う時に聞きましょう。では蘇生しなさい」
「……多分……本気で願えば来ることは可能……な筈」
「本気で願えば、ねぇ……ま、覚えてたらまた来るわ」

目の前がぼやけてくる。さて、ネギま世界に戻らなきゃな。

「……ぁ」
「まて、今何を言おうと……し……」

第十八天使が何か言いたそうにしていたが、確認する前に俺の意識は消えてしまった。

Ｓｉｄｅ　Ｔｈｅ　３ｒｄ　ａｄｍｉｎｉｓｔｒａｔｏｒ　ｔｏ　ｇａｔｈｅｒ　ｗｏｒｌｄｓ

「何か言い忘れでもありましたか、第十八統括世界管理者」

被管理者・アルトリウスがいなくなる直前に何か言いたそうにした、第十八統括世界管理者に質問する。場合によってはまた彼を呼びださなければならなくなるから、少々口調がきつくなっても怒られはしないだろう。第七統括世界管理者が欠けた分、管理が忙しくなっているのだから。

「……第七統括世界管理者の席に……彼が座る可能性があること」
「……まあ、また来ると言っていましたから、その時でいいでしょう」

ああ、そういえば彼は次代の第七統括世界管理者の候補に挙がっている。二度も私たちのせいで殺されているならその苦しみを知っている。ならば管理を慎重にするだろうと、そんな理由で候補に挙がった。私にとっては、仕事ができればそれでいいのだが。

まあ、もう一度来るかもしれないと言っていた。問題はない。

「さて、キビキビ働きましょう」

「……えいえいおー」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

霞む目を開けると、神父が俺の顔を覗き込んでいた。どうやら蘇生は成功したようだ。そして同時に、俺が人間ではなくなったことを自覚した。どうして、と言われると答えに詰まるが、とにかく人ではなくなったことが理解できるのだ。

そして、魔力の最大量が増大している。俺が人でなくなる前の大体……八倍か。これなら真祖を殺すことができる。しかし使いきったはずの魔力が回復しきっているとは……どれだけ時間が経ったんだ？

「ようやく起きましたか。魔法陣にも呪文にも不備がなかったので、心配しましたよ」

「……どれだけ俺は寝ていた？」

「七時間ほど……でしょうか。もう夜ですよ。満月が見えるでしょう？」

満月……ああ、満月の力が魔力回復を促したのか。それなら説明できるな。

「明日、リロイを殺す。神父はその後だな」
「……覚悟は既に出来ている」

全てを背負い、死ぬのだろう。その姿を見て、脳裏に何かが引っ掛かった。転生前、最初の自分が読んだ本に、こんな神父がいたような……

そういえば、俺は神父の名前を知らなかったな。これでは誰なのか分からない。

「そういや神父の名前ってなんだったか？　聞いてなかったか、忘れてたか。とにかく今は知らないんだが」
「私の名前かね？　そういえば名乗る場面などあまりなかったかな。私は、バロウ。トマス・バロウだ」

ああ、そうか。自分の開発したものが兵器に転用され、人を多く殺してしまった。その重荷を背負い、贖罪のために足掻き続ける神父、トマス・ルートヴィヒ・バロウの並行存在か。

ならば、彼を葬ってやるべきなのだろう。その罪の重さに耐えきれなくなり、潰れて壊れる前に。

「それでは明日、全てを無に帰します。ではさようなら」
「ああ、また明日」

バロウ神父。せめて痛みもなく、安らかに逝ってください。そのために必要な呪式も、ある程度の無理を押して使ってあげますから。

翌日、ついにその時はやってきた。夕刻に教会の鐘が鳴り響くころ、俺は家を出る。

実際は日の高いうちに終わらせたかったんだが、真祖になったばかりのころは太陽光ってか紫外線に弱いってことを忘れてた。いやー、あれは辛かった。しばらくは日の下に出られねぇな、これじゃ。

「リロイ、覚悟はいいか？」
「とっくの昔に、レナをこの手で殺したときに決めてたさ」

ゆっくりと右手を肩の高さまで挙げ、人差し指だけ立てる。あとは呪文を唱えるだけでリロイは終わる。

「リロイ、未練はないか？」
「ないこともないが、叶えられないことだ」

全身に魔力を通す。あとリロイに告げることはただ一つ。

「リロイ、言葉を残すか？」
「一つだけ、あったな。レナとアリステルに一言、『済まなかった』と謝っておいてくれ。俺は同じ所には逝けそうもないからな」
「……それは俺も同じだ。復讐の為に、吸血鬼に身を落としたんだからな」
「だったな」

自虐的にリロイは笑う。俺もつられて自嘲する。俺たちは二人とも、被害者にして加害者。二人と同じ所には決して逝けない。

「じゃあな、リロイ。冥府で会ったら、酒でも飲もうや」
「楽しみにしておく」

まあ、転生の仕組みからいえば、二度と会えない可能性のほうが高いが。

「イグネ・ナチュラ・レノヴァトール・インテグラ　地獄の深淵より来たれ　無明の主　灼熱の王　我が望むままに荒れ狂いたまえ　全てを浸蝕し飲み干し焼き尽くし　平穏なるこの世に旧き時代の煉獄を再び生み出さんがために　魂をも焼き焦がす悪意の黒炎を今ここに　『蝕みの焔』」

立てた指の先に、マッチ程度の大きさの炎が灯る。闇の属性付加をされた、輝かない黒い炎が。そしてそれは俺の指の動きに合わせて、リロイの足元めがけて飛ぶ。

さほど時間をかけずに着弾し、地獄の釜の蓋が開く。

これが、俺の開発したオリジナル魔法『蝕みの焔』。闇の持つ概念『侵蝕』と火の持つ概念『高熱』と『燃焼』を組み合わせた、一級品の危険物だ。

第一段階として、接触した部位から闇が『侵蝕』する。炎としての側面も持つため、より上に昇るように闇は広がっていく性質がある。

第二段階では、侵蝕した闇が『高熱』を放つ。普通の炎と違い、内部まで侵蝕した闇が熱を放つため、内から焼かれる苦しみを味わう。

最終段階で、侵蝕した闇から黒炎が噴き上がる。この炎も『蝕みの焔』なので、この炎に触れた物にも闇が侵蝕する。これが連鎖するため、魔力配給さえあれば、理論上星ですら焼き尽くすことが可能だ。まあ、魔法使いの魔力が尽きる方が先だから、関係ないが。

そして、この最後の特性こそが、真祖殺しを成立させる。コウモリとなって逃げようにも、そのコウモリが黒炎に触れれば確実に燃え尽きる。初期の実験でも前回の実験でも、逃げようとしない限り、全身を炎が覆うのとコウモリ化では、炎のほうが速かった。つまり真祖が逃げず、術者の魔力が尽きないなら真祖を抹殺させられる。

ま、逃げることを前提とした真祖は殺せないが、そういった奴に

は集団リンチでもしかければいい。そっちの方が確実だ。

「ぐあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

（くそ、机上の空論は、理想値にすぎないか。殺し切れるか自信がねぇ！）

魔力が不足し、強い疲労感を感じる。誤算だ。燃えるリロイの髪が、分離したコウモリが、焼き尽くされる前に大地に落ち、闇を広げている。その闇から炎が広がり、消費魔力が激増するとは。

まずい。このままじゃ、駄目なのに……意識が、朦朧と

「強制契約執行　６０秒間　アルトリウス・ノースライト」

していたところから一気に覚醒する。隣には、バロウ神父。……契約執行ってことは、従者契約を結ばれたってことか？

「これでいけるかな？　久しく使用していない秘術でね。配給できているか不安で仕方ない」

「これなら、いけます」

途切れかけた集中をどうにか戻す。とはいえ、バロウ神父一人分の魔力ではどこまで持つかわからない。お願いだ。これ以上イレギュラーは起こらないでくれ。

「あぁ……ぁ……」

その後は特にイレギュラーも起こらなかった。リロイの体は燃え尽き、骨とわずかな灰だけが残った。その骨すら灰にせんと、黒炎は消えることなく燃え盛る。しかし、それももう終わりだ。契約執行時間の６０秒が来て、魔法に魔力を流すことが不可能になったか

ら。

「ったく、俺も、まだまだってか？」

あ～だめだ。もう疲れた。どうせ日の下に出ても苦しいだけだし、このまま寝ちまうか。ってか、寝る。グッナイ。

第六話「不老不死者の宿命だよね」（前書き）

長く書こうと思った。
だから時間をかけた。
だけど無理だった。

第六話「不老不死者の宿命だよね」

不覚にもそのまま気絶するように寝入ってしまい、朝日に焼かれてのたうちまわるという恥をかいて早三年。不老不死者にして真祖の吸血鬼である俺が、あまりこの村に長居しても良いことはないと見切りをつけ、旅に出ることにした。

この三年間は忙しかった。バロウ神父の後釜に座る神父を探すことに始まり、真祖化の情報がこれ以上ないか教会を調べつくした。十分に次の神父――ミハイル・バルダムヨォン――が教会を継げることが分かったところでバロウ神父は引退。翌日にリロイと同じ『蝕みの焔』で焼き尽くした。そして最後に、俺がこの村に存在していた証拠を可能な限り消去していった。

こういった村への貢献以外にも、個人的にやらねばならないことがいくつかあった。まずは新しい発動媒体の作成。俺が今まで使っていた発動媒体は腕輪型なのだが、元から高位魔法発動に耐えられるようには作られていなかった。そのため、常時魔力配給を続けなければならない仕様の『蝕みの焔』の使用で、相当ガタが来てしまった。

次にダイオラマ墓地の整備。あの時はほとんど適当に入れただけだし、リロイも自責の念が強すぎて触れようとしなかったらしい。適当に大地に転がっていた二人を立たせ、中位の氷系魔法で氷柱の中に完全に閉じ込める。あとは綺麗に氷柱を磨きあげて見栄えを良くする。そしてダイオラマ墓地の設定を乾燥状態かつ零下五度にする。これだけだったのだが、ダイオラマ墓地の時間設定を通常のダイオラマ魔法球と逆、中の一時間を外の一日にしていたため、気が付いたら十日も経っていたというオチがあるが。

最後に呪式研究。今までは脳への負荷が強すぎて、ごく低位のものを除いて使い物にならなかった。され竜の原作でも、分不相応な呪式の使用で腕の神経が焼き切れるのは当たり前、脳の一部が焼き

切れることもあった。呪式医療が発展したされ竜世界では、神経再生も可能だし脳負傷を治癒することもできる。しかしこのネギま世界ではそれはできない。魔法ならできるかもしれないが、そんなか細い可能性に賭ける気には全くなれなかったのが実情だ。しかし不死の肉体、それも脳をいくら破壊されようとも再生可能であることが分かり切っていれば、いくらでも無茶はできるというものだ。その影響で演算領域が拡大し、第三位呪式くらいまでなら日常で使用可能、第一位なら瞬間発動できるようになった。

……実際はほとんど私用だな。

あ、そういえば、バロウ神父の使っていた強制契約執行の方法も教わった。血液を用いた仮契約をさらに簡易にしたもので、血を与えた対象に一度だけ魔力配給を可能にするというものだった。元々は真祖が血を与えた相手を吸血鬼化して操る方法を人間用に改良したものらしい。つまり、真祖である俺には必要ないものだということだ。残念。

「本当に出てくのか？　あたしらは別にかまわないと思うんだが」

「そうだな、ディー。確かにお前らは何とも思わないだろうな。俺が真祖になった理由を知るお前たちなら」

荷造りをしているところで、ディーが声をかけてきた。荷造りと言っても、真祖になって強化された闇の魔法の応用、影の倉庫に衣糧その他を使う頻度に合わせて順に入れていくだけだが。

そして、最後にダイオラマ墓地を入れて荷造りは終わり。日が沈むのを待ったら出発するだけだ。

「だが、次の世代は？　さらにその次の世代は？　そこまでの保証はない」

「だがなぁ」

「そして、俺の精神が持つかどうかわからない。分からないか？

俺は、お前たちが死にゆくのを眺めるしかないことを」
「……そうか」

ディーが納得したところで、腕に着けていた魔法発動媒体を外し、ディーに放り投げる。慌ててキャッチした彼女に告げる。

「まともに使えるか分からねえけど、くれてやる。その程度なら存在していた証拠にはならないからな」
「んじゃ、ありがたく頂戴する。それはあんたの魔法でも大丈夫なのか？」
「ん？　ああ、これか。上位古代語魔法の発動に耐えられるように設計したからな。多分何とかなるさ」

そういう俺の右の中指には金のリングにエメラルドのついた指輪が、左の中指には金のリングにサファイアのついた指輪がある。元々は俺とアリスの結婚指輪になるはずだったものであり、同時に魔法媒体としても使用できる逸品だ。これを使っているのは、忘れないためでも、あるけどな。

どうしても記憶は劣化する。たとえ遺体を氷結し永久保存しようとも、声を、しぐさを、名前を覚えていられる期間はそれほど長くない。今ですら声をまともに思い出せなくなり、表情やしぐさが曖昧になりつつある。記憶を繋ぎ止める鎖は、多いに越したことはない。

それは、俺の名前にも言えることだ。俺の今の名前は、アルトリウス・ノースライトではない。

「だけど、フルネームを言うの、恥ずかしくねーのか？　アルトリウス・レナ・アリステル・ノースライト」
「戒めだよ。俺が少しでも考えていれば、もしかしたらどちらかは救えたかもしれない。いや、姉さんを思い止まらせていれば、アリ

スだって生きていた可能性が高い。それを忘れないための、戒めの名として背負うさ」

いや、本当はそんなことじゃない。ただ名前を忘れないようにするだけのもの。もし・だったら・かもしれない。そんなことは既に言っても意味がない。実際、姉さんとアリスが犠牲にならなければ、他の誰かが犠牲になっていたかもしれないのだから。

「たられば は聞きたくない。ただ恥ずかしくないかって聞いただけだ」

「恥ずかしいが、それだけだ。それすら内包して、俺は生きていくさ」

俺はいつまで生きられるか分からない。七百年後の原作までは最低生き抜きたいが、もしかしたら十年経たずに死ぬかもしれない。逆に、千年の時を超えて生きるかもしれない。

そのどちらかまで、俺はこの名で生きるつもりだ。まあ、それでも、あれだ。さすがに女性の名を二つ入れている名前を隠したくて、RAと省略するだろうけど。

「さて、もうこの家も見納めか……」

さすがにこの二十三年間使用し続けた我が家だから、感慨も一入だ。最後に家の中を歩き回り、今までの生活を振り返ってゆく。

「そうだったな。もう、ここには戻れないんだよな」

そう考えると、悲しみが襲ってくる。しかし悲しみを捨て、現実を見る。もう、後戻りはできない。俺が自分の意思でそうしたのだから、責任は俺が持たなければならない。

日が暮れたのを確認し、家から出て外観を目に焼き付ける。さあ、これが本当に最後だ。気合を入れろ。

「じゃあな、俺の日常の象徴。イグネ・ナチュラ・レノヴァトール・インテグラ　来れ火精　光の精　光を纏いて　燃やせ栄光の炎　『光輝なる炎』」

『闇の吹雪』や『雷の暴風』と同じ二属性中級魔法、光と火の『光輝なる炎』。白く輝く炎が津波のように相手に襲いかかる、圧倒的な視覚効果を持つ魔法だ。

そして、俺の家を焼き尽くす、決別の魔法だ。

「もう、後戻りできねーな」

昔、鋼〇錬金術師を見たときに気に入ったシーンの一つだ。まさか俺自身がやることになるとは思ってもなかったが。

そのシーンと比べ、欠けているのは巨大な鎧だ。さすがにアルを用意することは出来ないし、したくない。

「ま、辛くなったら帰ってきな。あたしが生きていれば、いつでも泊めてやる」

「じゃあ、その言葉に甘えさせてもらうよ。縁があったらまた会おう」

踵を反し、燃える自宅に背を向ける。カッコつけるために鞄を肩に担ぎ、口角をわずかに吊り上げ、右手をひらひら振って別れを告げる。

最後にちらりと見えたディーの目は乾いていて、少なくとも涙を流しているようには見えなかった。彼女は強い。強すぎてぽきりと折れてしまいそうな危うさがあるが、そこまでの事態はもう起こら

ないと思いたい。そう、リロイが死んだ時のようなことは、もう二度と……まあ、大丈夫、だよな？　過保護にしても良いことはないし。

そして、俺は旅立った。

数年後、吸血鬼を匿っていたとして、村が滅ぼされるとも知らず。

第六話「不老不死者の宿命だよね」（後書き）

次は主人公のパーソナルデータを公開する予定です。

第七話「祝・原作キャラとの出会い！」（前書き）

主人公の雰囲気が変わります。我と書いてオレと読ませる王様っぽく。
しかし根は変わっていません。無関心なのはただの人間に興味が持てなくなってきているいるからです。

第七話「祝・原作キャラとの出会い！」

我（オレ）が村を出て早９０年。呪式と時間制御と魔法、時折体を鍛えて過ごしている。しかし、あの天使。今度近くに転生している事が発覚したらぶちのめそう。

年５％。この魔力量成長が想像以上に恐ろしいことがようやく分かったのだからな。

分からぬのなら、電卓を片手に計算してみよ。１．０５の９０乗は、およそ８０だ。さて、これで何を言いたいか分かったか？

む、分からぬか？　想像以上に頭が固いな。すなわち、我の魔力は村を出た時の８０倍になっているということだ。

（最近は魔力のコントロールに魔力を使い続けたからな……最大成長率に常に達するのも仕方あるまい）

「おい」

本当に参ったものだ。我の魔力は、村を出た時は一般魔法使いの１０倍程度であった。そのころは魔力成長が最大値になるように常に魔法を使うことを意識していたが……そうだ。６０年ほどしたあたりで魔力制御がきかなくなり始めたのであったな。そこから魔力同士をぶつけることで相殺し、魔力暴走を防ぎ続けたが……それが魔力成長を限界まで促してしまった。

複利法、恐るべし。……まだ分からぬ愚か共がいるな。今の我の魔力量位は一般魔法使いを１とすれば大体８００。来年の我の魔力量は、その５％増しで８４０になる。魔力量は加速度的に増えていくのだ。原作開始が７００年後であったから、１．０５の７００乗で……え、６８００兆？

ありえん。どこかで魔力を完全制御できるようにならねば、チート云々の前に、魔力漏れで世界崩壊が起きかねん。

（どうすればよいのか……）
（外部から魔力を吸い出すようにするか？）
（否、それならば魔力の還元方法が必要となる。）
（やはり我が完全に魔力を制御できるようにならねばなるまい）
「おい！」

これしかあるまい。しかし時とともに魔力量は増大するばかり。すぐにでも魔力を制御できなければ……。

「聞いているのか！！」
「む？　何かいたのか？」

しまった。集中しすぎて周囲の言葉が聞こえていなかった。我の思考を遮ろうなど……む？　これはいったいどういう状況だ？　最後に周囲を確認したのは、拠点にしている町を出て、適当に転移したあたりまでだが……

「すまぬ、我はいったいどのような状況に置かれているのだ？」

気がつけば、我はなぜか十字架のようなものに磔にされていた。足元には藁束。松明を持っている人間が６人、正面に見られる。左右を見渡せば、同じような境遇の人間が左に４人、右に１人。
仕方ないので右隣で同じように磔にされている金髪幼女に聞いてみるが、答えは返ってこない。代わりに、別に聞いてもいない正面のむさ苦しい男から返事が来る。

「魔女どもめ！　我々の村を襲った疫病、貴様らのせいだな！」

魔女狩り、か。最近活発になっているとは聞いたが、このような

ものであったか。村を出てから魔女狩りなど経験したことなど無かったのでな。ふむ、思考に耽っている我を見つけた人間が、極度の集中状態にある我を魔女と判断したのであろうな。

結論。死ぬことはないので思考を再開する。さて、どこまで考えていたのか……

（魔力制御をどうするか、だ。オリジナル）

（この程度で忘れるとは、それでも我のオリジナルか？）

（並行思考1号、すまぬ。そして3号、黙れ）

不死であることをいいことに無理のある呪式を扱い続けた結果、我は並行思考を最大3つまでですることができるようになった。おそらく、脳の演算領域が拡大した結果であろうが、並行思考のどれもが今の我と同じ、慢心王に近い性格を有している。否、我が俺だったころから慢心王に近い性格をトレースした結果、こうなったという方が正確か。

おそらくディーに知られたら、自分の脳内で完結するなら意味ないじゃねーかとか言われそうだが、そんなことはない。言葉に出したり何かに書いたりすると自分でも考えていなかったことに気付くことがあるように、並行思考の考察で思いつくこともあるのだ。

（さて、脳内会議を再開する。現在判明している魔力制御方法を提示せよ）

（負荷をかけなければ魔力は成長せぬ。故に外部から魔力を吸収。それをバッテリーとして使用する。これならば魔力を減らし、なおかつ負荷をかけずに魔法を使用できる）

（2号。それは制御とは関係ない。故に却下する）

（いや、2号の案もありではあるな。魔力が減れば制御は容易になる。これは確かに真理だ）

（オリジナルの言う通り、制御は容易になろう。しかし吸収する魔

力量がシャレになるまい）
（……ならば、魔力封印を行うか？　数日おきに封印をかけ続ければ、魔力成長は起こらぬ）
（しかし、完全魔力封印中は不死が適用されん。相当平和であるか、巻き込まれても対処できる体術がなければ話にならん）
（ではどうする？　我は思いつかん）
（先に体術を学び、気を使えるようにする。それから魔力制御しても遅くはあるまい。ただ漫然と日々を過ごすよりましであろう）
（1号の案を採用する。異議はあるか？）
（（（異議なし））
（ならば以上で本日の脳内会議を閉幕する）
（それは構わんがオリジナル。すでに火をつけられているぞ？）
（……熱いと思ってはいたが、まさか本当に火をつけられていたか）

3号の思考を受けて体に意識を移せば、確かに左にいる四人は既に火に包まれており、我の足元の藁束にも火が付けられていた。
しかし……ぬるい。実に手ぬるい。苦しめるためであろうが、この程度の熱であれば、恒常呪式で耐えることは可能だぞ？　そして耐えている間に真祖の生命力で再生する。

（つまらん。逆魔女狩りを行おうと思うが、意義はあるか？）
（（（異議なし））
（賛成3、反対0。よってこれより逆魔女狩りを開始する）

煙で声帯がやられたか、すでに声が出せん。声が出せぬ以上呪文が唱えられず、魔法が使用できない。時間制御は現状を変えるには無意味。体術は使用できないでもないが、この状況を打破できるほどできるわけでもない。
結論。現状で対応可能なものは呪式のみ。火に巻かれている状況からの脱出に必要な呪式を選択。

（消火、冷却、攻撃の三つを行える＜銀嶺氷凍息（クロセール）＞でどうだ）
（＜瑞壁（アグー）＞……いや、＜銀嶺氷凍息（クロセール）＞だな）
（＜緋竜七咆（ハボリュム）＞で逆に焼き殺すのみ）
（我は＜瑞壁（アグー）＞だが、確かに１号の意見は重要だな。＜銀嶺氷凍息（クロセール）＞に決定する）

呪式は決まった。第四階位となると少々発動に時間がかかるが……ふむ、五秒で十分か。我も成長しているな。

化学練成系呪式第四階位＜銀嶺氷凍息（クロセール）＞発動。氷点下１９５．８度の液体窒素を生成。我に多少かかるように方向を制御する。

「な、まさか、魔女の業か！？」
「の、呪われる！？」

呪いとは心外な。れっきとした技術だぞ？

液体窒素で酸素を遮断され消火。さらに藁束は冷やされ、酸素が流入しても再点火の心配はなくなった。そして残された大半の液体窒素が、魔女狩りを行っていた愚か者どもを飲み込んでゆく。

「む、これは計算外であった」

急激に冷やされた木製の十字が劣化、我の体重を支えきれなくなり砕ける。脱出の手間が省けた。

（よく言う。ある程度は考えてい――）
（並行思考、停止）

五月蝿い思考を停止する。さて……

「うわあああぁぁぁっぁぁぁぁ！？」
「たす、けてくれ！　頼む！」
「寒、い、冷、たい」
「む？　まだ生きておったか」

どうやら直撃を避けた数人が生き残ったようだ。運が良かったようだな。

しかし、いい加減煩わしくなってきた。寒いだのなんだと言うやつもいることだ、御望み通り温めてやろう。指輪をはめた右腕を掲げ、呪文を唱える。短縮詠唱でな。

「『魔法の射手改　連弾　火の三十三矢』――」

我の背後に三十三の火の玉が発生する。少々呪文に手を加えてみたのでな、これは常時魔力配給を行える新魔法。常時魔力配給の影響で、長時間待機させることもできて、障壁にあたった程度では砕け散らないので、意外と重宝する。

ニイ、と悪魔のような笑みを浮かべる。それに誰一人として気付かなかったのはつまらんが、死にゆく者には必要ないか。

「――せいぜい逃げ回れ。射出（フォイエル）」

号令とともに火の玉が三つずつ、いたぶるように撃ちこまれていく。疑似王の財宝（ゲートオブバビロン）ってな。

「ごふっ」
「あぁぁ、ぁ」
「ふはははは！　どうした、雑種ども！　逃げることすらできないか！」

寒さでまともに動けなかったか、二十七矢を撃ちこんだところで、生きている人間がいなくなってしまった。魔力配給をカットし、残り六矢を消し去る。

「さて、町に帰るか」
「たす……けて……」
「む、まだ生き残りがいたか？」

後ろから声がするので振り返ってみれば、磔にされた金髪幼女。そうか、まだこれが残っていたか。そう納得する一方、どこかで見た顔だが、会ったことがあるか？　と疑問に思う我がいる。

「おい、そこの幼女。名をなんという」
「エヴァ……エヴァンジェリン・マクダウェル」
「ほう」

驚いた。あのエヴァンジェリンがこんな低俗な魔女狩りに遭うとは……否、我の転生が七百年前。あれから百年近く経っている今、ちょうど真祖化したあたりであろう。

ずい、とエヴァの顔を覗き込む。唇からは八重歯と言うには少し長い牙が見え隠れしている。ふむ、真祖かどうかは知らんが、吸血鬼ではあるな。

「貴様、吸血鬼か？」
「……！」

エヴァは相当驚いたのか、目を見開いてうろたえる。確かに吸血鬼だとばれれば、それも凄腕の魔法使いの前でなら、死を覚悟してもおかしくはあるまい。

我はほほ笑む。ほとんど忘れていた原作キャラとの邂逅。そして

同族との出会いに。

「安心するがよい。我も吸血鬼だ。牙が見えるであろう？」

唇を指で持ち上げ、牙を見せる。そのことにさらに驚いたエヴァを観察し、気付いたことを述べていく。

「陽光に肌がやられているな。通常の吸血鬼であれば死してもおかしくない以上、真祖。しかし見た目に現れるダメージがあるのなら、真祖化して1～2年か」

「す、ごい」

「理解できて当然だ。我は真祖化した親友を葬るために真祖化した。故に真祖の特色に我以上に詳しいのは、ほとんどいないであろうな」

エヴァを十字から解放しつつ、解説してやる。英雄王の口調は真似しているだけであり、全てを見下すような真似はさすがにせん。この村にいた魔女狩り推進派のような、害のない存在を害する雑種（クズ）でもない限り。

「私を殺すの？」

「死にたいのか？　ならば殺してもよいぞ」

「ううん」

エヴァは横に首を振る。それもそうか。死を望むのはよっぽど追い詰められているか、精神がいかれているかだ。

「生きる術はあるか？　ないのであれば、我が匿ってやってもよいぞ」

「私は、生きていてもいいの？」

「生物には生きる権利がある」

そう言って、エヴァを闇で包む。日光を遮るために散々練習した魔法だ。魔法の才能に乏しかった我も、九十年もあれば無詠唱で行使可能だ。

「私は、生きたい。まだ死にたくない」
「ならば、生きろ」
「だから、魔法とか教えてちょうだい」

目を潤ませて懇願するエヴァ。ふむ、この顔をした子供を裏切るのは精神衛生上良くないな。

「その気があるのなら、教えてやってもよい」

それだけ言って、我は火の転移魔法を発動する。我とエヴァを炎が包み込み、次の瞬間に炎は消失する。既にそこに我達は存在しておらず、次に姿を現すのは現在拠点にしている町から少し離れた、人影のないところ。

ネギまの物語に、ようやくかかわったと実感した一日であった。

第七話「祝・原作キャラとの出会い！」（後書き）

ようやくエヴァを出せました。意外に時間がかかった……
これから先、呪式以外にルビを振る場合はその話で最初に出てきたものだけにルビを振ります。
今回の話ですと、我ですね。

第八話「3：現実は非情である」

エヴァを連れて町付近に戻った我（オレ）は、すぐさま強力な認識疎外をエヴァと我に適用する。原作はほとんど思い出せぬが、確かエヴァは真祖にされてすぐに賞金がかかっていたはずだ。念には念を入れる必要はあるだろう。認識疎外が効いたことを確認し、町に入り、宿に帰る。

「すまぬな。一人客が増えるぞ」
「どちらさまで？」
「詮索は無用だ」

懐から数枚の金貨を取り出し、主人に握らせる。ここ数年は盗賊や夜盗を狩ることで路銀を稼いでいるため、今はそれなりに裕福だったりする。この時代は金さえ積めばある程度はどうにかなるので、金のあるうちは大抵のことは気にする必要はない。

金貨を懐に収め笑みを浮かべる主人に会釈し、二人で部屋に戻る。探索魔法で周囲に魔法の目がないか確認し、カーテンを閉めて物理的な目が来ないよう隠蔽し、対物・魔法障壁を展開。さらに対魔・魔法障壁と呪式干渉結界を重ねることで多少の攻撃なら無効化可能になる。

少々厳重が過ぎたか？　まあ、我の名が知られるのは得策ではない。これくらいなら誤差の範囲だ。

「さて、自己紹介がまだであったな。我はアルトリウス。アルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライトだ。９０年ほど真祖をやっている」
「あ、私はエヴァンジェリン・マクダウェルです。先月真祖にさせられました」

先月か。ならばあのダメージも頷け……ん？　エヴァにはアタナシア・キティなんてミドルネームがあったと記憶していたが……いや、子猫（キティ）はまだしも不死（アタナシア）などというミドルネームをつけたがる親などいないか。魔女認定されかねん。

「させられたとな？　自らなったのではなく」

「はい。私は真祖にさせられました。そして……私を真祖にした女は、私が殺しました」

真祖にさせられた時のことを思い出したか、エヴァの顔が醜く歪み、魔力が荒れ狂う。うむ、やはりすでに殺したか。真祖化すると、自分が人間を外れてしまったことは何となく実感できる。リロイは血液と魔力の不足による喉の渇きに苛まされていたようだが……それがなくば、最初の実感は外れたことであったかもしれんな。

「とりあえず魔力を鎮めよ。この程度ならば障壁は揺らがぬが、正直息苦しい」

現在の我の魔力量は８００程度。エヴァの魔力は我の６割強で５００程度だろうか。障壁は揺らがずとも、息苦しさは増す一方だ。

「ご、ごめんなさい。私、まだ……」

「気にするでない。我の友も、真祖と化してしばらくは荒れていた。エヴァとは違い、自虐だがな」

９０年前。曖昧だった自我で行動した結果、リロイは我の姉を――彼の視点から見れば婚約者を――食餌として認識し、吸い殺してしまった。それと彼女の思いは、形こそ違えど同じ絶望だ。

「魔法を教える前に言っておく。ミドルネームを考えておけ」

「ミドル、ネーム？　何か意味があるんですか？」
「特に意味はないが、我もエヴァも、これより永遠を生きる。忘れたくない物事。背負わなければならない運命。それを忘れぬために、名に刻み込む」
「私の、背負うべき、運命……」
「我のミドルネームは姉と婚約者の名。それは真祖となった理由」

直接その現場を見たわけではないから、我には強い感情はない。リロイのことは怒りにより覚えていても、二人は忘れてしまいそうだった。今もなお、ダイオラマに二人を納めていようとも。故に、名に刻み込んだ。

「それって、絶対に決めなくちゃいけないの？　今すぐに？」
「別にいつでもよい。我は村を出るときに付けたからな」

そして、別につける必要もない。ただ、自分が自分であると認識するための、アイデンティティのようなものだ。

「少々出かけてくる。我が戻るまでここから出ぬようにせよ」
「？　それじゃ、この宿から出ないね。なるべく早く帰ってきてね」
（素直だな、騙されたばかりだというのに……同族故に裏切らぬと思っているのか、話を聞いてもらって安心しているのか）

まあ、どちらでも構わん。別に裏切る気も捨てる気も、今はない。障壁を維持できるように魔力を可能な限りこめ、音も気配もなく宿を出る……際に、宿の主人に一つ聞いておく。

「この近くに、賞金首に関して知ることができる場所はあるか？」
「賞金首？　酒場に行けばそれなりに情報は手に入りますが……」
「酒場か。承知した」

銀貨を一枚はじき、今度こそ宿を出る。さて、確か酒場は……この先だったな。

「さて、原作では氷と闇……雷も使えたか。発火を終わらせたら方向はそちらで……っと、ついたな」

さて、エヴァンジェリン・マクダウェル賞金首なのか。賞金首ならいくらなのか。それを確認しなければ、これからに差し支える。こういう場合は掲示板を探すべきだな。そこに賞金首の情報や討伐依頼が載っているはずだ。

「はいはい、どいてちょうだいな。新しい賞金首の情報だよ、っと」
「ほう、そこか」

羊皮紙を使用している、ということは、それなりに重要度の高いものか。ならば見る価値が――む？

賞金首
名称―不明
性別―男
特徴―金髪緑眼・身長１８０前後・２０歳前後
賞金―１０万ドル
備考―魔女認定済み（氷・火の２属性の魔法は使える模様）

一部情報に、魔法使いのみ閲覧可能なように特殊な魔法が使用されているな。しかしこれは……おそらく我のことを指しているな。全く不愉快な。しかしこの程度の情報なら、我にたどり着くことは不可能であろうな。さて、エヴァの情報は……これか。

賞金首
名称―エヴァンジェリン・マクダウェル
性別―女
特徴―金髪紫眼・身長１３０前後・１０歳前後
賞金―５０万ドル
備考―魔女認定済み（真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）だが魔法は使えない様子）

こちらは……似顔絵つきか。真祖であることが賞金額を上げているな。これでは一般人に被害が出て、賞金がつり上がる悪循環になるが……どうせ何も考えていないか、魔法を使えぬ幼いうちであれば一般人でもどうにかなると考えたか……後者であろうな。

なにせ、魔法使いがいるようには思えなかったあの魔女狩り集団に普通に捕まっていたのだ。そう考える方が普通。

「情報はそろったな。そろそろ戻るか」

とりあえず、エヴァに護衛術を教えなければ危険であるということとか。まかり間違って人目につけば、それだけで追われることになりかねん。我は自分を守ることはできても、他人を守りきれる自信など無い。

「ん？　にいちゃん、その手配書の特徴とあってへん？」
「そうなると、貴様もこの手配書の特徴に近いことになるが？」
「ああ～、それは盲点や」

突然話しかけてきた妙な訛りのある男。適当に見つけた手配書の人物の特徴に似ているため、それをうまく突いてみたのだが。

「でもうち、にいちゃんが村壊滅させたとこ見たで？」
「は？」

何を言ってるんだ、と思った瞬間、理解できた。
こいつが、我を賞金首にしたのか、と。

「武器取りな！　１０万ドルやで！」
「「「「「うおおぉぉぉぉぉ！！」」」」」

さて、ここで一つ問題だ。
現在我は、酒場にいる賞金稼ぎ（おそらく魔法使い込み）に囲まれている。この状況をどのように突破するか。
１：突如我はこの状況を穏便に収める良い案を思いつく。
２：エヴァンジェリンが助けに来てくれる。
３：現実は非情である。

（可能であれば１を選びたいところではあるが……無理だな。ここまで煽られた雑種（バカども）がそう簡単に落ち着くはずもなし。２は、たとえ来ても足手まとい。となると）

つまり答えは決まっている。３：現実は非情である、だ。本当に非情だ。非情に過ぎる。何故ならば。
我は、無能な雑種（バカ）（クズ）に情など持たぬからな！

「我の名はアルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライト！　貴様らを殺すものだ！　『魔法の射手改　連弾　光の６３矢』！」

我の背後に、光の礫が姿を現す。英雄王の見た目ならば、どうしてもこれはやりたくなる。次は天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）に近い魔法でも開発するか？

「死ね！」

まあそれは置いておいて、少し遊んでやろう。
最初は1本。次は2本。その次は4本撃つつもりだ。撃つたびに矢を倍に増やしてゆくこの遊び。回数はたったの6回。耐えて見せろよ?

「障壁を張るんや！　高々『魔法の射手』やで！」
「「「「「合点承知！！」」」」」

どうやら魔法使いのみで構成した賞金稼ぎの集団か。面白い。障壁程度で我の『矢』を防ぎきれると思っているのか?
我を囲うように、魔法使い共の多重障壁が展開される。なるほど。確かに障壁突破の術式を付与しない『魔法の射手』では、せいぜい1枚か2枚破壊する程度。安全は保障されているな。我の『矢』が、ただの『魔法の射手』なら、な?

「馬鹿な。『魔法の射手』が、砕け散らない！?」
「ど、どういうことだ！　ありえん、ありえんぞ！」
「まずいですぜ、兄貴！　障壁が突破されます！」
「し、障壁強化！　急ぐんや！」
「無駄だ、無駄。ほれ、4撃目だぞ?」

さらに8本追加。周囲の魔法使いがよけない限り、全て命中するように撃ちこんでいる。このことに、いつ気付くかな?　っと、意外と耐えるな。ではさらに16本追加だ。

「も、もう駄目だ……！」
「逃げるんだ！　決死か10万か、じゃ割に合わねえ！」
「馬鹿、逃げるな！　今逃げたら……！?」
「残念だな。統制が崩れた時点で、貴様らの負けだ」

さらに32本追加。これで計63本全ての光の矢が障壁に喰らいつき、1枚ずつ砕いていく。

正気を取り戻した連中が必死に障壁を再構築するが、時すでに遅し。一度ゆるんだ防壁は、そう簡単に再構築できんぞ？

みるみる内に、ついに彼らを守る最後の障壁となった。どうやら全ての魔力を注いでいるらしく、そう簡単には壊せない。このままでは魔力配給にそぐわぬ結果になりそうではあるな。ならば。

「イグネ・ナチュラ・レノヴァトール・インテグラ　地獄の深淵より来たれ　無明の主　灼熱の王　我が望むままに荒れ狂いたまえ　全てを浸蝕し飲み干し焼き尽くし　平穏なるこの世に旧き時代の煉獄を再び生み出さんがために　魂をも焼き焦がす悪意の黒炎を今ここに　『蝕みの焔』」

我が生み出した、禁忌の魔法を再現する。さて、我が構想した限り、このような状況下では……うむ。

「ば、馬鹿な……障壁を超えて来ただとぉ！？」

にやりと笑みがこぼれてくる。我が想定したように、障壁に激突した黒炎は、その闇で障壁を侵蝕していく。気体でない限り、全てを侵蝕し焼き尽くす煉獄の具現。魔法に対しての効果を確認する時間がなかったためぶっつけ本番だが、意外とできるものだな。

驚きか、恐怖か。障壁維持が放棄された瞬間、結界を飲み込んでいた闇と黒炎は虚空へと散ってゆく。対象が固体か液体でなくなれば消えるのは、想定通り。

結界を蝕んだ炎が消えて安心する魔法使い共。だが、安心はまだ早いぞ？　黒炎は、まだ足元に生きているのだから。

「さらばだ」

魔力配給が生きているか、対象がある限り焼き続ける。それが『蝕みの焔』。次はどれほど離れて魔力配給が続くか実験せねばな。

影の転移を実行。転移先はエヴァの影。ずぶずぶと沈む間にも、炎はゆっくりと広がっていく。最後の置き土産だ。

「＜爆炸（アイニ）吼＞」

爆薬、トリニトロトルエンを生成。黒炎に侵蝕された床板を、酒場の出口・魔法使い・適当な床に散らばるように吹き飛ばす。

直後に訪れる阿鼻叫喚。それを無視して完全に沈みこみ、エヴァの背後に表れる。

「エヴァ、逃げるぞ」

「うわっ！？　お、驚いた～。突然現れないでよ。心臓が止まって、寿命が縮むかと思ったわ」

心臓付近を押さえるエヴァ。しかしエヴァよ。心臓が止まった程度では真祖は死なぬぞ？

「真祖の寿命は縮まぬがな。それより賞金稼ぎが我とエヴァンジェリンを標的にした」

「ええ！？　二人とも狙われちゃったの！？」

激しくうろたえるエヴァ。それもそうか。我と出会ったのも、捕まっている時だったな。

「さらに言えば、二人とも賞金首だ。荷物を我の影に全て放り込め。移動する」

遮音障壁は張っていないため、下から誰かが駆け上がってくる音が聞こえてくる。ふむ、もう嗅ぎつけたか。

「訂正する。時間がない。飲み込むぞ」

「え、心の準備ができてないから、ちょっ」

全てを聞かず、問答無用で影に収納する。荷物が残っていないことを確認し、我自身は火で転移。さてはて、平穏に過ごせる時はやってくるのであろうか……

後日、真祖であることがばれていたうえ賞金が１００万ドルになり、二つ名に黒死病（ペスト）と同じ語感である『黒炎の死神（ブラックデス）』の名を冠することとなった。

案外格好いいな。

第九話「不死の子猫と契約と」

あの時の我(オレ)はいったい何を考えていたのか。今から過去に戻って問い詰めたいところであるが、時間制御能力は時間軸逆行を禁止してしまった。くそ。

「（何が『格好いいな』だ。我の名が広まって動きづらくなっただけではないか）」

そう、俺の名が広まったため、おちおち外も歩けやしない。我が連れているエヴァにかかっている賞金も、ついでとばかりにつり上がっているため、エヴァの身をより守らねばならなくなってきてしまっている。仕方ないので、ヨーロッパからエジプト経由で暗黒大陸(アフリカ)に脱出することとなった。現在、エジプトに滞在中だ。

呪式はこういうときには恐ろしく便利だ。変化に関しては魔法を超える個所がある。

「お、姉ちゃん。何を買っていんだい？」

「ええと……これとこれを。あら、こっちのは何かしら？」

今我は、姉であったレナの姿になっている。魔法ではなく呪式でだ。魔法による幻術は簡易ではあるが、解呪されればなくなってしまうほど儚い。しかし呪式は違う。呪式は魔法の一種でありながら、その歴史は魔法よりも科学の歴史に近いのが原因だ。

簡単にいえば、魔法は現実に幻想を呼び出すため、解呪されると消失してしまう。だが呪式には、幻想の力で現実を改変し、その結果を扱うものも存在する。

「デーツっていう、ナツメヤシの実さ。甘くておいしい木の実でっ

せ」
「そう。なら8つちょうだいな」
「8つだな。まいど」

まあつまり、魔法でつけた傷に解呪をかけても意味がないのと理屈は同じなんだがな。だがそれを基本とする咒式での変身術は、本当に他者になってしまう。

骨格を変える。筋肉の付き方を変える。髪の色を変える。髪の長さを変える。眼の色を変える。身長を変える。体重を変える。指紋、掌紋、虹彩を変える。声帯を変える。

ここまでして、完全に他人になってしまう。性別？　年齢？　そんなもの、材料さえあればいくらでも変えてしまう。それが生体変化系咒式の達人、変幻士だ。

「ほらよ。おまけにデーツを2つ付けとくぜ」
「あら、ありがとう」
「今後ともごひいきに～」

そんな咒式を用いて、俺は今姉の姿を取っている。はっきり言ってこの他人になるという行為、意外と自殺に近いものがあった。傷ならばいくらでも真祖の体が修復する。しかし咒式による肉体変化は、本当に何故か分からないが、修復対象外になっている。この体は、たとえ死んで再生されるとしても、レナの体として再生されるのだ。生体変化系咒式でないと、元に戻れない。

この発見、実験好きであることが偶然にもピタリとはまった結果でもある。右の眼の色だけを変えて再生させてみたら、オッドアイのままであったのだから。今では『我』と『姉』に変化する専用咒式を創り、どんな変身をしてもすぐに戻れるようにしてある。

現在使用している宿に着く。部屋に戻り、簡易の遮音障壁を展開してから声をかける。

「……もういいわよ」
「う～、つかれた～」

文句を言いながらエヴァが影から顔を出す。『疲れた』とは、我とは違い、貴様は何もしていないだろうが。

「影の中にいるだけなのに、どうして疲れるのかしら？」
「だって、魔法を早く使えるようになりたいから、影の中でも魔法を必死に……」

まだ初心者用の魔法しか教えていないが、相当練習したのであろうな。そうでもなければ、これだけの魔力を持つエヴァが疲労を感じることはない。
では、直接見てやるべきであるな。魔法はイメージが重要である。間違ったイメージで続けると消費も多くなるうえ、正しいイメージに移行できなくなりかねん。

「そう。なら早くアフリカへ行くべきね。私も直接指導したいし」
「ねえ、アランさん？」
「なあに？」

アランとは、我のイニシャルのA．R．A．Nをそのまま読んだものだ。偽名としてちょうどいいので、そう呼ぶように言い含めた。万一聞かれても、我にたどり着きにくくするために。

「そろそろその口調やめてくれない？　えっと、なんだか気が狂うというか……」
「この姿で我の口調に戻してもよいのか？」
「――ごめんなさい。やっぱり前の口調でいいです」

であろうな。我も女口調は気持ち悪いが、姉の声で我の口調は違和感しか存在せん。

「さて、一気にエジプトを抜けるけど、その前にこれをあげるわ」

先程購入したナツメをエヴァに渡す。

「これって……木の実？」

「デーツっていう、甘い木の実よ」

一応、前世で食べたことはある。甘かったような記憶しか残っていないが。そんなことはどうでもいいか。

「もう一度影に潜りなさい。この宿を出るから」

「本当だ、甘ぁい。意外とおいしいし」

「ねえ、沈められたい？」

「……は～い。おやすみなさい」

顔全体では笑顔、だけど目だけは笑っていない。そんな顔を見せてあげたら、しぶしぶと返事をしたエヴァがずぶずぶと影の中身潜りこんでいく。さて、我も荷物をまとめるか。アトラスの連中に見つかると厄介だからな。

そして、アフリカに来て４０年余り。その間に魔法を教え（我よりもセンスがあった）、咒式理論を教えてきた（こちらはさっぱりに近かった）。基本的に我達は二人で過ごしてきた。生物は。

「ツマリ、俺ノコトヲ人数ニ数エテナイッテコトカ？」

「そういうことだ」

まあ、途中でエヴァが作り出したチャチャゼロを人数に数えるか迷ったが、生命体ではないので数えない。そもそも、ＡＩが貧弱であるチャチャゼロは人間性に乏しい。数えたくないというのが本音だ。

「どうした、アラン。チャチャゼロが粗相でもしたか？」

「いや、そんなことはない。ところでキティ、最近開発している魔法とやらの進み具合はどうだ」

「さっぱりだ。どうにもすすまん」

俺はエヴァのことをキティと呼んでいる。アフリカについてすぐ、自分のミドルネームを考え付いてこう言ったのだ。

（私はこの姿から成長しない。不老不死の幼女、永遠の子猫。だから私は、私自身に不死の子猫、アタナシア・キティの名前を付けるの）

だから、その思いを鑑みてあいつのことをキティと呼んでやっている。恥ずかしいのか最近は顔を赤くすることもあるが、それはそれで可愛いのでいい。しかし荒んだのか、口調が我に似てしまった。あの素直なキティが……これはこれで可愛くなったな。なるほど、ツンデレとはこういうものか。

「我も共に考えてよいか？　こう見えても、人であったころに新魔法を生み出した経歴があるのだが」
「ああ、そうだったな。私だけではどうにも進まなくて困っていたところだ。アランの意見も聞くことにするか」

そういって、キティは我に魔法の構想を教える。ふむふむ、魔法による自己強化。それも魔法が概念であることを利用した、自己の概念強化か。確かに魔法による強化は魔力で身体能力を伸ばす程度。それを超えるのはただ事ではない。

しかし……これはあれか、『闇の魔法』か。我の記憶では、魔法を取りこんで肉体を魔法と化すものであったような……

いや、それを前提に考えれば、魔法を取りこむことは十分に良いものだ。魔法を取りこむとすると、ここがこうなって、ここをこうすると……だがそうなるとこっちに支障が……

「ううむ、ひとつ思いついたが、形にしにくいな……少々書き込むぞ」
「構わんぞ。アランの考えることは、形で示されないと私にはよくわからないものが多すぎる」

許可も得られたので、術式を次々に書き込んでいく。こちらがこうだから、ここをこうして、っと。

「む、ではこちらはこうか？」
「それは我も考えた。だがこちらをこうする以上、そこの術式はこうしたほうがいい。しかしそうすると……」
「……ああ、ここに矛盾が発生するな。ならばこれを――――」
「それがあったか。そうなるとここは――――」
「……俺ハ御邪魔虫カ？　御主人ノ邪魔ヲスルワケニモイカネーシ

ナァ……」

五月蠅いな、人形のくせに。

そして一年ほどかけて、ようやくエヴァと俺が共同開発した新魔法『闇の魔法』が完成した。効果は原作と同じで、魔法を取り込むことで自己を魔法と化すものだ。ただそれだけではつまらんので、呪式も取り込めるように製作を試みた。これから始動実験と称し、キティが魔法を、我が呪式を取り込むことになる。

「呪式選択、＜銀嶺氷凍息（クロセール）＞。呪印固定、掌握……っと」

「『雷の斧』、固定、掌握……ふむ」

隣のキティを見れば、全身に雷がちらつき、やや輪郭があやふやになっている。おそらく体が雷化している影響であろう。さて我は、と。

「アランは髪や瞳がやや青白くなったな。足もとの草も凍結しているから、成功しているな」

「キティは輪郭があやふやになって雷を纏っている。雷になっているな」

果たして取り込むことは可能になったようだ。これからも少しずつレパートリーを増やすべきであるな。術式解放、魔力配給破棄、呪式停止。

「オ、終ワッタカ？　ココ最近相手ニサレテナイシヨ、チョックラ手合ワセシテクレネーカ？」

「そうするか。我はそろそろ別れようかと考えているしな」
「――え？　今何と言った？」
「ん？　そろそろ別れようかと――」
「どうして！？」

身長差のせいで襟を掴めないキティは胸座をつかんでがくがくと揺らす。まあ、突然では驚くか。さて、理由を――

「どうして！？　私を捨てるの！？　ねえ！」
「ま、まて。何かおかしなことを口走ってないか？」

――話すこともできないくらい錯乱するだと！？　まてまて、我はキティにフラグなど立ててはいないのだが、キティ側から立てたというのか？

「とりあえず落ち着け。息を吸って、吐いて。ゆっくり吸って、ゆっくり吐いて」
「すぅ～、はぁ～、すぅ～～、はぁ～～」
「ゆっくり吸って、ゆっくり吸って、ゆっくり吸って……」
「すぅ～～、すぅ～～……って、いい加減苦しいわ！」
「落ち着いたようだな」

半ばギャグで言ったのだが、まさか実践されるとは。ともかく落ち着いたところで話を再開しよう。

「別れる理由はいくつかあるが。最も大きい理由は、キティが我に依存しすぎていることだ」
「わ、私がアランに依存しているだと！？」
「でなければ、あれほど取り乱すこともあるまい」
「う……」

まあ、あそこまで依存しているとは思わなんだ。

「それと、我も個人でやりたいことがある。結果、ここらで別れるのが得策かと」

「……わかった。アランがそういうなら私も止めない。だが！」

顔を真っ赤にし、ビシッ！　と音がしそうなほど勢い良く、その繊細な指を我に向ける。この状況で何か要求するとなると……思いつかんな。まさか処女を捧げると言い出さなければいいが。

「その前に私と仮契約しろ！」

「その程度でいいのか。ならばすぐにでもしてやるぞ。チャチャゼロ、陣をかけ」

「人形使イガ荒イゼ、ホント。ジャ、アトハ勝手ニシナ。ケケケ、ゴユックリ～」

嫌味と愉悦を混ぜたような捨て台詞をはいて、チャチャゼロは我の視界から消える。楽しんでいる方が大きいであろうな、あれは。

「キティを従者にするが、いいか？」

「構わん。アランがマスターなら本望だ」

そう言ってキティは眼を閉じる。はぁ、仕方ない。宝石を使おうとも思っていたが、こっちがお望みならそうしてやるのも男の甲斐性ってやつか。

少し腰をかがめ、キティと目線を合わせる。そのまま我も目を閉じてキティに顔を近づけて、口づけを執行した。

「っと、これでいいか？」

目を開けると、先ほどより赤くなったキティの顔。やべ、かわいすぎる。

不埒な感情が押し寄せる前に、パクティオーカードを拾い上げる。

「カードはアーティファクトカードか。使ってみろ、キティ」

「え、あ、うん。アデアット」

我からカードを受け取ったキティは言われるままにアーティファクトを取り出す。現れたのは一振りの剣。だが、その形状が通常のものとはかけ離れている。素朴ながら美しく繊細な長い刀身はいいのだが、鍔のあたりに妙な機械が付属しており、トリガーのようなものまで付いている。さらには、柄は取り外して何かを入れることができるような……

いや、現実逃避は止めるとするか。まさか、我が行きたがった『され竜』世界の道具（アイテム）、魔杖剣が出てくるとは。

「いやはや、我が呪式を使える影響か？　それともキティに呪式を教えたからか……両方か」

「これは、いったい何なのだ？　普通の剣ではないことは理解できるが……」

「く、くく。それは我の行きたかった世界の武器だ。ああ、転生者であることは話したよな？」

「？　ああ。荒唐無稽な話ではあったが、話に矛盾がなく、呪式なる魔法を扱える理由としては納得できるものがあったな……まさか」

どうやらキティも気づいたようだ。しかもこれは、あのレメディウス謹製の最高傑作『内なるナリシア』なのだからな！

「その剣。正式名称は『内なるナリシア』。さる高名な博士が作り

上げた、最後にして最高の作品だ」

キティに覚えている限りの説明をしていく。

「魔杖剣は呪式発動の補助をする。我のように実力で発動できるものは少ないからな、言いかえれば発動媒体だ。そして、主に防御に関しては最高を誇る自動呪式がそれには存在する。魔力を込めればそれは多重の干渉結界を生じ、状況を分析する演算を開始する」

それ以外にも言わなければならないことは多いが、さすがの我ももう細かいことは覚えてなどいない。

「魔力を込めてみるがいい。どれほどのものか我も興味がある」

「ああ、わかった。では……うぉ！」

「ぬっ！」

周囲に多重の呪式干渉結界が作動。さらに呪印からは良く分からないが、演算呪式と思われるものも発動している。試しに＜銀嶺氷凍息（クロセ・ル）＞を発動するが、発動段階で妨害が入り、発動後もガリガリと威力が減衰。至近距離で発動したのに、結局半分もいかないうちに無効化されてしまった。魔法も『燃える天空』を使用してみたが、我オリジナルである魔法干渉結界に阻まれて無効化された。

「凄まじいな……対魔法戦に関しては最強の守護を約束していないか？　いや、状況分析を補助されているから、攻撃も行いやすい……」

「そう思うが、慣れすぎは良くないな。緊急時以外は使用しない方がいい」

「それもそうか。アベアット」

少し惜しそうに、キティは『内なるナリシア』を還す。その間にコピーを作成した我は、キティにコピーを渡し、オリジナルを受け取る。

「さて、少し呪式を学んでいけ。それを使いこなせるようにな」

「う、やはりそういう話になるか……」

まあ、嫌なのは理解できるぞ。呪式原理からして、この時代の人間には理解できないものが多すぎるからな。だが、これから別れる以上、教えられることは教えておきたいのが性というものだ。

第十話「京都といえば神鳴流であろう？」（前書き）

タイトル考えるの、つらくなってきました。

第十話「京都といえば神鳴流であろう？」

さて、長々と放浪生活を送ってきた我だが、今中国から日本に渡ってきた。未だ鎖国状態（なんて言う割にはすんなりと入国できた）であるから、江戸時代。年号を聞いたところ安政３年とのこと。詳しい西暦はわからぬが、安政の大獄が幕末だったはずなので、幕末であっていると思いたい。歴史は苦手だったのでな。

現在の我は、多少背を縮めて瞳と髪を黒にして、不本意ではあるが髷を結い着物を着ている。さらに肌を黄色にし、顔立ちを東洋風にした。やや我の面影は残っているが、おそらく気がつくことはないレベルだ。これならば、日本人も心を開くだろう。

「すまぬ、そこの者」
「はあ、なんでっしゃろ？」

適当に見つけた男に声をかける。ふむ、前々世が日本人であったとはいえ、日本語を離れて５００年以上。イントネーション含めうまくいっているか微妙ではあったが、どうやら聞き取る程度ならいけるようだな。

「京都へ行こうと思っているのだが、最短での道筋を教えよ」
「へえ……でしたら……でしょうなぁ」
「ふむ、参考になった。駄賃だ、くれてやる」

銭を数枚取り出し、男の手の上に乗せる。男が喜ぶような声をあげているが無視し、人払いの魔法を使用する。そのまま街道を外れて茂みに入り、影の転移魔法を発動。大体の距離と方角さえ分かれば、目的地の適当な影に出ることなど造作でもない。

で、適当に移動した結果、遠い昔見たことがあるような場所に到

着した。

「む……ここは、関西魔法協会本部にして、近衛木乃香の実家……になる場所か？　ならば、京都神鳴流の情報も手に入るやもしれんな」

影から刀を一本取り出す。キティと別れてすぐにアフリカで習得した武術、現地の言葉で『術』という意味を持つ、ワイヲリカ族に伝わる超高度な技の数々を５０年かけて習った際に、師範を務めたハーンに貰った思い出の一刀だ。彼らには居合も伝わっており、日本刀によく似た片刃の曲刀を使用していた。その中でも最高の出来であるものを我は頂いたのだ。理由を問うたら、

『君みたいな最高の弟子を取ることはもう無いだろうからね！』

だそうだ。まあ、劣化しない肉体を保持していれば、嫌でも最高の弟子に成れる。元々様々な技術を高めるために転生したようなものだ。少々才能がなく絶望しかけた時もあったが、時間をかければいつかは頂上にたどり着けるし、たどり着く気でいる。

今現在も、我は『術』を高みに上げるための訓練は欠かさん。しかし、どこまでいっても『術』には果てが見えない。あのハーン師範ですら、未だに成長を続けていると称したほどのものだ。今の我は当時のハーン師範を抜いていようとも、今もハーン師範が生きていると仮定した場合、おそらく足元にも及ばない。数少ない、我が尊敬に値すると断言できるほどのお方だ。

「さて、感傷に浸るのも大概にするか」

刀身が８０センチ程度の無銘の刀を腰に下げ、関西呪術教会本部（仮）への階段を上がる。ほどなく屋敷に辿り着くが、不気味なほ

ど人気がない。

「留守か？　それにしても人気がなさすぎるが……む！」

突如、右前方の桜の木の陰から、刀を抜いた人影が一つ飛び出してくる。どうやら人気がないのではなく、気配遮断を施していただけか。奇襲のためか、警戒故か……両方だな。

体ごと振り向いた瞬間、僅かな足音が左右後方三方向から同時に発生する。どうやら、我を敵とみなしていたか、全力排除にかかってきたようだ。しかし、気配遮断を解かずに行動したのは良いが、足音を立てるようでは二流だ。

鍔のない刀をすらりと抜く。鞘走りの音など立てない。ハーン師範の前でそんなことをすれば、基礎がなっていないと説教ものだ。

「しかし……速いが、疾くはないな」

彼らは速い。我の通常体術ほどはなくとも、人の枠におさまるものとしては十分速い。しかし、いくら速度が速くとも、不意を突く疾さがなくては意味がない。

上段に構え、左足を前に出す。別名を『王者の構え』。挑戦者をすべて受け入れ、そして叩き潰す自信のあるものに許された、攻撃は最大の防御を体現する型。

教えてやろう、京都神鳴流。我の学んだ、『術』の恐ろしさを。

Ｓｉｄｅ　ｓｈｉｎ－ｍｅｉ－ｒｙｕ

突然、関西魔術教会本部の土地に踏み込んできた愚か者。それも太刀を佩いた、見慣れぬ人物。

警戒を強め、息をひそめていた我らに下った御言葉はただ一つ。

『排除せよ』。
布陣は正面から一人、敵の注意を引きつける。注意を引けたら左・右・背後の三方向から挟み撃ちにする。達人であろうとも、そう簡単には崩せぬこの布陣。その命、掻っ切る！

「留守か？　それにしても人気がなさすぎるが……む！」

正面からの攻撃の構えに、侵入者は注意を向ける。それも体ごと振り返るという、我々にすれば願ったり叶ったりの状況だ。
直後に、三方向から飛び出し、前後左右全方向からの挟撃。気づいていないのか、悠々と太刀を抜き、

「しかし……速いが、疾くはないな」

そんな世迷い事をほざいて上段に構える侵入者。その油断が、貴様を殺す猛毒だ！
あと一歩。それで侵入者の命は潰え――

「無重剣」

――金属と金属がぶつかり合う、キンという無機質な音が四度連続で響き渡る。一瞬ぶれた気もするが、依然奴は背中を向けたまま上段に構えている。このまま――あれ？　俺の刀は、どこに行った？

「やはりな。速いが疾くない。技術も程度が知れる」

いつの間にか納刀した侵入者がぐるりと周囲を見渡し、そこらの地面を指さす。その指差す先を見れば、刀が４本転がっていた。

「京都神鳴流、この程度か」

ひどくつまらなそうに呟いた侵入者は、その足で協会から出ようとしていた。その姿に俺は何も言えなかった。４人がかりで挑んでかすり傷一つ与えられないばかりか、彼が何をしたのかさえ理解できない俺などには、神鳴流を貶める発言に、反論など、できるはずがない。

「待つがよい、強き侵入者」

だが、俺たちの無念を晴らしてくれる者はいる。今代の京都神鳴流最高位、青山宗一郎が。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そこまで使える術者でなかったか、あまりに弱かった雑種（ザコ）を無視し帰ろうかと思っていた矢先、不意に聞こえた声に再び振り返ることとなった。

視線の先に立っていたのは、やや痩せた、それでいて不思議と力強さのある一人の男だった。

「私は青山宗一郎。京都神鳴流の最高位を頂いている」

「我の今の名は有須輝（アリステル）だ」

婚約者の名前を使用した偽名を告げる。たがいに名乗りあい確認しあうだけの、淡々とした会話が始まる。まるで予定調和を思わせる、静かな世界。

「なぜ、侵入した」

「京都神鳴流の情報を得るために」
「なぜ、情報を求めた」
「京都神鳴流の教えを請う為に」
「なぜ、貶める発言をした」
「想像以上に弱かったからだ」

それもそのはず。おそらく奴も、我と同じことを考えている。
――ただ、戦いたいと。互いの技で鎬を削りあいたいと。

「それだけの技術を持ち、まだ神鳴流を望むか」
「成長こそが我の生きる意味だ」

弓を引き絞るように、宗一郎の体が力をためていく。では、開幕としよう。

「真の京都神鳴流。我の前にその力を示せ」
「参る」

その一言が、戦いの火ぶたを切った。我は一切動かず、相手の動きを見る。相手は太刀に手を触れることなく、滑るように接近する。わざわざ刀を佩いていながら触れもしないとは、太刀に直前まで触れぬ居合の類か。『術』にも、その技術は存在する。わざと構えぬことで、構えている状態よりも自由が利くため速く動ける――初めて聞くと気が狂っているとしか思えない技術が。

「破岩拳」

だと思えば、拳だった。ただし気を纏い、『術』に通ずる無駄のない動きでの一撃だ。なるほど。全身で発生する力を余すことなく利用し、気で強化すれば岩をも砕くことを可能にするであろう。

しかし。その程度であるのなら、おそらく我にもできる。

「見様見真似破岩拳」

同じく無駄のない一撃を、気で強化して叩きつける。さらに激突の瞬間動きを止め、衝撃を余すことなく伝える浪之華（なみのはな）を使用する。

「……っ！」

「くっ……！」

激突と同時に、互いに大きく吹き飛ばされる。我と違い、衝撃こそ突き抜けてこなかったが、気が代わりに叩きこまれる。なるほど、これが京都神鳴流か……面白いではないか！

「居合斬空閃」

そんな気が緩んだ瞬間を見逃されなかった。神速の居合が空を一閃。それにより生じた衝撃波にも見える気が、斬撃として襲いかかってくる。それも一撃ではない。神速の抜刀と納刀を繰り返し、次々と斬撃を飛ばしてくる。

だが、それは我には当たらない。膝抜きを駆使し、ひらりひらりと隙間を抜ける。時に脛を切り落とそうとする斬撃には跳ばずに膝のみを折り曲げ、最小限の動きで回避する。

「貴殿も、遠距離では不利か」

「さすがにこれは、見様見真似では不可能だからな」

互いに攻撃も回避も止めずに会話する。『術』には遠距離攻撃を可能とする技はない。飛び道具の使用法や飛び道具を避けて懐に潜り込む歩法はあるが、ここまでの使い手に出会うことがほとんどな

く、使用回数が少なく鈍っている。だが、そろそろ体も温まってきたところだ。

「そろそろ行くぞ」

ゆっくりと宗一郎に向けて歩みだす。歩むことで生ずる、規則的な体の揺れを完全に消す。宗一郎はまだ気付かない。我が既に、彼の間合いに踏み込んでいることに。

我の接近速度と現在位置を知らねば、タイミング良く迎撃はできない。そしてそれらを目測するために必要なものは、人が歩む時の体の揺れと視覚の大きさの変化だ。そして、体の揺れは接近のテンポを知る重要な要素だ。だが、それを完璧に制御されると、距離感がつかみにくくなる。結果、間合いに踏み込まれても気が付かなくなる。

『術』の神髄は、予測の封印だと師範は言う。誰もが常に行う何気ない予測。それを封じられると、人は脆い。

『術』の攻撃は、速くはないが疾い。相手が予測するよりも早いタイミングで攻撃が来るからだ。『術』の攻撃は、強くはないが勁い。相手が防御しようとする前に攻撃が来るからだ。

間合いに入り刀を振るう。目を見開いた宗一郎が飛び退いて回避するが、その程度では無駄だ。すぐさま追いつきもう一閃。

「これで終わりだ」

「紅蓮剣」

しかし敵も恐ろしい男だった。回避し着地した瞬間に方向転換し、炎のような熱を放つ気を纏った太刀で斬り付けてきた。あの一瞬で転じた判断力は認めよう。しかし、それは無謀だ。

太刀が接触する瞬間、全身にブレーキをかける。我に伝わるは熱気だけであるが、あちらはとてつもない衝撃が襲いかかったはずだ。

刀こそ手放さなかったが、体勢は崩れ大きく吹き飛ばされる。
宗一郎が立ち上がる前に、その首に刃を突き付ける。

「――見事だ、青山宗一郎」
「――そちらこそ、有須輝」

そして敗北宣言を受け取り、刀を納める。周囲の数名は驚いているようだが、我や宗一郎にすれば別にどうということはない。ただ、自らの技を出し合うことが目的なのだから。そもそも殺す気があれば、先ほどの４名の命はない。

「敗者は勝者には逆らえないな。京都神鳴流、習っていくがよい」
「……言いだした我が言うのもなんだが、他流派のものを引き入れることに抵抗はないのか？」

通常はそんなことは許されない。伝えられた技を他流派に奪われないためにも。しかし、なんてこともないと言わんばかりに答えを返す。

「貴殿が敵に回らなくなる。それだけでも十分に意味はある。秘奥までは教えられないが……見て覚えられては手も足も出ないだろうな」

秘奥だろうと覚えたければ覚えればいいと。彼はそんなことを言うのか。

「総員、引け。この者も我ら京都神鳴流の一因となったのだからな」
「「「「は、はっ」」」」

あわてたように雑種（ザコ）共は引いてゆく。そもそも決して敵わぬ相手

に敵対すること自体が誤りではあるのだがな。
さて、京都神鳴流……いったい何年で我の物とすることができるのやら。

第十話「京都といえば神鳴流であろう？」（後書き）

何の脈絡もなく現れた『術』ですが、詳しくは『アルティメット・ファクター』をご覧ください……で許されるものじゃないと思いますんで（もう見つからないだろうし）、説明を入れます。設定欄にも簡易の説明は入れますが、こちらはより詳しく。

『術』とは、『アルティメット・ファクター』において、惑星テラ・インコグニタの原生種（トライブス）の一種、ワイヲリカ族に伝わる体術のこと。

その創造理念は『真正面から不意を突く』ことであり、そのために『相手の予測が外れた時の脆さを意図的に創る』。そのため、『術』の使い手は重心制御を完璧にできなければならない。基本になるのが『膝抜き』、『転（まろ）ばし』、『身体割り』である。

『膝抜き』は膝の力を抜いて体を捌く体捌き。『転ばし』は重心をひとまとめにし、足を垂直に上げて重心を浮かし、その重心を好きな方向に転がす体捌き。どちらも加速時間ゼロの移動法である。

『身体割り』は全身を同時にばらばらに動かす方法。『小魚の群れが方向転換するときに一斉にざっと動くように、全身を分けて一斉に動かす』ものである。ピアニストの指捌きが例として挙げられている。

ほぼ全ての技が以上三つから派生しており、『無重剣』は『膝抜き』によって真下に落ち、その瞬間の無重力を利用して高速で剣を奔らせる技である。『浪之華』だけは少々違い、攻撃が当たった瞬間に全ての動きを止めることで、交通事故の時にフロントガラスを突きぬけて運転手が飛んで行くように、衝撃を余さず相手に伝える技である。

雑記：アリスって書くと名前（ファーストネーム）だけど、有須って書くと苗字（ファミリーネーム）に見えなくね？

第十一話「魔法世界に来てみたが」（前書き）

遅れた理由
その１：京都神鳴流はこんな感じでいいか→あ、らぶひな見とこ→あれ、斬魔剣がイメージと違う→思考停止→いいや、オリジナル解釈で
その２：京都神鳴流の修行風景を書いた→納得できず消した→また書いた→また消した、の繰り返し。結局パス
その３：ポケモン買った
その４：就活の影響がちらほら

第十一話「魔法世界に来てみたが」

『術』を４００年かけて研鑽し続けたせいなのか、神鳴流を会得するのにかかった年月は2年で済んだ。斬岩剣を3日、斬空閃を7日で習得してしまい、その他多くの技を名前と一致させる作業を一カ月する合間に、奥義である斬魔剣を教えてもらうために交渉した半年を含めてだが。

ともかく。京都神鳴流を会得した我は、次なる地を目指す前に二振りの小太刀を鍛えてもらった。陰陽系の魔術師を専門にしている裏の鍛冶屋に、莫大な魔力を込めた我の血液を混ぜた砂鉄を渡して、無理を承知で作らせたその小太刀の名は妖刀「黒陽（こくよう）」と魔刀「紅月（くげつ）」。

妖・魔の名が付いていることからもわかると思うが、どちらも呪いに近い性能を所持した、我以外が扱うのは不可能に近いとんでもないものに仕上がった。詳しく言えば、封印である鞘から解き放たれた時、所持者が最低でも一般魔法使いの２００倍の魔力を持ってない場合、刀からの魔力のフィードバックで所持者は死に至る。４００倍近くあって狂うか狂わないか。６００倍あれば何とか扱える。１０００倍になると、今度は逆に刀側からの支援を得られる。そして、１０００倍の魔力を持つ者は我以外にはまずいない。故に、我専用に近いものとなってしまった。

「魔法世界へのゲートはここでいいのか？」
「はい。杖などの武器になるものは一時預かりになります」
「我は……杖は指輪二組。武器は太刀一振り。以上だ」

次の行先は魔法世界だ。まあ理由はいくつかあるが、一番大きな理由は戦争に介入してみたいことだ。次点は賞金稼ぎが嫌になるほど多いことか。全員返り討ちにしたが。

返り討ちについては、我が強くなりすぎたことも大きな要因か。常に武術・魔術面で強化を続けているため『進化し続ける怪物』などという二つ名が追加されていたからな。

「仮契約（パクティオー）カードも預かり対象になりますが、大丈夫でしょうか？」

「契約者のカードは影の中だ。杖がなければ取り出せん」

「……確かに。それではこちらの……」

今は適当に呪式変化している。我の本来の姿は、見つかればすぐに抹殺対象レベルまで危険視されてしまっている。この程度は日常茶飯事だ。

ああ、先ほど言っていた小太刀二振りはキティの仮契約（パクティオー）カードとともに影の中だ。あんな危険物、万一抜かれでもしたら出禁ものだ。キティとの関係も、知られると不安要素ばかりになるしな。

さて、ゲートを抜けたら適当に徘徊するか。さすがに１００年以上も時間が余っている以上、もう少し鍛えておきたいところではある。無論、魔法も気も使わない、純粋体術のみで。

これは、最近の３００年前から制限行為の一つだ。現在の我の異常な魔力と気の量では、戦いになることがまずあり得ない。そのため、よほどのことがない限りは魔力を封印、気も最低限度にしている。それでもなお、我が認めうる存在はハーン師範や青山宗一郎くらいのものだ。魔法使い共には体術の良さが分からんのか、遠距離から魔法ばかり撃ってくる。当然接近して殲滅。数が多い場合は仕方なく魔法と呪式で殲滅している。

「などと考えている間に魔法世界に到着か。見た目はファンタジーだが、実情はどうかな」

空飛ぶクジラや明らかに人間（ヒューマン）ではない人型生物（ヒューマノイド）もいるが、知的生物である以上、それほど旧世界と変わらない生活を送っているはず

だ。魔法を除けばだが。
　さて、どこに行くか……そもそも魔法世界編以降は真面目に読んだわけでもなし、どこがどうだったかなど、もう記憶には欠片もない。メガロが腐っていたあたりなどは覚えているが……ん、ケルベラス渓谷？
　――――ストーリーにかかわりがあった場所だとは思うが……よし、行ってみるか。指輪、刀三振り、共にオーケー。この装備で大丈夫か？

「大丈夫だな、問題あるまい」

　転移を実行する。我の視界が一気に切り替わり、たどり着いたのはどこかの崖の上。渓谷ならば、崖の一つや二つあっても不思議ではないが、谷底からは妙な気配が漂ってきている。この感じ……魔力消失空間？　とりあえずはここの谷底は、魔法と咒式は一切使えないか極限まで軽減されるかのどちらかだな。まあ、気が使える時点であまり問題になるまい。降りて修行を開始するか。
　で、わざわざ谷底まで降りて行ったのに、だ。

「ギュオオオオォォォォォォァァァァァァ！！！」
「デュラァァァァウウウウウ！！」
「五月蝿い」

　ひたすらに五月蝿い。我に図体が勝っているだけで強がる獣どもが。皆殺しにしてくれるわ。

＜私が相手になるから引きなさい＞
「「「「「「「「ギュア！？」」」」」」」」
「……ほう、それなりにできる者が来たか」

念話のようだが、誰だろうか。渓谷の奥、それも相当先だ。

＜馬鹿ね、圧倒的実力差を見極められないなんて……さて、私が出ていくのとそちらが来るの、どっちにする？＞

声だけでわかる。声の主は相当の猛者だ。口調からして女性……若しくは人語を解する高位の雌の魔獣か。

「我が向かおう」

獣どもが我に道を譲る。ならば声をかけたのは、この渓谷最強の存在か。

別に恐れる必要性はない。強き者との戦い。それは血沸き肉躍る行為だ。

「さて、邪魔するぞ」

＜ええ、いらっしゃい。勇敢なるヒト＞

最後の角を曲がったところで、声の主の姿が映る。なるほどな、確かに彼女なら最強を名乗れる。

それは、龍。それも、およそ１２０メートルはあるかという極上の大物。

＜私を見ても驚かないとはね。さすがは、ケルベラス峡谷に単身足を踏み入れる猛者。私はリュミスベルン。このケルベラス峡谷の魔獣のトップにして龍種最強よ＞

「ふむ、ならば我も倣うとするか。我はアルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライト。旧世界より来た真祖の吸血鬼だ」

＜ふうん……旧世界からのお客様は初めてだけど、ここじゃ弱肉強食だからね。私と一戦やらない？＞

なぜそうなるのかは分からないが、別に戦うことについては文句などない。龍種ほどになれば、我の相手としても不足はない。

「いいだろう。我の力を見せてやろう」

＜はっ、力不足を嘆かないでよ！＞

それだけ言って、リュミスベルンは飛燕のごとき……否、飛龍のごとき速度で腕を、尾を、翼を振るい、我に攻撃する。

それら一つ一つは大振りでありながら速く、さらには範囲も恐ろしく広い。巻き込まれる空気そのものも凶器となり襲いかかってくる。

確かに、疾くはない。ただ大きさと相まって避け辛いだけだ。だが、これは真理の一環でもある。それは、『どれだけ不意を突かない攻撃であろうとも、避けられなければ関係ない』だ。

術の求める先である『正面から不意を突く』とは対極に位置する、近代兵器に求められる真理ではあるが、ここまで圧倒的なものは初めて見たぞ。

「だが、どうにかなるな」

＜へえ、遅いくせに速いなんて、矛盾もいいとこじゃない＞

不敵に口角を釣り上げる。まだこれなら、回避は不可能ではないのだからな。

気を使い、加速度を限界まで上げる。加速時間をゼロにするだけで並大抵の攻撃は掠ることすら許さない。ならばさらに加速度を上昇させてしまったらどうなる？　答えは簡単だ。達人級であろうと危険性がなくなる。

さらに、剣術を使用する。さすがに龍を相手にして素手で挑もうと思うほど馬鹿ではない。勝てなくはないであろうが。

「紅蓮閃」

野太刀を抜き、気を火に変換。それを斬空閃の要領で飛ばす。まずは弱めの一撃で様子見だ。

＜甘いわ＞

「グルオアアァァァアアァァァァ！！！」

リュミスベルンはそう吼えた。その一吼えで紅蓮閃は吹き散らされる。同時に、背後にいた魔獣も大きく後退する。さすがは龍。鶴の一声よりも効果は抜群のようだな。

＜死の吐息にて消え失せなさい！＞

そのまま火炎の吐息で追撃を加えてきた。なるほど。これほどの範囲攻撃であれば、回避は不可能になる。まあ、回避不能ならば、安全地帯を生み出せばよいだけのこと。

「斬魔斬空閃」

形無きものに干渉する魔の型を以ってして、吐息を斬り裂いてやる。若干熱が伝わってくるものの、吐息そのものに比べれば可愛いものだ。

「っと、ぅおおぉぉぉ！？」

が、少々慢心が過ぎたようだ。死の吐息を目くらましに放たれた尾による一撃を、甘んじて受けてしまった。いやいや、さすがに龍の一撃は重い。

＜浅かった……いえ、直前で跳んで軽減したのかしら？＞
「いつつ……さすがは必殺とすら言われるだけあるな。気と回避で軽減して、ここまで通るものか」
＜さすがね。私の一撃を受けて生きていたのは、龍を除けばあなたが初めてよ＞
「お褒め頂き恐悦至極」

やや芝居がかった台詞で返すが、さすがにダメージが大きく、まともに動こうとするのは辛い。しかたないか。全力で潰させてもらうか。

＜だけど、次で終わりね＞
「そうだろうな」

野太刀を納め、小太刀二刀に手をかける。
さて、『岩』は動きの最適化による最高の一撃と気による強化。『空』は気による遠距離攻撃。『魔』は形無きものへ干渉する術。
それらを自在に扱ってこそ、京都神鳴流は完成する。先程のように、二つを組み合わせることも到達者としては必要だ。
そして、その強弱を調整することもできて、一流と呼ばれる。

「烈風絡魔斬鉄閃――」

妖刀「黒陽」にて、遠距離攻撃である『空』の型にねじれを作り、鉄をもねじ切る斬鉄閃を放つ。そこに『魔』を追加することで、形無きものを絡め取る。
そう、周囲に残存する吐息の熱量。それらを風で集め、干渉して絡め取り、ひとまとめにすることで生じる、焦熱の一撃だ。あの金色の鱗であろうと、鉄すらねじ切る一撃にこの熱ならば、耐えきれ

まい。

＜消し飛びなさい！＞

追撃のように死の吐息を吐くリュミスベルン。だが、それは悪手だ。形無きものを斬り裂く『斬魔』と違い、『絡魔』は形無きものを絡め取る。我の一撃の限界まで、それは止まることはない。

さあ、根競べだ。我の攻撃が臨界を迎えるのが先か、そちらの攻撃を超えるのが先か！

「グルアァ！」

どうやらリュミスベルンも気づいたようで、我の攻撃を押し返そうと吐息を吐き続ける。このままでは全ての熱量が我に向けて流れ込んでくるであろう。このままなら、な。

「――二刀連撃！」

残る一刀、魔刀「紅月」で烈風絡魔斬鉄閃をもう一度放つ。一つでは足りないのなら、二つならどうだ？

＜ふ、あは、あはは！　まさか私が負けるなんてね＞

どうやらリュミスベルンも気づいたようだ。我の攻撃を止める術が、既に存在しないことに。

攻撃を続けても打ち破れない。避けるには攻撃を止めなければならないが、攻撃を止めれば直ぐにでも攻撃が到達する。もはやチェックメイトだ。

＜楽しかったわよ、アルトリウス＞

だがリュミスベルンは諦めない。龍の誇りを胸に、最期の瞬間まで抵抗を続けるのだろう。だが、死なれでもしたらこちらが面白くない。

気で脚力強化。瞬動で岩壁を駆けあがる。さあ、見せてやる。我の最高の一撃を！

「ＡＲＡＮ全力右パンチ！」

体を割り、膝抜きを以って最速の一撃。そこに莫大な気を乗せて未来の羅漢拳（ラカンパンチ）を模倣する。

否、我の一撃は無駄を完全に省いていることに加え、気の総量が（おそらくだが）ラカンを超える。そこから繰り出される一撃は、我が上だろう。

せめぎ合っていた吐息も、烈風絡魔斬鉄閃も、問答無用に叩き落とし、消し飛ばす。やや茫然としたようなリュミスベルンの顔に、不敵な笑みを見せつける。

「我の勝ちだな」

＜くっ！　あははっ！　ええ、あなたの勝ちよ、アルトリウス。私自身が諦めた一撃を、当たり前のように叩き潰す。そんな奴に勝とうなんて、未来永劫不可能よ＞

龍の遠吠えが渓谷に響く。そして、我に向けられていた敵意その他諸々が消えていき、畏怖の念が向けられる。どうやら我がリュミスベルンに勝利したことで、ここでの最強が我であることが全魔獣に伝わったようだ。

「リュミスベルン。我と共に来い」

＜なに、私を気に入ったとでも言うのかしら？＞

やや笑みを含んだ声色で、冗談めかしてリュミスベルンは言う。気に入った？　ふはは、気に入ったとも。

「敗北を目の前にしても諦めない。それは我にすれば喜ばしいものだ。そして、十分に強い。ならば手放すことこそ愚策」

＜お褒め頂き恐悦至極＞

どうやら先程の我の真似のようだ。くくく、ますます手放したくなくなったぞ。

「さらに言えば、勝者は敗者の生殺与奪権を得る。ならば、貴様から死を奪ってやるだけだ」

＜それを言われたらどうにもならないわね。いいわよ、地獄までだろうと付いて行ってあげるわ＞

互いに笑いが止まらない。ああそういえば、我から言わねばならんことがあったな。

「これからは我をアランと呼べ。イニシャル読みだが、偽名にはちょうどいいだろう」

＜なら私はリュミスでいいわよ。これから頼むわね、アラン？＞

巨大な龍（リュミスベルン）が首を垂れる。周囲の魔獣どもも同様だ。これからの魔法世界生活、想像以上に楽しくなりそうだな。

第十一話「魔法世界に来てみたが」（後書き）

リュミスベルン：知る人は知るエロゲ、巣作りドラゴンのツンデレヒロイン。しかし作者が巣作りドラゴンを持っていないため、口調は多分違う。性格は全く違う。ツンデレではなく実力主義者（実力主義龍？）。最初はムブロフスカにするつもりだったが、ケルベラス渓谷では魔法が使えない↓呪式が使えないことに気づき断念。ちなみにだが、帝都守護聖獣の樹龍よりも強い。原作最強ですから。

それと、冒頭で述べた京都神鳴流の件ですが、この話での斬魔剣は「形のないもの（幽霊とか炎とか）に干渉する技」となります。なぜかというとＷｉｋｉｐｅｄｉａでは……

斬魔剣
神鳴流奥義。霊体を滅ぼす。

斬魔剣　弐の太刀
神鳴流奥義。手前にいる人間には影響を及ぼさず、その背後にある霊体（怨霊、悪霊等）を滅ぼす。

となっているのに、『ラブひな』ではトラックを斬った際に『今の、斬魔剣！？　運転手無事だし』とか発言している主人公。おい、斬魔剣でも人斬れると弐の太刀で言ってるんだが……どうしよう……というわけでして。結局こんな感じに変更しました。

第十二話「大惨事魔法世界大戦・序章」（前書き）

あれ、前回の投下がもう十日も前……？

悪あがきをしても文章量は長くならなかった現実。

第十二話「大惨事魔法世界大戦・序章」

Ｓｉｄｅ　Ｒａｋａｎ

「んっふっふ～　こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かぁ～。じゃ、早速肉を～♪」

「あっナギ！おまっ…！何先に肉を入れてるんだよ！？」

俺の見下ろす先で、紅き翼（アラルブラ）とやらが食事をしている。今回の俺のターゲットだが……ま、ど～にかなるだろ。

「いいじゃねぇか。　旨いもんから先でよ、ホラホラ！」

「バッ、バカ！　火の通る時間差というものがあってだな……まずは野菜を入れて……あ、ちょッ！」

「あーうっせ！　うっせーぞ、えーしゅん！」

えーしゅん……たしかあれは紅き翼（アラルブラ）の剣士。それに突っ込まれている髪の赤い奴は魔法使いで紅き翼（アラルブラ）のリーダーだったか。

「フフ…詠春、知っていますよ。　日本では貴方のような者を『鍋将軍』…と呼び習わすそうですね」

「ナベ・ショーグン！？」

それ以外は……今はいいな。俺の領域（テリトリー）に入れるのはそれだけだ。

そう、奴隷拳闘大会に優勝した時に現れた、俺史上最悪の相手。

触れることすら許されなかった『伝説の賞金稼ぎ』ほどの相手はいねぇ。

「つ…強そうじゃな」
「わかったよ…詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋将軍だ」
「全て任す。　好きにするが良い」

さてと、そろそろ動くとすっか。アデアット、『千の顔を持つ英雄』。まずは挨拶代わりだ。受け取れえええええ！！！！

……うわーお。鍋に直撃してひっくり返った瞬間、宙にある肉を箸で取りやがった。なかなかやるな、あの赤毛と他二名！

「食事中失礼～ッ！　俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン、いっちょやろうぜッ！」

一息に飛び降りて挨拶する。おや、鍋を頭からかぶった剣士の様子が……

「ふふ、ふふふ、ふふふふふ……食べ物を粗末にする者は――」

瞬間、縮地に近い速度で間合いを詰め――

「――斬る」
「おほ？」

――その手にした刀を一閃する。いや～、ちっと想定外だな、こりゃ。まあ戦う為に仕掛けたんだからこれはこれでいいけどな。しかし、こいつは奴よりも弱い。つーわけで、あんたはお呼びじゃないぜ！

「情報その一。生真面目剣士はお色気に弱い」

懐から取り出したカプセルを、剣士の目の前に放る。それがはじけると、かな~りきわどい服装をした精霊が呼び出される。

「な、ななな!?」

すぐさま目を閉じ、見なかったことにしようとする剣士。だけどよ、敵を前にそれは致命的だぜ?

「まずは一人。次は……」
「俺だ!」

赤毛の魔法使い、か。ええと確か……

「情報その五。赤毛の魔法使い。弱点なし、特徴無敵」

俺様と同じ、無敵。魔法使いと剣士の違いはあるが、それでも同じ舞台に立てる者。

「ええと……雷の斧」
「――訂正する。弱点、暗記」

まさか雷の斧を唱えるのにあんちょこを使う奴だとは思わなかった。間違いなくこれは弱点だな。
その魔法の威力が、規格外でなければ、だが。

「はっ!　その程度で勝てると思ったかッ!」

気合防御で乗り切る。さて、俺のパワーアップの礎となってもらうぞ。

五時間ほど戦い、結果は相打ちとなった。まさか、この俺とここまで戦える魔法使いがいるとは思わなかった。

「へっ、なかなかやるな。名前、なんてゆーんだ？」

「ラカン。ジャック・ラカンだ、赤毛」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ」

ナギ、か。覚えたぜ、その名前。

「ラカン。紅き翼（アラルブラ）に入らねえか？」

「は？」

つい茫然としてしまう。が、すぐに気づく。こいつらについて行けば、俺様のパワーアップに一歩近づくかもしれねえな。

「いいぜ、どうせフリーランスだ。強くなるのにちょうどいい場所を探していたしな」

「はぁ、戦い続けて仲良くなるとか……どこの少年誌ですか、貴方

達は？」
「バクキャラ同士だからじゃないかのう？」
「ひでーな、てめーら」

ナギが笑う。こんなやつに引き分けたのも癪だが、俺はその上を行ってやる。
奴に勝つために、な。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　■■■■

「ラカンと紅き翼（アラルブラ）の勝負が決したわよ、■■■」
「そのようだな。さて、刺激してやった分だけ強くなってもらわなきゃ意味がないぞ、ジャック・ラカン」

約３ｋｍ離れた所から、私と■■■は二人の対戦を見続けていた。
私たちにすれば、この程度の距離は視認に困る距離ではない。

「それほど彼に期待しているの？」
「彼、じゃない。彼らだ。紅き翼（アラルブラ）のリーダー、ナギも入っている」

暗赤色のフード付きローブに、目元を覆う青銀色の仮面をつけた■■■は、唯一露出している口元に笑みを浮かべている。しかしそれは、獲物を狙う飢狼のような、血の滴るような笑みでもあったが。

「くくく……さて、義姉（あね）貴よ。彼らはいつごろこの戦争の裏に気付くと思う？」

「そうね……情報源がなくちゃ無理でしょう。完全なる世界（コズモエンテレケイア）は秘密結社よ。それも様々な国の中核に深く食い込んでいるのに気付かれないほどの」

「だろうな。さあさあ早く気付け、若人よ。その時は……」

ぱさりとフードを取り払い、仮面を外し、■■■はその素顔をさらす。直後に魔法が彼を全くの別人に変化させる。理由が理由とはいえ、相変わらず秘密主義ね。今回の姿は……アレンね。似た姿でリリアンヌもあるから紛らわしい。

確固たる理由があり名前は知られど素顔を知られていない彼と、名乗る気がなかったため素顔を知られていても名前を知られていない私には、それぞれに二つの二つ名がつけられている。

「参加してあげるよ。この伝説の賞金稼ぎ、『沈黙者（サイレンサー）』と『黄金女帝（ゴールドエンプレス）』がね」

もう一つは、互いに気に入っていない。『名無き者（ネームレス）』と『顔無き者（ノウフェイス）』なんて、誰が好き好んで名乗るものか。

「……義姉（ねえ）さん。何を思いだしたのかは知らないけど、やつあたりは場所を考えてね」

「え……あ」

気がつけば私は、近くにあった木の幹を握りつぶしていた。いけないいけない。抑えるのを忘れていたわ。ああ、恥ずかしい。別にそこまで恥ずかしくもないけど。

「さて、次の依頼まで時間があるけど、もう移動しましょうか？」

「はいはい照れ隠し照れ隠し。次の依頼ってなんだっけ？」

「減らず口はよしなさい。次は……アリカ姫の護衛ね。久しぶりの

護衛依頼よ」
「そ。じゃあ行こうか」

私は光のゲートを開く。慣れるまでが大変だったけど、光のゲートは広範囲を一度に巻き込めるすぐれもの。まあ、慣れないとそもそも光ではゲートを開けないのだけれどね。
光のゲートに飲み込まれ、共に全身が薄れていく。消える間際。

「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ」

アレンの呟いた言葉だけがこの場に取り残された。

第十二話「大惨事魔法世界大戦・序章」（後書き）

謎の賞金稼ぎ二人組。彼らの正体やいかに！？ｗ

ちなみに最後のセリフは「さようなら」を意味するドイツ語です。

第十三話「ラカンの過去、そして現在」

ラカンＳｉｄｅ

「そーいやさ、ラカン。何でそこまで強さを求めてんだ？」
「……なに言ってんだ、ナギ？」

紅き翼（アラルブラ）に入ってから一週間ほどしたある日。突然のナギの言葉に、やや動揺しつつも平静に俺は返す。俺が強さを求めている事はまだ誰にも言っていないのに、何故ばれた？

「確かに、やや焦っているように見受けられることがありますからね」
「だな。他人の技を盗もうとしていることも時々あったし」
「そもそも紅き翼（アラルブラ）に入るときに、そのようなことを言ってなかったかの？」

言った気もするが……疲れ切っていたその時のことなんざ覚えてねえな。
まあ、丁度いいか。紅き翼（ここ）も結構気に入っちまったしな。

「はぁ……俺が強さを求めてんのはな、奴隷から解放されたその日にあった出来事が由来だ。
俺は奴隷として拳闘大会に出場させられていた。まだそのころはそこまで強くなかったしよ、最初の頃はどうあがいてもダメだった。抜けるためには優勝しかなかったのにな。
だから鍛えて、鍛えて、鍛え抜いて。何年かかったかなんて忘れたが、十分に実力をつけたと自負できたときには、拳闘大会での優勝なんて簡単だったさ」

「だから鍛えていると？　もう奴隷に逆戻りしたくないために？」

アルが話を遮る。確かにそう考えてしまっても仕方ないところもあるあろう。もうあの頃のようになりたくないと、そう思い鍛えていると。

だが、俺の話はまだ終了してないぜ。

「残念だが、『優勝までは』だ。優勝するのは簡単だったが、その直後に起きた出来事こそ、俺が鍛え続けている理由さ」

あの、悪夢のような出来事。それは……

「優勝した直後、観客席と闘技場を隔てている障壁を抜けて侵入した輩がいた。当時の俺は世間を知っているわけじゃなかったからな、それが誰なのかは分からなかった。

そいつの見た目は全身を暗赤色のフード付きのローブで包み青銀色の仮面を付けた男と、貴族のような服を着た華奢な金髪の女の二人組だった」

今でも極稀に夢に見る、二人組。あれから一度も会っていなくとも、下手をすれば死ぬまで忘れることはないかもしれない。

「その二人……もしや沈黙者（サイレンサー）と黄金女帝（ゴールドエンプレス）ではないかの？　わしはその二人しか出ぬのじゃが」

「なんだぁ、沈黙者（サイレンサー）に黄金女帝（ゴールドエンプレス）ぅ？」

「聞いたことがあるような……アル、知っていますか？」

「知っているもなにも、魔法世界で知らない者はいないほどの有名人ですよ。神出鬼没にして受けた依頼の平均達成率９０％オーバーを誇る『伝説の賞金稼ぎ』です。名前でしたら、男の方はアラン。女の方は公式の場で名乗ったことがないため不明です」

勝手に情報を共有する紅き翼（アラルブラ）の面々。外れていたらどうするつもりだか。まあ。

「後で知ったことだが、その二人だ。話を続けるが、その時は会場がとんでもないほど盛り上がったな。まあ、伝説とまで言われた二人組が、公式の場に現れたことが滅多なことではないっつーのもあるようだったが。

で、突然乱入してきた奴らの内男の方が、俺に手招きをしてきやがったんだ。かかって来い、とでも言わんばかりにな。そのときゃ既に相手の力量くらいは探れるようになっていたから探ってみたが、女のほうはともかく、男の方からは特にプレッシャーも感じなかった。だから俺は思った。なめてんじゃねぇぞ、とな」

今思えば、恐ろしいほどの蛮勇だった。観客席と闘技場を隔てる障壁は、奴隷がいくら暴れても抜け出すことができないように強固にできている。それを難なく越えてきただけで十分に恐ろしいことだというのに、それに気づかなかったのだから。

「だから俺は挑んだ。だが何もできなかった。すれ違いざまの一撃でダウンさせられた。　次に気づいた時には、既に二人はいなかった。何がしたかったのかは未だにわからん。だから、俺は鍛え続ける。次に会ったときに、あの時の借りを返すためにな」

解放された後にいくつかわかったのは、あの障壁を切り裂いたのは女の方で、男の方は俺を叩きのめしただけだということ。そして、奴らの異常性。

「これが女の方の、百年以上前に撮られた写真だ。そしてこっちが、十年ほど前に撮られたものだ」

二枚の写真を取り出す。男の方は素顔を曝したことがないためだろうが、口元しか判別できない写真しかないから集めることを止めた。

「ふ～～ん……あんま変わってねーな」

「長命種ならあり得る、のか？」

「なるほどのぅ、これは確かに異常じゃの」

「さすがの長命種でも、百年も変わらないことはあり得ないのでは……？」

そう、この女の写真では、少なくとも変化しているようには見えない。いくらなんでも、百年もの間変化しないことはあり得ない。

そして俺様がたどり着いた結論。それは。

「おそらくこの女、人じゃねえ。最悪は真祖の吸血鬼（ハイディライトウォーカー）の可能性もある」

「……可能性はありますね」

変化しない存在。そんなものは不老不死になった存在しかあり得ない。ならばこれが真祖である可能性は高いはずだ。

「ではなぜ日常生活に困らんのか不明じゃな。真祖であろうと、吸血は必要ではなかったか？」

だが、ゼクトの言葉で矛盾に到達した。吸血鬼としての必須、というよりは存在理由（？）である吸血行為をしているといった情報は一切ない。

的外れだったか？　真祖に関する情報も少ねぇし、ここでグダグダ悩んでも思考の無駄か。

「まあ、話はそれちまったが。これが俺様が力を求める理由だ」

適当に切り上げる。ナギはまだ聞きたそうな眼をしているが、既に語るべきことは語りつくしちまったからな。済まねえがもう話せねえよ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

■■■■改めリュミス　Ｓｉｄｅ

「お初にお目にかかります、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア様。護衛としての契約のために参りました、アランでございます」

普段の彼を知るものが聞けば、あり得ないと叫びかねないほど丁寧にアランは自己紹介をする。けれど、私はそこまでは驚かない。彼は謙(へりくだ)るべき場では言葉づかいを正す。そして、本当に自分より上だと認めた相手には、言葉遣いを正すらしい。見たことはないけれどね。

「私は……そうね。護衛の間はリュビと呼んで」

そして私は対等である口調は直さない。たとえ王族であろうと、人に対して頭を下げる意味も理由もない。須(すべ)らく、子供のようなものよ。

「申し訳ありません。しかしリュビは……」

「よい。この者が誰に対しても頭を下げぬことは知っておる。では二人に告げる――」

私たちは真祖と古龍。ただ実力が必要な依頼であれば、何であろうとこなすことができる。諜報は老若男女変幻自在のアラン一人でほぼどうにでもなってしまう。さて、護衛条件は何かしらね。

「――最長五年、最短で戦争が終結するまで、私を守り通せ。以上だ」

「その依頼、五年が経過した時点で戦争が終結しなかった場合、私たちは解雇されるのでしょうか？」

「それはない。再び私がそなた達を雇う。その時にどうするかはそなた達しだいではあるが。それでどうするのだ。雇われるか、否か」

私はアランに全権を委譲している。別に人間社会は嫌いではないけれど、そこまでこだわるものではなかったから。今では長いスパンで歴史を繰り返しながらも、そのたびに苦悩し乗り越え成長する人に興味を抱いている。それでも、アランのほうが的確な判断を下せるから権利を主張しない。

「承知しました。それではこれ以後五年間、私アランと相棒リュビはアリカ・アナルキア・エンテオフュシア様に仕える護衛となります。契約書へ条件を書き込んだ上でサインをお願いできますか？」

「これは、正式のものか。少々待つがよい」

そう言い、一字一句間違いがないか、不利になる記述がないか、矛盾がないか、読み解いていく。無意味よ。それは一切の私情を挟まず、今回の契約に合わせてアランが書き綴ったもの。間違いが起きたことなど一度もない、私の知る限り完全無欠の契約書なのだから。

「……ふむ、大丈夫そうだな。では『五年経過するか戦争が終結す

るまで』と。これでよいな？」
「はい。では私のサインを『A・R・A・N・』と……」
「『リュビ』ね」
「血のサイン……なるほど、偽名ですら意味をなさぬようにするためか。では私も『アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』」
瞬間、契約書が発光し、此度の契約が完成したことを告げる。
「それではこれより五年間、よろしくお願いいたします。アリカ・アナルキ――」
「アリカでよい。姫や様の敬称は不要だ。それといい加減猫かぶりはよすがよい」
「かしこまりました――これからよろしく頼む、アリカ」
さて、がんばりましょうか。完全なる世界（コズモエンテレケイア）の目的、『魔法世界の崩壊』は私たちの生きようとする意志と相容れないのだから。その馬鹿げた幻想、潰してあげるわ。せいぜい首を洗って待っていなさい。
そういえば、なんでアランが直接完全なる世界（コズモエンテレケイア）を叩き潰そうとしないのか分からないけど……ま、それはどうでもいいわね。目的成就の瞬間に潰してあげるのが、せめてもの慈悲（悪意）ってことで。

第十三話「ラカンの過去、そして現在」（後書き）

アランは完全なる世界（コズモエンテレケイア）を潰すつもりはありません。さらに、世界の誰もが潰せません。原作開始二十年前の大戦時にいなければならない人物は全員揃うように運命固定をしてしまったためです。そして原作開始二十年前とは、大戦の終戦直前です。

お分かりいただけたであろうか。

第十四話「紅き翼との邂逅」（前書き）

就職活動で本格的に投稿が難しくなってきました。
だが、やめるつもりはない。

第十四話「紅き翼との邂逅」

「アラン、リュビ。移動するぞ」
「どうしたの、アリカ」

アリカの護衛になってからかなり経った。アリカにはもちろん極秘、リュミスにすら詳細は話していない情報網を利用して完全なる世界（コズモエンテレケイア）について探っていたのだが、おもしろいことが分かった。

ＭＭ（メガロ）の元老院にいる密偵がつかんだ情報によれば、魔法世界とは何者かによって創られた世界であり、そろそろ限界が近いらしい。限界に達すれば魔法世界は崩壊し、魔法世界住人は全員消滅する。旧世界からの渡来者の末裔であるＭＭの人間の上層部などは消えずに残るが、彼らはそのことを公表せずに崩壊の序曲と共に旧世界へ戻り世界支配を目論んでいるらしい。

さらに、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の構成員と接触して新入りとなった者もいて、それからは『再構成不可能』である魔法世界を切り捨て、『崩壊』を早めることによってＭＭ（メガロ）を滅ぼして旧世界を守るらしいことが聞けた。

――なぜ１００年以上何もしてこなかったかというと、忘れていたからだ、としか言いようがない。魔法世界編は拳闘大会あたりしか覚えておらず、戦争についてなぞ完全に忘れていた。戦争が始まったので念のために調べたら完全なる世界（コズモエンテレケイア）が関与していることに気づき、ようやく情報を集め始めたのだから。

……誰に言い訳をしているのだ、我（オレ）は。

「これから紅き翼（アラルブラ）と接触する。まさか攻撃してくるとは思えぬが、護衛は頼むぞ」
「分かったわ。行くわよアラン」
「ああ」

アリカの影に潜り込む。我が傍にいることを他者に悟られず、さらに危機とあらばすぐに駆けつけることが可能な状態である。まさに影から見守る状態だ。本来は『影』ではなく『陰』だが。

マクギルが先行し、紅き翼（アラルブラ）と先に接触する。

「「「マクギル元老院議員！」」」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国……アリカ王女」

そしてこちらを紹介する。……ふむ、紅き翼（アラルブラ）のメンバーが情報通り増えているな。あの銜え煙草はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。その横にいるガキはタカミチ・T・高畑とクルト・ゲーデル。あとは最後に見たときのままでナギ、詠春、ラカン、アルビレオ、ゼクトか。

「その横にいるのは……黄金女帝（ゴールドエンプレス）！？」

「ふふ、久しぶりね、ジャック・ラカン」

「……久しいな。護衛でもやってるのか？」

「ええ、アランも一緒よ。それと、護衛の間はリュビと呼んで頂戴。偽名だけど、ね」

驚愕するラカンに、あくまで余裕の態度を崩さずにウインクすらして見せるリュミス。

まあ、我（オレ）も奴も同じくアリカに協力する身。いがみ合っても仕方ないのは確か。むしろ協力し合わなければ……する必要はないな。我（オレ）の契約は護衛。契約に変更があるか特殊な条件下でもない限り、アリカから離れることはあり得ない。

「アラン、顔を見せよ」

「了解した、アリカ」

影から抜け出る。ただし普通に現れては面白くないので、操影術でアリカの影を持ちあげ、そこから現れる。

その出現に全く驚かないリュミスとアリカ……と紅き翼（アラルブラ）の面々。ち、さすがに少しも驚かんか、奴らでは。

「現在アリカの護衛を依頼されているアランだ。久しいな、ジャック・ラカン」

だが、驚かずとも好戦的な目で見てくる奴はいた。一度叩きのめした男、ジャック・ラカンが。

「てめえ、あとで勝負しな。今度こそ俺様が勝ってやる」

「現在こちらはアリカの護衛中。そちらはアリカと協力関係にある。戦いに意味はない」

まあ、別に殺してやってもいいのだが――あの闘技場で、誤って下手をすれば殺しかねない一撃を打ってしまったはずだが、何故かリミッターがかかったかのように力が弱まった。何かが働いているような気がするが……ふむ、何故か我（オレ）が行った結果のような気もするが、覚えていないのであればどうでもいい事ではないのだろうか。さて、ラカンと話している間にアリカの方はど――

「気安く話しかけるな、下衆が」

――ナニがあった？　ナギが何か不用意なことを言ったのか、そのあたりだとは思うが……そのナギもぼぅっとして、っと。あれは落ちているな。そういえば、確かアリカがネギの母親だったような、違ったような……まあ、そのあたりはどうでもいいか。

アリカの説明が終わる。簡単にいえば、戦争を終わらせる調停者となるはずだったアリカだが、力が及ばず紅き翼（アラルブラ）に助けを求めたのだ。我（オレ）？　なぜに我（オレ）がアリカを助けなければならん。我（オレ）の役目は護衛であり、情報収集や戦争ではない。

まあ、頼ってくれれば速やかに情報提供を行うが。

「『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』。これが戦争を長引かせている存在です。現状では連合にも帝国にも関係者が潜んでいるようですが……」

ガトウがアリカに説明している。が、その程度の情報であれば既に我（オレ）の手の内。どころか、上層部クラスなら誰が完全なる世界（コズモエンテレケイア）の人間かまで調査済みだ。我（オレ）の究極の情報網、なめるな。

……しかし、この先どうするか。我が行動しなくとも、完全なる世界（コズモエンテレケイア）との戦いは紅き翼（アラルブラ）がいればどうとでもなってしまう。忠実に護衛に徹するか……それでは面白くないな。いろいろと文句をつけて護衛から離れてみるのもいいか。

「以上です」

「話は終わったか？　なれば我（オレ）から言うべきことがある」

話の終わりにかぶせるように発言する。するとアリカがやや訝しげに返してくる。

「くだらないことは申すなよ、アラン。で、何を言う？」

「何、しばらくリュビに護衛を任せようかと思っただけだ。我（オレ）もそろそろ運動不足で体がなまりそうなのでな」

「ふん、護衛の任務に飽きたとでもいうか？　いいだろう。その力を以って王国に尽くせ。結果を出してみせろ」
「御言葉のままに」

言質をとったぞ、アリカよ。久方ぶりに暴れられそうではあるから、血は騒ぐが。

「では、市井にでも降りて情報収集と行くか」
「待ちな、俺たちも行くぜ！」

馬鹿（ナギ）の発言は無視する。どうせ我（オレ）にはついていけないのだからな。

「ふん、勝手にするがいい。とはいえ、付いてきていいのはアルビレオかガトウか詠春（タカミチ）とクルトだ。餓鬼二人は邪魔、馬鹿（ナギ）とラカン二人は足手まといだ」
「な、ざっけんな、てめえ！」

ラカンの怒鳴り声をＢＧＭに王城から飛び出す。そのまま空中で生体変化系呪式を使用し、仮面とローブで隠された肉体を姉であるレナに変化させる。

着地の直前、足元に影のゲートを開いて、王城から離れた場所に転移。ゲート内部でローブと仮面を外すのを忘れないわ。

……さて、情報収集を始めましょうか。まずはオスティアのジェルメイヌとミカエラを訪ねて……姿を変えながら帝国かしら。シャルテットとカイル、エルルカと会ったらＭＭ（メガロ）でレオンハルトね。ネイとグーミリアには会えたらラッキーって思いましょう。アリアドネーのマリアムに会ったらすぐに帰ってきて、ウェスペルタティア王城のクラリスで終了ね。ガストは完全なる世界（コズモエンテレケイア）に所属しているし、キールは商人として全国を渡っているから、どこで会えるか不明だし無視して十分、と。

「紅き翼（アラルブラ）には見つけられるわけないのよ。我（わたし）が完全な別人に変身できることを知らないのだもの」

そして、私が保有する情報網の正体を知らないから。まさか全員が■■■だなんて想像すら出来ないでしょうから。私ですら、＜？位相換転送移（ゴアーブ）＞であんな事が出来るなんて想像すらしていなかったんだから。何事も挑戦が大事、ってね。

「あまりゆっくりして怒られるのも嫌だし、手っ取り早く終わらせましょうか」

＜量子過（タブ・ス）？遍移＞を発動し、木々をすり抜けるように、いえ、文字通りすり抜けて移動する。物質透過という極微の確率を励起している私に、物理接触は無意味。本来は足裏だけは発動させていないため地面をすり抜けてしまうことはないから、まさに目標めがけて一直線に行くことが可能――なんて咒式だけど、飛行魔法を並行発動するから完全に接触する必要がない。だから、斬魔剣や重力魔法や重力咒式ぐらいしか今の私には効かない。

「悪の華、可憐に咲く。美しい彩で。周りの哀れな雑草は、嗚呼、養分となり朽ちていく」

世界各地に潜り込んでいる諜報員の名のオリジナルとなった歌を口ずさみ、オスティアへと飛翔する。

最終的にグーミリア以外の全員と会うことができたのだけれど…
…やっぱりリリアンヌかアレンに変身するべきだったかしら。元ネタ的な意味で。

第十四話「紅き翼との邂逅」（後書き）

情報収集を行っているキャラクターは、悪のP著の『悪の華』より多数、名前だけお借りしています。
おそらく、名前のあるキャラは全員出したものと思われます。ちなみに全員があるt……おや、誰か来たようだ。

第十五話「馬鹿と王女が消閑中」（前書き）

就職活動のせいで、更新が遅れそうです。

第十五話「馬鹿と王女が消閑中」

二日ほどかかったが、ようやく王城に帰ってこれた。そして我（オレ）が持ち帰った情報と紅き翼（アラルブラ）の調べた情報を合わせたとき、おもしろいことが分かった。現在の執政官（ナンバー2）が『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の手先、という情報だ。

我（オレ）にすれば、『上層部に内通者がいなければ戦争を長引かせることはできないとか考えないのか？』が正直な感想だ。

「ところでゼクト。馬鹿（ナギ）とアリカとリュビの姿が見えないが、どこにいる」

「ん？　アリカ姫がナギを引き連れて町に行ったぞ。リュビは護衛としてついて行ったが」

デートか。ったく――ＴＰＯを弁えんとは、ずいぶんと歪んだ性根だな。リュミスが付いて行ったのが救い、か？

「まあ、それはどうでもいいな。リュビがいる以上、そうそうアリカに傷が付くことはあるまい」

「信用、ですか。そういえばアラン、ひとつ聞いておきたいことがありました」

「何だ、アルビレオ・イマ」

この男（アルビレオ）。軽いところはあるが、紅き翼（アラルブラ）においては頭脳派の一人だ。そして確か、他人の人生を知ることを好む性癖があったはずだ。さて、現状で知らなければならんことがあるか、我（オレ）の過去を聞くか、どちらで来るのか。

「貴方は、リュビさんとどこまで行ったんでしょうか？」

「――ふ、貴様に期待した我（オレ）が馬鹿だった、ということか」

魔法世界編など覚えていないが、これはこんなキャラだっただろうか？　いや、我（オレ）の影響でこうなったなどと考えたくない。これは最初からこんなのだった。Q.E.D.（証明終了）だ。

「だがまあ、否定したところで勝手に想像を膨らませるが馬鹿の基礎。教えておこう。あれと我（オレ）は仮契約こそ結んだが、それ以上の関係はない」

「つまらないですね。ではその言葉に嘘がないか、アーティファクトへ登録してもよろしいでしょうか？」

そう来るか。ここで否定すれば囃したて、肯定すれば我の名が知られる。ふむ、少々きつい二択ではあるが。

――現状維持、か。大戦後であれば別に正体が知られようと関係ない。なぜなら、この大戦に参加するために我（オレ）はわざわざ魔法世界まで来たのだから。

「構わん。が、この戦いが終結してからにしろ。現状で我（オレ）の真名が知られるのは痛手だ」

「今は教える気はないと？」

「何のための仮面とフードと偽名だと思っている？　個人特定を難しくするためであろうが」

まあ、我（オレ）の名が不用意に知られた場合、殲滅するだけで事足りる。あまり好まぬ事態ではあるが、最終手段としてはなかなかのものだ。

『ごめんなさい、今大丈夫かしら？』

『どうしたリュビ。我（オレ）は大丈夫であるが……何か問題でもあったか？』

念話の声色を低くする。念話では周囲の音が聞こえないため何が起きているのか判断することは……何だ、今の爆音は？　城外――街の方だな。

『アラン、問題発生よ。「完全なる世界（コズモエンテレケイア）」の構成員がこちらに――アリカかナギか私かは不明だけれど――攻撃を仕掛けてきたわ。現在ナギが反撃中。アリカを連れて離脱した方がいいのかしら？』

『普通に考えろ。護衛対象を危険に巻き込むなど言語道断だ』

『その護衛対象が、ノリノリで攻め込もうとしているのだけれど……』

溜息すら聞こえてきそうな、リュミスの呆れたような念話。我（オレ）も想定外だが……そこまでつまらないのか、王女生活は。

さすがにこのような状況は想定していなかったからな……人間生活の短いリュミスでは、このような状況下でどうすればいいのか分からず戸惑っているんだろうが。

『構わん。護衛に徹しろ。護衛対象が望むなら、その状況下で守り通せ』

『了解。ならしばらく「完全なる世界（コズモエンテレケイア）」と遊んでるわね』

我（オレ）らの仕事は護衛。護衛対象さえ無事ならそれでいい。ストレスをため込まれても厄介なだけだ。

が、紅き翼（アラルブラ）の連中はそうではない。何やら心配そうな連中に振り返り、言葉を放つ。

「おい、アルビレオにゼクト。悪いニュースだ。聞きたいか？」

「聞かないとさらに悪くなりそうなので、聞くことにしたいですね」

「そうじゃの、情報はほしいからの」

「では一度しか言わんからよく聞け。馬鹿と王女が消閑中に『完全なる世界』に襲われたぞ。現在迎撃ついでに攻め込むつもりだそうだ」

最後の一言に、ゼクトは『あの馬鹿弟子は……』と唸り、アルビレオはうすら笑いを凍結させ、今さっき来たばかりであるが故我の話を聞けなかった詠春は、二人の顔を見て『また何かあったのかよ』と言わんばかりに顔をしかめた。

リュミスＳｉｄｅ

魔法が敵を吹き飛ばす。

これだけならいいんだけど、その前に『あんちょこを見ながら』と付くことだけが問題ね。詠唱遅くなるし、片手ふさがるし。

「んと……『雷の暴風』！」

それ以上に……広範囲攻撃を街中で使うのは、さらにどうかと思うわよ。大抵は余波だけだから魔法障壁で止められるけど……万一直撃したら、障壁程度じゃ止まらないわよ、この威力だと。

ああもう、思ってるそばから余波で店が倒壊したわ。これに市街戦なんてやらせない方がいいかもしれないわね。

「行くのだ、ナギよ！」

アリカも煽らないでよ……ナギの腕の中にいられると、私が守れないのに。

ああ、もう。仕方ないわね。頻繁にブレスにさらされ、獲物を障

壁ごと噛砕き、なお欠けることなど滅多に無い自慢の牙を研ぎ澄ました龍牙長剣（トゥースソード）及び、私の本来の重量で着地しても、一度足りと罅一つ入ったことのない鱗を削りだし組み上げた龍鱗金鎧（ドラゴンメイル）を召喚し、武装する。共に私の一部を加工したものだから気や魔力の通りがいいし、強度は並大抵のアーティファクトとは比べ物にならない。

さあ、私が露払いをするから、アリカに傷一つ付けるような真似をしたら後で百倍返しものよ、ナギ。

「死にたくないなら――――どきなさい！！」

咆哮。それに気を上乗せし、衝撃波として叩きつける。これは、アランに聞いて以降使用している、ブレスの変化系。

そもそも龍の吐息は息だけでなく、そこに気を乗せて属性変換することで、火の吐息（ファイアブレス）、雷の吐息（サンダーブレス）、風の吐息（ウィンドブレス）、氷の吐息（アイスブレス）といった各種属性の吐息（エレメンタルブレス）に変化するもの、らしいわ。私もアランに出会って初めて知ったわ。

吹き飛ばされた完全なる世界の構成員（コズモエンテレケイア）は、体勢を整えながら魔法の射手を足止めに射ってくるけれど、私には無意味。顔に中るものは籠手で弾き、体に中るものは鎧に任せる。ついでに後ろの二人に流れそうなものは、長剣で防いでおくわ。

「ナギ、追い打ちは少し待ちなさい」

「なんでだよっ！」

馬鹿ね、やっぱり。仕方ないわね、少し講釈してあげるわ。

「今すぐに追えば、叩き潰して終わりね。でも、少し逃げさせて追えば、本拠地を叩けるわ」

「わあったよ。姫さんもそれでいいか？」

「うむ、少しでも多く潰せるほうにしよう。彼らは少しやりすぎた」

会話の最中も目を離していないことに気づいていないのか、完全（コズモ）なる世界（エンテレケイア）の構成員は既に逃げ始めている。それで逃げられるとは思わないことね。

「さて、追いかけましょうか。逃げ切れると勘違いした哀れな狐を、ね」

その後すぐ、私たちは完全なる世界（コズモエンテレケイア）の拠点の一つに辿り着いたけど、既に撤退した後なのか偶然出払っていたのか、人員は逃げ帰った者だけだった。けれど、おもしろいものを私たちは発見した。それは、執政官が完全なる世界（コズモエンテレケイア）の協力者であることを確定させることになった、一通の手紙。

マクギル元老院議員との相談によって、明日には法務官を呼ぶらしいわ。国内の勢力を一掃する気だと思うけど、うまくいくといいわね。

第十六話「一番目のアーウェルンクス」

現在我（オレ）はマクギル元老院議員の下に来ている。理由としては執政官の完全なる世界関与容疑（コズモエンテレケイア）について。

まあ、それはいい。我（オレ）にすれば、アリカのみを守ることが任務。ならば内通者（インサイダー）には速やかに消えてもらうのが得策。が、何故リュミスまで此処にいるのか。アリカの護衛はどうした。

「アリカはどうした？」

「現在、ヘラス帝国第三皇女、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアとの会談中よ。『リュビが近くにいると話がややこしくなりかねん、アランのところに行け』なんて言っていたわよ」

頭痛がしそうだ。あれは護衛のなんたるかを理解しているのか？そういった危険な時に身を守ってもらう為に護衛を雇っているのだろうが！

まあ、我（オレ）は雇われ人だ。勝手に自爆されたら、どうしようもない。別にアリカに忠誠を誓っているでもなし、共に地獄に落ちる気はそうそうない。

「なら仕方ないな。依頼者の意向に逆らうのは禁忌だ」

今はアリカを見捨てる。生きて会えたら、その際には再び付いてやるがな。

しかし、一体どういうことだ？　今日この時間に来ることは既に通達済みなのに、マクギルも法務官も一向に姿を現さん。此処にいる紅き翼（アラルブラ）メンバーのガトウ・ラカン・ナギで、難しい話をできるのは……ガトウだけだな。悪く言えば、ラカンは脳筋で、ナギは勘だ

けで生きているようなものだ。

「それにしても、マクギル元老院議員は遅いな。どう思う、ガトウ？」

「う～む。昨日から準備をしているのならば、ここまで待たせるような事態にはならないはずだが……」

ガトウも同じことを疑問に思っているようだ。そしてやはり、ナギやラカンはそこまで頭は回っていないようだな。

なんて、噂をすれば影。足音が聞こえてきた。おそらくはマクギル――ん、魔力が違う？　ならば法務官……いや、ならば足音が一人分である理由が分からない。

「お、遅かったな、マクギル元老院議員」

ラカンが反応する。しかし、マクギルだと？　いったいどこがだ？　見た目こそまったく同じであるが、魔力も気も違う。よくよく思い返せば、足音も違った。おそらく、何者か幻術を用いて変化した姿だろうな。

「法務官はまだいらっしゃいませんか」

当然の反応だ。だがこの付近に、他者はもういない。魔法転位でもしてこない限り、此処に人が来ることはない。

「法務官は……来られぬことになった」

「は……？」

「……あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここにきて……慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね」

それは、一理ある。ここで下手な刺激をすれば、最悪は粛清の嵐が吹き荒れ、戦争以上の被害が出かねん。

「む、それもそうかもしれんな。が、それは個人判断か？」

「私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

が、この魔力が誰であるか、我（オレ）には判断が付いた。完全なる世界（コズモエンテレケイア）の幹部……の誰か。ガストが会ったことがなければ、分からなかったかもしれんな。

なるほど。であるならば確かに、そう考えるものが多くて当然であるな。『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』内部ならば、ここで止まることは良しとせんだろう。

「待ちな。あんた、マクギル議員じゃねぇな。何もんだ？」

「しかたあるまい……失せよ」

ナギの疑念の声にかぶってしまったが、我（オレ）は攻撃態勢に移る。化学練成系咒式第四階位＜曝轟蹂躙舞（アミ・イー）＞――否、同系第五階位＜曝轟収斂錐波（アミ・イール）＞を展開。トリメチレントリニトロアミン、通称ＲＤＸやヘキソーゲンと呼ばれる爆薬を生成し、その爆風を擂鉢状（すりばち）の力場に沿って収束させ、偽マクギルの胴体を打ち抜く。

同時にナギの魔法により、頭が燃えていく。まあ、この程度でくたばるようであれば、その程度だったということだ。

「お、おい！　何攻撃してるんだよ、二人とも！」

「……ち、無傷か。これが貫通せんか」

「……危うく破られかけたけどね、『沈黙者（サイレンサー）』」

煙が晴れたとき、そこにいたのは既にマクギル元老院議員ではな

くなっていた。白髪の青年、『地のアーウェルンクス』。確か、『一番目（プリームム）』だったか？

しかし、先程の問答でもあったが、これで貫通しないとなると、奴は想像以上に固い防御を誇ることになる。なにせ、呪式に対魔・魔法障壁は通用しない。そもそも対魔障壁や魔法無効化能力とは、精霊との交信や精霊そのものを遮断することで、副次的に魔法を止め、かき消す。すなわち、精霊の関与しない呪式は、対物・魔法障壁でないと止められないことになる。

そして＜曝轟収斂錐波（アミ・イール）＞は、第五階位に達する岩盤掘削用の呪式である。これを止められるとなると、虎の子である第六階位や第七階位――準戦略級から戦略級の呪式を使うしかなくなる。

なお、呪式専門の守りである呪式干渉結界ですら、第五階位を完全無効化すれば驚愕に値する。

現状から推測――光学干渉が弱いため、電磁光学系呪式ならば貫通は容易か。

「だけど……よくわかったね。千の呪文（サウザンドマスター）の男、沈黙者（サイレンサー）。こんな簡単に見破られるとは思ってなかったよ」

「本物（オリジナル）のマクギルはどうした？　殺したか？」

「ああ、今頃はメガロ湾の底だよ」

ま、そんなところか。偽物となり替わられた本物の末路など。

「ごちゃごちゃと、うるせえ！」

馬鹿（ナギ）一人が突撃するが、当然のように止められる。追撃でラカンも参戦するが、そこまで変化はない。奴の守りが想像以上に固すぎる。

我（オレ）も、乱戦では奴のみに有効打を与える呪式が存在しない。真祖の力で思い切り右ストレートを打てば、障壁も何もかも無視して攻

撃できなくもないが……説明が面倒だ。
ガトウは論外。攻撃力が低すぎる。リュビは……どうするか。別に行けなくはないが……

「わしだ！　マクギル議員だ！　スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ、アラン、リュビ！　奴らは帝国のスパイだった！　奴らの仲間もだ！　今も狙われている。軍に連絡を……」
「「げ！」」
「しまった……！」
「あらら」
「む、タイムオーバーか」

軍と喧嘩しようと、別に勝てないことはない。我（オレ）の全力をもってすれば、魔法世界壊滅も夢ではない。
が、そこに意味はない。逃げるか。手に炎を宿す。これは転移用のゲートとなる炎だが、普段のとは使用方法を違え……

「飛べ」

他者めがけ放射する。傍目には火炎放射に見えるが、実際は単なる転移魔法。それなりの観察眼なくして見破るのは、不可能に近い。

「さて、我（オレ）は別に指名手配されようと逃げ切る自信はあるが、此処は捨て台詞を吐き捨てて逃げさせてもらおう。『たとえ我（オレ）を倒そうと、人の心に闇がある限り、第二・第三の我（オレ）が現れるだろう』」
「……こういう場合は、『覚えてやがれ』とかじゃないのかい？」
「それはありきたりでつまらん。ではさらばだ」

置き土産に電磁光学系呪式第四階位＜光条灼弩顕（レラージェ）＞を発動し、眉間を貫いておく。近赤外線レーザーであるため、通常方法では目視

不可能。呪印組成式で光学呪式であると理解できなくば、撃たれないかぎり知ることのできない残酷なものだ。
が、穿った奴が水に変わるとは……くくく、既に逃げた後だったか。強かな奴だ。
さて、我(オレ)もそろそろ逃げるか。ナギとガトウとリュミスは紅き翼(アラルブラ)の隠れ家に飛ばしたが……と、その前にタカミチらを回収するか。

「回収完了」
「え、何するんですか！？」
「ちょ、どうしたんですか！？」

タカミチとクルトの背後に転移し、問答無用で二人を抱えあげたら、何故か怒鳴られた。
しかたあるまい。簡潔かつ分かりやすく説明するか。
「紅き翼(アラルブラ)が指名手配された。故に魔法世界の大半が敵だ」
「「！？」」

納得したか、驚愕しすぎたか、動きが停止する。さて、隠れ家に飛ぶか。

「で、アリカは捕まったと。ナギ、回収して来い」
「はぁ！？」

ものすごく意外そうな返答が来たが、惚れた弱みがあるだろ。逝ってこい。

第十七話「忘れ去られていた顔」（前書き）

就職活動＋書くのは苦手＋現実逃避で読みまくる＝筆記遅延

それでも、二十日も投稿できなかったのは予想外。

第十七話「忘れ去られていた顔」

さて、ナギをたたき出してから少しして。ようやく帰ってきたナギは、三つの人影を連れていた。
一人は我(オレ)が護衛していた対象、アリカ。

「何だ、これが噂の『紅き翼(アラルブラ)』の秘密基地か。どんな所かと思えば、掘立小屋ではないか！」

もう一人は今回会談していた相手、テオドラ。たとえどのような状況にあろうとも、王族としての誇りを失わぬその姿勢。場合によってはただ高圧的としかとられんこともあるのだが……まあいい。
我(オレ)と彼女(テオドラ)では主義主張が異なる。押し付けはせん。

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリはよ」

……ラカン。王族相手にその口調は減点ものだ。我(オレ)ですら初対面ではアリカ相手に敬語を使用していたぞ？
まあ、あの筋肉馬鹿に、他人を敬う心があるかと問われれば、微妙だとしか返せんが。

「何だ貴様、無礼であろう！」
「へっへ～ん。生憎ヘラス皇族にゃ貸しはあっても借りはないんでね」
「何ぃ？　貴様何者だ」
「俺は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカンだ」

そして、想像通り口論になる。我(オレ)もこの馬鹿どもと共にいすぎたせいか、少し人間味が戻ってきた気がするな。そうでもなければ、

ここでこの言い争いを止めようとは考えなかったはずだ。

「それではこちらも挨拶をば」

「む、そういう貴様は何者だ」

気が付いていなかったのか、このガキは。

「お初にお目にかかります、ヘラス帝国第三皇女、テオドラ・バレイシア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア様。私の名はアラン。『沈黙者（サイレンサー）』、『顔無き者（ノウフェイス）』あたりが二つ名としては有名でしょうか」

「あ、あぁ、そなたらがかの有名な『伝説の賞金稼ぎ』か。ならばその横に立つのが『名無（ネーム）――』」

「『黄金女帝（ゴールドエンプレス）』よ。その名では呼んでほしくないわ。名が無いのではなくて、名乗っていないだけ」

リュミスは少々いらついているようだ。まあ、あの名は嫌っているからな。我（オレ）は大抵の人物に化けることが可能である以上、固定された顔が無いと言えなくないため、そこまで悪くは思えん。百面相や千貌でも構わんが。

「この護衛の間はリュビと名乗っているわ。その名で呼んで頂戴」

「ふむ。分かったぞ、リュビよ」

そして、ナギが連れて来た三人の最後の一人。テオドラの後ろにひっそりと付き添っていた、侍女服を着たドリルヘアの亜人。一体何故彼女がここにいるのか。それが不思議でならんぞ、おい。

「あ、アニさん、久しぶりッス」

若干ひきつった笑みで、彼女は挨拶をする。しかし、それは我（オレ）の

望む答えではないぞ。

「ここで何をしている、シャルテット」

最後の一人の名は、シャルテット……そう、我（オレ）の密偵の一人にして、帝国上層に唯一送りこんでいた存在。その彼女がここにいるということは、帝国上層の内情を知る駒がいなくなるということ。かなり痛手なのだがな。

「報告したっしょ？　第三王女付きッスから」

テオドラに無理やり連れ出され、そして共に捕まった、と。それならば仕方あるまい。密偵である以上、派手に動くわけにもいかなかっただろうからな。

「まあ、それならいい。全てを報告せよ、シャルテット」

「仕方ないッスね」

今まで何も持っていなかったシャルテットの手の上に、漆黒の球体が生じる。それを我（オレ）は当然のように取り上げ、握りつぶすようにして内に取り込む。

とたん、我（オレ）の視界が漆黒に染まる。最終報告以降のシャルテットの記憶、精神、人格など、魂に記述されていた情報が流れ込み、アルトリウスとシャルテットの境界が曖昧になり、消失し、同化する――その情報整理のために五感情報の取り扱いが二の次になり、認識できなくなっているがためである。

その流れ込み我（オレ）の物となりつつある情報の一端に、今回の誘拐の犯人が映っていた。罠にはめたのは……アリカの付き人か。想像以上にオスティアには完全なる世界（コズモエンテレケイア）の手が伸びているな。そういえば王も黒の可能性がある、だったか。

「待つのじゃ！　シャルテットは、貴様の手の内なのか！？」
「是（イエス）、と答えさせてもらおう。シャルテットは我（オレ）の密偵の一人。とはいえ、帝国上層にはこれ一人しかおらん。気にするな」
「黙ってて悪かったッス」

より厳密にいえば、我（オレ）の密偵ではなく――分霊に近いものか。だが、この真実は誰にも告げることはできん。真祖で無いものがこの術に手を出せば、まず間違いなく、死ぬ。

「帝国上層には……って、おぬし、何人密偵がいるのじゃ！？」
「どうでもいいだろう、そんなことは。知ったところで、誰がそうなのか知らねば意味は存在せん」
「う」

図星を突かれ黙ったテオドラを視界の端にとらえつつ、やや厳粛な場になりかけているナギ一味に目を向ける。

「じゃが……主と主の『紅き翼（アラルブラ）』は無敵なのじゃろ？　世界全てが敵――良いではないか。こちらの兵はたったの９人。だが最強の９人じゃ」

勝手に決めるな。さらに言わせれば、９人となると、我（オレ）とリュミスも含めている数字か、おい。我（オレ）らは紅き翼（アラルブラ）とは全く関係ないが……仕事だ、しかたあるまい。
最近こいつらに愛着が湧いてきていることは否定せんが。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり、剣となれ」
「やれやれ。相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ。俺は騎士じゃなく

て魔法使いなんだが……いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

剣を突き付けるアリカ。片膝をつくナギ。ふむ、これはいい絵になるな。脳内フォルダ（記憶完了）に保存。今度念写呪式か念写魔法を開発して再生するとしよう。

さて……ついでに我（オレ）も儀式に参加するか。ナギに倣い片膝をつき、首を垂れる。

「ならば我も誓おう。我が身と剣。共に汝に預けよう。そしてこの素顔も」

そのまま、今の今まで顔を隠していたフードと仮面（マスク）を取り払う。顔を上げたとき、周囲に奔ったのは……何もない、だと？

「ふむ、それが主の素顔か。初めて見たな」

「……は？」

待て。１２００万ドルの賞金首を、見たことがないだと！？

「確か、見せたくないと言ってましたが。見たことのない顔ですね」

「な」

アルビレオ、貴様もか！　しかし、他の奴なら知っているだろう。立ち上がって周囲を見渡す。

「ふむ、どこかで見た気もするが、思い出せんのう」

「ちょ」

さ、最高齢であるゼクトもか……。

「妾もないな」

皇女、それでいいのか……？　最後の頼みの綱は、ＭＭにいたガトウだけ……か。

「ガ、ガトウは……」

「無い……はずだ。どこかで見たか？」

「我（オレ）の苦労は、何だったんだ……？」

別の意味で膝をつき、首を垂れてしまう。この１００年以上。賞金稼ぎになってから、確かにアルトリウスとしての顔を見せたことは一度もない。だからといって、１２００万ドルの賞金首を知らんと言い切るとは、俺の苦労が台無しにされた気分だ。

「ま、素顔なんてどうでもいいな。仲間なんだしな！」

「そうだな、がははは！」

「貴様らはどうでもいい」

「「んだと！？」」

この雑種共（馬鹿二人）に期待などせん。期待するだけ無駄だ。

「「死ね！」」

項垂れる我（オレ）に迫る二人の拳。それに僅かに手を触れ、受け流しつつ力を加える。それだけで奴らの拳が激突し、我（オレ）への被害はなくなる。

「＜重加崩倒（ベ・タン）＞」

さらに重力力場系咒式第三階位＜重加崩倒（ベ・タン）＞を発動。大地の重力（グラビトン）

子を増量し、指定範囲の重力を一時的に増加させる。魔力をつぎ込んだ量からして、推定だが5G程度。
突然重力が5倍になる。それはすなわち、自分の体重の4倍の重さの物を突然背負わされることに等しい。

「げぇ！」
「ぬおっ！」

さすがの二人も、姿勢を崩した瞬間の出来事だったため、強化された重力に逆らうことができずに倒れ伏す。

「おお、思い出したぞ。確かアルト……アルトリウスだったか？」
「思い出したか、ゼクト。そうだ。我(オレ)の名はアルトリウス。まあ、今の貴様らと同じ賞金首だ」

ようやく我(オレ)の名が出る。しかし……我(オレ)が言うのもなんだが、１２００万もの賞金首が忘れ去られるとは、どういう事態だ？

「いや、生存報告の無いそなたが生きておったとは。長生きはしてみるものじゃ」
「そうか……我(オレ)は生きているか疑わしかったのか……」
「最後の報告が２００年は前じゃからの」

旧世界にいる間、我(オレ)はうっかりしていたか何らかの理由がある場合を除き、アルトリウスの姿で人前に出ることはなかった。そして魔法世界では一度たりとその姿を人に見せたことはない。そう、ここ２００年はアルトリウスの目撃例がないことになるのだ。
一応真祖ということで手配書はあるが、あまりに長く目撃例がなければ忘れ去られていくのは仕方のないことではある。
よって、よほど詳しくない限りは知る者がいないという事態にな

っていたのであった。

「馬鹿馬鹿しい……顔を隠しすぎたせいで、顔を忘れられていたとは。確かに我は顔無き者（ノウフェイス）だな」

「師匠。一体誰なんだ、アルトリウスって？」

「あ～、どっかで聞いたんだが……賞金首のアルトリウス？」

おそらくではあるが、二つ名を聞けば分かる者もここには居るだろう。未だに活動報告のある闇の福音（ダークエヴァンジェル）のように、な。

「魔法世界人なら、噂くらいは知っていると思うのじゃがの。齢６００を超える真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）、と言えば分かるか？」

「まさか……黒炎の死神（ブラックデス）？」

「後は、進化し続ける怪物や金色の夜叉あたりが有名じゃの」

ピシ、とテオドラとガキ二人の表情が凍る。それ以外の奴らは無関心だったり知らなかったりで反応は薄い。アリカは『だからどうした』と言わんばかりの表情をしている。

それもそうか。短くない間、アリカの護衛を我（オレ）らは務めている。信頼があれば、本性がなんであろうと気にせんか。そんなことを言っていられぬ状況なのもあるかもしれんが。

「Ａｒｔｏｒｉｕｓ・Ｒ・Ａ・Ｎｏｒｔｈｒｉｇｈｔ――アランはイニシャルか」

「そこを突っ込むか、詠春」

確かにそこから考えたが。ここでＲとＡを教えるのは……馬鹿共（ナギとラカン）に馬鹿にされるのは気に食わん。却下。

「ふぅん……アランがその気なら、私も自己紹介するわ。私の本名

はリュミスベルン。正式な発音はЯ$ス&ルンよ。リュミスって呼ばれてるわ」

「リュムィスヴェルン……ユミスヴァルン……ルヴィスベルン……？　なんつー発音だ！」

「Я$ス&ルンよ。Я$ス&ルン」

ナギが苦戦しているが、さすがの我（オレ）も龍語発音は難しい。『Я』は『ル』と『ユ』を同時発音しつつ『リュ』にしない。『$』は『ミ』と『ム』を混ぜて多少濁らせ、『&』は『バ』と『ベ』の間くらいの発音でややVの発音に近づける。この聞き取りにくい音を使って偽名のユミ、スバル、ルイズ、ベル、リュビ等をひねり出した。

「そーいやアラ……アルトリウス。相方のリュミスは少なくとも百年は姿を変えてねーが、やっぱ真祖だったりすんのか？」

「少なくとも人外だ。亜人ですらないが、種族は内緒だ、ラカン。それとアランでいい。本名は長いだろう？」

何だろうか。我（オレ）の自己紹介で一気に場が砕けたというか、厳粛な雰囲気が霧散したというか……しかし、意外と今以外に自己紹介の場面はなさそうなのでな。

で、テオドラがいつの間にか涙目になってんだが。タカミチとクルトも同様だ。

「ち、ガキ三人は怯えるだけか。さすがにこたえたか？」

「魔法世界では闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）と同じくらい有名な二つ名であるぞ、黒炎の死神（ブラックデス）は」

アリカが言うように、原作でもキティの二つ名が恐れられていたように、我（オレ）も恐れられている。『夜遅くまで出歩く子供は、闇よりも暗い黒炎に燃やされる』なんて言われるほどだ。だからこそ、本

名が廃れていることにはビックリだったんだよ、我（オレ）は。

「いい加減泣き止め。五月蠅い」

「「はいぃぃ！」」

余計泣きだしたか。

「大丈夫ッスよ、テオドラ様。アニさんは敵対しない限りは手を出さないッス」

「ほ、本当か？　視られたら死ぬという噂はただの噂なのか？」

「アランをバロールかなにかと思っておるのか？　そもそも、見た程度で死ぬのなら、ここにいる全員が死んでおるわ」

「アリカ様の言うとおりッスよ。身内には甘いっすから、アニさんは」

自分のことのように語るシャルテットの頭に鉄拳を叩きこみたかったが、止めた。自傷行為に意味はあるまい。

「やはり今のうちに自己紹介したのは間違いではなかったな。勝利後にすれば、間違いなく大混乱であったな」

「さて、確かにそうなるでしょうけど、結局は変わらないのでは？」

「周囲の心構えがあるかないかでは大きく違うであろう、アルビレオ」

「確かにそうですね。ところで、真祖ともなれ」

「半生の収集なら勝手にしろ。終戦後と言ったのは、我（オレ）が真祖であることがバレないための処置だ。既に知られた以上、拒む理由がない」

「では早速」

収集は勝手に行わせつつ、周囲を見る。そして、先程の厳粛な状

態などかけらも存在しないどころか、本当にあったのかどうかすら疑わしいまでの状況に嘆息する。

先程はこのタイミングしかないと思ったが、時期尚早だったかもしれん。

第十七話「忘れ去られていた顔」（後書き）

今回出てきたリュミスの本名と言うか正式発音ですが、され本編では竜語と呼ばれるものがあり、ガ※ルｂィΣィ、＃ド＊ォルク、エ※ンギ＃ドが名前として登場。ヒトの発音で一番近いのはそれぞれ、ガニルティズィ、ニドヴォルク、エニンギルゥドです。

ガ※ルｂィΣィは『ガニル、ティジィ？　ビィズィ？』、＃ド＊ォルクは『ニドヴォルクかイィドブォルク』と似た発音が提示されていますが、エ※ンギ＃ドは『エニンギルゥドかウェニンギィエグドだろうか』なんて言ってます。

『ギルゥド』と『ギィエグド』なんて、全く違う発音が近いと感じられるような特殊発音なら、リュミスベルンを竜語でЯ＄ス＆ルンと記述し、本編中のような複雑な発音が存在してもいいじゃない。

第十八話「最終決戦前の講義」（前書き）

１２／３０~１／１は親の実家に帰っていました。その間、暇すぎて筆が進む進む。
というわけで投稿です。

第十八話「最終決戦前の講義」

あれから半月。ガトウを中心としたメンバーによる完全なる世界（コズモエンテレケイア）の拠点の調査が終わるまでしばらく暇になってしまった。

「そういえばアラン」

「む、どうした」

そんなわけで。本拠地で呪式や魔法を弄り暇潰しをしていた我（オレ）に、同じく暇を潰すためにアーティファクト『イノチノシヘン』の『半生の書』を読んでいたアルビレオが、その本を掲げつつ声をかけてくる。

「これはあなたの書ですが……聞きたいことができましたので」

「ほう、どこだ」

「まずは……初期の方の貴方の名がこのように黒塗り、さらには内容も空白や塗りつぶしが多い点ですね」

「聞きたいか？　我（オレ）は気に入った物にはその理由は教えているが――貴様には教える気は存在せん」

転生者であることを知られても痛くはない。ただ、記憶の中の未来があやふやである我（オレ）が頼られるのが気に食わんだけで。そして、言いふらされるのが嫌なだけだ。

「まあ、一つ言えるのは、我（オレ）の旧い過去は既に我（オレ）から失われている。魂からすら、な」

「魂から、というのは……転生者だから、ですか？」

「！？」

ここ数百年で一番驚かされた。まさか我（オレ）が、目を見開くような事態に陥るとは。しかし……どこから漏れた？　キティとリュミス以外には伝えてはない、そしてここにキティはいない。リュミスが話すとは思えない。いったいどこから……

などと考えるのは間抜けのすることだとすぐに気付いた。目の前には我（オレ）の今までを記録したアーティファクトがある。なれば、そこから漏れたに決まっている。特にアルトリウスとなった始まりの頃は、そのことを脳裏に描くことも多かった。

「そうか、それすら知れるか。まあ、それは正解だが……他人には話すな。正確に知れぬもの以外にはややこしくなるだけだ」

「確かに、あなたはこの世界の未来すら知りえるような行動をしている。これを話すことは早計というものですか」

「否。無意味だ。我（オレ）が知るのはこれより２０年は先のこと。それも、ほんの半年程度だ。さらに言えば、真祖になる以前に劣化した記憶は、どのようにしても蘇らん」

どれだけ自分の記憶を蘇らせようにも、忘れた記憶を再生した場合、そこにはノイズが走ったり一部が抜けたりする。また、行動に基づかない思考に近い記憶は、記憶再生を見ても知ることがほとんどできない。故に復活は絶望的である。

「それは残念です。では、何故そんなピンｐ」

「物語とは、元々一つの世界だ。世界があり、それを観測もしくは感知できた者が、物語を綴る。アルビレオ。貴様のアーティファクトと原理は同じだ。世界の観測が、物語なのだろう？　その『世界』の前に『別の』と付くだけの話だ」

で、確か我（オレ）の『最初の世界』は、『急降下爆撃機』の世界。すなわち、あのドイツのリアルチート、ハンス・ウルリッヒ・ルーデル

の書いた自伝の世界だそうだ。この世界でも、存在しない戦争英雄の物語として書かれているらしい。

「そして、この時代の大体２０年後が主である物語を読んだことがある。それだけだ」

内容は言わん。劣化した記憶では、転生者であることと未来を知っているかもしれないことが読み取れる程度だろう。まさかナギの息子の物語とは思わんだろうからな。

「そうですか。まあ、未来を知っても良いことなど無いでしょうしね」

「当然だな。で、それで終わりか？　ならば我（オレ）は作業に戻るが」

「いえ。呪式とは何なのか。それが一番知りたいことですので。見た限りでは、魔法のようではあるようですが、魔法とはまた毛色が違うので」

今までの胡散臭い笑みを消し、かなり本気に近い顔で迫るアルビレオ。ふむ、それは確か我（オレ）の研究テーマの一つであったな。既にある程度の解析は終わったが。

「ふん。それならば頭脳派魔法使いであるゼクトにも言う必要性があるな。二度手間は避けたいのでな。ゼクトも暇な時でいいか？」

「ん、そうですね。ではまた改めてということで」

「呼んだかの？」

……噂をすれば影、とは言うが。ここまでナイスタイミングなのはどうなのだろうか。ご都合主義？

「ああ、丁度いいときに帰ってきましたね。アランの独自魔法（オリジナル）につ

いて聞こうとしていたところです」
「独自魔法じゃと？」
「ああ。我（オレ）が一から開発したのではないが、そのようなものだ。我（オレ）以外に扱える者は二人しか知らん。共に我（オレ）の従者だ」
まあ、細かいことを知るのは信頼のおける――気の置けない仲の者だけだ。もしくはアルビレオのような特殊なものか。
さて、何から伝えるか。
「まずは、呪式とは何かの説明の前に、魔法とは何かを知らねばなるまい。詳しく知らぬ者も多々いることだしな」
元々我（オレ）は学者に近い人間だった。姉の婚約者であった男を狩るためだけの魔法を開発するために、知識は人並み以上になければならなかったから。そのため、呪式と魔法を比べる機会も多く、その後も魔法と呪式を極めるために細部まで知らねばならなかった。
故に。通常の魔法使いは気にも止めぬことを知ることができ、あの『蝕みの焔』を完成させることができたのだ。
「魔法とは何か、ですか？　精霊を介して魔力を力に変える、ですよね」
「それでは半分じゃろう。札を介することで使用できる東洋の魔法、陰陽術もあるのでの」
「それでも赤点だ。この世界の魔法は総じて、概念を作るものだという事が抜けているぞ」
「「概念ですか（じゃと）？」」
やはり、気付いていなかったな。これは我（オレ）が二年近い魔法研究によって達した結論だ。そうそう知られてはいないだろう。

「例えば。初歩の初歩では火を灯せる。その火は一体どのように燃えている？」
「む？　火の精霊に魔力を託し、呪文にて契約を執行……違うか？」
「的外れだな。なぜなら、厳密には火ではないのだから」
「火では、ないのですか」
そう。火ではない。それに辿り付くだけで半年はかかったのだから。

「では聞こう。火とはそもそも何だ？」
「火は……モノを燃やしたときに発生する、ですよね？」
「そうだ。では、魔法の火は何を燃やしている？」
「魔力、じゃな」

くっくっく……計画通り。
と言いたくなるほど思った通りのことを言う。

「では、燃やすとは――燃焼とはどのような現象だ？」
「火がつく、では？」
「定義は良く知らんのう」

物理学知識は魔法使いにとって不要だと思っているのか？　……概念でしかない魔法であるならば、ほとんど不要ではあるか。

「正解は、物質の急激な酸化によって熱と光が発生する、だ。さて、もう一度聞こう。魔法で火を付けた場合、何が燃えている？」
「魔力、ではないの。魔力は酸化しない。その定義にしたがえば、魔力は燃えず、火は発生しない」
「そうだ。だから、魔法で生み出されるものは火という概念にすぎないということだ。そして、呪式は違う」

虚空に文字を書いてゆく。それに目を見開くゼクトを無視し、説明を始める。

「魔法は先程も言ったように、魔力を以ってして概念を呼び出す。が、咒式は魔力を以ってして、物質を組み上げる。火をつけるのであれば、燃料と熱源を用意する。例えば……」

書き綴る文字で化学練成系咒式第三階位＜緋竜七咆（ハボリュム）＞の咒印を構築。組成式と共に描き出す。

「これはまあ、分かりやすいものだな。油を生成し、それに着火する。発動すれば……」

作用量子定数（ブランク）ｈに干渉。咒印・組成式に導かれ位相空間で合成されたベンゼン２１％・ガソリン３３％・ポリスチレン４６％を混合したナパームを、位相変異現象を励起して掌に召喚。そして、咒印に含まれている簡単な点火咒式を起動することで。

「こうな――あ」

「どうかしましたか？」

「しまった。ナパームなんてそう簡単に消えないものを使うんじゃなかった。干渉停止」

作用量子定数への干渉を停止し、ナパームを消し去る。酷い火傷の痕が残るが、真祖の回復力に任せて説明を再開する。

「このように、物質を組み立てることが咒式の特徴だな。だがこれは、作用量子定数ｈによる時間と質量が反比例することを利用し、一時的に物質を呼び出しているようなものでもある。まぁ……召喚

魔法に近いものがあるな。故に完全魔法無効化能力では止められるが、対魔・魔法障壁では止められん。揺らいでいるとはいえ、合成された物質だからな。そして、作用量子定数への干渉を停止したり逆干渉を受けたりすれば、先程消したように存在が崩壊して呪式は消失する。

物質だけでなく、エネルギーのみの召喚も可能だ。そうすることで現実の物質を改変する呪式も存在する。物の形を変えたり、化学合成したりする呪式だな。この場合、合成中以外は完全魔法無効化能力等も効果が無い。まあ、魔法の炎で燃やした松明に完全魔法無効化能力者が触れても消えないのと理論は同じだ。

しかし、呪式にｍ――」

「あの、さすがに理解が追いつかなくなったのですが……」

「魔法の理論が全く違う、ということは分かったのじゃが」

理解できなくて当然だ。概念であるが故に新たに作るにしても感覚でどうにでもなる魔法と違い、呪式は科学法則に則(のっと)らざるを得ないため、短絡的に考えると大失敗してしまう可能性がある。例えば＜死哭燐沙霧(バル・バス)＞はサリンガス生成する呪式だが、これは失敗が分かりやすい。思考と呪式の流れで精製順序をトレースしなければ、無色透明であるサリンガスに不純物が混在してしまい、黄色がかったガスになってしまう。

「理論が分からなければ使用できないからな。呪式は対魔・魔法障壁では止められないことだけ覚えておくがいい。万一我(オレ)の呪式に巻き込まれた際、対魔・魔法障壁を張ったせいで死亡、などとつまらん事態になっても困る」

そして、呪式に関する最大の違いを聞くことができなくて困っても知らん。精霊に頼らずに発動する以上、精霊の代替となるものが必要となる。それが、自己の脳や法珠である。法珠が無い場合、全

ての負荷は脳にかかる。我（オレ）のように馬鹿げた回復力と言うか復元呪詛が無い場合、最悪脳細胞が焼き切れて廃人になるか死亡する。法珠が存在しようとも、程度が低いものが高位呪式を使用すれば普通に廃人になる。

まあ、理論が分からんのなら低位呪式すら使用出来んのだからどうでもいいか。

「ということは。私たちでも使おうと思えば呪式は使用できるということですか？　その理論とやらを理解できれば」

「そうじゃのう。普通の魔法は洋の東西を問わず、理解さえできれば使用できる物じゃからの」

心中で笑う。基礎理論を理解した程度では、呪式は扱えん。先程言えなかったことの一つ。呪式発動の最重要たる物理干渉能力。それを持たないならば、呪弾が無ければならない。

なぜなら、位相空間で物質を合成するためには何らかのパスが必須だからだ。物理干渉能力者以外はそのパスの構成の触媒として、呪弾を代替にしなければならん。すなわち。

「難しいな。呪式の発動には、先天的な素養が必要だ。魔法と同じだが……低確率で素養を持たず使用不可能である魔法とは違い、呪式は完全な素養（物理干渉能力）を持つ確率が低い」

「むぅ、タカミチがいるのと同じくらいの確率で、呪式使用可能者がいるという事かのぅ？」

「さぁな。我（オレ）以外には従者だけ――共に人外だ。少なくとも知りうる人間で当たり前に呪式行使が可能な者は、真祖になる以前の我（オレ）のみだ」

そう言いつつ影の倉庫を開き、一振りの剣を取り出す。鍔の部分には機械と回転式（リボルバータイプ）の弾薬装填機関の存在する、ガンブレードとはま

た趣の異なる剣。

そう、それは『されど罪人は竜と踊る』の魔杖剣。キティのアーティファクトとして現れた『内なるナリシア』を基本としつつ、現在の我（オレ）の技術の粋を凝らした一品だ。

とはいえ、法珠の性能は恐ろしく悪い。超あたりがいれば、ＡＩ作成技術を応用して高性能法珠を作れるだろうが、我（オレ）の技術では低位咒式をサポートするのが限界。第五階位クラスの高位咒式ともなれば、範囲指定結界の構築すらままならない。

そして咒弾には、物理干渉能力者の一部を使用している。正確にいえば、我（オレ）の血肉だが。

刀身は本来なら希少金属（レアメタル）を用いた咒化金属なのだが、この世界の法則なのかどうかは知らんが、杖であれば構わないらしい。そのため、杖にするのに適した金属を剣型にして魔法的細工をしただけだ。まあ、本来も咒式増幅がメインの役割だ。この程度で十分、ということだろう。

「本来ならこれさえあれば、ある程度の才能でも使用可能になる。完成していないがため、そうでもないだろうが」

「本来ならじゃと？　どういう意味じゃ」

「そういうことですか。ああ、ゼクトは理解しなくてもいいですよ。これは私たちの間で分かればいいだけのことなんで」

胡散臭い笑みでアルビレオはゼクトを諭す。これにはさすがのゼクトも徒労になると判断したか、かすかにため息をつきつつ諦めた。

「使って見るか？　原初の咒式（ベンゼン環作成）ならば、適正の有無を判定する指標になるが」

「いえ、さすがにあの理論を理解するのは無理なので」

「あの程度でか？　本来なら量子作用定数の値とその制御方法、仮想力場へのアクセスに思考による科学的追きゅ、そうだ。言い忘れ

ていた」
「一体なんですか。すでにいっぱいいっぱいなので、覚え切れるかどうか分かりませんよ」
そんなことなどどうでもいい。これは言っておかねばなるまい。
「呪式は、怪奇方面（オカルトサイド）からではなく、自然科学方面（サイエンスサイド）から派生（アプローチ）した魔法だ。人間が魔法を科学で解き明かそうとすれば、いずれたどり着くだろうな」
「ほう、科学と魔法が交われば、そうなると？　面白いことを言うのう」
「ひとつ質問ですが。だとすれば、サポート魔法や治癒魔法は、呪式にするとどのようになるのですか？」
それはいい質問ですね。
「こういうことだ」
問答無用で生体強化系呪式第一階位＜狗耳（ダスク）＞を発動し、アルビレオの聴覚神経に干渉。犬の聴覚と同じ、１５ヘルツから６万ヘルツの音を拾えるようにする。さらに我（オレ）に同呪式第二階位＜蝙喉蝠（ラ・キュラ）＞を発動。可聴域以上の振動数を持つ音、いわゆる超音波を発声できるようにする。
＜さて、我（オレ）の声が聞こえるか？＞
「ええ、聞こえますが、それがどうしましたか？」
＜ゼクトには聞こえていないぞ＞
「そんなはずはないでしょう。かなり高い声ですが、私に普通に聞こえるんですから」
「何を言っておるのじゃ。念話なら声に出さん方がいいぞ」

「まあ、こういうことだ。今のは我(オレ)の声を超音波に、アルビレオの聴覚を犬並みにした。補助は他の生物を模すか、生物の限界を超えさせるような何かを作るか、だ」

だから。呪式での強化と魔法の強化は完全なる別物だ。ただ身体能力を強化するなど、呪式では不可能。人造筋肉へ置換する＜剛導電旺脊喚法(ビ・ユー・レト)＞、エネルギー補充と心理抑制の解除による＜鋼剛鬼力脊法(バー・エ・ルク)＞、重量増加で威力を増す＜重剛堅脊法(バキルト)＞。方法如何によって、化学・生体・重力のいずれにも強化方法は存在する。

「お、頭脳派が集まって何してんだ？　俺様を呼ばねえってことは、悪だくみだろうがな。がははは」

難しい話が終わった所を見計らったかのように、馬鹿二人が現れた。どうするか。こいつらにさっきの話をより詳しく教えて知恵熱で倒すか？

「悪だくみではないのだがのぅ……」
「どういうことだよ、お師匠様？」

よし、この馬鹿に魔杖剣を握らせて、呪式でも使わせてみるか。第一階位なら、運が良ければ使えるだろう。

「ナギ。これを持て」
「は、何かあんのか？」
「我(オレ)の独自魔法を使用するためのものだ。まあ、こんな感じだ」

魔杖剣の引き金をわざわざ引き、化学練成系呪式第一階位＜燐舞(ウコバ)＞を実演。そして、どのような仕組みであるか説明する。

「今のは、主成分であるマグネシウムと燐に電磁咒式で着火するものだ。基礎となるのは6．626075540のマイナス34乗J・sである作用量子定数hを感じることだ。これは時間の不確定性と熱量（エネルギー）の不確定性が反比例することを利用している。そのため……」

「うるせーな、アラン。よっと」

咒式を扱うための基礎理論。それを一切聞かずに魔杖剣の引き金を引くナギ。そう、あいつは最初から話を聞かない奴だ。知恵熱も出すわけがなかった。我（オレ）の言う通りにしていれ……ば……

「馬鹿……な」

多少構成は粗いが、＜燐舞（ウコバ）＞の咒印が魔杖剣の先端に発生。我（オレ）が発動したものよりも広範囲かつむらっ気があるが、正常に発動してしまう。呆然としながらもその光景を凝視してしまった。

んな阿呆な。咒式の原理を理解しないのに発動できるわけが……いや、本編にも一人だけ、そんな奴がいた。

「この無知の天才（バグキャラ）が……」

名前など思い出せないが、十二翼将の一人に、似たような奴がいた、はずだ。

常識を超えた存在（バグキャラ）は、咒式士の常識にすら囚われないということを認識した瞬間であった。

第十八話「最終決戦前の講義」（後書き）

最後の十二翼将の一人とは、シザリオスです。こいつは呪式の原理を理解せず、『正義の味方はとにかく強い』という思い込みだけで第七階位クラスの呪式を恒常発動させる超級のバグキャラです。ある意味ナギと同レベルですね。

魔法が概念上の存在であるというのは、例に出した『火をつける』ことを科学的に説明できず、呪式なら説明できることからです。しっかりと読んでいる方なら、第四話で書いたことがあることに気づいているでしょうけれど。

第十九話「最終決戦と崩壊の序曲」

地のアーウェルンクスから逃走して早半年。アリカが王位を奪ったとか、ナギがアリカに張り倒されたり殴り飛ばされたり投げ飛ばされたりした回数がそろそろ４ケタに達しそうだとか、そんなことを除けば、小説や単行本なら確実にあらすじだけで済まされるような、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の拠点を暴き構成員を潰すという地道な作業の末。本拠地たる場所が判明した。

それは、王都オスティア空中宮殿最奥。通称『墓守人の宮殿』。と言えればよかったのだが、我（オレ）は完全なる世界（コズモエンテレケイア）にも内通者を仕込んでいる。そのため、何処にあるか程度は既に知っていた。そして、完全なる世界（コズモエンテレケイア）が企む『世界を無に帰す儀式』や『リライト』を用いての『完全なる世界』の創造のことも追調査で明らかにし、我（オレ）のみが知った。

故に、それを為すことが不可能になるよう、対抗魔法（カウンターマジック）を作り上げた。否、久々に思い出した転生時の最後の追加能力として、天使≪管理者≫に要求した。

しかしまあ、効果を発揮するまで２０年近く必要とする超大規模儀式魔法になってしまったのだが。それは此処で奴らの企みを阻害することで帳消しにするとしよう。

「不気味なぐらい静かだな、奴ら」
「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」
「嵐の前の静けさでないことを祈れ」

我（オレ）が手に入れた情報が確かであれば、ほぼ無尽蔵な召喚を奴らは可能とする。今静かであろうとも、直後にどうなるかは不明。

手加減をある程度しないで暴れるなど、数十年に一度、あるかないかくらいの珍しさだ。せっかくの最終決戦、久しぶりに派手に楽

しめればいいのだがな。

「ナギ殿！　帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

アリアドネーのセラスが、報告の為にやってきた。だが、その手には報告とは全く関係の無いサイン色紙を持っているのだが……何故だ？

「それで、あの……ナギ殿、アラン殿」
「ん？」
「何だ？」
「サ、サインをお願いできないでしょうか」
「あ？　ああ、いいぜ。それくらい」
「構わん。そら」

なるほど。ナギと我（オレ）にサインを求めに来たのか。ちなみに我（オレ）は紅（ア）き翼（ラルブラ）の隠れ家以外では、いつも通り仮面とフードを付けている。故に、アランがアルトリウスであることを知る者は、紅き翼（アラルブラ）関係者を除けば誰一人としていない、はずだ。

「しかし、時間切れか」

ガトウの説得が間に合わなかったか、連合・帝国の正規軍の援軍は現在無し。そして、既にタイムリミットだ。

「彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼らの手にあるのです」
「ああ」

ナギが号令をかけようとするが、我(オレ)が手で制する。うろんげな目をされるが、笑みを浮かべて言ってやる。

「最初に一発、派手に開戦の狼煙(のろし)を上げてやれ。言葉よりも明確な一撃で、だ」

適当に千切ったメモ用紙を渡す。我(オレ)が２００年ほど前に考案し、実践した魔法。おそらく、アルトリウスとして最後に認識された時のものだ。まあ、このバグキャラ筆頭なら扱えるだろう。メモを見ながらの魔法も、手帳(アンチョコ)に頼るこいつなら慣れ親しんでいるはずだ。

「んーと……契約に従い　我に従え　光の帝王　雷の女帝　満ちよ天光　我は此処に在り　開け黄泉の門　彼は其処に在り　出でよ審判の神雷　終焉を具現せよ　『裁きの天雷(インディグネイト・ジャッジメント)』！」

『千の雷』よりもさらに広範囲・高威力の雷撃が、ナギから撃ち出されて完全なる世界(コズモエンテレケイア)の面々に襲いかかる。最低でも『千の雷』２発分の魔力を消費する大魔法なのだが、ナギは涼しい顔で使用する。さすが、バグキャラ。

だが、周囲は違った。特にナギのことを紅き翼(アラルブラ)のトップとしてしか認識していなかった者あたりから、呆れと理解不能が混じった表情が見て取れる。

しかたあるまい。こっそりとナギに近付き、耳打ちをする

「これで景気付く筈だ。号令をかけてやれ」

「っしゃあ！　野郎ども、行くぞ！」

にやりと不敵に笑い、ナギが飛び出す。それに紅き翼(アラルブラ)の面々が続き、呆気にとられていた兵士たちも我に返って戦闘を開始する。

「ではな、リュビ。外の敵は任せたぞ」
「ええ。好き勝手に暴れて、壊滅させてあげるわ。潰れなさい！」
リュミスは＜重加崩倒（ベ・タン）＞を発動する。高々第三階位の重力呪式と言えど、龍種最強を名乗るリュミスの膨大な魔力と演算力から繰り出されれば、ただで済むようなやわな威力では済まない。
ざっと見て直径５０ヤードの空間にある浮遊島が落下し、大地が陥没。人も亜人も魔獣も悪魔も、全てが平等に潰れていく。
「まだまだいくわよ。星よ（アステル）！」
さらに追加で、重力力場系呪式第五階位＜轟重冥黒孔濤（ベヘ・モー）＞を三重発動する。黒い点のようにも見える、中性子星ほどもある重力子（グラビトン）を射出する呪式だが、リュミスの攻撃には慈悲が無い。三つの重力子は物質との接触の瞬間に互いに干渉し、さらに強力な重力に変貌。接触点から効果範囲を握りつぶすところを、すり鉢状に周囲を削り取る。
効果範囲から外れたところにいる敵は、散発的だが魔法を撃ってくる。しかし、それはリュミスには届かない。
「ガアァァァァ！」
咆哮に乗せられた高位重力呪式が空間を歪め、魔法を司っている精霊に直接干渉。魔法の発動と維持を阻害して、正面方向数十メートルに存在する魔法を無効化していく。ついでに言えば位相空間も破壊しているため、呪式も無効化されるはずだ。
大混乱に陥った敵集団に、リュミスは完全武装して飛び込んでいく。遠距離から呪式や魔法や吐息を放つよりも、直接戦う方がリュミスは好いている。接近を許した敵は、瞬く間に二つに解体（ばら）されて命を散らす。

「ふ、ここに残ってもやることなどなさそうだな。では俺も突入するとするか」

久しぶりに二刀――黒陽と紅月――を腰に佩き、墓守人の宮殿に突入する。邪魔する奴は抜き打ち一閃で真っ二つだ。人斬りをほとんど行わなかったがために、妖刀としての資格は失っている。しかし我(オレ)の血を馴染ませているがために、気を通せば十分な強度を誇る刀になる。

「受けてみよ！　天地乖離す(エヌマ)――」

右手に気、左手に魔力。双方風属性に変換、合成して体内に取り込み、咸卦法を発動。そのエネルギーを右腕一本に集中させる。その状態で鞘に収めた黒陽に手をかける。腕付近で風が巻き付き、唸りを上げる。

「開闢(エリシュ)の星！」

本来なら単なる居合斬空閃だったもの。しかし実際に飛んで行くのは、魔力と気を合一した風属性の超エネルギー。ただ通り過ぎた地点を切り裂くだけでなく、周囲を引きずりこむ一撃だ。雑種どもは避けることもままならず、吹き散らされるのみ。

ふむ、想像よりは威力はあったが、『対界』としては威力が低いな。重力か時空を追加してみるのも一興か。

「今のは、斬空閃！？」

詠春か。確かに我(オレ)が京都神鳴流の技を見せるのは初めてだが、そこまで驚くか？

……ああそうか。クルトとは違い、我（オレ）がいつ習得したか不明だからか。では、神鳴流では伝説と化しているかもしれん名を告げるか。

「有須輝。偽名の一つだ」

「ま、さか。歴代最強の使い手を下したとされる、幕末の剣豪……？」

「おそらくそれだろう。懐かしいな。雷光剣」

完璧を超えた入りで瞬動し、雑種共の中心で刀を振るう。すると、まるで塵芥のように吹き飛んでゆく。

「手が止まっているぞ、詠春？」

「まさか伝説と共に戦えるとは……！　参る！」

「貴様も未来には英雄と呼ばれるだろうがな」

歓喜を隠そうとせず、詠春は攻撃を再開する。心なしか、我（オレ）の参戦前よりも威力が上がっているようにも見える。テンションが上がったが為に、気の出力が上昇したか。

「イグネ・ナチュラ・レノヴァトール・インテグラ　来れ火精（来れ氷精）　光（闇）の精（闇を従え）　光を纏いて　燃やせ栄光の焔（吹雪け常夜の氷雪）――」

人には声帯が二つある。それをばらばらに動かすことができるのならば、同時に異なることを話せる。元々はどこぞの馬鹿が呪文詠唱と解説を同時に行う為に作ったとされる技術であるが、我（オレ）が使用するならば話が変わる。本来なら行えない呪文の二種同時詠唱（デュアルスペリング）程度なら、可能となる。

同時詠唱なら、無詠唱で行った方が威力は下がるが楽だというのは内緒だ。

「――『光輝なる炎（闇の吹雪）』」

右手に光炎、左手に闇氷。正面から左右に腕を振るい、広範囲を吹き飛ばす。さすがに古代語魔法には劣るが、我（オレ）の莫大な魔力で撃ちだされればそれに匹敵しかねない威力ではある。

偶然生を拾った敵が、撃ち終わり背を向け無防備である我（オレ）に奇襲を仕掛ける。が、それは勘違い。我（オレ）に隙など存在していない。炭素を合成し、空気中の酸素を一酸化炭素や二酸化炭素に一時的に変換する呪式、化学練成系第二階位＜窒息圏（チャクス）＞を我（オレ）を巻き込む形で展開。罠を張り待ち構えているのだから。否。そもそも奇襲は見抜かれている時点で、奇襲になっていないか。

勝手に呪式圏内に突っ込み、二酸化炭素中毒や一酸化炭素中毒、急性酸素欠乏症で昏倒しかけた哀れな敵を、紅月で仕留めて呪式を解除。呼吸を再開する。しかし……弱い。数頼りで纏まりが無い集団など、恐怖たりえない。

「やはり、魔法と呪式は封印するべきだったか？　しかし、この大戦で封印して十分ともなれば、いつ本気で戦えばいいのか……」

思考しつつ、群がる雑魚を刀の代わりに足を振り抜く斬空閃で、文字通り蹴散らす。途中で威力からしてナギの物と思われる『千の雷』の流れ魔法が飛んでくるが。

「反魔掌」

斬魔剣の応用で、形無きモノに触れる『魔』の技を掌に使い雷を受け止め、振り払うというか弾き飛ばす。何故かラカンの叫び声が聞こえた気もするが、華麗にスルー。散発的に飛んでくる魔法も同じく反魔掌で弾き返す。接近する者は容赦なく斬殺する。そんなことを思考と共に続けていたら。

「……ん？　もう終わりか？」

襲撃が無くなってきたなと思い見上げれば、ナギがアーウェルンクスの首をつかんでいた。といことは。我（オレ）の間諜も会ったことのない完全なる世界（コズモエンテレケイア）のトップが現れてもおかしくはないはずだ。最奥で儀式をしているのなら話は別だ――！？

「ナギ！？」

恐ろしいまでの魔力と共に、ナギが撃ち抜かれた。その一瞬の軌跡から、射出地点を推測。目を向ければ、鍵のようなものを持つ、圧倒的な力を保持するローブ姿の魔法使い、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の主（マスター）である造物主（ライフメイカー）の姿が。

そしてその鍵を用いて、更なる攻撃を既に造物主は紡いでいた。防御……否、あれは我（オレ）の張れる防御など薄紙の如く貫きかねん。避けるにしてもあの速度は速すぎる。ならば。

よく見る。そして、その輝きが増し、射出するかしないかの瞬間。

「時間停止」

世界の時を停止する。いかに速さを誇ろうとも、時の止まった世界では資格を持たぬ者は動けない――筈だったが、駄目だ。この停止した時間においても、造物主の攻撃は緩やかではあるが動き続けている。時間停止にすら耐性付きとなると、如何なる防御であろうと完全に無効化されるのは確定的に明らか。時空断裂くらい持ってこなければ、止めることなどできん。多少移動したところで、即座に時を動かす。

「停止解除」

そして、紅き翼（アラルブラ）は全防御を突き破られ、地に沈んだ。ゼクトなどは比較的軽症だが、ラカンは両腕が千切れている。そのうち復帰しそうではあるが、現状では動けそうにもない。

「いけませんナギ！その身体では！」

アルビレオが初めて焦ったような声を出すのでそちらを見れば、腹腔を貫かれたはずのナギが立ち上がるところだった。人の身にしてそこまでやるか。

「アル、お前の残りの魔力全部でオレの傷を治せ」
「し、しかしそんな無茶な治癒では……」
「３０分もてば充分だ」
「ですがっ」
「ふふ、よかろう。わしもいくぞナギ、わしが一番傷も浅い」
「ゼクト！　たった二人では無理です！」
「我（オレ）もいるぞ」

右手をかざし、＜胚胎律動癒（モラックス）＞を発動する。この呪式は未分化細胞により治癒を行うため、多少ならば失われた部位も再生できる。貫かれた傷程度なら、傷跡も残るまい。ただし。

「これで大体の怪我は癒えた筈だ。が、ラカン。貴様は無理だ。さすがに失われた腕一本を戻すのは……な」

これがもし千切れただけならば。多少違和感は残れど、すぐにでも繋げることができた。が、消し飛んでしまっていては、さすがに無理だ。出来て肘までか。

「アラン！　無事でしたか！」
「ああ。回避に専念させてもらったのでな。ゼクト、ここでの治療は我(オレ)が行う。安心して行け」
「アラン、行かせるな！　奴はマズイ、別物だ！　ナギが死ぬぞ！」
「何言ってんだ。オレは無敵の『千の呪文(サウザンドマスター)の男』だぜ？　オレは勝つ！　任せとけ！」
「ナギィッ！」

ラカンの声を無視し、ナギとゼクトは宮殿に入って行く。
……さて。こいつらの治療を再開するとするか。我(オレ)は真祖だから治癒を学んでいない、なんてことはない。変身して人として暮らす以上、治癒もせずに傷がすぐ治るのは不気味がられるからだ。苦手ではあるが、多少は修めている。

「＜胚胎律動癒(モラックス)＞と＜殖血(ゾーチ)＞で肉体的には十分回復するだろうから……＜醒奮(ヴェリネ)＞で覚醒させれば十分か」

一気に三重展開。肉体的には完全に戻ったであろうが、元々＜殖血(ゾーチ)＞は増血剤であって、直接血液量を増やすわけでない。そのため、血液不足による体調不良等は防げまい。無理やり＜醒奮(ヴェリネ)＞で覚醒させているだけで、可能ならばすぐにでも病院に放りこんで精密検査した方がいい。

「さて、我(オレ)もナギを追うことにする。各自頑張って復帰することだ」
「駄目だ、行くんじゃ、ねえぇ！」

突然ラカンが跳ね起き、我(オレ)を止めようとしてくる。その勇気は認めよう。だがラカン。貴様の実力で我(オレ)を止めることは、おそらく両手があって初めて可能になる芸当だ。五体不満足な現状では、一笑で終わり。児戯にも等しい真似ごとだ。

ん？　ああそうか、＜醒奮（ヴェリネ）＞で興奮している状態だったな。多少行動に制御が効かないのは仕方のないことか。

「眠れ」

＜窒息（ノキシ）＞を発動し、ラカンの吸う空気の酸素濃度を一気に低下させる。だが酸欠状態になったラカンは状況をすぐに理解。呼吸を停止する。

「残念だな。既に貴様は終わっていたのに」

しかし、一瞬でも酸欠になった時点で、呼吸停止は遅すぎる。おそらく意識が朦朧とし始めているであろうラカンに触れ、突撃の勢いを利用し投げる。頭から落ちんように調整はしたし、あのバグキャラのことだ。死にはせんだろう。

さて転位……しても奴らのところに行けるとは限らんな。仕方ない。頑張って歩いて探すか。

しばらく探索を続け、破壊音が聞こえた方向に向かったところ。宮殿の中央と思われる場所に、ナギと造物主はいた。周囲を見渡せば、ゼクトは壁に叩きつけられぐったりしている。周囲に暗い闇が見えるところから、その系統の攻撃で弾き飛ばされたか。死んでい

るか否かは、遠目であることに加え薄暗いために分からん。

「人間を、なめんじゃ、ねえええええ！！」

ナギが放った魔法の一撃が、造物主の中心を貫通。墓守り人の宮殿すら巻き込んで完全消滅させた。どうやら我（オレ）は止めを見届けただけか。まあ我（オレ）がいなくとも、この大戦はこうやって決着するのだろうな。少しやりたいことはあったが、できなくともまあ問題はない。

こうして、大戦は終わりを迎えた。

――そう、思っていたのだが。

「ん？　なんだこの感覚は……」

妙な感覚が我（オレ）を襲う。全感覚を総動員して原因を探れば、さらに奥と思われる方向から、何かが欠けていく。

現状で思いつくことはただ一つ。『世界を無に帰す儀式』、完成していたか！

「……も……２６００……絶望を知れ」

最悪はより深い最悪を呼ぶ、とは誰の言葉だったか。まだ誰も感付いていないであろう儀式の完成に慄いていた我（オレ）の耳に、誰かの声が聞こえる。

否。誰か、ではない。その者の名は、ゼクト。紅き翼（アラルブラ）の幼き老魔法使い。その雰囲気は今までのゼクトの物ではなく、造物主に近いものがあった。乗っ取られたか、ゼクトがオリジナルだったか……どちらでも違いはない、か。

「さらばだ」

「お、師匠……師匠ぅぅ！」

ナギの慟哭が響く。しかし、もはやそんなことを言っている場合ではなくなってきた。先ほどまでは内に留まっていただけの魔力消失現象が、広がり始めている。我（オレ）はどうにかなるが、ナギはそうもいかんだろう。

「ち、ナギ！　とっとと脱出しろ！」

「だけど、お師匠様が！」

「そんなことを言っている場合ではない！　魔力消失が始まっている！　『世界を無に帰す儀式』が完成した証だ！　巻き込まれれば逃げられん！」

我（オレ）の莫大な魔力で拮抗することで多少の時間稼ぎは行っている。しかし、魔力消失に拮抗するほどの魔力放出はきつい。

「ほんの僅かなら時間を稼げる！　脱出しろ！」

「……分かった！　アランも脱出するんだよな！？」

「口よりも前に足を動かせ！　ここは任せろと我（オレ）が言ったんだ！　信用して先に行け！」

我（オレ）の怒鳴りを聞き、ようやくナギは背を向けて脱出する。それを見届けて魔力放出を止める。押しとどめて実感したが、この程度の魔力消失ならば、拡大を止めることは不可能でも内からの魔法行使には問題あるまい。そもそも、魔力消失も魔法無効化も、一定ラインまでしか効果はない。それ以上の力を以ってすれば、無視はできるものだ。

さて。見られると困る観客の排除は終わった。ここから先は。

「そこにいるんだろう、造物主（ライフメイカー）。話がある」

表に知られてはならん、漆黒の闇。裏の時間だ。

第十九話「最終決戦と崩壊の序曲」（後書き）

設定として存在するものの、本編では解説できそうにないアルトリウスの時間操作について。

この小説内において、時間操作は大きく分けて五種類存在します。

1. 時間の加速・減速
2. 世界時間の停止
3. 他者時間の停止
4. 他者時間の逆行
5. 空間干渉

1は最も分かりやすいですね。対象としたものの速度を変えます。Ｆａｔｅの時間変速とは違い、揺り戻しは存在しません。しかし自分の速度を上げても重力加速度は変わっていないため、歩いた時に足が落ちるのがゆっくりに感じられます。

今回使用した2は、イメージとしては、世界という本に何も書かれていない白紙のページを挿入する感じです。そのため、時間停止中の物質は動くことはできずとも破壊可能です。封絶が一番近い概念でしょうか。修復はできませんけど。

3は単純にモノの時間を止めるものですが、世界停止と違って止められたモノは、変化を否定されているため破壊不可能。石化魔法のようなステータス異常系も時間停止中に受けた場合は無効となります。

4は時間逆行であって時間『軸』逆行ではない、と言うところが重要。対象となったモノを一定時間巻き戻します。しかし魂に干渉しているわけではないので、死者に使っても傷一つないきれいな死体ができるだけです。同様の理由で、記憶が逆行することもありません。記憶は魂の領分でそれを引き出すのが脳、という設定が裏にあ

ります。

５は、十六夜咲夜さんが紅魔館に使用しているものですね。加速・減速の応用で空間を拡大・縮小します。ちなみに加速の応用で空間縮小、減速の応用で空間拡大です。理由はありますが、説明が長くなるので割愛します。知りたければ感想でそう書いてください。多ければあとがきでやるかもしれません。

第二十話「平和にも対価は付き物だ」

あの後、造物主と対面し会話し、脱出した。もう少し遅ければ大規模反転封印術式に巻き込まれかねんところだったらしいが、聞いた時は僅かだが胆が冷えた。

会話の内容？　そのようなもの、教える義理すらない。

まあ、今は楽しまねばな。ようやく長かった戦が終結し、平和を享受できるのだからな。とはいえ、我（オレ）には平和などない。これから先、アルトリウスとしての己を殺したまま生きねばならんのだから。バレとは即、殺し合い。それが我（オレ）の日常。

まあ、魔法や体術の被験者が向こうからやってくる、ともいえるのだが。

「パレードとは肌に合わんな。引き籠るのが我（オレ）には似合いだ」

「んな固いこと言うなって。楽しんだもん勝ちだぜ？」

「かも知れんが。正体が知られれば、運が悪ければ追われる立場にある。それが我（オレ）だ」

「この程度の相手なら、撒くのも難しくないくせに」

「それもそうだが……どこを見ている？」

リュミスはこちらを見ずにどこかを見て話をしている。その視線の先には、巨大な龍の姿が。確か帝国守護聖獣の古龍で……樹龍（ナーガシャ）だったか。巨大とはいえ、リュミスより僅かに小さいくらいか。

「ん。ナーガシャかなって」

「……知り合いか？」

「ええ」＜１５００年ぶりくらいかしら。久しぶりね、ナーガシャ。いえ、ИーガΣャ＞

＜誰よ、わたしの本当の名前を知っているなんて……って、その声

まさか、Я$ス&ルン！？　なんであんたがここにいるのよ！＞
＜あら、私が此処にいちゃいけないのかしら♪＞
＜うるさい、うるさい、うるさい！＞

何だろう、リュミスからいじめっ子オーラが出ているような気がしてきた。哀れナーガシャはリュミスの毒牙にかかるのであった。

＜まあそれは置いといて、だ。念話が我（オレ）にも漏れているぞ＞
＜あら、仮契約のパスでも通じたのかしら。それじゃ＞

念話が切れ、何を話しているのかは既に分からないが……ナーガシャの怯えようとリュミスのホクホク顔を見るに、精神的に一方的に攻められ続けているのだろうな。

閑話休題（それはさておき）

「つー訳だ！　それが俺と紅き翼（アラルブラ）の仲間（メンバー）である青山詠春、アルビレオ・イマ、ジャック・ラカン、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、タカミチ・T・高畑、クルト・ゲーデル。そして死去したがフィリウス・ゼクト。そして協力者である――」

ピキーンと、何かが脳裏に走った。まずい。奴（ナギ）にこれ以上言葉を発せさせてはならんと直感が告げる。しかし、下手に口を閉ざさせることは隠しごとがあるという事に等しい。

高速思考、並行思考展開。結論は……

（（（（（（（（（無理だ）））））））））

ありがとうございました、死ね。まあ、本名を口走らん可能性も……

「――伝説の賞金稼ぎ、沈黙者（サイレンサー）と黄金女帝（ゴールドエンプレス）こと、アルトリウス・R・A・ノースライトとリュミスベルンだ！」

無かっただと!?　この馬鹿が、本気で我（オレ）を逃走者にするつもりか？　追跡者（ハンター）からは逃げ切って見せるがな。

さて、貴様の話術、見せてもらおうか。失敗した瞬間、貴様らに罪をなすりつけてやるがな。

パレードが終わり、部屋に戻ってきた。結局危惧したことは起こらなかった。アリカ女王とテオドラ皇女の言によって、賞金の取り下げすら行われた。ナギはほとんど役立たずだったがな。

この部屋に今いるのは、我（オレ）・ナギ・ラカン・詠春だけだ。ガトウとクルトとタカミチは別室だ。アリカ女王は今ある件に対応しなければならん故に忙しい。ん？

「そういえば、黄昏の姫御子はどうした？」

「ああ、姫子ちゃんならガトウに預けてる。人前に出すわけにもいかなかったしなぁ」

黄昏の姫御子ことアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。俺の元雇い主兼女王のアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの血縁になる、完全魔法無効化能力者。実年齢は百を超

えたくらいらしいが、本人の体の時を止められているが為、見た目は幼女だ。

「ふむ、精神が壊れかけている上に成長阻害魔法がかかっていたな。ではそうそう人前には出せんか」

その苛酷な扱いから、彼女の精神はほとんど崩壊している。狂わなかったのが救いかそうではないかは人によるが、心が不完全に伽藍洞なのは痛い。

空虚に近い心では周囲の物事に興味が湧かないため、心を取り戻すきっかけが少ない。残ったわずかな心もこれ以上傷付かないための拒絶であるのが、余計にたちが悪い。

「それでも、時が姫子ちゃんを癒してくれると信じてるぜ、俺は」

「そうだな。我(オレ)らに出来ることなどない。黄昏の姫御子――アスナが自分で選ぶことだ」

無情かも知れんが、これが限界ですらある。どれだけ手を差し伸べようと、手を取る意思を見せなければ意味がない。

「ところで、なぜ貴様がそこまで彼女を気にする。他者には無関心が基本ではなかったのか？」

「我(オレ)とて、慈悲の心は持ち合わせている」

我(オレ)は非情だ。身内であるのならば確実に守るし、いくらでも気にかけよう。しかし、関係ない存在であるならば目の前で死のうが基本は知ったことではない。使えるのならば気が変わるかも知れんが。

しかし、さすがにな。

「既に親を失い、心を失った。そのような少女が、これから母国と

数少ない血縁をも失うとなれば、心動かぬ者の方が珍しい」
「待て、アラン！　母国と血縁を失うって、どういうこった！」
「ふん。そのようなことか」

馬鹿は馬鹿らしくしていればよいものを。世界には、知らない方がいいこともあるのだから。
まあ、慈悲ではなく真実を知る者として。既に決まった未来を教えてやろう。

「なぜ王都でなくこの離宮で停戦記念式典が行われるか知っているのか？　無論、戦火が激しかったなどといった理由ではない」
「じゃあ」
「大規模反転封印術式。その反動でウェスペルタティア王国の大半は墜ちる。そして国王をクーデターに近い方法で廃し、その椅子に座っている。国王謀殺と王国の意図的墜落。これほどの罪があれば、まあ死刑は確定か」
「っ！」

ナギはすぐにでも動こうとするが、我（オレ）が手で制する。既に賽は投げられている。人の力は、否、個の力とは意外に小さく、救える者などあまりに少ない。
我（オレ）ですら既にできることは何もないと考えている。

「どこへ行く？　墜ちることを告げても、誰も本気にせん。墜ちる頃には魔法使用が封じられるであろうから、貴様らでは助けることもできん」
「じゃあどうすれば！」
「何もできん。今この時、星の裏で起きている犯罪を止める術がないのに等しい。諦めよ」
「てめえは、てめえはそうやって諦めんのか！」

「ああ」

肯定する。何を当然のことを言い出すのか、この男は。

「限界を知れ。我（オレ）の本気ならば、確かに救うことも不可能ではない。否。確実に多くを救えるであろう。だが……」

「何だよ」

ナギの目を見る。どこまでも真剣に、一切のふざけを入れずに。

「その代償に、戦争が再開する恐れすらある。何せ、無断で一つの国に大規模魔法を使用するのだからな」

「許可を取ればいいじゃねえか」

「どうやって？　こうなることが分かっていたのかと言われれば、その時点で積みだ。是（イエス）ならば国の滅びを肯定した者として再び賞金首、否（ノゥ）ならば根拠がないとして切り捨てられる」

「なら」

「墜ち始めたら魔法は使えん。故に諦めろと言った。アリカはすでに覚悟していた」

実際は、全魔力をつぎ込むことを是とするならば、魔法使用不可能な空間だろうとその抵抗を突破して見せよう。が、そこまでする理由が我（オレ）にはない。

だが、そこに光明見たりとナギがまくし立ててくる。

「そうだ、まだ雇われてんだろ！？　ならクライアントを守るのは」

「義務だが、その契約は既にない。大戦は終わっている」

契約は、『5年経過するか大戦が終わるまで』。既に停戦している以上、我（オレ）は既にフリーランスの賞金稼ぎに戻っている。

「今から雇うと言っても拒否させてもらう。デメリットが大きすぎる」
「てめえに、人の心はねえのか！？」
「真祖にそれを言うか」
「っ！」

言葉に詰まったか。では、我（オレ）はここから去らせてもらおうか。
まだ造物主との取引は終わっていない。あれとの対話を終え、争いのない『完全なる世界』などという妄想を否定し、遍く普遍的な世界を作らんがために。この魔法世界という名の一つの可能性を潰さぬために。
戦いは終わってはいない。

第二十一話「アフターサービスはＨＡＰＰＹ　ＥＮＤだ」

あの直後。我（オレ）が予言したようにオスティアは崩落した。ナギは動こうとしたようだが、アルビレオによって行動が阻害された上にアリカ女王の言葉が効いたらしく、崩落に駆けつけることはできなかった。

そしてそのままアリカはＭＭに捕まった。我（オレ）の想像と違ったところがあるとすれば、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の黒幕としての罪まで着せられたことだがまあ、誤差範囲だ。

以上は、女王付きに昇格したクラリスと紅き翼（アラルブラ）監視役のジェルメイヌから得た情報だ。

この二年間、賞金稼ぎとしての活動を控え、戦後処理のために魔法世界中を駆け巡った。

戦火が酷かった地域では、孤児はすぐに見つかる。そんな孤児を引き取るための孤児院の設立や、孤児院に送るほどでもないくらい育ったものをアリアドネーの学校へ送る行為。それらを繰り返して不幸な子供らを救っていった。

我（オレ）も元々は孤児だ。村人や姉に支えられて生き延びることができただけの。それ故、どうしても子供には甘くなってしまうのかもしれん。

ああ、だからアスナにも優しかったのか……いや、どうでもいいことだ。

「そういえばアラン、メガロのネイからの情報にあった処刑場所って……」

「ケルベラス渓谷。それも魔獣の穴（リュミスのホーム）だ」

あの時どこかで聞いたことがある気がしたが、それはアリカの処刑場所だった。

「まあ、そういうわけだ。処刑まであと二週程度であるのならば、予め平定しておけ。帰省ついでにな」
「そうね。久しぶりに帰っておいた方がいいかもしれないわね。百年も留守にしてたから、私のことを忘れた可哀想な子もいるかもしれないし、そもそも私を知らない子も多いだろうし」
「ありかをころすわけにもいかんしなー。あふたーさーびすくらいはしてやるべきだからなー」
「そうね。ところで態々抑揚なく適当に言う理由は？」
「雰囲気だ、雰囲気。心にもないことを言っているように聞こえるだろう？」

リュミスは真面目だからな。もう少し柔らかくなってもいいんだが。

「そもそもね、二年前にあんな事を言っておきながら実際は助けるつもりだったなんて、ツンデレ？　にもほどがあるわ」
「何を言う。あの時点ではできることなど何一つなかった。それは真理だ」
「だけど、あそこまで言う必要もなかった。これも真理でしょうに」

まあ実際、言う必要など何一つなかった。だが我（オレ）はあの時、真実を知っている数少ない存在だった。故に親切心で言ってやったまでだ。

「それもそうだがな、気まぐれだ。それとリュミス。そろそろ行け」
「……それもそうね。それじゃ私は行くから」

リュミスは玄関から外に出るや、転移を使用して消えた。一度に数キロ程度とはいえ、リュミスほどの魔力量ならば魔獣の穴まで連

続使用しても十分持つ。
今の我（オレ）の魔力でも、リュミスの魔力量を超えている。十分到達できるだろうが、回復速度が圧倒的に落ちているがため、無理は禁物。実際は無茶でも何でもないだろうが。
ああ、現在の我（オレ）とリュミスの家はケルベラスの大森林という名の樹海に存在する。この地下では今、ある儀式が進行中。暇つぶしに見ていくか。
土がむき出しの階段を地下数十メートルまで潜れば、水晶で補強された儀式場が存在する。赤い光に満たされたその広大な空間に、一つの人影と巨大な――直径1メートル弱の――赤い宝石が鎮座している。宝石の周囲には複雑で綿密な立体魔法陣が敷かれ、とある魔法儀式を発動させ続けている。

「――何の用だ、アルトリウス」
「別に、暇潰しだ。アルトリウス」

その人影は、アルトリウス・R・A・ノースライト。我（オレ）自身だ。
ああ、別に頭がおかしくなっているわけではない。これは＜？位（ゴアープ）相換転送移（アープ）＞のちょっとした応用だ。
そもそも＜？位（ゴアープ）相換転送移＞とは、ファックスのようなものだ。データを送信し、受信先で再生する。ただそれだけの理論の転送呪式。しかしファックスと同じで、転送先の存在はオリジナルと全く同一の精神と肉体をもつ、全くの別人となってしまう――通常ならば。そして、魂の構造を知らないのならば。
＜？位（ゴアープ）相換転送移＞で自己を量子化して転送後、再構築時にオリジナルを破棄。そうすれば魂はオリジナルの肉体からコピーに移る。
一般人ならば、これで終わる。だが真祖の吸血鬼にはとある事象が存在する。生存本能として、無数の蝙蝠に自己を分解する機能が。このとき、魂は一体どうなっているのか。
無数の蝙蝠に分かれ、それぞれが独立している以上、それぞれに

魂が存在すると見るのが正しいだろう。よって我（オレ）は、予め自己の肉体の一部を分離。そしてそれを核（コア）に＜?位相換転送移（ゴアーブ）＞の分身体を生み出すようにした。そうすることでそれぞれの体は、別人ではなくもう一人の自分として活動できるようになった。

魂の絆が薄いため直接の情報交換はできんが、魂の一部を還元すれば分割以後の全情報――記憶のみならず経験や習得技術まで得ることができる。

たとえ肉体の一つが死のうとも、分身が一つでも生きていれば、死した肉体に宿る魂が生きた分身に宿ることで、記憶は消え去るが生きながらえる。たとえ死したのが本体であろうと。否、どれもが本体であり、優劣は分けられた魂の量による魔力量の違いだけか。

目の前にいるのは、その分裂した肉体の一つ。いくつもの分身体の中でも最も多くの力を宿しているものだ。

具体的には、全力の９３．２％。主にアルトリウスとして行動する我（オレ）には２％しか残されていない。密偵たちは十数名の合計が２．８％で、２％はある目的で行動中だ。

「儀式に異常はないな？」

「あるわけなかろう？　我（オレ）はお前で、お前は我（オレ）だ」

「だったな」

我（オレ）は笑う。奴（オレ）も笑う。が、我（オレ）はすぐに笑みを消す。

「予定通り此処は破棄する」

「ふむ、予定より早い気もするが……原作をうろ覚えにしていた弊害か」

無言でうなずき、胡坐をかく。

「お前からは報告を受け取れんからな、聞いておく。完成しそうか

？」

「少なくとも、今のところは目立った変化はない」

ならばいつも通りか。

「そういえば、数日前に『奴』が来ていたぞ。『これ』で一つ『完成』させてな、『あれ』が効かんことを実証した」

「まあ、『奴ら』のモノだ。完璧でなければ意味はない。で、『奴』だと？　我（オレ）は聞いてないが？」

「お忍びらしい。ああ、『4』以降もすでに稼働計画は立っているそうだ」

「ほう、『2』はすでに稼働して『3』も稼働準備中と聞いたが、それ以降もか」

まったくもって『奴』の行動は読めん。まあ、これも我（オレ）の行動の結果なのだろうが。

しばらくし、立ち上がろうとした瞬間、背を向けていた奴（オレ）が声をかけてくる。

「そろそろ帰りたい、そう思っただろう？」

「当然だ」

既に地下儀式場に来てから2時間は経つ。儀式に参加するならばともかく、見ているだけならば飽きてくるのは致し方あるまい。

立ち上がり踵を返す直前。忘れるところだった。儀式の邪魔にならんよう、蝙蝠ではなく言葉で報告する。

「処刑は十五日後。ケルベラス渓谷、魔獣の穴だ」

「そうか」

たった一言。その返事を聞き地上へと帰る。

「ここここ、あとはあそこにそっちで……起爆」

その途中、地上と地下を結ぶ階段に＜曝轟収斂錐波（アミ・イール）＞で一斉に衝撃を与え、崩壊させる。これで誰一人として地下に到達することはできん。まあ、我（オレ）ならば転移で出入りできるが。

家の外に出る。元々は飛龍の住処だった洞窟内部に小さな家を作っただけ。爆破して落盤を起こせばそれだけで証拠の大半は消滅する。

洞窟を爆破し、証拠隠滅を開始する。念には念を入れ、しつこいと思えるほど徹底的に物証を消していく。並大抵の探査では証拠が見つからないと確信できるまで隠滅を繰り返していたら、丸一日かかったのは内緒だ。

「では行くか」

アリカｓｉｄｅ

「魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに『死の谷』」

元老院議員の一人がこれから行われる処刑法を説明しておるが、もはや関係のないことだ。私はもう助からない。助かってはいけない。

生きているだけで災厄を振りまいてしまう『災厄の女王』として終わらなければならないのじゃから。

谷底から響く魔獣の唸りは、これから私が落ちることを知っての物なのか、そうでないのか……これも関係ないの。
そしてその説明も終わり、ついに処刑の時刻がやってきた。

「歩け」
「触れるな下郎。言われずとも歩く」

押し出される前に、自らの足で死に向かって歩いて行く。そして最後の一歩というところで目元に涙を浮かべてしまう。これは未練。捨て去ったはずの生に対する、最後の。
……最期くらい、弱音を吐いても、怒られんじゃろう？

「さらばじゃ。ナギ……」

その言葉が誰かの耳に届く前に。私は身を投げた。心にあったのは、風が気持ちいいなという場違いなもの。

そして、衝撃と共に暖かなものに包まれた。

「これが、死か」

想像していたものと違い、痛みは感じないらしい。私はどちらへ行くのだろうか。天国か、地獄か。
だけれども、現実はどちらでもなかった。

「いや、死ぬにはちぃっと早いんじゃねぇか、姫さんよ！」
「え……ナ、ギ？」
「そうとも、千の呪文（サウザンドマスター）の男のナギ様だ！」

実際は使えるのはほんの数個なのに千などと馬鹿げた数を持ちだした馬鹿な男。そして、私が好意を寄せてしまった男。
それが、私を、その……お姫様だっこしていた。

「上は紅き翼（アラルブラ）がどうにかしてくれてるしな、あとは俺たちがここから抜け出せばハッピーエンドだ」
「は、離すのじゃ！　私がここで死ななくば、民が不幸になる！」
「嫌だね！」

私を抱いたまま、ナギは谷底を駆け抜けていく。何故じゃ！

「惚れちまった女をむざむざ死なせる訳にゃいかねえな！」
「ナギ……」

顔が赤くなる。こんなところでいきなりそんなことを言わんでも、私にも心の準備が……

「やれやれ、お節介だったかしら？」
「お節介でいいだろう」

こ、この声は……あの二人に聞かれたのか！？

「アルトリウスにリュミスベルン！？」
「正解だ。が、アランかアルトでいい。長いだろう？」
「そうね。私もリュミスでいいわ」

彼らは少し離れた岩壁付近にいたのじゃが、その後ろには無数の魔獣の姿。それも、かなり……怯えておるのか？

「あ、アレなら気にしなくてもいいわ。ちょっと暴れようとしたか

ら」
「二人がかりでぶちのめした。少なくとも我(オレ)らがいる限り、貴様らには襲いかからん」

そう言われれば、墜ちる時に響いていた魔獣の唸り声は、どこか怯えが含まれていたように思えるのじゃが。まさか、この二人が直前までのしておったのか？

「しばらくすれば上も静かになる。その後はさっさと隠居することだ、アリカ。わざわざこんな茶番までして死を偽装してやったんだ。ハッピーエンドを邪魔する奴はもういない」
「しかし、それでも生きていることを知る者は残る！　それでは民が……！」
「そうか、女王アリカが死なければならんと言うならば、ここで死ね」

腰に佩いた長刀が、鞘から抜き放たれる。それは間違いなく首を通過し――

「これで貴様は二度死んだ。この世にいない人間だ」

――なお私は生きていた。首筋にかすかな痛みが走ることから、斬るものを選別するという神鳴流二の太刀で表層だけ切り裂いたか。それは、手元が狂えば私を殺しかねん行為。よほど自信があったのか、死んでもよかったと思ったか……死を実感させたかったか。

「女王としての立場はもう無い。好きに生きろ」

それが、新たな私の始まりとなる言葉。

第二十一話「アフターサービスはＨＡＰＰＹ　ＥＮＤだ」（後書き）

＜？位相換転送移（ゴアープ）＞の応用理論を簡単に言えば、Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏのアサシンの宝具ですね。自己の魂を分割し、分割した魂に＜？位相換転送移（ゴアープ）＞で肉体を与えることでそれぞれを独立した存在として動かすというのは、ここから少し発想を得てます。

大きな違いを上げれば、体の一つが潰されても、魂が一つに戻ろうとする世界からの修正で魂が元に戻る点でしょうか。技術が集積される点は、そんな描写が会ったような無かったような……どっちでもいいか。

後で考えたら、ＮＡＲＵＴＯの影分身の術に非常に近かったことに気付いた。どれもが本体である点と、疲労が蓄積しない点と、魔力が分割される点を除けば、ですが。

第二十二話「リョウメンスクナノカミ、京都に眠る」

目の前には、ヒトの形をした巨大存在が横たわっている。
逸らしにくいがそれからどうにかして目を逸らせば、こちらはこちらで無数の酒瓶と男三人が横たわっており、三人の女性がそれぞれに付いて介抱している。
さて、どうしてこうなったのだったか。そう、それはつい数時間前のこと……

さて、ケルベラス渓谷でアリカが死んだことになってから、我（オレ）らは京都にやってきた。まあ、理由としてはいくつかあるが、一番大きいのは京都神鳴流を我（オレ）が納めていることを知った詠春が誘ったことか。京都に滞在する数日の間に、当時の神鳴流を教えることとなっている。
ちなみにナギとアリカは新婚旅行――ではなく婚前旅行としてこちらに訪れている。しかたあるまい、よくよく考えれば、あれはまだ十七。さすがに結婚には早すぎる。
まずは詠春の自宅へと戻り、翌日から京都観光をすることとなった。今はその本山への階段の途中である。

「しかし、百年以上来ていないと景色も変わるものだな」

階段から町を見下ろすと、本当にそう感じる。あの幕末のころとは大違い。この大階段とそれを囲む鳥居の群れも、当時よりも古びて色あせてしまっている。

「そう言えば手前は来てたんだったか。んな昔はその容姿じゃ目立ったんじゃねえのか？」
「ふ、我（オレ）をなめるな」
即座に生体変化系咒式第三階位＜他化體身（ルーセ・フェル）＞を発動。骨格を変え肉の形を変え皮膚や髪の色を変え、我（オレ）があの時来た姿に早変わりする。
「ひっでぇ変化だな、そりゃ。まったくの別人じゃねえか」
「当然だ。ちなみに我（オレ）は、女にもなれ「ほんとうですか？」るが、ってアルビレオ。貴様は我（オレ）の半生を見ている以上、その程度は知っているだろうが」
「貴方の主観では知れないこともあるんですよ？」
まあ確かに、我（オレ）も姿を変えているところを直接外部観測したことがあるわけではない。では、最も慣れている変化をお見せするとしよう。
身長は我（オレ）の本来のままで良し。骨格と肉付きを女性的に変更。髪の長さをセミロングからロングくらいに変更。服装もついでに女性用の者に変更。
「これでいいかしら？　久しぶりの変身だと、ごくまれにおかしなところがあったりするのだけど」
私の今の姿はレナ・ノースライト。私の姉だったひと。今でもまだ氷の棺に閉じ込められたまま保存され、年に一度の墓参りを欠かしていない、血のつながった唯一の肉親。
「すげえ。アリカよりも美女なんじゅぎゃ！」

「殴られたいようじゃの、ナギ」
「殴ってから言うんじゃねえ！」
「『殴ると思った時には、既に殴っておれ』。ウェスペルタティア王族に伝わる伝統じゃぞ？」
「んな伝統はいらね、ぐふぁ！」

私に見惚れたナギが、アリカに殴られて宙を舞う。さすがは王家の魔力。私なんかより圧倒的に量は少ないのに、変換効率は圧倒的に上ね。

「なんでそんなナチュラルに女性になれるんだ？　普段から高圧的なアランにしてはおかしいじゃないか」
「それはね、詠春。私は常に演技をしているからなのよ」

そう、私は常に演技をしている。あの人格だって、当初は演技だったんだから。今でもある理由から努めてあの性格になるようにしているのよ？

「ですから、このような姿になってもすぐに対応して見せます。やれやれ、姿に合わせた人格設定って、結構辛いんですからね？」

そう言って僕の子供の頃の姿になります。子供ギルガメッシュの目を緑にした感じですから、大抵の人にはかわいいと言ってもらえます。

「そういう事じゃ。さて、私をナギが見たらなんというかの？」
「……すごい、アリカと声もしぐさも一緒」
「まあね、黄昏の姫御子。ゼクトに化けることも考えたけど、それは彼の精神を壊しかねないからやめることにしたよ」

最後に地のアーウェルンクスを経由して元の我（アルトリウス）に戻る。連続変身も、慣れればそれほど疲れんな。

「とまあ、こんなところだ。人種年齢性別。そのようなもの、我（オレ）には無いに等しい」

「へぇ。で、女の時はどんな感じなんだ？」

「さて、昔はどうだったかは別にするが。今の我（オレ）にすれば、どちらも我（オレ）であることに変わりない。それは女性に女性であることを聞くに等しい徒労だ」

これが本当であるからさらにたちが悪い。特にここ百数十年出しっぱなしであった分身十二人のうち八名が女性であった。それぞれの経過時間をも共有するため、この百年に限定しても、八百年を女性、五百年を男性で過ごしていることになる。もう、どちらが本当の性別で会ったかすら忘れかねんほどだ。

それ故、この性格を固定するのも一苦労だ。時折性格が違うといわれるが、それも致し方あるまい。

「お、そろそろ頂上じゃねえか？」

「そのようですね」

「「「「「おかえりなさいませ、若様」」」」」

そんなこんなで頂上に着けば、一斉に巫女服の女性に挨拶される。若様とは、おそらくだが詠春か。奴が次代の長であるからして。

「ああ、ただいま」

その詠春は女性たちに頬笑みと共に返答する。そして青山詠春として、我（オレ）らに挨拶をする。

「そしてようこそ、紅き翼（アラルブラ）とその協力者。我々はあなたたちを歓迎します」

これが数日前の出来事である、ん？

「む、回想するにも戻りすぎたか」

「そんなこと言ってないで、こっちを手伝いなさい」

「それもそうか」

では手伝いながら回想するとしよう。さて、今度こそ。

「ほう、宴会か？」

「ああ、京都にいるのも今日までだ。酒でも飲んで騒ぐのが一番だ」

詠春のそれは言えている。酒はヒトを繋ぐ潤滑油だ。人間や亜人でもそうだろう。

「ではアスナは寝かしておくのか？」

「いや、ソフトドリンクで我慢してもらおうかと思う。無いとは思うが、さらわれる可能性がある」

「ふむ、言えているな」

まだ大戦のごたごたが残っているが、それでも旧世界に来た黄昏（アナ）の姫御子を狙う者がいないとは言い切れん。ならば、少々煩わしいと思われるかもしれんが、手元にいてもらうのが得策か。

「手伝えることがあれば何でも言え。ただ漫然と待つよりは暇が潰せる」

「いや、さすがに客に手伝わせるほど礼を失する気はない」

そう言って詠春は侍女たちに支度をさせる。

その一時間後には、宴会を出来る程度に支度されていた。が、そこで馬鹿共がフライングで宴会を始めていた。

形式や様式美を知らんのか、こいつらは。

「お、遅かったじゃねえかアラン。ほれ、駆け付け一杯」

「ふん、貴様らが早すぎるだけだ。ふむ、それなりだな」

ラカンに差し出された一杯を口に含むが、洋酒にはない日本酒独特のスッキリとした辛みが広がる。酔えんから酒はあまり好まんが、日本酒はまた別だな。

「あらあら皆さん、お早いですね」

「すまんな、木乃美（このみ）。この馬鹿共のせいだ」

「うっせーな、アランはよ。で、この別嬪は誰だ？」

「近衛木乃美。詠春の未来の妻だ」

「いややわ、ナギはん。べっぴんさんやなんて」

どこか小春日和の陽光を思わせる暖かさを持つこの女性は近衛木乃美。詠春の婿入り先だ。

そして、稀代の陰陽術師でもある。今はまだ研究中の事柄がある為手を出してないが、次は陰陽術に手を出すことも思考に入れてみるか。

「詠春にアルビレオにアリカにアスナ。この四名を呼んできてくれぬか？　どこにいるのか知らぬ我(オレ)では迷いかねん」
「はい、分かりました。それでは、お楽しみくださいまし」

一礼して去る木乃美。それを見送りつつパクティオーカードを取り出す。
無論従者であるリュミスに念話を送るためだ。

＜今何をしている？＞
＜え？　特に何もしてないけど、どうかしたの？＞
＜馬鹿共が勝手に宴会を始めてしまってな＞
＜そう。なら私もすぐ行くわ＞
＜いや、召喚する。だからそちらの状況を聞いたのだが＞
＜あ、そうなのね。今すぐでもいいわよ＞
「従者召喚」

ならば召喚する。酒の席に龍を呼ばずしてどうする、日本神話的に。
む、あれは八岐大蛇であって龍ではない？　知るか。

「本当にいきなりね。それでよかったけれど」
「さて、リュミスも駆け付け一杯」
「ふうん……少ないわね」

そう言って近くにあった酒瓶をつかみ、一息に飲み干す。龍であるリュミスは、解毒機能が人間よりも著しく高い。アルコールなど、

水とほとんど変わらない。スピリタスでもそれほど変化は起こらないだろう。
我(オレ)も、真祖のスペックと呪式士としての解毒機能のせいで、酔いなど感じることはない。

「豪快じゃの」
「アリカ、いつからいた？」
「今来たばかりじゃ。私も一杯頂こうかの」

ラカンからコップを奪い、くいっと飲み干す。そこには元女王としての風格が加わり、一枚の絵画のようで。
そんなこんなしているうちにメンバーが集い、宴会が始まった。
陰陽術師や神鳴流剣士も参加した、大所帯の宴会だ。
食事などでこんな大人数の輪の中にいるのは、実は我(オレ)にとっては初めての経験だ。アルトリウスでは身を潜めているし、アランとしては人との付き合いが薄い。アリカ付きの時は、大人数と共にいることはあってもこんな和気藹々《わきあいあい》とした雰囲気ではない。

「さすがの我(オレ)も、さみしいと感じていたのか？」
「かもしれないわね。基本は人間なんだから」

リュミスの言葉にうなずく。さすがにヒトでなくなっても心は人間のまま。非人間的になろうとすればするほど心は摩耗する。
リュミスやこの馬鹿どもと共に有り、少しは我(オレ)の心も癒されたのだろうか？
少ししんみりとした空気を我(オレ)が出していた時。突然空間が震える。
否、大音声の咆哮が、空を割いた。

「なんだぁ！？」

「これは、まさか！」

詠春が騒ぐが、我（オレ）にはそんな事よりも重大なことがあった。

「でっけえなあ、おい！」

「リョウメンスクナノカミ!?　何故封印が解けた！」

「貴様ら……」

我（オレ）には大嫌いなものが三つある。一つは練習や鍛錬を不要とする天才。一つはなれなれしすぎる人間。そして最後の一つは。

「っしゃあ、『雷の斧』！」

「ラカンストレート！」

「く、斬空剣！」

「……俺の邪魔を……」

めったに動かない、感情の動きを邪魔されることだ！

「すげえ、まだ倒れねえぜ。っとと？」

「何揺らいでやが、っとぉ？」

「酒を飲んで急に動くからだ！　っ、私もか……」

「……してんじゃねぇ！」

あれを一撃で倒せる魔法および呪式を検索。結論、上位古代語魔法か第七階位の攻性呪式、もしくは莫大な魔力で強化した上位の魔法か第六階位呪式。

魔法では目立ちすぎるが故、第七階位呪式の行使を決定。その中でも目立ちにくいものは鋼成系の＜神威貫鋏釼轟聳砲（アッゼ・ザール）＞か。

１立方センチメートル当たり２０グラムの高密度物質で形成された弾丸を生成。弾丸のサイズは半径１センチメートル、長さ８セン

チメートルで重量は２５０グラム。仮想力場にて核融合並みのエネルギーを生成。このエネルギーを用いて弾丸を射出する。
　本来ならば無反動砲の原理にて後方に同じだけの威力を逃がすのだが、完全に威力を殺せる自信がない。真祖の肉体強度を魔力によって超強化。右手の中指と人差し指をくっつけて伸ばし、薬指と小指を折り曲げ親指を立てた銃の形を作り、左手は右手首を支える。下半身は想定される反動を抑え込めるようにしっかりと大地を噛む。
　右中指の指輪から呪印が灯る。我（オレ）の周囲を覆い尽くす巨大呪印の中、指先に弾丸が形成される。

「消し飛べ、雑種がぁ！」

　我（オレ）の言葉が発せられるとほぼ同時、１２．７ミリ対物専用（アンチマテリアル）ライフル弾よりも二回り以上大きい弾丸が、マッハ１０を超える超々高速で射出される。どうやら力が釣り合わなかったか、肩が外れそうな反動が両腕にかかる。
　結果は上々。スクナの丹田付近に着弾した弾丸はそのとてつもない威力を解放し、衝撃波で胴回りと同じくらいの空洞を生み出していた。そして弾丸にかすりもせずとも、衝撃波だけで気絶させられたナギ・ラカン・詠春が地上に倒れ伏す。
　……しまった、さすがにやりすぎた。

「詠春はん、だいじょぶかいな？」
「ナ、ナギ！？　起きるのじゃ、ナギ！」
「……ラカンおじちゃん、大丈夫？」

そして物語は冒頭へ戻る、といったところか。

「瀕死のリョウメンスクナノカミは陰陽術師が封印準備中。事態が広範囲に伝播してないか神鳴流剣士が出払って確認中。気絶した奴らの世話で一部女は使えない、と」

「そういう事や。申し訳あらへん、お客人に手伝わせてしもうて」

「気にするな。気絶云々は我(オレ)が原因だ。宴会の後片付け程度、やらねば立つ瀬がない」

真祖の夜目を生かし、散らばるゴミや酒瓶を拾い集めていく。どこか使い道を間違えている気もしなくもないが、どうでもいいか。

「もう、しわ、けない。アラン」

「ほう、もう動いて大丈夫なのか、詠春」

「どうにか、な。突然、ハンマーで殴られたような衝撃で撃墜されたが、気絶以外の影響はない」

そういう詠春の顔は苦笑を浮かべているが、目は全く笑っていない。いかんな、やはり少々やりすぎたらしい。

「あれはさすがの我(オレ)もやりすぎたと反省している。貴様の言う事を一度だけ、常識の範囲内であれば叶えてやる。これで許せ」

「言質を取ったぞ」

「構わん」

どうせ人が常識の範囲内で願う事など高が知れている。そして一つに限定すれば、使うことを躊躇うものだ。

そして。

「我(オレ)は明日には魔法世界に行くのでな。次に会うのはいつになるか

分からんぞ」
「卑怯な！」
「旧世界に戻ったらここに顔を出すようにしてやる」
「それで済むか！　毎年とは言わんが、５年に一度は顔を出せ！」

５年か……アレがああだから……それぐらいか？　誤差がどれほどか分からんが、おそらくは大丈夫であろう。

「承知した。それでいいのであればな」

さて、果たして我（オレ）の想定道理にいくのであろうか。答えは神のみぞ知る。

……この世界に神がいたかどうかは知らんが。

第二十二話・舞台裏『動き出す闇』

クルトＳｉｄｅ

アリカ様の処刑から既に数日が過ぎた。
あの日紅き翼（アラルブラ）の面々によってアリカ様は救い出されたが、アリカ様が被った汚名は何一つ晴らされていない。
僕は許せない。アリカ様を救うだけの力のない自分が。そして、力がありながら何もできなかった紅き翼が。
だから僕は、紅き翼から脱退し、アリカ様に汚名をかぶせたメガロメセンブリアに身を寄せることにした。武の英雄の力ではできないことが多すぎるから。そして、メガロを内側から壊すために。

「あのお、君がクルト君でいいのかな、違うかなぁ？」
「なんですか？」

突然名指しで僕のことが呼ばれる。隣を見ればいつからいたのか、長身痩躯の青年がいた。真っ白の三つ揃いの中で、金の髪と青の瞳は妙に目立つ。

「ああ、よかったあ。ボクが君を知ってても、ボクのことを君が無視したらお話にならないし、なんてネ♪」

おちゃらけたというが頭のネジが数本吹き飛んでいるというか、どうも掴みどころのない男だ。そもそも、なぜ僕に話しかけたのか。

「なんの用ですか？　どうでもいいなら僕は行きますから」
「いやあ、ごめんごめん。ぼかぁ君をスカウトしに来たのさ」
「……はい？」

スカウト。一体こいつは誰で、何の目的で、どこに僕を所属させようというのか。

「んん、ボクのことを疑っている？　しかたがないなぁ、ちょっとだけボクのことを教えてあげちゃうぞ？」

そういうと、舞台の主役のように大仰な身振りで語り始める。

「ぼかぁ君と同じメガロメセンブリアに敵対する思想を持つ組織、薔薇十字騎士団（ローゼン・クロイツ・オルデン）の１０＝１（イプシシマス）なんだにゃー。あ、イプシシマスって超越者って意味で、だからぼかぁ騎士団（オルデン）の総長なんだよ。ビックリした？」

そのあまりに突拍子のない戯言に、僕の興味は完全に失われた。

「ひどいなぁ。せっかく人が話してあげてるのに無視するなんて、ぼかぁちょっと傷ついちゃったぞ」

これはただの馬鹿だ。気にする必要は――な！？　馬鹿な、人がいない！？

「これは認識阻害を突き詰めた結果だよ。外の存在を君は認識できないし、外の存在は僕も君も認識できない。気付かなかったでしょ」

「どういうことだ」

「ん～、君に話を聞いてほしいだけなんだけどなあ。ほら、メガロメセンブリアの元老院に聞かれると厄介だし？」

確かにそうだ。こんな支離滅裂な人間であろうと、反逆分子であると認識されれば抹殺されかねない。

だが、なぜ僕を巻き込もうとする。

「それはね、君がメガロと対峙することを決めたからだよ。まだボクの組織は立ち上げたばかりで構成員が少ないんだ。それに、騎士団（オルデン）に入団してほしいだけで、別にそれ以上行動を縛るつもりはないよ」

「構成員が少ない？　一人でメガロメセンブリアを潰せるような男がいて、それでまだ少ないと？」

「ん～、非常に惜しい！　ぼかぁ確かに一人でメガロを潰せるかもしれないけど、それしかできないのさ」

「それしか……？」

それだけできれば十分だ。なのになぜこの男はまだ力を集めようとするのか。

「君と同じさ」

「僕と……ああ、そうか。武の英雄ではできないことが多すぎるからか」

「ごめーとー！」

にへらと青年は笑う。その目は確かに笑っているが、瞳の奥には見通せないほどの混沌とした闇が渦巻いている。

これは危険だ。だがそれ以上に、使える。紅き翼（アラルブラ）とは違い、しっかりと世界を理解した集団。彼らならばまだ心を許してもいいかもしれない。

「いいよ、貴方の騎士団とやらに入るよ」

「おおっ、子供は素直が一番だね」

「でも、メガロメセンブリアにも入りますよ。まだ貴方を信用した訳じゃない」

「大丈夫だいじょーぶ！　君にはメガロへの潜入と内部の反乱分子の掌握を頼みたいからね」

ヘラヘラと笑う青年に、僕も笑う。こいつはやっぱり危険人物だ。だけど同時に、僕の理想をかなえるのにこれ以上ないほど都合がいい。

ああ、そう言えば。

「貴方の名前は何ですか？　貴方が僕の名前を知っているのに、僕があなたの名前を知らないのは不公平です」

「あれ、まだクルトには教えてなかったっけ？　ぼかぁカイン――カインっていうんだ」

第二十三話「力あれども救えぬものあり、か」

「効率化による術式改変は、本来はある程度に留まる。が、高位の術者はこのように過剰魔力に耐えられるように補強する事もあれば精密動作のために追加術式を加えることもある。同じ魔法でも人によって個性が表れるのは、この無意識化での術式改変の影響が実は最も大きい」

多くの人――人間亜人問わず――が犇めく空間で、我（オレ）は講義を続ける。ここはアリアドネー最大の国立魔法大学。非常勤講師としてここに登録した我（オレ）は年に数回、このように魔法研究の一部を公開している。

とはいえ、ほとんどが百年以上も前に完結した研究である。最新の研究は難しすぎる物が多すぎる。そもそも、この古い研究の成果を知って初めて理解できる物すらある。そして毎年聴衆が変わるため、最新の研究成果など明かせん。

「無論、適性も重要だ。適性は魔力の属性の偏りが原因だ。よって、高位の術者になればなるほど属性に偏りが生まれ、必然的に適性に縛られる。さて、術式の効率化に話をもど」

「すみません、質問です」

「ふむ、なんだ」

「高位の術者は、適性外の魔法も使用できます。高位の術者ほど縛られるのは矛盾していませんか？」

見れば頷く者がちらほら見られる。しかし何故……ああ、そういうことか。

「ふむ、少し言い方が悪かったようだな。では言いなおそう。低位

の術者は、自らの使用できる魔法の限界が、適性内外共に近しい。ここまではいいか？」

質問者と頷いていた者が肯定を示す。

「だが高位術者は適性内での限界と適性外での限界は大きく離れる。これもいいか？」

これも同じく肯定する。

「ならば、低位の術者よりも高位の術者が属性に縛られていると言えなくはないか？」

「あれ？　でも……ん？」

「高位術者が適性外の魔法を使用しやすくなるのは、効率化の一端だ。適性属性に合わずとも、合うように術式を弄る。ここで差異が大きくなるため、限界に差が生じる」

説明に納得半分疑問半分といった風だが、どうにか納得させたか質問者は礼を言う。

「では話を戻すぞ――――」

久方ぶりの講義を終えて休憩室に戻れば、懐かしい顔と出会った。確か最後に会ったのは……もう二年も前か。

「お疲れさまでした、アルトリウス殿」

「セラスか。久しいな」
「騎士団の方も忙しいので」

そう言えばセラスは、アリアドネー騎士団の副総長にまで上り詰めたのだったか。こちらは非常勤というより特別講師として招かれる程度でしかない以上アリアドネーにいることは少なく、いてもこの大学にしか寄らない。これではなかなか会う事もあるまい。

「まあ、我(オレ)もそうそう騎士団に顔を出すようなことをしないのでな。会う事が少ないのは必然か」
「そうでしょうね。今回の講義を聞きましたが、素晴らしいですね」
「とはいえ、百年以上前の研究だ。誇るほどの物ではない」
「それほど昔の物を……では、最も新しい研究は何をなさっているのですか？」

最新研究か。絶えたとされる魔法の復元……否、これはもはや絶望ともいえる研究だ。キーボードの上を猫に歩かせて、出来た文章が本を成すほど……とまでは言わんが、うろ覚えの本の内容を復元しようとしている程度には。

となれば、既に九割以上完成しているあの研究か。

「最新の研究成果は、究極技法(アルテマアート)と呼ばれる咸卦法の最終目標、と思われる地点の再現だ」
「属性咸卦法を大戦で使用したと聞きますが、それよりも上、ですか？」
「純粋出力であればこちらが上だ。属性付加による応用力で言えば属性咸卦法だが」

実は大戦時には八割完成していたのだが、残りの二割で躓いており、思考の切り替えに研究したものが属性咸卦法だ。神鳴流の属性

変換と『闇の魔法』からヒントを得、属性を合わせれば意外とどうにかなるのでは？　と考えたことからの発展だが。

大戦終結から早十二年。あるサンプルが手に入ったことから飛躍的に研究は進み、現在の完成度は九割超え。あとは実際に使用して微調整で完成だ。

「原理を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ふむ。まず、世界には様々な力があふれている。その中でも生命が捻出できる力は四種類ある。分かるか？」

「四種類ですか？　気と魔力と、あと二種類は分からないですね」

「まあ、名前が付けられていない力だからな。我（オレ）は便宜的に霊力と妖力と名付けた」

霊力と妖力、とセラスがつぶやくが、それを半ば無視してさらに言葉をつなげる。

「そもそもの発端は、咸卦法の存在を知ったときの些細な疑問だ。それは『何故相反する力を混ぜるとより上位の力となるのか』だ」

「そういうものだから、では納得できなかったのですね」

「当然だ」

そこで止まることは、思考の停滞に等しい。

「だが、それ以上を知ることはできなくてな。その時全く別の研究テーマがあった。『妖怪化のシステムとは』というものが」

「まったく異なる研究ですよね、それは？」

「ああ、だがこれが咸卦法研究を進めた」

猫が猫又になるように、狐が九尾になるように。永く生きた生物が上位生物になることが稀にある。その際に魔力によく似た別種の

力が関係することが分かったことがきっかけだ。

「この力を、妖怪化に必要な力という事で妖力と名付けた。妖力はどうやら年月を生きるほど増えるものだった。で、だ。魔力に似た力があるのなら、気に近い力もあるかもしれない」

「そうしたら、気によく似た別の力があった。そしてそれを霊力と名付けた。違いますか？」

「正解だ」

そして、この四種の力の発生源を調べていたのだが。

「それぞれ発生源が異なっていてな。気は肉体より、魔力は魂魄より、霊力は精神より、妖力は年月より生じるものであった……ん？」

少々外が騒がしいが……誰か来たか？

数瞬後、入ってきたのはアリアドネー騎士団の団員だった。否、アリアドネー騎士団に潜入している分身、マリアムだった。

「失礼します、副総長」

「どうしましたか？　本日私は非番ですが」

「アラン殿への言伝ですので。カグラに危機あり、と」

カグラ……ガトウか？　しまったな、大戦後の数年については一切知らない。本編で一切出てこなかった彼だが……ここで死んだか、歴史が歪み始めたか。

「場所は？」

「こちらです」

地図で示された場所。少々遠方ゆえ面倒だが、行くしかないか。

それに……ちょうど咸卦法の話をしていたのだ。調整も行えて一石二鳥だ。

「ふん、知った以上見捨てるのは目覚めが悪いからな。右手に気、左手に魔力、右手に霊力追加、左手に妖力追加……四力合成」

前回行ったときは、その力のあまりの純度の高さに制御が追いつかず暴走した――それほどの力。

肉体を、精神を、魂魄を、時間を。全てを捧げることで生じる『世界最高の存在』の力――神力。それを疑似的に再現したものであるから、疑似神力とでも言うべきか。

「く、さすがに負荷が酷い。総量減少……よし」

どれだけ疑似的であろうと、神の力であることに変わりはない。たとえ真祖と言えど到底耐えられるものではない。

ひとっ飛びで向かい、即時救出だな。敵対勢力ありと判断した場合、即時殲滅も追加だ。

「ではまた会おう、セラス」

「騎士団を派遣しますか？」

「否、不要だ」

一言残し大学を抜け、虚空瞬動で駆ける。ヒトは寿命が短い。（死にやすい）間に合えば御の字だな。

辿り着いた場所は荒野。そこには無数の悪魔と倒れ伏す銜え煙草(ガト)の男、そして幼い女が青年に連れられている。

咸卦法は既に解いている。さすがに長期間維持していられるほど最適化してはいない上――今の心境では暴走させかねん。

「遅かったか……後藤、生きてるか？」

「ガトウ、だ。アラン」

ツッコミをするガトウだが、その言葉は弱々しく、生気が感じられない。

ぱっと見ただけだが間違いなく致命傷。咒式や魔法を駆使すればまだどうにかなるかもしれないが、この状況下で治療行為を行う事は不可能に近い。

「言っておく。貴様は此処で死ぬ」

「はっきり言うね。まあ、分かっていたけどね」

その口調は穏やかで、混乱も恐怖もない。諦めたというよりは、覚悟が決まったというべきか。

「遺言はあるか？　覚えておこう」

「アスナの記憶を、封じてくれないか？　特にこの記憶は重点的にね」

「イヤ。忘れたくない。なんでそんなこと言うの！」

アスナは激しく抵抗する。しかしガトウに発言を覆す気はなさそうだ。

「承知した。安心して逝け」

「ああ、そう、させて、もらお、う」

銜えていた煙草が地に落ち、ガトウの魂が逝ったことを示す。宗教的に抗議されるかもしれんが小さく十字を切り、ガトウの魂の冥福を祈る。どうせ全てを忘れ輪廻の輪に戻るだけだろうが、その流れに間違いがないように祈る程度は許されるよな？

そっとガトウの顔に触れ、目を閉ざす。そして、あえてゆっくりと立ち上がる。

「さぁ、処刑の時間だ」

「「「「！？」」」」

直後、我（オレ）の雰囲気が一変し、周囲の悪魔どもが怯える。

我（オレ）にはこの現状が許せん。ああ、別に、悪魔どもがガトウの命を奪ったことはどうでもいい。そこに怒りなど欠片もなく、悪魔どもが許せんわけでもない。ただ、目の前で救えるかもしれん命が散ったことが。どうしても七百年前を思い出させる。少し思考を巡らせていれば救われたかもしれない、姉貴（レナ）と婚約者（アリステル）を。

故に、悪魔どもへの怒りなどない。ただあるのは自虐のみ。救おうと思った存在を救う事が出来なかった自分への、行き場のない怒りだ。

そう。これから行う事は、言葉にすればあまりにも単純で馬鹿馬鹿しいだけの『八つ当たり』だ。

「楽に死ねると思うな」

「「「「――――――！！！」」」」

まるで蜘蛛の子を散らすように、悪魔どもは逃げ惑う。賢い悪魔は魔界へ還ろうとする。しかし、世界とはあまりにも無情。逃走を許すほどの情け容赦は、狩人（アルトリウス）にはない。

呪式干渉結界＜反呪禍界絶陣（アーシ・モダイ）＞と、魔法を司る精霊や術式に干渉

するようにした＜反魔禍界絶陣（マギカ・モダイ）＞。それらを発展させた、呪式を含む魔法用の使用阻害空間作成呪式＜抗魔禍界絶陣（ベルゼ・ファ）＞。その阻害方法は至極単純。呪印組成式や魔法術式の構成時に干渉。我（オレ）の意思を混ぜることでまともな発動を不可能にする。

　完成された魔法や呪式には一切干渉できない欠点こそあれど、展開領域が広く内部での魔法及び呪式発動が理論上不可能になる、魔法使い殺しの結界。精霊を介さない魔族の帰還魔法と言えど、この結界空間内で発動するなど不可能だ。

　ついでに＜遮熱断障檻（フォエニク）＞で結界空間を取り囲む壁を生成。ここから物理的に逃がすこともせん。

　逃げられぬことを悟ったか、九死に一生を得るためか、やけくそか。一転して攻勢に移る悪魔。ここで広域殲滅魔法や高位呪式で一網打尽にしてもいいのだが、アスナはともかくタカミチが生き残れる保証がない。致し方あるまい、初歩魔法の一斉掃射でけりをつけよう。

「光の９３９１矢、闇の９３９１矢、火の９３９１矢、氷の９３９１矢、計３７５６４本――全弾射出」

　一直線に、ジグザグに、弧を描いて、放物線を描いて、螺旋を描いて、回り込んで。あらゆる軌道を描きながら魔法の射手は悪魔に食らいつく。撤退不可能な悪魔は蹴散らされ、殺されていく。

　十秒もたたずに悪魔は全滅し、静かな荒野に早変わりする。直後に＜遮熱断障檻（フォエニク）＞の呪式構成が崩れ、崩壊していく。物質を組み上げる物ならばともかく、それ以外の呪式は持続時間が短いな、全く。

「さて、これまでの全てを忘れてもらおうか。黄昏の姫御子・アスナ」

「イ、イヤ。絶対にイヤ！　なんでイジワルするの！？」

「文句はガトウに言え。ああ、だが心配する必要はない」

口を耳元に寄せ、声になるかならないかの声量で告げる。

「　　」

「え？」

「深層心理（アラヤシキ）に刻み込め。それこそが記憶封印を解くキーワード」

そして――――――――黄昏の姫御子ことアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアはこの瞬間に死んだ。

ここにいるのは記憶のない幼い少女。ただのアスナだ。

数ヵ月後。京都に顔を出した我（オレ）に詠春が、アスナが神楽坂明日菜として麻帆良にいることを教えてくれた。そして、ナギに息子がいることを。さらにそれが本命だと言わんばかりに娘である木乃香の自慢話を始めた。

……ん？　てことはネギ（現在１歳）と明日菜（既に２０歳過ぎ）は従姉弟か。

日本の法律上は問題……なかったな。いとこ同士の結婚は。

第二十三話「力あれども救えぬものあり、か」（後書き）

八年前。ガトウの最期を看取り、アスナの記憶封印に細工。

プロットってこれだけって、大丈夫なのでしょうか？

第二十四話「新たな依頼と原作介入への道」

桜の花は既に散り、青々とした葉を茂らせるこの季節。久方ぶりに京都へ我(オレ)は顔を出した。

約束した五年ごとの訪問だが、前回と比しても京都は近代化が進んでいる。そのくせ、社などの文化財付近は古の香りを残している。

関西呪術協会総本山――――ここも古の香りを残す場所の一つであり、一望する眺めは近代化が進もうとも整備された京の都を思わせる壮麗さ。

つい最近まで身を寄せていた退魔家系の一つは真に山奥。このような機能美も兼ね備えた街並みなど欠片もない。それはそれで自然美はあったのだが。

さて、何が言いたいか。

「いい加減現実逃避はやめたら？」

「そうだな」

とりあえず目の前の近衛詠春の聞き飽きた娘自慢を聞き流しているだけなのだが。確かに現実逃避しているだけではまったくもって意味のないことではあったな。

「木乃香だったか。貴様の娘がそれはそれは美しく気品があることは理解した。で、何が言いたいのだ、詠春」

「ああ、そういえばまだ言わなければならないことを言ってなかったかな」

この男、年々親馬鹿レベルが上がっている気がする。下手に木乃香を馬鹿にすれば我(オレ)相手であろうと容赦なく突っかかってくる。逆におだてれば気分が良くなる。

親というものは皆こうなのだろうか。我（オレ）は前世含めてそのような経験がないのでよくわからないのだが。

「来年、木乃香が中学に上がる。その警護を依頼したい」

「木乃香の通っている学校がある場所は確か……」

「麻帆良だ」

原作通り、木乃香は麻帆良に通っている。西洋魔法使いの巣窟である関東魔法協会のある麻帆良に、だ。

関西呪術協会の長の娘を通わせるには、お世辞にもいい場所であるとは言えない。

「お義父さんの意志と私の意志の擦り合わせの末なのだが、私の眼の届かない場所でもある。だから……」

「理由などどうでもいい。我（オレ）は貴様に借りが一つ――違うな。貸しを一つ作ったのだ。それを我（オレ）は返さねばならん」

そう言い、少しだけ姿勢を正す。何らかの条件によってその依頼が遂行できない状況下におかれない限り、依頼を違えることはない。それを我（オレ）は信条としている。そのため、依頼の条件は可能な限り抜け道があるようにしなければならない。

少しでも隙を見せれば、無茶苦茶な条件で依頼をさせられかねないからだ。

「依頼は近衛木乃香の警護。その際の条件は何かあるか？　少なくとも我（オレ）が近くにいても大事に至らん何かは用意してもらわなければならんが……」

「お義父さんに教職に就けるよう手配はします。希望の教科に就けるかどうかは分かりませんが」

それはいい。だが中学の間だとしても、三年は麻帆良生活となるのか。

だが、その間リュミスをどうするかだ。魔法世界であるならばある程度の地位を持っているから、別に放置しても問題はないのだが。

「私は？　別に魔法世界で待っていてもいいわよ。高々数年でしょう？」

「否。教職以外で不足している人材があれば、そこに入れてもらえるようにしてもらおう」

「そうですか。木乃香の近くにいられる方が、こちらとしてもうれしくはありますが……」

まあ、それは麻帆良側の都合に合わせるしかないのだが。多少脅せば、ある程度は融通がきくだろう。

「さて、木乃香を中学三年間警護すること。それが依頼でいいか？」

「あ、いや。木乃香に魔法は教えないでほしい。魔法に近付くのもなるべくなら避けさせてほしい」

「魔法から遠ざける？　冗談はよせ。十年前ちらりと見たが、あれほどの魔力保持者に魔法を教えんなど、才能を腐らせるにもほどがある」

「苦渋の決断なんだ。木乃香に魔法を教えるにも、まだ早すぎる。そのためにお義父さんのところに出したくらいなん」

「馬鹿か？」

今までの雰囲気を全て消し、親友に向けるにはあり得ないプレッシャーをかける。こうまでしなければ、おそらくこれは理解することが出来まい。

「それが何を意味するか分かっているのか？　理解していないので

あれば問題だが、理解していながらならば大問題だ」
「理解しているとも。祖父の庇護の下にいられるということだ。それに関西呪術協会の跡取りという見られ方もしないで済む。どちらもいいことだ」
「貴様は子を可愛がりすぎるあまり、最も忘れてはならぬことを忘れてしまっている」

こいつは理解しているのだろうか。少なくとも原作では理解していなかったような気もするが。さすがに覚えていないが、現状と僅かな記憶を照らし合わせれば、理解していなかったように思える。

「何がだ。お義父さんは今では関東魔法協会の長だが、昔は陰陽術師だった。おかしなことではないだろう」
「関東魔法協会と関西呪術協会は対立している。それでもか？」
「だけど身内だ」
「そうだな。貴様の内ではな」

やはり、大切なことを見落としている。それも最低二つ。無知は罪ではない、知ろうとしないことが罪だとは言うが。知ったつもりの無知はより悪いのだろうか。

「二つほど貴様は理解していない。第一に。貴様の部下にはそう思わん者もいることを忘れている。貴様の義父を関西呪術協会の裏切り者として見る者もいるというのに、そう言えるか？」
「それは……」
「第二に。万一魔法を知ったとして、魔法を教える人物は西洋魔法使いになる。西洋魔法使いの巣窟なのだから当然だな。さて、それでもなお関西呪術協会に、自分は正しいと胸を張って言えるか？」
「く……」
「ああ、第三に。偶然一人になった際に襲われても、あれでは自己

防衛すらできんな。知ってるか？　大魔力保持者は狙われやすいぞ」
「っ！」
　別に我（オレ）は責めることはしない。関西呪術協会がどうなろうとも陰陽術が無くなるわけではないから、結果的に関西呪術協会はなくなろうと困らない。
　ただ、久方ぶりの友人と呼べる存在だから、気にかけてやっているだけだ。

「まあ、考えろ。しばらくは京（ここ）都に留まるつもりだからな。それでは」
「いや、万一。そう、万が一魔法が知られたらでいい。木乃香に陰陽術を教えてやってほしい。木乃香が中学に上がるのは来年だ。一年あればある程度は修められるだろう？」
「依頼は木乃香の護衛と、万一魔法を知られたら陰陽術を教えること。以上で相違はないな？」
「ああ。それでいい」
「だが教職も行うとなれば、見れぬ時間も増える。さすがに教職の手を抜くのはまずいのでな。その間の護衛は考えているのか？　リュミスがどうなるのかもわからんのでな」

　おそらく、『彼女』がいるのだろうが。それでもなお確認は欠かさんようにせねばな。ここで念を押しておけば、『彼女』のせいで木乃香が襲われても我（オレ）への叱責はあるまい。
　この念の入れようこそ、依頼達成率の高さにつながっている。依頼にこちらに有利な、曖昧でない穴を意図的に作り、万一の際はそこを突く。それを明文化させれば尚良し。
　卑怯？　それは阿呆の言う事だ。

「それは問題ない。元々木乃香につけようとしていた護衛もいるか

らな。入りなさい、刹那」

入ってきたのは黒髪の少女。確か烏族の混血（ハーフ）だったか。誕生日が10月18日なんてことはない、はずだ。

「京都神鳴流剣士、桜咲刹那。ここに」

「初めまして、だな。我（オレ）はアルトリウス・R・A・ノースライト。分類は……いろいろ修めたが、西洋魔術師だな。京都神鳴流も百五十年ほど前に修めさせてもらった」

その瞬間刹那の目が細まり先手を打ってきたが、後の先（カウンター）で抑え込む。＜術＞の真理は合気道にも通じている。一度抑え込まれれば、そうそう抜け出せん。

「どうした、我（オレ）が気に入らんのか？」

「お嬢様を害するかどうか、守れるかどうか見極めるのも、私の役目だ」

この、何と面白いことを言うのか、刹那は。見極める？　誰を？　我（オレ）をか？　く、くくく……

「くははは。さすがは関西。このような場ですら冗談を忘れんか」

「冗談、だと……！」

「貴様相手など役不足もいいところだ。往ね」

この程度の存在に傷をつけられるほど、鍛錬を怠った覚えはない。魔法世界の上位存在とは、そういうレベルのものだ。

その言葉にカチンと来たか、次々と野太刀を振るってくる。しかし、いったいどこまで太刀筋が粗いのか。見ていてイライラしてくるほどに刹那の剣は酷い。

６７、６８、６９……全て素手で捌くが、かすり傷一つ付くことはない。別に気で体を強化する必要すらない。速さはあっても疾さがない。見え見えの予備動作から放たれる攻撃など、恐れるに値せず。

９７、９８、９９……

「これで１００合だ」

「がっ！？」

この二年で習得した新たな体術を以ってして１００合目を回避し、首筋に手刀を中てる。無論手加減はした。しなければ比喩抜きに首が飛ぶ。

「もう少し育てろ。芽はある」

「そうか。さて、お義父さんに連絡は入れておくから、早いうちに麻帆良に行ってくれないかな？」

「……そうだな。貴様の義父の都合がいいのであれば、明日にでも行ってやると伝えろ」

刹那を担いで詠春は立ち上がる。おそらくは義父とやらに話をつけに行くのだろう。

む、だが、奴の名は何と言うんだったか？　『ぬらりひょん』や『妖怪』の異名ばかり覚えていて、本名など覚えとらん。しまったな、先程の話の流れで聞いておくべきだったか。

四半時間ほど経ったあたりで、詠春が戻ってくる。義父との話し合いに決着がついたのだろう。

「お義父さんからの伝言は、『三日後の十時に学園長室に来てほしい』だってさ。一応連絡先はこれだよ」

ピン、と一枚の名刺を弾き飛ばす。それを人差し指と中指で挟むように止め、内容を確認する。

『麻帆良学園理事長　近衛　近右衛門』

ああ、そんな名だったな。すっかり忘れていた。

「三日後の十時ね。今のうちから新幹線の席を予約しておくわね」
「助かる。それと、教職に就くまではここを拠点にさせてもらうぞ」
「それはこちらからお願いするよ。陰陽術を教えなければならないんだから」

さて、一年でどこまで覚えられるか。実際はある程度覚えられれば十分だが、可能ならば、と欲は尽きん。

第二十四話「新たな依頼と原作介入への道」（後書き）

刹那の性格がつかみづらい……間違ってないよね？

第二十五話「異常という正常・正常という異常」

約束した前日、我（オレ）とリュミスは麻帆良入りした。さすがに当日に行くのは無理があると判断したためだ。朝一に出れば理論上は間に合うらしいが、時間的猶予が消し飛ぶのでな、却下した。

今は麻帆良本校女子中等部に最も近い駅、麻帆良学園中央駅の駅前広場。

「昨日連絡したから、ここに案内役が来るのよね？」

「ん、ああ。知り合いらしいが……なるほど。確かに知り合いだな」

土曜日の朝となれば、駅前とはいえ人影はまばら。故に、知り合いが近づいてくればすぐにそれと分かる。若き日のガトウを想起させるその風貌は、おそらく似せようと努力しているのであろうことを知らしめさせる。

タカミチ・T・高畑。紅き翼（アラルブラ）の少年探偵団などと呼ばれていたガキも、大戦からの17年で、あどけない少年から立派（ダンディー）なおじさんになっていた。こうして並び立つと、我（オレ）が時から切り離されていることが良く分かる。

「久しいな、タカミチ。十五年、否、アスナの一件以来だから、五年ぶりか」

「そうか、もうそんなに経つんだね、アラン。リュビさんもお久しぶりです」

「久しぶりね、タカミチ君。それと、リュビは当時の偽名よ。今の私の名前はリュミスベルン・ノースライト。リュミスと呼んで頂戴」

ああ。リュミスは戸籍上、リュミスベルン・ノースライトとなっている。義理の姉という設定だ。魔法世界大戦よりも前だと、その

呼称をよく用いていた。黄金女帝（ゴールドエンプレス）が拾った子供と言う設定だったか。
大戦でアリカ付きになってからは使っていなかったが、共にいることに違和感をなくすために、再び使うこととなったわけだ。

「それじゃ、学園長に会いに行こうか」

タカミチの言葉で歩み出す。
しばらく歩いたあたりで、少々言いたいことが会ったことを思い出した。学園長に言うつもりだったが故に忘れかけていた。

「そうだ。我（オレ）のことをアランとは呼ぶな」
「は？」
「アランの名は売れすぎたのでな。アルトリウスの方がまだいい」
「いや。いくら賞金が取り下げられているからって、齢七百を超える真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）の名の方が悪いと思うよ」
「だが、アランだと正義馬鹿共がよってくる。鬱陶しくて仕方ない。アルトでもいいがな」
「はぁ、二人目の真祖が来たなんて知られたら、荒れるなぁ。アランならそれほどでもないのに」

二人目の真祖、だと？　原作とは違い、キティがここに封じられるような理由を見つけることはできなかったのだが。一人目とは誰だ？　イレギュラーか？

「タカミチ君。二人目ってことは、もう一人真祖がいるの？　誰？」
「え、知らなかったのかい？　結構有名な真祖だし、彼女はアルトリウスのことを知っていたよ」

我（オレ）のことを知る、有名な女性の真祖。心当たりが一人しかいないのだが。

「まさか、キ、エヴァンジェリンか？」
「そうだよ」

何故封印された？　原作では、付きまとわれて嫌がったナギが、罠にはめて封印したはずだ。いや、何らかの理由が有って同じように付きまとった可能性は否定できんか。しかし、たとえ同じ状況にあれど、あの＜内なるナリシア＞がある以上、キティに負ける要素があるとは思えんのだが……
まあ、過ぎたことはどうでもいいか。

「そうか」
「彼女に君が来ることは伝えてないけど……教えた方が良かったかい？」
「否。不要だ」

おそらく我（オレ）は木乃香のクラスの担任か副担任になるはずだ。木乃香のクラスにはキティもいる。その時でも十分だろう。

「ここが麻帆良本校女子中等部。ここの一室が学園長室だよ」
「そうか。案内御苦労」
「いや、部屋まで送って案内終了だから」

そして学園長室に着いたのだが、これは本当に人間なのか？　人間だとしても、あの木乃美の父親であるとは到底思えん。よほど母親の遺伝子が優秀だったのだろう。
もしくは。

「漫画では、ぬらりひょんの孫の見た目は普通の人間だったな」
「酷い言われようじゃのう……」

昨日偶然立ち読みした漫画を思い出す。この世界でも連載されているのは驚き……でもないか。他世界の観測を行えるのは、一応普通なのだから。（この世界では、連載が私たちの世界よりも数年早いことになっています）

「どうでもいい会話はやめましょう？　来年から私たちは何をすればいいのか。今はそれだけで十分よ」
「それは問題がある気がするが、間違ってもいないな」

早く言えと目で訴えれば、学園長は落ち込んでいた風から元に戻る。そして口を開く。

「アラン殿「アルトリウスと呼べ」ではアルトリウス殿には、来年から教職に就いてもらう事になる。木乃香のクラスの副担任が妥当じゃろうな。教科は数学になりそうじゃが、よいかのぅ？」
「数学、か。不得意ではないな」

後衛咒式士は理系職。化学練成系を得意とすると聞けば化学が良くできるように思われそうだが、数学もできなければ話にならない。
そして。我（オレ）は何に就こうがある程度どうにでもできるが、リュミスはどうなるのだろうか。

「私は？　言っておくけれど、教職なんて無理よ。他人に教えるなんてやったことないのよ」
「ふぉふぉ、大丈夫じゃよ。ちょうど女子寮の寮監が年齢を理由に退職を考えているらしくての。そこに収まってもらおうかと考えておったのじゃが」

「寮監、ねえ。何をすればいいのかさえ分かればできると思うわ」
「そこまで難しくはない。共有スペースの清掃と寮生の管理が主じゃ」
「ならいいわ。寮監として来年からここで働かせてもらうわ」

そのまま手続きの書類やら麻帆良の地図やらを受け取り、その日は解散となった。書類はなるべく早く提出せねばならないらしいが、それでも数日以内なんて切羽詰まってはいない。今年中に提出できればよいらしい。

「ふむ、次回の来訪で提出するのはこれとこれで……なるほどな」
「履歴書は適当でいいらしいけど、どう書こうかしら。ま、そのあたりはさすがに聞くわよ」
「我(オレ)も、履歴書偽造は初だが。麻帆良内の大学で教員免許取得の嘘は書かねばならんらしいが……ん？」

ふと、顔を書類から上げる。ぶつぶつと、泣きごとのような不平不満のような、良く分からないことを呟く声が聞こえてきた。

「ほう、まさか彼女とも会えるとは」

その姿に、見覚えがあった。眼鏡はかけていないが、原作と同じ道を歩めば我(オレ)の生徒になる少女。長谷川千雨がそこにいた。

「どうした、そこの少女」
「ったく、どうして……ん、私のことか？」
「ああ。どうもおかしなことを言っているのでな。ストレスでもあるのなら、話を聞かんでもないぞ」

確か彼女はこの麻帆良の認識阻害を無効化していたな。それがど

れほどの苦痛なのかは、我（オレ）には理解出来ん。もとよりこちら側の住人なのでな。

それでも、暇つぶしにはいいだろう。

「ぁあ？　なんで良く分からん外人に話さなくにゃいけないんだよ」

「来年よりこの地で教職に就くこととなった。生徒の話を聞くことも教師の務めであろう？　予行演習としてはふさわしいと判断したのだが」

「……よくわからねぇけど、それで気が済むんならいいぜ」

「気が済むのはそちらであろう？」

「は？」

少々ぽかんとしたような表情で千雨は止まる。

「そちらの気が鎮まるように、会話の相手となろうと思ったのだが？」

「そういう事かよ。ん？　来年からってことは、まだここにきて日が浅いのか？」

「そうだな。麻帆良に来たのは昨日だ」

「なら、聞いてくれないか！」

そこからは、千雨による堰を切ったかのような告白が滔々と続いた。それを我（オレ）とリュミスは相槌を打ちながら聴き続ける。

「……だから……なのに、みんなは疑わない。どうしてだよ！　どう考えたっておかしいだろ！？　この間なんか……なんてこともあったのに『麻帆良だから』って言って切り捨てるんだぜ！？」

彼女の話はループしている。否。似たような経験を何度も繰り返

した反動だろう。
　想像以上に、彼女の精神は擦り切れている。異常を正常であると認識させる認識疎外結界空間内で、その効力から外れた千雨は、正常なまま異常を異常であると認識し続けたのだ。そして周囲は、異常を異常だとは思わない。
　この認識のずれが、さらに千雨を擦り切れさせる。このループから脱する方法は、いくつかあるが……

「もういい。大体どうなっているのかは理解できた」
「だから……って。おわ！」

　千雨はびっくりしている。むしろ気づいていなかったのか。リュミスが千雨の横に腰かけ、あやすように頭を撫でていることに。リュミスは子供には甘い。母性本能が強いのだろうか？

「大丈夫よ。貴女の認識は間違っていない。ええと、千雨ちゃんでいいのかな？」
「え、うん。やっぱりおかしいよな！？」
「ええ。貴女の言う事は全部、普通に考えたらおかしいことよ。それは私が保証するわ」

　リュミスがあやす間にも、我（オレ）は解決方法を考える。いくつも方法はあるが、大雑把には三種類しかないのだから。その三種のうち、どれを選択するかは千雨しだいだ。

「世界の真実を知りたいか？」
「は？」
「それを知れば、何故周囲が異常を異常として見ないか。千雨だけが周囲と違うのか。その答えが出る」
「教え「しかし」なんだ？」

しっかりと注意置きをし、真剣さのみで構成された瞳で千雨の瞳を射る。

「それを知れば、今までの『日常』には戻れん。否。今まで『日常』で塗りつぶされていた真実を見続けることとなる。貴様が見ていた異常すら、その『日常』から漏れた一部でしかないかもしれないのに、だ」

「つまり、それを知ればもう後戻りはできない、一方通行の道ってわけか？」

ごくりと喉を鳴らして、千雨が恐る恐る口にする。

「ギリギリ後戻りはできる。が、知った後の選択次第では戻れなくなる。それでも知るか？」

「……もしもここで『知りたくない』って選択をしたら、どうなるんだ？」

「今と同じ日常が続く。日常の隙間から非日常がのぞく『日常』がな」

少しだけ目を伏せるが、すぐに真っ直ぐに我（オレ）の目を見返す。

「教えろ。このまま中途半端な位置にいたくない。どうせ後戻りがまだできるなら、踏み出してみるのもいいんだろ？」

「良く言った」

恐怖により、一歩を踏み出さないものも多い。それは別にかまわん。その一歩によってすべてが終わってしまえば、踏み出さない方が賢明であると言える。むしろ、危険すぎる物に近寄らんのは、生物の持つ本能的な緊急回避だ。

が、未来など誰にも分からん。そしてその本能を乗り越えた先に、知性を持つ人のみが得られる発展がある。
恐れを抱き、なお『進化』を求める者を、我(オレ)は好む。

「では教えよう、世界の真実を」

そこからは、強力な認識疎外を周囲に巡らせたうえで魔法の説明だ。ここで我(オレ)が何をしようと、他者には感付くことはできない。否、世界樹によって麻帆良全域を監視している以上、我(オレ)が認識疎外を使用したことは感付かれたか？

「これが、世界の真実だ。まあ、それほど悲嘆することもない。ガリレオ・ガリレイが地動説を提唱しようとも以前よりの天動説が根強かったように、そうそう認識とは切り替わらんからな」
「……まあ、いい。こうやって目の前で実演されたら、信じるしかないだろ。じゃあ、どうやってここから私は戻れるんだ？」
「では、これより三つの道を示そう。どれを選ぶかは自由だ」

右手の人差し指・中指・薬指の三本立てる。そして左手の人差し指で右手の人差指を折り曲げる。

「A、このまま何事もなかったかのように日常に戻る。他者と自分の認識の違いを知った以上、それほど擦れることもなく生きていける。もちろん周囲との差を認識し続けるが故、再び擦り切れることもあり得る」

次に中指を折り曲げる。

「B、記憶操作を受け、今日の我(オレ)との会話を全て忘れる。ついでに認識疎外を増強する術式を追加しよう。これだと貴様も周囲の『異

常』な人間と一緒になるが、擦れる可能性は非常に低くなる」

最後に薬指を曲げる。

「C、魔法を習う。日常から完全に乖離するが、代わりにどのような異常に巻き込まれようと自力で対処可能になる、かもしれない。これのみ、完全に後戻りのできない道だ」

後半に行くほど、容赦のない選択肢。無論、後半の物ほど受け取らん方がいいが、同時に後半に行くほど安全でもある。

「さあ、どれでも好きなものを選ぶといい。相談は今日だけ受け付けよう。回答はいつでもいいがな。選ばんのなら、自動的にAを選んだこととなるが」

絶句する千雨も、少ししたところで受け入れたのかぽつりと言葉を発する。

「全部を忘れても、世界は変わらないんだよな？」

「当然だ。天動説の時代も、実際は地が動いていたのだからな」

「忘れて生きたら、異常を異常だと思えなくなるんだよな？」

「おそらくな。認識疎外のレジストが出来るため、完全になるかは分からんが」

「魔法を知れば、本当に、絶対に、この日常に戻れなくなるのか？」

「決して戻れない。魔法を知った自分を中心とした新たな日常を構築するしかあるまい」

「あなたは、魔法を知って後悔したり悩んだりしたことって無いのか？」

「無いな。我（オレ）の生まれた村は、魔法使いの村だ。魔法を知り、そして扱う事こそ普通だった」

そのまま俯いた千雨に、声をかける。

「考えろ。納得が出来るまで考えろ。納得せずに道を選べば、後悔が大きくなる。納得すれば、たとえ後悔してもやっていける」

「どういう、ことだよ」

「そのままだ。納得して選んだ道ならば、たとえ間違っていたとしても受け入れられる。が、納得せずに間違えば、それは後悔となる」

そのまま泣きそうな顔で考え始めた千雨に、優しい声をかける。

「もう質問がないのならば、帰るがよい。来年、麻帆良女子中等部に教師として我(オレ)はいる。その時にでも答えを言えばいい。今日中に出るような答えになど、納得できまい」

「う、うん」

涙が流れる寸前の顔を拭い、千雨は立ち上がる。その頭をリュミスは優しく撫で、慈しむ顔をみせる。

「そうだった。私たちの名前、千雨ちゃんには教えてなかったわよね？　私はリュミスベルン・ノースライト。リュミスでいいわ」

「我(オレ)はアルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライト。普段はアルトと呼べ。来年以降、学内で会うのならばノースライト先生だが」

アラン、とは呼ばせん。呼んでいいのは、そう呼ぶのが自然になりすぎた相手だけだ。

そして、公私混同はしないように心掛けるつもりだ。

「リュミスさんと、アルトさん、か。似てない気がするけど、兄弟？」

「義理の、だがな」
「私が姉ね。そうそう、来年から私は女子寮の寮監よ。私の寮に入れば、いつでも会えるわよ」
最後にギュッと千雨を抱きしめ、リュミスは我（オレ）の横に並ぶ。
「では、またいつか会おう」
「ああ、じゃあな」
さて、千雨は一体どのような判断をするのか。まあ、彼女の眼を見れば、どの選択をするのかは大体分かるが。
おそらく――――

第二十六話　兼　生存報告（前書き）

タイトルですが。
とりあえず地震によって私の家族に怪我人はいませんでした。
地震で大学に足止め→睡眠不足→帰宅後すぐにバイト
このコンボのほうがつらかったぜ……

第二十六話　兼　生存報告

麻帆良初来訪から五ヵ月弱。久方ぶりに我(オレ)らは麻帆良を訪れた。
無論理由は書類提出だ。

「ふぉふぉ、確かに受け取ったぞい。今からでもこっちに移り住んでおくかの？」
「私は、そうしたいわ。寮監なんてやったこともないから、仕事を間近で見ておきたいわ」
「我(オレ)は無理だ。先約があるのでな。一月前までには戻るようにしよう」

先約とは、陰陽術を覚えるということだ。概要は覚えたが、術の発動は未だ不安定。あと四半年もあれば人に教えられるくらいにまでは至れると思うが……果たして間に合うか。ダイオラマ魔法球を使えばいくらでも時間は捻出できるが、時間感覚が消え失せるのでやりたくないのだがな……

「それは残念じゃのぅ……ところで、夜の警備や休日の生徒指導もついでにやってもらえるとありがたいんじゃがのぅ」

そう来たか、学園長。だが。それに我(オレ)が答える言葉はほとんどない。
なぜならば、契約をしているのは近衛氏ではあるが、目の前にいる学園長・近右衛門ではなくその義理の息子・詠春だ。ならば何故、その依頼と何ら関係ないことをしなければならないのか。

「夜の警備については了承しよう。しかし、生徒指導に関してはお門違いも大概にすることだ」

「何故かのぅ？　木乃香の警護が依頼ならば、少しで」
「はっ」

その言葉の意味を理解していない、否、うまく裏をかこうとしてこちらにも都合のいいことを言おうとしていることに気が付いていない。その浅慮さを鼻で嗤い飛ばす。
そして、一言で斬って捨てる。

「その程度、麻帆良の一般教職員で十分だ」
「人手不足なんじゃ」

溜息と共に苦言が漏れる。
まあ、『それがどうした』の一言で終わらせらるのだが。

「それがどうした。実質は正規職員ではない我(オレ)に、そのようなことはどうでもいい。そもそも、教職員の数が不足しているようには思えんが？」
「いや、世界樹の効力で、生徒が全体的に強いんじゃよ。普通の職位では太刀打ちできない生徒も多くてのぅ……」

くつくつと喉の奥で笑いをかみ殺す。本当にこの学園長は何を言っているのか。
その程度で何故我(オレ)を頼る。まあ、二度とそのようなことを言えないように釘を刺すのも一つか。

「それは、私たちがいなければ木乃香ちゃんを守れないの？」

リュミスを横目にすれば、こちらを同じように横目で見ており、その目には楽しそうな色が浮かんでいる。どうやらリュミスも、我(オレ)と似たことを考えたようだ。

「む、そういうわけではないのじゃが、念には念を入れると……」
「ほう、我がいなければ、安全でない可能性があるほど危険な場所なのか、麻帆良とは？」
「大変ね。そんな場所だなんて知らなかったわ。詠春に伝えなくちゃね」

リュミスがとどめとなる一言を口にする。それで、学園長は肩を落とし、やれやれと言わんばかりに首を振る。
老人よ。年季の違い、思いしれ。

「すまんかった。ワシの負けじゃよ」

そして、すぐに調子を元に戻す。断られても仕方ないと予め考えていたか、もしくは引き受ければ御の字程度だったか。

「では、今日はここまでじゃ」

その学園長の言葉を受け、我とリュミスはしばし別れることとなる。我は京都へと戻り、リュミスは麻帆良に残る。その後も基本、リュミスは学生寮生活でこちらは職員寮生活。会う事はあまりない。
裏技を使えば、いくらでもどうにでもなるが。

「じゃあね、アルト。私は話を聞かなければならないから残るわ」
「そうだな。我は帰るがその前に――否、運次第であるが故、どうとも言えんな」

半年ほど前に出会った少女、千雨の回答を聞きたいところではあるが、この広い麻帆良では出会えるとも限らん。偶然出会えたのならばそれでいい。その程度で十分か。

「ではな。また来年会おう」
「そうね。また来年」

軽く手を振るリュミスに手を上げて答え、理事長室から退室する。
さて、本当にどうするか。今のうちから麻帆良を廻っておけば来年からの生活に支障は出ないが……しかし……

「う～む」
「うーん」
「む？」
「え？」

ほぼ同時に、異口同音に唸りと疑問が生じた。ふと横を見れば、壁際で何事か悩んでいる少女の姿が。麻帆良に来るたびに、このような悩みを持つ者と会わねばならんのだろうか。
少女は首をかしげる。長い茶髪がさらさらと流れる。

「あれ？　この学校では見かけませんけど、先生ですか？　って、外国人だから英語英語！　え、え～っと……Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅａｔ　ｙｏｕ．」
「案ずるな。日本語ならマスターしている。それと我（オレ）は来年からここで教職に就く者だ」

しかしこの顔、見たことがないな。まあ、現在中学生の人間など、原作には登場すらしないのだろうが。

「あ、そうだったんですか」
「ところで、一体何を悩んでいた？　ああ、話したくなければ話さんでもいい」

偶然とはいえ、同じ瞬間に悩んだ者同士。暇つぶしを兼ねるのにちょうどいい。これも半年前に似たようなことを考えた記憶があるが……どうでもいいな。

「え～っと、そうですね。一応先生ですし、中立の意見も聞きたいですから、聞いてくれますか？」

「我（オレ）は構わん」

「そうですか。実は、進学のことなんですけど……」

進学……ここはエスカレーター方式で高校まで上がれるはずだ。それで進学で悩むとなると、転校するか否か、というところか。

「お爺様は、お母様が通っていた高校に通ってほしいそうなんです。ですが、同じ麻帆良学園内でも学校が変わってしまうんです。みんなはこのまま高校にエスカレーター方式で進むんですけれど……だから、みんなと別れるのが嫌で、でもお爺様の言う、お母様の通っていた高校にも興味があって、どうしようかって悩んでて……」

後半はまとまりが欠けていたが、それでも一生懸命悩んだ果ての揺れなのだろう。だが、そこに答えることはほとんどできない。

「こうすればいいなどと言う事はできん」

「そんな……」

「だが」

言葉を切る。混乱したままでは、必要なことも聞けまい。

「選択の手助けをする程度はできる。そうだな……かつての知り合いに、こんなことを言った奴がいた」

「それは……？」
「『他人に相談できるのは、その答えが既に自分の中にあるから』と。即ち、自分に自信がないだけだ、とな」
おかしなことではない。だが、これは少々必要な言葉が飛んでいる。
「我（オレ）はそうは思わん。相談するのは他にも『自分では答えが分からない場合』や『決定権を放棄した場合』も含まれる」
「そう、ですよね。そんなことないですよね」
「だが、今の貴様の相談は、明らかに『自分の中に』答えがある」
え、と目を丸くする少女。なんだ、気付いてないのか？
「悩みは『どちらにすればいいのか』であろう？　二者間で悩んでいるのであれば答えが分からないわけでも回答を放棄しているわけでもない」
「あ」
「そう。ならば、揺れている選択に、答えが出ているはずだ。ただ、周囲の反応などで価値観が揺らぎ、天秤が揺れ動いているため、答えが出せなくなる」
「じゃあ、結局は決まって無いってことじゃないですか」
「そうでもない」
肩をすくめる。分かりづらかったかもしれんが、ただ天秤は揺れているだけだ。それならば。
「揺れているから判断しづらいだけで、どちらかには傾いているはずだ。それを見極めればいい」
「本校女子高か、聖ウルスラか。どちらかに傾いているはず……」

「他人の言葉に耳を貸すのもいい。が、それを判断の基準にはしないことだ。必ず後悔する」

もしもそれらを判断基準にすると言うならば。それは自己決定ではなく状況に流されただけだ。

自由気ままに生きた我（オレ）は、あまりそのような決断を迫られなかった。それでも、数少ない決断の場では、他者の意見には流されぬようにしてきたつもりだ。

腕時計がちらりと目に入る。その時間を確認し、疑問が生じた。

「さて。今の時刻からして、休み時間だったのだろう？　そろそろ終わるぞ？」

「え、きゃ！」

腕時計を見せると、少女は慌てて走り出した。その方向に三年の教室はないはずなので、教室移動の最中だったか。それでも、教師の端くれとして、忠告だけはする。

「廊下は走るな。他人とぶつかるぞ」

「大丈夫です！」

そのまま風のように駆けていってしまった。あの調子なら、悩みもすぐに解決できるだろう。

さて、そろそろ外に出る……ん、学生証？　この写真は、先程の子のか。学籍番号は『９８ＪＨＡ０３０』。名前は『宮小路瑞穂』か。

渡す相手は三年の先生がいいが……タカミチが妥当か。それ以外の教員都は未だに顔を合わせたことがない。突然話しかけても不審者扱いされるだけだ。

「そこ。何者だ」

このようにな。

背後から響いた不審者を見つけました、と言わんばかりの警戒を滲ませた声。

確かこれを見せればいいんだったな。服の中に入ってしまっていた入場許可証を取り出す。

「不審者ではない。これでいいのだろう?」

「許可証か。失礼した」

「見知らぬ男が女子中内部を歩いていれば、警戒するのは当然だ。こちらも不審者と勘違いされかねん行動を取っていた可能性も否めん」

振り向けば、厳格な雰囲気を醸し出す男性教職員。おや、三年の担当ではないか。名前は確か。

「新田先生、で間違いないか?」

「そうだが、何故私の名を?」

学園広域生活指導員でもある新田教諭。少なくとも受け取った資料中には、特に何も書いてなかった。こうして面と向かっても魔法使いではないことは容易に見て取れる。どころか、裏もしらんだろうな。

「これは失礼。来年度より此処、麻帆良本校女子中等部にて教職に就くこととなった者だ。名をアルトリウス・ノースライトと言う」

「アルトリウス……ああ、そう言えば高畑先生からそのような話を聞いた覚えがありますな」

「高畑先生からか。それは僥倖だ。ああそうだ、先程このようなも

のを拾ったのだが」

そう言って、手の内で無意識のうちに玩んでいた学生証を渡す。

そこに書かれた人を見て、新田は少しだけ眉を跳ね上げた。どうやら知っていたようだな。まあ、大抵の教師は、担当する学年の生徒をある程度知っているのだろうが。

「宮小路のか。確かに預かりました」

「申し訳ない。もし彼女を見つけても、なるべく叱らないようにしていただきたい。我(オレ)が急かせてしまったのでな」

素直に頭を下げる。少しの会話の中で、新田は信用も信頼もできると判断したためだ。

我(オレ)は、格上であろうと認められないのならば、敬う事は決してない。だが、どれほど格下であろうと認めたのならばぞんざいには扱わん。

そして、新田は敬うに値する。

「では、これで失礼する。また不審者として詰問されたくないのでな」

「そうですか。それではまたいつか」

しっかりと会釈をし、別れる。彼と共に生徒を導く、か。

……意外と楽しくなるかもしれんな。

Ｓｉｄｅエヴァンジェリン

あと半年もしないうちに中学生活が終わる。

しかしそれは私以外だ。私はこのラセンからは逃れられない。
麻帆良に捕らわれてから既に十二年。三年で解放すると言ったナギは七年も前に死に。
マスターであるアランは、魔法世界で活躍しているため、念話を届けることすらできない。

「あれ、学生証がない？　どこで落としたかな……」
「宮小路。これだろう」
「あ、新田先生。ありがとうございます」

強すぎる魔力でかけられた登校地獄を解くことは誰にもできず。
このまま私はここで過ごし続けるのだろうか。

「新任になる先生が拾ってくれた。私ではなくその先生に感謝することだ」
「あ、もしかして、あの外人の先生ですか？　名前聞いておけばよかった」

屋上にでも行くか。授業を受ける必要などない。登校さえすればいいのだから。

「確か……アルトリウス先生だ」

……まて。今何と言った!?
いや、アルトリウスの名は、それほど珍しいものではない。

「高畑先生の知り合いらしい。詳しくはそちらに聞くことだ」
「そうなんですか。ありがとうございます」

タカミチの知り合いだと!?

そこまでくれば、単なる偶然なわけはない！

「す、すまない！」

「ど、どうした、マクダウェル。」

新田が少し引いている。だが、それがどうした！

「そのアルトリウスとやら、フルネームはアルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライトではないか！？」

「あ、ＲＡは知らないが、アルトリウス・ノースライトと名乗っていたが」

ふ、ふふふ。ふはっはははははは！

まさか、まさかここでその名を聞くことになろうとは！　いや、何故タカミチを問い詰めようとしなかったのか。タカミチもナギと同じ、紅き翼（アラルブラ）の一員だったのになぁ！

「新任になる、か。来年ここに来るんだな？」

「ああ。だが、卒業するマクダウェルには関係ないだろう」

「いや、そうでもない」

また私は中学一年として麻帆良本校女子中等部に通うだろう。もし解放されたら、一人の女としてアランの下に馳せ参じればいい。

ああ、ここまで昂揚するのは久方ぶりだ！　ふ、ふふふ。

「ふはははは！　ははははごふぁ、ごほ、ごほ」

「ね、ねえエヴァンジェリンさん。大丈夫？」

す、少しむせただけだ。だが、怪訝な視線も何もかも気にならん。

来年が楽しみでしかたない。ふ、ふはははは！

第二十六話　兼　生存報告（後書き）

ウルスラはミッション系お嬢様学校→妹制（スール）があってもいいんじゃね？→お姉さまと呼ばれる人が必要→ブックオフで偶然『おとぼく』小説版発見→『エルダーシスター』宮小路瑞穂→これだ！　うん、考えた俺の脳は馬鹿ですね。瑞穂の性別は女。男の娘じゃないです。

そう言えば、アルトリウスのアーティファクトですが、実は全く考えてません。必要ねーよ、こいつには。

ですが、ある本をに出てきたものを見て「これだ！」と来たものがあります。

＜運命の化身＞。世界の似姿である本をアーティファクトにして、ついでに再演観測を行えるようにすればいいんじゃね？　あれって魔法消去なしでは最強の＜化身（アバター）＞だし、最強のアランに持たせれば凄まじいことになるはずだ。

しかしキャラクターの関係上、そもそも出す必要性がないため、封印。

もしかしたら番外編（Ｆａｔｅ）でちらっと載せるかも。

■知らない人のための補足　『円環少女（サークリットガール）』最終巻のネタばれあり

＜化身＞とは、角川スニーカー文庫より発刊している『円環少女』において、魔法使いが自分の魔法世界の秩序によって記述した『自分自身』。

＜運命の化身＞は『人間を救う』秩序によって『過去の人間を操作する』再演大系の＜化身＞で、『この時間の流れとは別の歴史の“

自分自身〟』を呼びよせる。型月的に書けば、並行世界の自分召喚。さらには『この歴史上にはもういない人物』であり、『別の歴史の流れにおいて本人が絆を結んだ存在』であるならば呼び込むこともできる。

これによって倉本きずなは『神に近き者』グレン・アザレイや『絶望の大神』イリーズ・アリューシャなどを呼び寄せた。

ちなみに、『円環少女』において、二つ名に『神』が入る者は大抵が超高位魔法使いである。今挙げた二人は、相似世界と円環世界の最高位魔道師、だった人物。

26．5話「とある半妖の素行調査・前編」

刹那Ｓｉｄｅ

ここにあの男が来てからもう半年になるが、そう言えば食事の時しか接点がないことに気付いた。こちらの稽古終わりに道場に来る時もあるが、それは接点とは言い難いし。

これではあの男が木乃香お嬢様に危害を加えないのかどうか判断できないではないか。

よって、本日はあの男――アルトリウスの素行を調査することにする。

まだ外も暗い中。私は無理やり目を覚まして奴の部屋に向かう。

携帯を見れば、現在時刻三時五十二分。さすがに早過ぎたか……？　いや、四時過ぎに起きていることが確認されているだけで、もしかしたらそれ以上前に起きているかもしれないのだ。

がんばれ、桜咲刹那。ここで挫けては、お嬢様を守ることなどできないぞ！

認識疎外系の札を張り、奴の部屋に入る。

「……さすがにまだ起きてなかったか」

寝顔を見る限り、起きそうな気配はない。このままこいつを亡き者にすれば……いや、それはまだ早すぎるな。

そのまま五分が過ぎ十分が過ぎ、じれったくなってきたころ。

「ん、ふぁ……」

「っ！」

気を張り詰める。ばれたか？　いや、奴を見る限り、そのような

気配は微塵もない。ただ単に、起床時刻になっただけなのだろう。
時刻確認。四時十二分。よくこの時間に起きれるものだ。

「さて……」

何事もないかのように電気をつけ、浴衣風の寝巻を脱ぐ。ま、まて、女がいるのにって、気付かれていないんだった！
咄嗟に目を逸らす。その前に引きしまったしなやかな肉体が見えてしまった。それが目に焼き付いているのは内緒だ。
ガサガサと紙が擦れるような音がしたので目を戻せば、いつの間にか着替え終わっていた奴が何かを取り出していた。レポート用紙の束に、陰陽術関連の書類だ。
そこからは、ひたすらに何かを綴っていた。横からのぞき見れば、英語とはまた違う言語で何かを書きなぐっていた。時折出てくる数字はまだ理解できるが、それ以外は理解不能だ。
しかし、日本語で書いてほしいものだ。確か日本語は書きも完璧なのだから。

「Ich schreibe dieses in Deutsch. Sie k?nnen es nicht lessen.」
（な、何を言っているんだ？）

突然理解できない言葉を紡ぎ始めたこいつの横顔をまじまじと見てしまう。
まさか、ばれた？　いや、それならば顔を上げる程度のことはする筈だ。ただ何か分からないことがあったから声を出しているだけだ。

「Glaubten Sie, da? ich Sie nicht merkte? Ich merkte, bevor S

ｉｅ ｉｎｓ Ｚｉｍｍｅｒ ｅｉｎｔｒａｔｅｎ． Ｅｓ ｗａｒ ｂｅｄａｕｅｒｌｉｃｈ．」

そう呟いて、再び静かになる。一体なんだったのか。時折『シャイセ』などと呟く以外は、本当に一言も発さずに筆記を続けている。

三十分ほどしたところで、ペンを置く。書きなぐられた紙を見て、それを何度も読み返し、一冊のノートを取り出す。

そちらに書かれているのは英語のようだ。全てアルファベットで書かれているからな。それでも私にはまだ理解できない。ちゅ、中学になれば英語を習うからな。そうすれば分かるさ！

「Ｕｎｄ，ｄｉｅｓｅｓ ｓｃｈｒｉｅｂ ａｂｅｒ ｉｎ Ｃｏｄｅ，ｗａｒ ｈｉｅｒ ｅｎｇｌｉｓｃｈ． Ｓｉｅ ｗｅｒｄｅｎ ｄｉｅｓｅｓ ｎｉｃｈｔ ｖｅｒｓｔｅｈｅｎ．」

また何事かを呟く。独り言ならば、もっと聞こえにくいように言ってほしいものだ。

手早くきれいな字で何かを書き綴ると、全てを片づけて立ち上がる。私の横を通り過ぎ、部屋を出ていってしまう。

追いかけねば。

奴は本山の裏手にいた。林と言える程度には木があるため、閉所での訓練にはいいが、野太刀を扱う私には苦手な場所ではある。

そこで奴は、僅かだが魔法の明かりを灯して、自然体で直立していた。

さて、ここで一体何を……

「え？」

目を疑う。じっと見つめていたはずの奴が、いつの間にかその場からいなくなり、一歩分離れた場所にいたのだから。

瞬動？　それならば音が出るはずだ。ここまで無音でなお速い動きなど私は知らない。

いや、速くない？　目で追おうと思えば追える程度の速さでしかないのだ。それなのに、気が付けば奴は行動を終えて場所を変えている。

何度見ても、その行動は目で追える速さなのに追えない。一体何故……？　暗いからとかそんな理由ではないはずだ。

「あれは、太刀？」

しばらく摩訶不思議な動きを続けていた奴は、魔術なのだろうか、どこからともなく一振りの太刀を取りだした。そしてそれを腰に佩き。

居合を一閃、二閃、三閃、四閃。早朝の静寂を崩さぬように、無言で縦横無尽に太刀を振り抜く。一度振るうたびに太刀は鞘に戻るが、鞘鳴りの音などは一切聞こえない。

その事実に愕然とする。一流の剣士は、鞘走りの際に無駄な音を出さない。それは鞘と刀身が擦れている証拠であり、力が無駄になるからだ。

そして、奴は一切の音を発しない。即ち、鞘と刀身を一切接触させずに、何度も、十何度も、何十度も居合を続けていることになる。それは、超一流などでは言い表せないほど、太刀の扱いを完璧にしていることになる。

一瞬奴がふらりと倒れる。慌てて近寄ろうとした瞬間、その倒れかけた姿勢で踏みとどまった。太刀を斜め上方に突き出して。

いつの間に。直前まで、確かに鞘に納められていたはずだ。まさかあの一瞬で？

「……どれだけ凄まじいのだ、奴は……」

京都神鳴流を修めていると言っていたか。こいつならば、不可能ではないだろう。

見た限り、気を使った形跡はない。なのにこれだ。私では、例え忌み嫌う翼を出して気を全開にしたところで、単なる剣術しか使わない奴に負けてしまう。それが、目に見えてしまう。

そして太刀を消した奴は、ナイフを一振り取り出す。そして。

消えた。そして近くの木の幹に、真横に着地している。そこから再び消え、木の枝を一本揺らして地上に姿を現す。

「あれは……七夜体術か？」

関西呪術協会に属さない退魔家系の一つを思い出す。超人的な体術により、正面から暗殺することで魔と対峙する。そんな明らかに無茶苦茶なことを平然としでかす家系の業。

東に拠点を置くため、直接会ったことなど数えるほどしかないが。その時に見た体術と、非常によく似ている。

むしろ、あんな変態的体術を扱う流派が七夜以外に在ってほしくない。床のみならず、壁や天井すら足場として利用し、立体的な空間移動を行うくらいなら、まだ理解できる。だが、最高位になると壁や天井を当然のように駆けることができるなど、人間を止めているとしか思えない。

「非常識にもほどがあるだろう……最強を自負するだけはある、と言う事か」

獣のように、四肢を存分に使用して移動を行う。先程の摩訶不思議な動きと違い、ひたすらに速い。そして、加速と停止が突然すぎる。この視覚的揺さぶりが、正面からの暗殺を成し遂げる重要なも

のなのだろう。
遠距離から見ていても時折見失いかけるのだから、その唐突さは理解してもらえると思う。
しばらく動きまわったところで、懐から何かを取り出す。どうやらそれは式紙のようで、ぽむ、と軽い音を立てて、瞬く間に奴と同じ姿をとる。
直後、奴の体が裏返り、飛び蹴りを繰り出した。何を言っているのか分からないかもしれないけど、そうとしか言いようがない。一体どんな構造をすればあんな行為が出来ると言うのか。
式紙が落ちてきたところで、ナイフを持つ手を翻し、高速で何度も斬りつける。神鳴流剣術の五月雨斬りと似たような技だが、ナイフと太刀の違いか、攻撃速度は圧倒的にあちらが速い。
式紙は衝撃で飛び、木の幹に叩きつけられる。よほど頑丈なのか手加減したのか、未だに形を保っているのはビックリだ。
その時奴は、ナイフを持つ手を真っ直ぐ頭上に掲げる。

「極死――」

初めて、日本語で話した。そう思った途端、式紙めがけナイフを投擲する。かなり速い。あの速度では、回避は難しいな。弾いても、逸らしきれなければ危険極ま

「――七夜」

ナイフが届いたその時、奴は式紙の頭上にいた。そして、私はその技の恐ろしさを知ってしまった。
投げたナイフの対策をしなければ、心臓を穿たれる。だが、回避したり弾いたりしようとすれば、その隙に首をねじ切られる。相当の腕がなければ、死に方を選ぶだけの理不尽な二択だ。
ぽむ、と軽い音を立てて、式紙が消える。さすがに頸部をねじ切

られれば、耐久限界に到達するか。

「斬岩剣」

気付かぬうちにナイフから小太刀へと得物を変えた奴が、神鳴流剣術を使用した。それは凄まじい鋭利さで、近くにあった木の幹を、半分ほど切り裂いていた。

そこに破壊の痕跡はあまりない。普通にあれほどの斬撃を繰り出せば、幹が抉り取られたように砕け散るはずだ。

それは、攻撃に無駄がない、と言うことだ。

それからは、神鳴流の技を次々と繰り出していた。先程までの技は見ていても分からないことが多かった。だが、私と同じ神鳴流剣術であるならば、評価を下すことができる。

……私などとは比べ物にならないほど、彼の剣術は洗練されていた。見ていてほれぼれする。長ですら、彼ほどの位置には居ないかもしれない。

そして、気が付けば周囲が明るくなり始めていた。

「……Ｅｓ　ｉｓｔ　Ｚｅｉｔ　ｄｅｓ　Ｆｒ?ｈｓｔ?ｃｋｅｓ.」

そう言って、屋敷に戻る。そろそろ七時。ということは、彼は二時間近く武術鍛錬を行っていたことになる。それなのに、奴は息一つ乱してはいない。

そのからくりは理解できる。全ての動きに無駄が全くと言っていいほどないのなら、疲労は最小限に抑え込める。

彼も人外だから、回復が速い。一般人も平坦な道を歩き続けるだけならばあまり疲労しないように、疲労速度より回復速度が速いのならば、一切疲れずに行動することができる。

私では無理だ。息も絶え絶えにはならなくとも、あれだけ動けば

呼吸は乱れてしまう。
その差は、天と地どころか、天上と奈落ほどはある。

彼は途中でどこかによっていたのか、私より後に朝食を食べに来た。その際も私に対して特に何かするわけでもなく言うわけでもないため、気付かれていないようだ。
さすがの彼も、気配を断ったうえでの認識疎外では気付けないみたいだ。

朝食後は、自室で陰陽術の指南書を読み始めた。しかもただ読むのではなく、時折書き写したりそこに何か書き足したりしている。
今度は日本語だ。いや、陰陽術で使うのが漢字である以上、先程の言語で書くのは無理があるのかもしれないが。

（しかし、不気味なほどの集中力だな……そして、考察もすごい）

そこに書かれたことを読めば、彼が何をしているのかはよく分かる。陰陽術で使われる言語。それの意味と、組み合わせによる変化を書き綴っている。
時折陰陽術を使い、納得するかのように頷く。発動前に結果を予測して綴っており、それと等しい結果が得られていることに満足しているのかもしれない。
……もう十時か。さすがに私も暇ではない。これから午前の鍛錬だ。さすがに鍛錬を休むわけにはいかないからな。
願わくは、私がいない間に彼が妙な事をしでかさないことを。

昼食直前。午前の鍛錬を終えて彼の部屋を覗くと、鍛錬前に見た時と変わらない位置で陰陽術の発動とその成果の確認を行っていた。

この男、真面目に何者だ？

26．5話「とある半妖の素行調査・前編」（後書き）

ずっとアルトリウスの視点だから気付きにくいですが、一人きりの時や他人に聞かれたくないことを口走るときにはドイツ語の時があります。そのため、第二者・第三者視点になると意味不明なことを口走っているように見えます。

Q．この裏設定、翻訳サイトがないと書けないという欠陥だらけの設定だが、大丈夫か？

A．大丈夫だ、問題ない。そんなところは基本書かない。

27．75話「とある半妖の素行調査・後編」（前書き）

引き続き刹那視点でお楽しみください。

27．75話「とある半妖の素行調査・後編」

午後になり、彼は再び自室にこもった。昼食前と同様に、陰陽術に関する何事かをし続けている。

はっきり言って、見ていて暇だ。ここまで真面目が過ぎると、監視をしている私が馬鹿らしくなってくる。

「……Ｎｕｒ ｄｉｅｓ ｉｓｔ ｄｏｃｈ ｆａｌｓｃｈ.」

（ん？　何か言っていたか？）

早起きが過ぎたせいで大あくびをした時、何事かを呟いていた。しかしそれ以降何も言わなくなったので、横からのぞき見ることにした。するとそこには、東洋呪術の一つである、丑の刻参りについて書かれていた。

それを彼は、何やら熱心に書き写している。それは早朝に見た英語以外の言語で書かれ、私には文字は理解できない。しかし、絵が描いてあるので、そこからは理解ができそうだ。今描いているのは藁人形か。以前に描いたと思われるものには、京人形やビスクドールのようなものもある。

人形系の魔法・呪術について書いているのだろうか？

「Ｕｒｔｙｐ Ｍａｇｉｅ……」

また何事かつぶやきだす。その顔は真剣で、凄まじい速度でなにかを書き、消しては書きなおし、紙が使えなくなれば丸めて放り投げる。

しばらく狂ったように書き続けていた彼も、やがて何か結論が出たのか、ペンを止める。

そして清書用なのか、別の紙を取り出してペンを走らせる。そこ

にはもはや、狂気はない。

「一体何を理解したのだ……？」

言葉も文字も分からない私には、何をしていたのかさえ理解できないが、この短時間で彼が何かを発見した、と言う事だけは理解できた。

はあ、しかし本当につまらないな。今の時間は、何……時……え？十四時……三十五分？　午後の鍛錬の時間を過ぎている！？

「それでは……御免！」

忍び足で部屋から抜け、瞬動すら用いて駆け抜ける。ある程度融通してもらえるように長に頼んではいるけれど、三十分以上も遅れてはさすがに言い訳も聞かれないかもしれない！

何とか怒られずには済んだが、次はないときつい忠告を貰ってしまった。

さて、もうこれ以上調査をしても無意味かもしれない。

生真面目にもほどがある。それが分かっただけでも十分。

「む……」

今一瞬ではあるが、妙な気配を感じた。殺気や敵意とはまた違う、けれども似たような刺すような気配。

周囲にいる神鳴流の師範や同門が何も感じていないから、半妖で

ある私にしか感じられないほどわずかなものだったか、私にのみ届けられたものだったか……両方か。

誘われているのかもしれない。既に去ろうとも不信に思われない。行くのもありかもしれない。

「……」

可能な限り無音で、道場を後にする。先程感じた気配の位置は、この方向だったはずだ。

このとき私は、少し考えていた。

誰が私に気を送ったのか。結界を破壊せずに潜り込める者など果たしているのか。

もしもいるとしたら……どれだけ高位の存在なのか。私一人で相手をしてもいい存在なのか。

そして。

「遅いぞ」

彼はそこにいた。紅葉舞い散る中、両の目を閉ざして自然に溶け込むように自然体で。

その服は朝着ていた黒のライダースーツのような服だが、ここに長いことといたのか、紅葉が数枚、肩に乗っている。

彼の名はアルトリウス・R・A・ノースライト。私が今日半日、素行調査していた相手。

「朝早くから我(オレ)を見張っていたようだが、もう少し気取られんように心掛けろ」

驚愕する。今の今まで、バレているとは思わなかった。そもそも、そのようなそぶりすらなかった。

「失態を挙げるのならば……我（オレ）の部屋に入る直前で気配遮断したことか。超一流ともなれば、あの位置は既に気配察知の間合いだ」

故に慌てることもなかった。そう言い、閉ざされた目を開いて私を見る。

なるほど。あらかじめ気付いていれば、そのようなそぶりを見せぬように心掛けることもできるか。

「まあ、特に我（オレ）の邪魔をするようなことがなかったので捨て置いたが」

それはつまり。私に見せるための行動である可能性も否めなくなったという事だ。

「……ひとつ聞こう。私に見張られていると知って、普段と違う行動をとるようなことはあったか？」

「疑うか？　が、あれが普段の行動だ。明かりなどは、見やすいように点けてやったが」

つまり彼は、毎日ああしているのか。気が狂っているとしか思えない。

少なくとも私には、真似するなどとは考えたくもない。

「一日中、つまらぬ見張りをさせた、せめてもの償いだ。稽古をつけてやろう」

何かを放られる。慌てて手に取れば、夕凪と同じくらいの長さの竹光だった。彼の腰には、一振りの太刀と二振りの小太刀。どれもがやはり竹光だ。三刀流、ではないな。今朝を見る限り、一刀と二

刀を使い分けると見るべきだ。
一歩、彼が近づく。その歩みには、ブレが全くない。下には枯草があるというのに、音もほとんど立たない。動きに無駄がなさすぎるのだ。
そして、その目はどこを捉えているのか、いまいちつかめない。おそらく、私の一挙手一投足を俯瞰しているのだろう。試しに野太刀サイズの竹光を構えるが、視線が動くことはない。
まずい。ただ見ていただけでも圧倒的だったが、対峙するとさらにレベルの違いを思い知らされる。超一流など、彼はすでに超えている。もはや武神クラスだ。

「真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）、アルトリウス・R・A・ノースライト。貴様も名乗れ」
「烏族の混血（ハーフ）児、桜咲刹那。参る！」

震えを押し殺して叫ぶ。まだ彼は一切の構えをとっていないが、構えなどとられたら一瞬で負ける。無手である以上、こちらよりも間合いははるかに狭いはずだ。ならば、先手必勝しかない！

「うあああぁぁぁぁぁぁ！！」

思い切り振りかぶり、幹竹割りを仕掛ける。この速度なら、一本取るくらい容易い。

「疾さが足りんな」

が、私の攻撃はかすりもしなかった。ほんの半歩左にずれた位置に彼がいたから。早朝に見せていた、摩訶不思議な歩法だ。
駄目だ、全く移動の前兆がつかめなかった。あの時は暗さのせいかと思っていたが、目の前にしても一切分からない。

「言い忘れたが、我（オレ）の武術は柳生新陰流で言うところの『直立たる身の位』に相当する。構えていないが為に有利であるなどと夢想しないことだ」

『直立たる身の位』。たしか、構えをとっているよりも、構えていない方が動きに自由があるため、結果的に構えている時よりも早く動ける。そんな馬鹿げた理論だが……この男ならば、やってのける。根拠はないが、そう確信できてしまう。

だが、それと今の動きに、共通点は存在するのだろうか。

「歩法の一つをとってもそうだ。移動の構え……予備動作か。それをなくすことで速さはそれほどでなくとも早く動ける。故に疾い」

するりと、滑るように踏み込んでくる。そこには、速さはない。だけど、予備動作がないせいで、動き出すまで対応できない。

言われて、ようやく分かった。私たちのような武術を修めた存在は、構えを見て動きを予測し、予備動作を見て無意識レベルで反応する。だが、その予備動作がなければ反応しようがない。結果。

「く、そっ！」

常に彼よりも一歩出遅れてしまう。向こうもこちらの予備動作を見て行動するのだから、予備動作を見てから予備動作なしに動けば十分間に合う。どれだけ先手を打たれようが関係ない。

どれだけ斬りかかろうが、突こうが。予備動作によって攻撃される場所が特定され、そこからずれられるから完全に回避される。場合によっては、零距離まで詰められて腕を抑え込まれる。

私は早くも絶望し始めていた。武器対素手かつ、まだ彼は一度たりと攻撃していないのに、だ。

「っ！」

一度攻撃をやめ、大きく距離をとる。こちら息も絶え絶えだと言うのに、彼は息一つ乱していない。

どこまで規格外なんだ、こいつは！

「はぁっ、はぁっ、はぁ……化け物め」

「隙が――予備動作が多すぎる。虚を突かねばどれだけ速かろうと意味はない。では、攻撃の予備動作が無くなるとどうなるか、構えからの実演をして見せよう」

彼が、初めて武器に手をかける。そして、小太刀の竹光を上段に大きく振りかぶる。

それは、最初に私が斬りかかったときと似た構え。なのに。

「う、ぁ」

威圧感が違いすぎる。いや、彼は凪いだ湖面のように静かで、全く威圧などしていない。なのに、その構えだけが恐ろし威圧感を与える。

聞いたことはある。『完全な構えは、見る者を威圧する』と。これがそうなのか。ただ振りかぶっているだけなのに！？

威圧感だけじゃない。構えをとているはずなのに自然体すぎる。いや、自然的すぎる。そうだ、この威圧感は、まるで、巨大な岩や滝を見たときのような……

「行くぞ」

静かな一言を受けて、我に返る。じっと彼を見つめ、その動きを

余さず視る。予備動作が全くないなどあり得ない。どこかに必ずあるはず――

彼が動く。ゆっくりと、その竹光が私に振り下ろされる。

予備動作は分からなかった。しかし対応しなければ。そう思いこちらも竹光を上げようとするが、動かない。

しまった。人間は、知覚から行動まで、ほんの数瞬だが動けない時間が存在する。予備動作が分からなければ、どれだけ正面から来られても、見えないのと変わりないというのか！

「一本」

「うっ……」

ピタリと、鼻先で竹光が停止していた。私の竹光は、また振り上げる中途にある。

完全敗北だ。私では、彼には勝てない。今のが実戦ならば、正面から不意打ちされて私は死んでいる。先手を打とうにも、半歩ずれられるだけだ。

どうシミュレートしても勝ちのビジョンが出ないのは、初めてだ。

「では最後に、極地の一つを見せてやる。光栄に思え」

無駄のない動きで数歩後退すると、今度は正眼に竹光を構える。今度こそ一挙手一投足を見逃さぬよう見ていると。

「無重剣」

ほんの一呼吸。その一瞬で、彼は宣言のように、まるで重力から解放されたかのような軽やかさと速さを以って、幾度も空を斬った。その位置は、理解できた。もし彼と同じ体格の人間が目の前にいれば、首・両肩・鳩尾・腹で斬られた斬殺死体が転がっているはずだ。

「気付いたかどうかは知らんが……未だ我（オレ）は気や魔力による強化はしていない」

身震いするほど無駄のない、鮮やかな剣捌き。だがそれ以上に、直後の言葉の方に身震いしてしまった。

私は、気による強化をしている。そうでもなければ、彼には勝てないと感じたからだ。なのに、彼は一切の強化なしに、武術のみをもってして私を打倒した。

いや、彼は吸血鬼。それならば……！

「真祖としての異能は、全て魔力あってのものだ。魔力を使用していない以上、使用などできん」

軽薄な笑みと共に紡がれた言葉に、絶望が深まる。彼の言う事が本当ならば、成人男性程度の身体能力で、半妖と当然のように渡り合い、勝利して見えたという事になるからだ。

彼がお嬢様に手を出す出さないはもはや関係ない。護衛をせず手を出すのならば私には止める術はなく、護衛をして手を出さないのならば私以上に任務を全うする。

私の存在意義が、完全になくなった。

「まあ、絶望するな。我（オレ）の武術は五十年かけて習得したものを、六百年かけて昇華したものだ。十三歳（ティーン）にすら満たぬ小娘に打ち破られようものなら、こちらが首をくくらねばならん」

まぁ首をくくっても死ねんだろうが、と冗談めかして言うと、私の手から竹光を奪い、歩み去ってゆく。空を見上げれば、既に夕日は落ちて闇が天を覆い始めている。

私は、どうすれば……

「少しでも腕を上げたくば……この時間はここにいる。いつでも来い」
「！？」
慌てて振り返れば、肩越しにこちらを振り返っていた。そこには先程とは笑みの種類を変えた彼がいた。
それはまるで、『俺を超えられるか？』と問いかけるような表情だった。
「……いいだろう。すぐにでも貴様を超えてみせる。首を洗って待っていろ！」
その私の返答に、今度こそ面白そうに哄笑する。
「くはは、吠えたな。待っているぞ」
そして今度こそ振り返らずに自室へと帰りゆく。
その背は恐ろしく大きく、本当に超えられるかどうか不安にさせる。それでも。
「超えてやる。お嬢様の、このちゃんのためにも……！」
奇跡ではアルトリウスは超えられない。積み上げた時を超えうるのは、それを超える努力と、アルトリウスにはない才能。そして、本当に超えたいと願う真摯な心だ。

27．75話「とある半妖の素行調査・後編」（後書き）

ラストはなんとなく円環少女風にしてみました。

途中のドイツ語ですが、一応こんな感じのことを言っていました。

『ドイツ語で書いているのだ。貴様には読めまい』
『我（オレ）が気付いてないとでも思ったか？　貴様が部屋に入る前から感付いていたわ。残念だったな』
『そしてこれは英語だが、暗号形式だ。貴様では理解できまい』
『……食事の時間だな』

『……やはりこれだけが違うか』
『原型魔法……』

前半ではほとんど皮肉を言っており、後半はいろいろと書いた日本語の（再）翻訳に失敗。結果、これだけの短さに。

第二十七話「教師生活第一日目」

女子中学校には似合わない、大人の男性二人。それがスーツを着て廊下を歩いている。

その大人二人とは我（オレ）とタカミチの二人であり、１－Ａの副担任と担任という立場にある。

つい先ほどまで生徒の名と顔を写真照合で一致させていたのだが。

「なあ、高畑先生」

「何ですか、ノースライト先生」

その１－Ａの教室前で、二人して停止している。少し上を見れば、その理由は明らかになる。黒板消しがドアに挟まっているからだ。

いたずら、なのだろう。

「これはどう反応すればいい。引っかかるべきか？　解除するべきか？」

「う～ん。さすがにこういう事はなかったからなぁ」

仕方あるまい。ドアを開け、黒板消しを落とす。それを空いた手でつかみ、教室内部を見渡す。

数歩先には縄跳びが張っており、黒板消しに気を取られて進めば、引っかかって転びかねない。

その先にはもう罠はなさそうだな。縄跳びトラップをほどいて解除し、黒板消し共々生徒に見えるように持ち上げる。

「この罠を仕掛けたものは？　該当者がいない場合、連帯責任として全員が叱責の対象となるが」

「「「「「この姉妹です！」」」」」

「「ええっ！？」」

当然のようにクラスメートに売られた鳴滝姉妹。致し方あるまい。

さて、どのような罰則を課すか。

「ではその二名。鳴滝風香と鳴滝史伽は……まあ、一度目故許す。二度目はないと思え」

その言葉にほっとする様子もなく、にやりとする二人。我(オレ)が寛容だから大丈夫だと勘違いしているようだな？

甘いな。一度目だから許しただけで、二度目は本当にない。

「次に行っていることが発覚した場合……反省文を四百字詰め原稿用紙一枚だ」

「「え！？」」

「「「「「うわぁ……」」」」」

軽く引く生徒一同。では、絶望を与えよう。

「ん、少なかったか？　では当初の予定通り、今回から一枚だ」

「「ごめんなさい。私たちが悪かったです！」」

こんな馬鹿なやり取りをしている間にタカミチも教室に入り、教卓の位置に着く。

我(オレ)も遊んでいる場合ではないな。タカミチの横に移動する。そこから教室を見渡せば、先程まで確認していた顔が揃っている。

知っている顔は――原作知識を除いて――四人。明日菜・刹那・千雨・キティだ。警護対象の木乃香も確認した。

しかし、本当に全員中学一年か？　小学生や大学生が混じっていると言われても納得するぞ。

「幸先が少し悪かったけど、みんな、入学おめでとう。今年から、何事もなければ三年間、君たちの担任となる――――タカミチ・T・高畑だ。よろしく」

タカミチはチョークを使い、黒板に名前を書く。我(オレ)も倣うか。白のチョークを握り、アルファベットで名前を書く。

さすがにドイツ語ではない。英語書きならまだ読めるかもしれんが、ドイツ語ではさすがにいないだろう。

「同じく、何事もなければ三年間、君らの副担任となる、アルトリウス・R・A・ノースライトだ。よろしく」

「「「「「「よろしくお願いします、高畑先生、アルトリウス先生！「ノースライト先生」」」」」」

「よろ「待て」うん？」

普通に返そうとしたタカミチを制止し、一名を除いてにらみつける。

その一名は長谷川千雨。まあ、呼び方を既に教えていたから間違えることはなかったようだ。

「我(オレ)をアルトリウス先生と呼んだほぼ全員。ファーストネームで呼ぶな。ファミリーネームのノースライトで呼べ。以上。これからよろしく」

それだけ言って、一歩分後ろに下がる。しばらくシンとした空気が漂ったが、すぐににぎやかなものになり始める。

その中で、一人の生徒が立ち上がる。朝倉和美だ。

「高畑先生、ノースライト先生。クラスを代表して質問してもいい

ですか」
「構わないけれど、皆はそれでいいかい？」
全員が頷くのを……否、キティだけがこちらを睨んでいるが、無視だ。頷くのを確認して、タカミチが許可を出す。
「ならいいよ。それで質問は？」
「ええと、まずはお二人の名前……は既に知ってるんで、年齢と担当科目を」
「僕は今年二十五で、担当は英語だよ」
「我（オレ）は（永遠の）二十歳だ。担当は数学だ」
え、意外に若い！　担当逆じゃないの？　など言いつつも、質問は続き。十を超える質問の後、クラス全員が興味津々となった質問が来た。
「では、このクラスで気になる子はいますか」
眼の色が変わる。キティなどは、比喩抜きで眼の色が変わりかねんが。
しかし、気になる、か。このような場合は、知り合い程度の意味で済ませるのが得策か。
「え、えーと……一応後見人として、明日菜君かな」
「知り合いという意味で、神楽坂・近衛・桜咲・長谷川・マクダウェル。要注意人物として、鳴滝姉妹だ」
この解答に。
「高畑先生……って、あんた誰よ！」

「うちは知らへんけどなぁ？」
「そ、それは言っていいのですか？」
「目立たせるなよ……はぁ」
「ふん。何故私の名を先に出さない」
「「目、付けられちゃったね」」

名を言われた全員が、それぞれの反応を返す。
しかしアスナ。先生にその口調は駄目だ。

「後見人は親代わり、という事でしょうけど。ノースライト先生はその五人と知り合いっていうのは？」
「神楽坂とは六年ぶりだったか、覚えていなくとも無理はない。近衛は両親と知り合いでな、その関係でこちらから見知っている。桜咲は、昨年まで世話になった場所が桜咲の近くだった。長谷川は、昨年ここに訪れた際に少々相談に乗った。マクダウェルは、しばらく共に暮らしていた」

ここにきて、クラスが一気にヒートアップする。恋話には敏感だな、女子とは。

「お、お！　同棲ですか！　いつからいつまで！？」
「確か、五……いや、六（世紀）は前か。親を亡くしていたのでな。兄として（一世紀の）半分くらい共に過ごした」
「六年前から、三年一緒に過ごしたと。ふむふむ……って、マクダウェルさんは親がいないんですか！？」

あちゃあ、聞いちゃいけなかったかなぁ。などと呟いているが、少なくともキティにはそのようなことは関係あるまい。
親が死去したことよりも、吸血鬼と化した自らと折り合いをつける方が重要だったからな、当時は。

「気にするな。少なくとも私は気にせん」

しっしっと軽く手を振り、朝倉に答える。原作とどれほど違うかは知らんが、同じであるならば十二年は既にここで過ごしている事になる。気が滅入っても仕方あるまい。

パンパンと手を打ち鳴らしてタカミチが収拾を付ける。

「はい、質問はここまで。まだ気になる人がいたら、直接僕たちのところに来るように」

「そうだな。それと、もし何か相談したいことがある者がいれば、いつでも我(オレ)のところい来るがいい。相談に乗ってやる」

「それじゃ、今日はここまで。明日は――」

タカミチが連絡事項を告げる間、もう一度クラス全体を見渡し、名簿の顔と実際の顔、そして名前を一致させる。

佐々木、釘宮、那波、葉加瀬、絡繰、キティ……相坂、村上、大河内、龍宮、レイニーデイ。以上、三十と一名。

「連絡事項は以上。さようなら」

「「「「「「「「「「さようなら！」」」」」」」」」」

確認終了とほぼ同時に、ＳＨＲが終了する。まあ、今日は入学後最初の顔合わせ。そこまで遅くなることはないのは分かりきっていたが。

各々が誰かと話し始めたりする中、朝倉は自席で手帖に記したことを纏めており、幽霊である相坂は同じく自席から離れようとしない。

そしてキティと長谷川の二名が、我(オレ)の下に来る。

「……さて、我（オレ）の下に来た二名は、何か相談があるとみていいか？
マクダウェルに長谷川」
「……ふんっ」
「まあ、な」

各々がうなずく。しかし、どうするか。長谷川は目立つことを嫌っていた。どのような選択をしたのか不明であるため、キティに聞かせるわけにはいかん。
この場合は……魔法的に隔離するか。

「後でここに来い」

紙を手渡し、キティは絡繰と共に教室から出ていく。裏には地図が描かれているから、ここに行けばいいと。
まあ、いろいろと小細工せずに済んだだけいいか。

「……ここでは話しづらいだろう。生徒指導室で話すことにしよう」
「あ、ああ」
「では高畑先生。先に失礼する」

生徒指導室。名前は悪いが、実際はそんなことはない。個人面談にも利用される部屋だ。
職員室と同じ階にあるため、放課後や早朝に、先生と話し合いがある場合などにも利用されている。

長谷川を連れ、生徒指導室に入る。その後、認識阻害結界や遮音結界、人払いなどをかけて情報漏洩を防ぐ。
なお、隠匿性の高さは超一級だ。行使の瞬間を目撃されない限り、この結界には気づけないだろう。
例外は……人払いが効かない長谷川や神楽坂のような存在だけだ。

「さて、長谷川千雨。最後に会ったのは既に一年も前になるが……答えは出たか？」
「無視するか、忘れるか、学ぶか……ですよね？　あの瞬間も、考え抜いた後でも、答えは変わらなかった」
一呼吸、二呼吸。そして一言告げる。
「魔法を教えて。ただ巻き込まれて、何もできないままなんて、私はごめんだ」
「……それでいいのだな？」
「ああ」
じっと瞳を覗き込む。真祖の異能である魔眼を使うこともなく、ただ見続ける。
長谷川も、目を逸らさない。人は真正面から目を見られることを本能的に嫌う。特に負の感情があればすぐに逸らすし、熱意があるのならば逆に逸らすことはない。
ほんの十秒程度の視線交錯で、その思いが本物であることは理解できた。
「ならば、それでよい。あとは千雨の適性を見るだけだが……どのような魔法を使いたい？」
「どんなって……やっぱり魔法にも種類があるんですか？」
「楽に話せ。既に教師としての時間は終わっている。ここにいるのは、魔法使いの男と魔法使いを目指す女だけだ」
「じゃあ……魔法にも種類があるのか？」
それでいい。我（オレ）は仕事と私事を区別する。仕事中ならば敬語を話さないのは注意せねばならんが、私事中ならば、フランクに接した

方がこちらも楽でいい。

「種類としては、大雑把に三種類だ。西洋魔法、東洋呪術、呪式。他にもルーンやウィッチクラフトなどもあるが、既に遺失した魔法だ」

どちらも、復元しようと試みたことはあるが、ことごとく失敗した。途絶えて久しすぎて、資料すらほとんど残っていないせいだ。

「西洋魔法と東洋呪術と呪式……それぞれどんなのなんだ？」

「そうだな……概略だけだが、それでいいな？」

「ああ」

さて、どこまで伝えるか。熱中し過ぎると、話が長くなる悪癖があるからな。やっぱりある程度と言う事は……

「西洋魔法は、よくイメージされるファンタジーの魔法だ。原理は、精霊との契約に基づいて定められた呪文を唱え、魔力を渡すことで概念を生成する。個々人の適性に応じて属性は変えるべきだが、基本誰にでも扱える。この麻帆良は関東魔法協会といって、西洋魔法使いの巣窟でもある。この地で魔法と言われれば、ほぼ確実に西洋魔法になる」

ある程度の魔力さえあれば、ほとんど誰にでも扱える手軽さが、西洋魔法だ。タカミチのような例外だったり、極端に魔力が少なかったりしなければな。

「東洋呪術は、いわゆる陰陽術だ。本拠地は京都にある関西呪術協会。基本的に真名を紡ぐことで世界から概念を引き出す魔法だ。また、発動媒体として呪符を使用する傾向があるな。現在西洋魔術師

と東洋呪術師は対立関係にあるため、特別な理由がない限りは習うことはお勧めしない」

特別な理由を持つ者の例は、木乃香だな。木乃香は、関西呪術協会の跡取りとして、西洋魔法より前に東洋呪術を学ばねばならんからな。

「呪式は前の二つと違い、エネルギーを一時的に引き出す魔法だ。詠唱はいらないが、その分理論がめんどくさい。利点としては、使用者が極端に少ないため、見切られることがまずない。そして魔法ではあるが、科学方向からアプローチしているため、理詰めで納得できる要素が多々ある」

もとより異世界魔法であるため、使用者の少なさは仕方ない。だが詠唱不要にして見切られにくい利点は、それを補って余りある。

「お勧めは西洋魔法。適性が合うのであれば呪式。東洋呪術はどうしようもない場合のみにしたい、というところだ」

「なるほどな……じゃあ、呪式から試してもいいか、アルトさん？理詰めってなら、私とも相性がよさそうだ」

「ふむ」

なるほど。だがそうなると、法珠が必要になるな。人間の脳では演算領域が狭すぎる。下手に行わせれば、脳死しかねん。そして、教えるための場所だな。ダイオラマ魔法球ならば、様々な時間変速の物を用意してある。その際に肉体時間を外の時間と同調させる必要もあるな。

……しまったな。人外ならが無茶できるが、人を相手にするための準備が足りていない。法珠は今日取りに行く予定で、ダイオラマ魔法球は、同調設定の物も作ってはいるが、今は自室だ。

「だが、あいにく今はそれができん。今夜にでも千雨の部屋に赴くことにしよう。必要な道具を持って、な」
「あ、だけど私は女子寮だぞ？　男であるアルトさんが入るのはちょっと無理があるんじゃないか？」
「くくく、我(オレ)を見くびるな。リュミスもいるが、それ以上の裏技さえ存在する」

なに、女性しか入れないのであれば、女性で入ればいいのだろう？幸いにして我(オレ)は、女性のバリエーションも多い。

「さて、それは今夜のお楽しみだ。卑猥な意味ではないぞ？」
「は、卑猥って……ばっ、馬鹿野郎！　んなこと言うんじゃねぇ！」

最初は意味が分かっていなかった千雨だが、次第に理解したのか、どんどん顔を赤くしていき、仕舞いには切れた。
くはは、まだ中学だというのに、耳年増だな。分からぬままでもよかったのだがな。

「案ずるな。どこぞのニュースではないが、女子中学生に欲情するほど狂っているつもりはない」
「当然だー！」

真っ赤な顔のまま叫び、俯いてぶつぶつ文句を言う千雨。

「さて、キティを待たせるわけにもいかんのでな。また今夜会おう。九時前には着く予定だ」
「ああわかったよ。で、キティ？　マクダウェルのことか？」

知らんのは当然だが、口を滑らせたのはまずかったか？　まあいいか。どうせ私事ならばキティと呼ぶつもりだ、我（オレ）は。

「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。キティのフルネームだ」

「そんでキティか。子猫のことだったな、確か。んじゃ、アルトさんのＲＡはどういう意味だ？」

あ、そんなことか？　当時は背負うだなんだ言っていたが。今ではそこまで意識するものではないな。ただ、忘れんようにする程度の意味合いしかない。

そもそも、イニシャル読みがこの百年の普通だったからな。フルネームなど、言う方が稀だ。

「レナ・アリステル」

「は？　妙に女性っぽいミドルネームだな」

「女性っぽいではなく、女性の名前だ。正確には、死した姉と婚約者のな――ああ、気にするな。既に遠い昔のことだ」

聞いちゃいけないことだったかと顔を少し青くした千雨を、落ちつけるように言う。だが、それが千雨の心に火を付けた。

「遠い昔って……せいぜい十年だろ！？　んなこと言うんじゃねえよ！」

「七百年前だが？」

ぴしっ、と千雨が石化した。永久石化魔法も＜石骸触腫掌（サルマク）＞も使用した覚えはないのだが、おかしいな？

ファンタジーの不老不死の魔法使いくらいイメージしていると思ったが、そうでもなかったようだな。

「七百って……おかしすぎるだろ、さすがに！」
「キティは六百くらいだ。教室で言っただろう？　五・六ほど前に出会ったと」
「あ、ああ。確かに言ったけどなぁ」
「あれは、六『年』前ではなく、六『世紀』前だ。半分も、六年の半分ではなく一世紀の半分だ」

完全に撃沈した千雨の頭を撫でつつ思う。
男っぽいのにどこか乙女なのは、ディーやアリスでも似たようなところがあったが、魔法に慣れているか慣れていないかで違いは出るものだな、と。

第二十八話「秘密の特訓。言葉だけ聞くとエロい」

千雨の選択を聞き、別れてから。キティの元に向かう、はずだった。

だが、今夜にも千雨に咒式を教えるかもしれん以上、法珠を受け取らねばならん。

現在地は麻帆良大学。超や葉加瀬が所属する――絡繰茶々丸が作られた研究室に制作依頼を出した。故に、そこまで取りに行かねばならん。

コンコンコンとドアをノックする。豆知識だが、ノック二回はトイレの確認。入室時には三回ノックするのが正式らしい。

嘘かどうかは知らん。

「アルトリウスだ」

「おお、入てもいいヨ」

どこか訛っている、と言うより無理やり訛らせたような声が室内から響く。

「失礼する」

「いらっしゃいネ、ノースライト先生……いや、アルトさン？」

真意の掴み辛い笑みを浮かべた超鈴音が、部屋の中で待機していた。その手に、球状の機械を乗せて。

法珠、どうやら完成していたようだな。

「それを取りに来たが、完成したのか？」

「それはもちろんネ。技術的には茶々丸のＡＩのほうが難しかたガ、なるべく小さくまとめるという点では、きつかたネ」

超から法珠を受け取り右手に持つ。呪弾はいらず刀身代わりの杖である指輪は既に左の指に装着済み。では、簡易呪式から。

可能な限り脳の演算領域を使わず、ある呪式をイメージして法珠に魔力を通す。すると、今まで作ったどの法珠よりもスムーズに呪式が構築される。

そして左掌に、黄色針状結晶が生成される。ＴＮＴとも省略されるトリニトロトルエンを生成する＜爆炸吼（アイニ）＞の発動だ。

「完璧だ。さすがは自称未来から来た火星人。現代技術ではできない域に到達している」

技術レベルの差から、さすがにキティの＜内なるナリシア＞には敵わないだろうが、それでも驚愕できる域の代物だ、これは。

「そうカ。それでは一つ交渉したいが、いいカナ」

「ほう、言ってみよ。物によっては是と言おう」

さて、超は何を望むか。実際に未来人だからな、こいつは。我（オレ）も知らない何かを楯にゆするか、それとも……

「三年後の世界樹の大発光。その時に私が行う行為を黙認することネ」

「ふむ……何をするかは知らんが、我（オレ）に直接的な被害が及ばぬうちは、我個人は動かないと誓おう」

この程度なら容易い。

「言質をとたネ」

「構わん。なんなら録音機材でも用意しろ」

「既に記録済みネ」

少々黒い笑みを浮かべ、胸ポケットに入れていた、小型のボイスレコーダーを取り出して見せる超。その程度は予め行っておくか。だがまあ、忘れぬことだ。

今回の契約は、かなり穴だらけであることを。

「では、これで失礼する。待たせている奴がいるのでな」

「エヴァンジェリンかナ？」

「そうだ」

何かあったのだろうか。ちょうどいいと言わんばかりに笑顔になる。

先程までと違い、黒さはないが。

「なら茶々丸に伝えてほしいネ。メンテを今週末に行うとナ」

「絡繰にか？　了承した」

研究室を出る。ちょうどその時。

「あ、ノースライト先生。こんにちは」

「葉加瀬か。こんにちは」

葉加瀬と出会った。そういえば研究室内には葉加瀬の私物があったような気もしたが、彼女はここに住んでいるのか？

そうだとしても、こちらからは特に何も言えないが。そのことを言うのは、この研究室のトップか寮監だ。……寮に入っていれば、だが。

「寮に入っていなさそうだな。葉加瀬と超は」

何故か、そんな気がした。やはりあれだ。マッドサイエンティストは、薄暗い研究室が似合う。
それを言ったら、我(オレ)もだが。

そして、キティから手渡された地図を頼りに歩くと、指定された場所が見えた。見間違えようのない、ログハウスだ。
おそらく、真祖の吸血鬼が生徒と同じ寮に入るのを、正義狂いの魔法先生に止められたのだろう。もしくは、そういった反発が起こる前に学園長に隔離されたか。自発的に生徒とは係わり合いたくないと考えた説もあるか。
とりあえず、スリーノック。

「すまない。アルトリウス・ノースライトだ。マクダウェルはいるか？」

返事がない。ただのログハウスのようだ。

「留守か？　時間を開けすぎたせいで泣きながら布団にもぐっているか……いや、ごめんなさいと連呼しながら人形遊びをしている可能性も……」
「んな訳あるかぁ！」

キティが、怒りながら玄関を開け放つ。聞こえているのであれば、さっさと出てくればいいものを。

「インターホンを鳴らせ！　そこまで文明から離れていたわけではないだろう！？」

「知っているが、まさか真祖の吸血鬼がノックの音程度が聞こえないわけがないと思ってな」
「うぐっ」

キティの心にクリティカルヒット。ふらふらと後退するキティを見て、追いかけるように部屋に入り込む。

「先程ぶりです、ノースライト先生」
「ああ、絡繰。超からの伝言だ。メンテナンスを今週末に行うそうだ」
「今週末ですね。――記録完了。伝言ありがとうございます」

関節部などのメカメカしさと人格の欠如を除けば、絡繰は人間に限りなく近い。呪式技術には擬人（クンスツ）も存在するが、あれはＡＩを法珠頼りにする程度で、基本部分は現状の技術による製作に任せるしかない。

人造筋肉という一点で言えば＜蚰蟹殻鎧（ドラメルク）＞もいいが、工学的に作ることを考慮すれば＜剛導電旺脊喚法（ビュー・レト）＞も捨てがたい。今度仮想空間ではなく現実空間で構成することで、技術支援としてみるか……？

しかし、そうなるとエネルギー問題が発生するな。あれらは生体内で使用されることを目的とされているため、ＡＴＰをエネルギー源とする。魔力や電気エネルギーでは簡易的には動かせても完全に動かすには至らない。＜鋼剛鬼力脊法（バー・エルク）＞のＡＴＰ生成回路を組み込んでみるのも一興か。

だが、そうすると全身に血管を張り巡らせる必要があるな。ＡＴＰを全筋肉に行き渡らせねばならんからな。現状の技術でも十分それは賄えるとして、発生する熱は……既に機械が発している熱を放熱できている時点で問題ないか」

「言語検索――ドイツ語と判明。呟いていた言葉を翻訳します」
「ああ、気にするな茶々丸。そいつは稀に思考を垂れ流す悪癖があ

る」
「む、声に出していたか」
いかんな。だが、ちょうどいいと言えばいいのか？　我（オレ）が直接伝えんでも、絡繰経由で超に伝えられる。
「我（オレ）は何時から呟いていた？」
「翻訳開始――終了。聞き取れたのは『人造筋肉』というフレーズが最初です」
ほぼ魔改造計画の始まりからか。ならば。
「今我（オレ）が呟いていたことを、超に余さず伝えろ。おそらく超ならば理解できるはずだ」
「了解しました、ノースライト先生」
丁寧にお辞儀をする絡繰。その動きはどこかぎこちなく、まだまだ改良の余地あり、といったところか。
「おいアラン。そんなことより聞きたいことがある」
「何だ、キティ」
ふと振り向いた瞬間、キティは少し助走をつけ。
「何時まで私をほっとく気だ貴様は！」
顔面めがけてのドロップキックを放つ。しかし、その程度では不意は突けん。
冷静に膝を抜き、衝突コースから軸をずらす。そして足首でキティをキャッチし、そのまま逆さ吊りの状況に持っていく。

「危ないな、キティ」
「危ないも何もあるかぁ！　十三年だぞ、十三年！　何故貴様は助けに来なかった！」
「……何の話だ？」

ついぽかんとしてしまった。我（オレ）はキティが麻帆良にいるとは思ってもいなかったのだ。助けにくるも何もない気がするのだが。

「はぁ！？　ナギが『自分かアランが三年後にどうにかするはずだ』と言っていたぞ！」
「ふむ、初耳だ。そもそも大戦以降、ナギと会うどころか話をしたことすらないな」

どうせナギのことだ。どうでもよくなって忘れていたのだろう。
その答えを聞き、キティは間の抜けた顔をしてから顔を真っ赤にして怒りだす。

「くそ、あの言葉は嘘だったというのか、ナギぃ！　どうにか見つけ出してやるといｔ、へぶ！」
「五月蠅い。落とすぞ」

手を離し、キティを顔面から床に落とす。行動してから許可を取る、ウェスペルタティア王族流の実践だ。

「ノースライト先生。落としてから言うのでは遅いかと……」
「大丈夫だ、ナギの嫁の一族に伝わる伝統だ。それと、学外ではアルトリウスかアルトで十分だ」

落ちたキティはプルプルと震えている。しょうがない、子猫（キティ）を持

つように首根っこをつかみ、近くにあったソファに座らせるか。

「ところでキティ。何故ここに閉じ込められた。話を聞く限りナギに閉じ込められたようだが、あいつは仲間が真祖であろうと何ら気にしなかった真性の馬鹿だぞ。真祖だからという理由で閉じ込めるとは思えん」

そしてラカンもだ。あの二人は、紅き翼（アラルブラ）の二大馬鹿だ。

真祖であると知ってから、むしろ『強えんだろ、一戦やろうぜ！』のようなノリの方が大きくなったからな。

「う、そ、それは……貴様が知らんでもいい、アラン！」

「……事の顛末は？」

仕方ないので、絡繰に質問する。しかし、絡繰は首を左右に振る。

「すみません。私は当時まだ制作されていなかったので、マスターが麻帆良に閉じ込められた理由は不明です」

「何故茶々丸に聞く！　ええい、巻いてやる、巻いてやるぞ、このボケロボが！」

きりきりと派手に音を立てながら、絡繰のネジを巻くキティ。しかし、ソファを使いようやく届くようでは、巻いているというよりは巻かせてもらっているようにも見える。

その微笑ましい光景を眺めながら、とりあえずキティの乱れたスカートを直してやった。逆さ吊りになってから今まで、ずっとパンチラし続けていたからな。

だがさすがに、その体躯でその下着は、アンバランスが過ぎるぞ。

ネジを巻かれて絡繰がダウンしてから、しばらくキティはお話を続けたわ。ほとんどが愚痴だったけど。

最初は女子中学での生活も楽しかったけれど、三年が過ぎてループする時に周囲が記憶を失い、自分だけが解き放たれないことに愕然とし。二度目もダメだった時には失望し、三度目で完全に諦めて。

途中から酒精の入ったキティは、自分でも何を言っているのか分からなくなっていたのかもしれないわね。泣きながら弱音を吐くなんて、再会した時の様子からは分からなかったし。

とりあえず、男性（アルトリウス）の姿ではなんだから、女性（レナ）の姿で抱きしめて髪を撫でながら、心を癒してあげた。いいえ。この程度で癒えるほど、心は簡単なものではないわね。

それでも、今まで背負い続けていた物は、少しくらい軽くなったと信じたいわ。

＜で、今いいかしら、リュミス＞

＜その声、レナね。どうしたの？＞

念話の声色も、変化中の人物の声に近くなるように変えている。すぐに分かるのは、百年近くパートナーを組んでいた影響でしょうね。

＜今から女子寮に入りたいのよ。千雨に魔法を教えるって言ったから＞

＜あ、千雨ちゃんに？　女子寮の門限を過ぎているから、私の部屋へ直接跳んでくれるかしら＞

念話の回路を通して、女子寮の大まかな地図が送られてくる。そ

の位置を確認して、闇のゲートを生成する。
ゲートをくぐり、すぐにリュミスの部屋の中に着く。

「ごめんなさいね。突然の訪問で」
「構わないわよ。ほら、千雨ちゃんの所に行ってあげなさい」

久しぶりの再会も、会話はあまり多くない。まあ私たちにすれば、半年程度はあまり長い時間ではないからね。
手渡された詳細な地図を見ると、千雨は一人部屋。ちょうどいいわね。二人だったらどこかに連れ出すことも考慮に入れなければいけなかったけれど、一人部屋だったら何をしてもばれることはないわ。

「ありがと」
「いいのよ。姉妹でしょう?」

義理の、それも姉弟だけれどね。
そう笑って返してから、寮監室を出て千雨の部屋に向かう。そしてほんの数分もしないうちに千雨の部屋に着く。
途中ですれ違った寮生には、私の姿はうまく認識できないはず。軽い認識阻害をかけているから。

「ごめんなさい。千雨はいるかしら?」
「いるが……誰だ? リュミスさんとは呼び方が違うし……」

そういえば、私がアルトリウスと同一人物だってことは、ふつうは気付かないというより、分かりようがなかったのよね。
最近変身を多用することがなかったし、その時はその人物として周囲と関わっているから、忘れてたわ。

「アルトからの伝言があるわ。そう言えばいいかしら」
「アルトさんからの？　入りな」

ガチャリと鍵が開き、ドアが開く。部屋の中には様々なものがあり、よく見れば衣装のようなものもある。ちうたんは既に活動していたかしら？　基本的に、そのあたりは調べてないのよね。
私が部屋に入るや、千雨はすぐに鍵をかける。誰かに聞かれるとまずいって言う事は、頭にあるようね。偉いわ。

「で、あんたは誰だ？　アルトさんとの関係は？」
「そうね。それじゃあ……」

手に持つバッグから、大きめの布を取り出す。それを裏表見せて、何の仕掛けもないことを示す。ここからが本番よ。その布を翻して千雨の視界を遮った瞬間、呪式によって変身。アルトリウスの姿になる。

「こういうことだ。言ったであろう、裏技があるとな」
「女性に変装とかするなよ……変態め」
「今のは変装ではなく呪式による変身だ。そして、先程の女は死別した姉（レナ）だ」

くるくると布をまとめ、カバンに放り込みながら告げる。さて、道具の類はどこに入れたんだったか……スノーグローブサイズのダイオラマ魔法球に新型法珠搭載の魔杖剣に練習用の杖、念のための仮契約（パクティオー）用の儀式陣と宝石に……適性魔法属性を知るための魔法道具（マジックアイテム）、と。

全てカバンから取り出して再び収納し、顔を上げると、カバンを様々な角度から見る千雨がいた。このカバン、そこまで大したことがあるわけではない。ただ時間魔法を応用して空間を操り、中の体

積を嵩増(かさま)ししただけだ。メアリー・ポピンズの真似だ。

「まさか、入るはずのないものが入ってるそれも……」
「それも魔法だ」
「何でもありかよ……」
「そうでもない」

間違った知識が植え付けられる前に、訂正しておく。それも師として重要な役割だ。

「魔法使いにも適性はある。火に特化すれば水が扱いにくいとかな。そしてこれは、時間操作を根源とするものだ。レアにもほどがあるぞ」
「そうなのかよ。そんな手軽に当たり前のように使われてちゃ、私にすれば誰にでも使えるようにしか見えないぞ」
「仮にも七百歳だ。研鑽レベルが違う」

前世からも含めれば、既に三度死に損なっている。その結果がこれならば、死ぬのも悪くないかもしれん。
だからといって、死ぬことはお勧めしないがな。

「さて。まずはこれに触れろ。時間が惜しいのでな」

机に置いたダイオラマ魔法球を指す。首をかしげつつも千雨が触れたところで我(オレ)も触れ、強制的に魔法球を起動する。
この魔法球は、表面に魔法陣が刻まれているため、触れながら起動することで中に入ることができる。中にも水晶球があり、それに触れながら魔法陣を起動すれば、外に出ることができる。
ちなみに、速度差は３６０倍。外の一日は中の一年で、某時と精神の間と同じだ。

「おい、ここはどこだよ！」

千雨が咆えるが、無視して周囲を見る。一辺五メートルの正方形の真っ白な部屋の中央に我(オレ)らはいる。一月ほど、中の時間にすれば三十年は放置していたが、特に変動は起きていないようだな。

「ついて来い」

千雨を引き連れて階段を上ると、この家の玄関部分に到着する。ここは四方に扉が存在し、廊下ほ通れば寝室とダイニングキッチンとリビング、そして外にそれぞれつながっている。

リ
―
台―玄―寝
外

絵にすればこのような感じだ。

外に出れば、そこはとんでもないところであることを認識させられる。

「どこだよここは……」

「先程のダイオラマ魔法球――スノーグローブの中だ。圧縮された空間でな、時間の流れも外とは少々違う」

この家は、厚さ三十メートル、半径百メートルの水晶の板の上に建っている。呪式的に土の珪酸を集め、純粋な水晶結晶にしたものだ。

そしてそのさらに向こうを見れば、このダイオラマ魔法球のここ

以外を覆い尽くしている木々が見える。否、作ったのがもう十年以上前であるため、内部時間は軽く四千年以上経過している。結果、林程度だった木々も、既に樹海と言い換えた方がいいほどに繁殖している。

呪式と圧縮によって超強化された水晶の板に見た目の変化はないが、端の方ではどうかは分からんな。あとでチェックしなければ。

ちなみにこの大地は、崩落したオスティアの浮遊島のいくつかを盗んで作った。

「ここならば、どれほど魔法を扱おうが、誰にも文句は言われない」

「確かに文句は言われねえかもしれないがな。どうやって出るんだよ、ここからは」

「最初に来た部屋の水晶球に触れれば、外に帰れる。では、適性を見るとしよう」

ここにいれば、時間はほぼ無限にあるのだからな。ゆっくりと行おう。

第二十八話「秘密の特訓。言葉だけ聞くとエロい」（後書き）

おかしいな。今回で千雨の適性が判明するはずだったのに……

第二十九話「意外な適性とアーティファクト」（前書き）

恐ろしく難産でしたが、どうにか投稿できました。
ちょこちょこ書き続けたら、気がつけば７０００文字オーバー。ありえん。

第二十九話「意外な適性とアーティファクト」

適性検査だが、まずは千雨の欲しがっている呪式から始めるか。

やり方は簡単だ。我（オレ）のサポートの下、第一階位の呪式を発動すればいい。呪式の発動までの大雑把な流れは、使用したい呪式を選択し、呪印に合わせて思考追跡し、仮想力場で呪式を構築し、位相空間から呪式を転送する。

この構築が出来るか否かが、適性の分かれ目だ。適性がない者は、この構築がどうあがいてもできない。タカミチに西洋魔法の詠唱ができないように。

故に、我（オレ）が呪式を選択し、思考追跡し、ほぼ全てを構築し、位相空間から引き出してやる。僅かな構築をさせるだけで、適性判定が出来るのだ。

「まずは、呪式を扱う適性があるかを見るが――そのための下準備だ」

だがその前に、呪式理論を教えなければなるまい。それを知らなければ、どれだけ呪式を扱う適性があろうと、使用することは不可能。

そのために、態々ホワイトボードまで入れてきたのだか……ら？

カバンの中をよく見る。だがない。壊れてはならないものを取り出してひっくり返すが、ペンは出てくるがホワイトボードは出てこない。入れ忘れたか？

仕方ない。紅き翼（アラルブラ）に講釈する際に使用した方法でするか。

呪光（勝手に命名）で、宙に必要事項を書き出す。主に作用量子（プランク）定数とその詳細だが。

「その文字の書き方はもういいとして、数字の意味は何だ？」

「これは、呪式使用に必須となる数値だ。意味を完全に理解する必要などない。とりあえずこういうものだと覚えていればな」

ここから、約二時間にわたって講義は続いた。

千雨は、意外と聡明だ。理解はほとんどできていないかもしれないが、感覚で形を成すことが出来ている。それはナギのような規格外じみた勘ではなく、一種の芸術的センスだ。頭の回転が速いと言い換えてもいい。

もしかすれば、多重並行思考（マルチタスク）も使えるかもしれんな。それならば、呪式士に成れずとも、魔法使いでもかなり上位に位置することが可能だ。無詠唱の多重魔法が飛んでくるのだからな。

そこまで行くのならば、場合によっては二重詠唱（デュアルスペリング）も覚えさせるか……？　人間の脳では思考領域が狭いため、純粋演算には向かない。詠唱と言う手段を用いて脳内手順を軽減する……逆か。詠唱を省くことで脳内手順を煩雑化させているのか。

否。人間の体では、二重詠唱（デュアルスペリング）は難しすぎる。呪式技術を持って無理矢理可能にさせる……には、呪式を覚えなければならない。

結局、呪式士になってから考えるのが無難か。

「理解する必要はないが、知っておかねばならんことは以上だな」

「……なるほどな。こんなことを日常的にやってれば、数学が得意にもなるか。演算ばっかだもんな」

「だが、その中でも扱う事が多いのは化学系だ」

適性は化学練成系と電磁光学系だが、手広く万能にしているため、そこまで適性がどうのと考えることなど、ここ二百年はない。

千雨が大あくびをする。そうか、ここに来たのが八時五十三分ごろ。講義の時間にに休憩と前後時間を含めれば三時間ほどか。ならば、千雨の体感時間は既に深夜零時。眠くなってもおかしくはない。

「ふぁ、あ。そういやあれからどんぐらい経ったか？　いくら時間の流れが違うったって、そろそろ戻らねぇと明日が……」

「ここにきてから約三時間だ。外で言うと……三十秒だ」

「ぅあ？　三時間は六十分が三回で……百五十分。六十倍で、ええと……」

相当寝ぼけてきているのか、二桁の掛け算を間違えている。今日の講義の内容も、実はあまり頭に入っていないかもしれんな、これでは。

「三時間は秒にして一万八百。よって、外との速度差は３６０倍だ」

「あ～……つまりどういう事だ？」

完全に頭が寝ているな。もう一度明日講義し直せねば。

「外の一時間後にここを出たいのであれば、ここで二週間ほど過ごせばいいという事だ」

「なるほど……ゆっくり眠れるな」

……果たして頭が寝ているな。頭が起きている千雨ならば、二週間という期間に仰天してつっこむはずだ。

これ以上は無意味だな。寝かせるか。

「寝室は分かるな？　寝ておけ。また明日起こしに来よう」

「うぃ～っす。おやすみ～」

だが、我（オレ）は眠る必要はない。真祖の吸血鬼だから、眠る必要がないという意味ではない。咒式を極めれば、三日三晩不眠不休で戦闘などといった馬鹿げたことも不可能ではなくなるのだ。ただ講義するだけならば、五日は休みを取る必要はない。

また、わざわざ千雨の覚醒をここで待つ必要もない。一度ダイオラマ魔法球から出て、一分待てばいい。そうすれば中では六時間経過し、千雨の体内時計では朝になっている。

一分後。再びダイオラマ魔法球に入り、内部時間を確認する。

時刻は午前八時十五分。ここを出る時の内部時間が午前二時五分だったため、ほぼ六時間経過していることとなる。1．7秒ほど入るのが遅れたが、進入時のタイムラグを考えれば妥当か。

が、少々忘れていたことがあったのを今思い出した。

「しまったな……千雨はどの部屋で寝ているのだ」

ここの寝室は、六畳一間が計二十部屋ある。部屋が一つだけでは、万一の時にどうしようもなくなることを考慮した結果だが、少々裏目に出たか？

一つ一つ調べるのも手間だ。ダイオラマ魔法球の管理者権限を利用するか。使い方によってはプライバシーの侵害につながるが、今回はそこまではしない。

＜Ｖｅｒｗａｌｔｕｎｇｓｂｅａｍｔｅｎｆｏｒｍ　ｅｒｗａｃｈｔ．　Ｐｒ？ｓｅｎｔｉｅｒｅｎ　Ｓｉｅ　ｄｉｅ　Ｌａｇｅｎｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎｅｎ　ｄｅｓ　Ｍｅｎｓｃｈｅｎ　ｉｎ　ｄｉｅｓｅｍ　Ｈａｕｓ＞（管理者モード起動。この家にいる人間の位置情報を提示せよ）

＜Ｅｓ　ｇｉｂｔ　ｅｉｎｅ　Ｆｒａｕ　ｉｍ　ｓｉｅｂｔｅｎ　Ｓｃｈｌａｆｚｉｍｍｅｒ＞（七番寝室に女性が一人います）

七番寝室か。追加でこの家の見取り図を脳内展開する。あまり寝るために使っていないが故、寝室の配置がよく分かっていないためだ。

なるほど……そこか。

＜Ｖｅｒｗａｌｔｕｎｇｓｂｅａｍｔｅｎｆｏｒｍ，ｓｃｈｌａｆｅｎｄ＞（管理者モード終了）

＜Ｄａｎｋ＞（ありがとうございます）

管理者権限を終了し、歩いて七番寝室へ向かう。ダイオラマ魔法球の設定をいじり、直通の転移門を開いてもいいが、元よりかなり内部に魔法及び機械技術を詰め込んでいるがため、いちいち設定し直すのも面倒だ。下手な設定で、バグが生じるのも困る。

しばらく歩けば、寝室になどすぐ到着するしな。

「千雨。起きているか？」

ドアをノックし、声をかける。我（オレ）の所有物とはいえ、今は女性の部屋だ。マナーを忘れるような真似はせん。

『う～ん……って、おい、ここはどこだ！？』

「起きたようだな。ここはダイオラマ魔法球――あのスノーグローブの中で、その寝室の一つに貴様はいる」

『え……ああ、そうだったな。んじゃ、とっとと着替えて学校に行くか』

やはり、先程まで――昨晩は、頭は寝ていたようだな。起きていれば、そんなことを言う必要はないのだから。

「精々六時間で何を言う。外では一分しか経ってないぞ」
『はぁ!?　って、そうか。外と中じゃ、時間の流れが違うとか言ってたか』
「某時と精神の間とほぼ同じ、３６０倍速だ」
『外の一日が、中の一年ってか？　全く……ふざけてるよな、魔法ってのは』

通常、ここまで時間差をつけたダイオラマ魔法球を作る者など存在しない。管理が大変になるが故だ。しかし我(オレ)は、咒式やら魔法やら機械技術やらをフルに利用して、オートメンテナンスシステムを搭載した。

しかしこれも、時差をつけられない一因ではある。そもそも内部世界の運営に所有者の魔力を使用するダイオラマ魔法球にオートメンテナンスシステムを搭載すれば、維持だけで多大な魔力を持っていかれる。具体的には内部の加速率分だけ消費量が増す。我(オレ)の膨大な魔力を以ってしても、３６０倍速は少々辛い。

ならばどうすればいいか。答えは、『足りないのならば、別の場所から持ってこい』だ。ダイオラマ魔法球内部に世界樹の苗木を植林し、その魔力を以ってして全機能を維持している。その数、六本。神秘的効率を高めるため、ダイオラマ魔法球の縁付近に六芒星になるように植えた。

結果、ダイオラマ魔法球内部には十全以上の魔力が蓄積している。内部時間とリンクしている世界樹ならば、外からの干渉と違い、消費量増加もないのでな。

……そういえば、余剰魔力が多すぎる気がするな。明日にでも八重の防性結界と四重の攻性結界を外周に張り巡らせてみるか。

「お待たせ」
「そうでもない」

ちょうど千雨も出てきた。思考を切り替える。
さて、今日の講義メニューは……と。その前に渡さねばならん物があったな。

「千雨、受け取れ」

ポケットからそれを取り出し、千雨に放る。宙でキラリと光を反射しつつ、それは千雨の手に放物線を描いて飛んでゆく。

「っと。なんだよ……指輪？」
「そうだ」

とはいえ、深い意味があるわけではない。それがあればいいというレベルの、外と中の時間のズレを解消する物だ。

「ロリコン」

心にぐさりと刺さることなど、ない。やましい気持などないのだから。

「そうか。ここの一年は外の一日。そのズレをなくすための魔法道具（マジックアイテム）だったのだが……いらないのか」
「？　どういう意味だ」

気付いていないのか、それともボケているのか。まあ、気付いていないより、どうでもいいと思っている可能性が高いか。

「ここで過ごせば過ごすほど、老化する。分かるな？」
「あ～、確かに。なるほどな、それを防ぐアイテムってか」

正解だ。例えば外の一日分此処で過ごせば、老化という点では外の人間と一年のズレが生じてしまう。真祖のような寿命がないに等しいものならばともかく、人間にはきついもののはずだ。
それを未然に防ぐため、外の時間と肉体の時間を同期させるための指輪だ。

「ここにいる間は付けておけ」
「そうしとくよ。進んで老化なんてしたくねえからな」

そして、それだけの指輪ではない。我(オレ)自ら作り上げた最高級の魔法発動媒体でもある。万一咒式士の適性がなくとも、それさえあれば魔法が使える。
時間魔法適性があればそれを補助する機能もあるが、そこまでは期待せん。

「外に出る必要はないな。リビングで復習からだ」
「ああ」

実際、先程も外でやる必要性などなかった。いきなり咒式発動などできるはずもないことをうっかり失念したせいなのだから。あの馬鹿(ナギ)のせいで。

「――――という事だ。これで咒式発動まで必要なことは全てのはずだ。細かいところは慣れるしかあるまい」
「あぁ」

あれから九日は経過した。組立てが速いといっても、それは机上の空論。実際に使用するためのレベルには到底達していなかったことが判明したが故、これほどの時間がかかってしまった。

だがまあ、バグキャラとは違うのだ。我(オレ)は呪式理論があろうとも法珠がないが為、脳を慣らすのに十年はかけた。法珠があっても呪式理論が薄い千雨が、九日で僅かでも扱えるようになれば、大進歩だ。

「さて、これが魔杖剣だ。扱いは教えたな」

腰に佩いていた魔杖剣を抜き、千雨に手渡す。念のため刀身は潰しておいたが、それでも金属の塊だ。重くて持てんかもしれんな。

「お、重っ」

案の定持てなかった千雨の横に着き、右手で法珠付近を支え、魔杖剣を持ちあげる。ついでに千雨の手に触れる。

補助のためには、触れているのが一番だからな。

「呪式構築のほぼ全てを我(オレ)が行う。千雨は我(オレ)の合図を以って、呪式構築に手を出せ」

「ああ、やってやるよ！」

頬を赤らめてややけくそに叫ぶ千雨の手を握り、化学練成系呪式第一階位を構築する。

魔力変換：良好
呪印構成：終了
思考追跡：完了
仮想力場：安定

呪式構築：不完全――エラー発生

「今だ」

「っ！」

我（オレ）の合図とともに、千雨が呪式構築に割り込んでくる。

呪式構築：外部補助発生――エラー消滅

位相空間にて呪式発生を確認

位相変異現象励起――終了

ベンゼンの発生を確認

呪式の発動は正式に行われ、目の前に六角環構造を持つ有機化合物――ベンゼンが生成される。

これにより、千雨には呪式士としての才能がかけらかも知れんがあることが証明された。次は一人でやらせてみるか。

「ん、何なんだ？」

「どうした」

千雨が右手を握ったり開いたりしながら首をかしげている。と、そうか。魔力を扱ったことがないとそうなるのであったな。

「魔力が流れたことによる軽い拒絶反応だ」

「拒絶反応って、やばくないか？」

「大丈夫だ。神経系が鋭敏になることで、くすぐったさを感じる程度だ。少量ならばな。そして慣れれば、敏感になることもない」

魔力の扱いを教えずに呪式行使成功か。意外と適性は高いのかもしれんな。

「仮契約（パクティオー）をすれば魔力を流すのも楽になるが……方法が方法なのでな。今回は割愛させてもらおう」
「何だよ、パクティオーって。それに方法が方法って……」
「最も簡単にして馬鹿げた方法、聞きたいか？」
頷く千雨に、その馬鹿げた方法を教えてやる。
「キスだ」
「……はぁ！？」
「口づけ、接吻、チュウ。そう呼ばれる行為だ」
予想通り驚き顔を赤らめる千雨。当然だ。女子中学生にすれば早すぎる話であるからして。
しかし、恐ろしいのはここからだ。
「今顔を赤らめた理由は分かる。しかし、男にすれば顔を青くする要素もある。男同士であろうと、関係なくキスだ。おそらく考案者は、そこまで考えずに効率を追い求めたのだろうな」
「うわ……本当に馬鹿だろ、考えた奴」
まあ、宝石を利用する方法もあることにはあるが、そちらは準備に手間がかかる。手っ取り早く行うには向かん。
故に、男同士だろうが女同士だろうが、男女間であろうが。現在では仮契約＝キスだ。
「宝石を使う方法もあるが、準備に半日かかる。キスは羞恥を無視して一瞬だ」
「……でいい」

真祖の耳はかなりいい。何を言ったのかはきちんと聞こえた。だが、本人の意思を今一度確認するか。最近読んだ漫画風に。

「なぁにぃ、聞こえんなぁ？」

「シンかよ！　キスでいいって言ったんだ！」

言った後ハッとなって顔を赤くして俯く千雨。

ここにリュミスがいれば頭を撫でていたのだろうが、さすがに我（オレ）がするわけにもいくまい。しばらく傍観し、千雨が落ち着いたところで追い打ちの一言を告げる。

「ところで、今は仮契約せんと言ったばかりだが」

「っ！！」

ようやく自分が自爆を超えて大爆発を起こしていたことに気付いたか、先ほどよりも真っ赤になる。

だがまあ、おちょくっただけなのだが。実際に仮契約するとなると、少々制約が多くなる。

「まあ、ゆっくり考えろ。そして本当に必要かどうか考えて、そのうえで決めろ。時間はたっぷりとあるからな」

「……いや。仮契約するよ」

耳まで真っ赤に染めて、うつむいて。千雨はささやくような声でそういう。

本当にいつでもいいのだが……まあ、仮契約は契約破棄もできるものだ。嫌だと感じたようならば破棄してしまえばいい。

「儀式陣は……あった」

まさか、こんなに早く使う事になるとは思わなかった。想定外だ。
だが、それもいい。知っているように進むだけではつまらんからな。

「我(オレ)が主で千雨が従者の形で契約するぞ。むしろ、そうしなければ意味がない」
「ああ……」

千雨は俯いたまま顔を上げようとしない。一分二分と待つが、動かない。個人的にはいつまでも待ってやってよいのだが、使い捨ての陣がいつまで持つか分からん。書き直すこともできるが、面倒は嫌いだ。

「すまん」
「え……んん～！」

指先で千雨の顎を引っ掛け上向きにし、唇を奪う。すぐさま魔法陣が輝き、パクティオーカードが生じる。仮契約が成立したのだ。

「……バカ」

蚊の鳴くような声で千雨が呟く。ほぼ同時に儀式陣が光を失い、ぼろぼろと崩れ始める。時間的にギリギリだったか、契約に耐えきれなくなったか。両方か。
どちらでもいいか。とりあえず今回生じたカードを拾う。

「果たしてアーティファクトカードか。手にとって来(アデアット)れと言え。そうすれば固有装備が手に入る」
「うぅ……アデアット」

少々涙目な千雨は、それでも言う通りに行動する。出てきたアーティファクトは……王錫か？

探査用呪式を数種発動し、構造を調べる。錫の上部はほとんどが精密機械……というか、法珠。周囲を覆う金属は、全体が刀身。呪式弾倉は見当たらないが、間違いなく魔杖剣の一種。この場合は、魔杖王錫か。

しかし、呪弾を込められないとなると、千雨では発動不可能……否、完全魔法無効化能力者が魔法破壊武器を得るように、呪弾を必要としない者だからこそ、呪式弾倉が存在しない魔杖剣が入手できたのか？

ならば、千雨は……

「魔力を流す。呪式を使え」

「え、あ、あぁ」

契約執行により、魔力を千雨に流す。千雨はそれを受け、呪式を行使する。

万一我（オレ）の予想が正しければ。呪弾のない魔杖王錫でも、千雨は呪式を行使できることとなる。

法珠の演算をフルに使用、不格好ながら呪印が宙に点る。見る限り、呪式行使に問題はない。

「うらぁ！」

ガツンと石突を床にたたきつけると同時、先程と同じ呪式が発動。ベンゼンが生成される。呪弾なしに。

呪弾には、呪式置換物質と呼ばれるものが含まれており、これを触媒に呪式が位相空間から引き出される。そのため呪弾なしに呪式を使用したければ、先天的素養として物理干渉能力を持つ必要がある。

そして千雨は、その物理干渉能力者だ。
今言えることといえば、非常にレアだという事だけだ。完全魔法無効化能力ほどではないが。

「……我(オレ)を除けば二人目……否、一人目か」

リュミスは別だ。彼女は生まれながらの龍族。人間と違い、ほぼデフォルトで所持しているような代物だ。
物理干渉能力者ならば選択の幅はいくらでも広がるが、千雨がそもそも前衛に向かん。後衛職として育てるには、どうするべきか。
非常に楽しみだ。

第二十九話「意外な適性とアーティファクト」（後書き）

どうでもいい情報

設定上、アルトリウスと契約して、され竜関連のアーティファクトが出てくるのは三人
よって、以降の人は魔杖剣とは関係ない別のアーティファクトが出ます
そして全部別作品ものを予定しています

第二十九話・舞台裏『逃げるなら……いや、遅いか』（前書き）

第三者視点に挑戦。

第二十九話・舞台裏『逃げるなら……いや、遅いか』

千雨とアルトリウスがダイオラマ魔法球内部で訓練しているその時、アルトリウスは世界樹広場にいた。

矛盾しているようだが、そのようなことはない。アルトリウスは一人ではない。望めば最大１０００人まで――麻帆良のアルトリウスでは２０人まで――遍在を生み出せるのだから。言いかえるのならば、アルトリウスは魂を０．１％刻みで分割できる。

「待たせたか？」

「いや、そうでもないよ。アルトリウスさん」

アルトリウスを出迎えるように言葉を発するのは、タカミチ・Ｔ・高畑。アルトリウスにすれば、多少武術を教えてやった弟子でもある。

そのタカミチの背後には、この麻帆良にいる全ての魔法先生と魔法生徒がいる。当然と言えば当然だ。アルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライトは真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）にして魔法世界の英雄という、悪と正義の狭間に存在している。

どちらにせよ、無視できる存在ではないのだ。

「ふぉふぉふぉ、今日まで顔合わせをしないという約束だったが、本当に今日までここに来ないとはのぅ」

「ううん、真祖は悪。でも魔法世界の英雄で、人を襲った話なんて聞かなくて……」

「我々を誑かす悪魔が……！」

心の奥が見通せない表情で嗤う学園長の近衛近右衛門。敬うべきか離れるべきか迷う幾人かの魔法生徒。あからさまに敵対する正義

狂のガンドルフィーニ。
さらには黙ってはいるが、１－Ａの生徒である龍宮真名と桜咲刹那、シスター服の春日美空、アルトリウスの従者であるエヴァンジェリンとその従者の茶々丸もいる。
それぞれがそれぞれの意思を持つ中、一歩アルトリウスが踏み出す。

「魔法先生及び魔法生徒の中には初めて会う者もいるが、どうやら情報が流出しているらしいな」

ここで一度言葉を切り、滴るような笑みを浮かべて続きを言う。

「『金色の夜叉』、『黒炎の死神』、『進化し続ける怪物』等の二つ名を持つ真祖の吸血鬼のアルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライト(ハイ・デイライトウォーカー)にして、『魔法世界の英雄』『伝説の賞金稼ぎ』『沈黙者』等の二つ名を持つアランだ。ここには契約に従いいるだけだ。そちらが仲良くする気がないのであれば、こちらから歩み寄る気はさらさらない」

心底どうでもいいといった口調でアルトリウスは告げる。
そのまま踵を返し、世界樹広場から去ろうとする。

「ちょっと、待たんか。本当に挨拶だけで済ませる気かの？」
「当然だ」

慌てたように近右衛門が引き止めようと試みるが、アルトリウスは一顧だにしない。
そもそもアルトリウスには、本来ここに来る意味など欠片もない。なぜならば彼らへの依頼は木乃香の護衛であり、リュミスベルンのいる寮に木乃香がいる以上、仕事はないに等しいのだから。
それでもわざわざ来たのは顔見せのため。顔見せが終われば、別

に残る必要はなくなる。
もしもこの後警備があるのならば話は違うだろうが、そのようなことをアルトリウスは聞いていない。

「まさか、力量を調べようとでも？　はっ！　ここにいる雑魚では、我（オレ）の力の一割も引き出せん」

馬鹿にするようにアルトリウスは言い放つ。それに、あからさまな敵対感情を向けているガンドルフィーニが怒り狂う。

「ふざけるな！」

そして激情に駆られるまま、高速詠唱で中位の魔法を行使する。
一般人に使えば過剰殺傷級（オーバーキルレベル）の魔法を。
だが、アルトリウスは一般人ではない。どころか、魔法使いとしては超一級の存在だ。振り向かずに完全無詠唱で手を掲げる、それだけで対魔・魔法障壁を十重に張り、魔法の威力を全て食い止める。
否、その障壁の一枚目すら揺らがせることはなかった。

「……その程度か？」

十の障壁の、一枚目すら打ち破れない。まさに一割も超えることが出来ていない。それを認識し絶望し、ガンドルフィーニが膝をつく。
いや、アルトリウスは無詠唱で障壁を張っていたのだ。その障壁の強度となれば、完全な障壁の三割に満たないはずだ。それすら破れない以上、ガンドルフィーニとのレベルの差は歴然だ。

「なら、僕が出るしかないかな」

タカミチが踏み出すとアルトリウスは足を止め、体ごと振り返る。
その顔には、楽しそうな笑みがあった。

「妄言もいい加減にしろ、タカミチ。貴様程度で我(オレ)を打ち破れるわけがあるまい」
「どうかな。十年前の僕とは一味も二味も違うよ」

対するタカミチは、スーツのポケットに手を入れている。その戦闘スタイルを知るアルトリウスはさらに笑みを深め、誘うように両手を広げる。

「ならば、来い。こちらも魔法は使わないでやろう」
「慢心したから負けた、なんて言わないでくださいね」
「慢心せずして、何が最強か」

普通に聞けば呆れそうな言葉を皮切りに、戦闘が開始した。
タカミチは知っている。アルトリウスは気を使用することが苦手なのか、あまり使わないことを。魔法を使わないと言った場合、魔力による強化も行わないことを。そして鍛錬では、有効打撃を与えられればその時点で負けを認めることを。
だから、接近される前にマシンガンのような居合拳で有効打撃を与えようとする。

ただ一つの誤算は。
タカミチと同じく、アルトリウスも進歩している可能性を考えなかった。

居合拳は名の通り、ポケットから居合抜きのように拳を打ち出し、拳圧を射出する技だ。
だが、それならば。

「え！？」
「甘い、甘いな。蜂蜜よりもな」

別にポケットに手を入れる必要性などない。そもそも、＜術＞を会得しているアルトリウスからすれば、ポケットに手を入れるなどという行動制限は、ないほうが圧倒的に疾く行動できる。
＜術＞による変幻自在の拳で拳圧を飛ばし、居合拳を完全相殺する。それは、タカミチが飛ばした拳圧と全く同じ強さで、正確に正面から激突させることで生じる現象。
ある種、銃弾を銃弾で撃ち落とすような、気違いじみた行動だ。
その一瞬。タカミチが驚愕で手を止めてしまった瞬間を見逃さず、膝抜きで溜めをなくし、一歩目からトップスピードに乗る。この組み合わせを知るのは、刹那ただ一人。その刹那も、一瞬アルトリウスの姿を見失いかけていた。

「Ｃｈｅｃｋｍａｔｅ」

妙にいい発音が、タカミチの背後から発せられる。発したアルトリウスは、立てた人差し指をタカミチの首筋に当てている。
もしもこの時アルトリウスがナイフを持っていれば、頸動脈を掻っ切っている。そういう意味だ。

「確かに筋はいい。だが、我（オレ）の二つ名の一つは『進化し続ける怪物』。当時よりもさらに進歩している可能性を考えなかった貴様の負けだ」
「さすがに、天才の言う事は違うね」
「タカミチ」

ゾワリ、と。

アルトリウスの一言に、この場にいた全ての者が悪寒を感じた。
ただ名前を呼ぶ。その中に含まれた、絶対零度の怒りの前に。
そのアルトリウスは、タカミチの眼を間近から覗き込み、底冷えするような声色で告げる。
「我(オレ)が天才だなどと……二度と言うな」
――命が惜しければな。
アルトリウスは天才を嫌う。ここにいる誰もが嘘だと言うかもしれないが、アルトリウスには突出した才能など欠片もない。今こそ魔法使いとして天才的と言われるが、幼き頃には年下の幼馴染に負けるほどに弱かった。今では体術でラカンに勝てるほど強くとも、その域に至るのに百では足りない年を重ねた。
どこまでも欠片程度の才能しかない凡人。それが血のにじむような研鑽の末、最高位にまで至ったのだ。
アルトリウスの慢心は、慢心ではない。積み上げた年月に裏打ちされた、絶対の自信。
だからこそ、天才を嫌う。生き様全てを否定するに等しいからだ。
「ほう」
不意に、ピリッとアルトリウスの肌を魔術的な何かが走り抜ける。
簡単に解析すれば、麻帆良を覆う結界が、アルトリウスに焦点を絞っている。
このようなことを行える術者は、この麻帆良最強の魔法使いだった近右衛門しかいない。
「学園長。我(オレ)を結界で縛ればどうにかなるなどと、思うなよ。魔に属する者がこの地の結界で力を落とすのは、自己強化に回す魔力に制限がかかる故。魔力による強化に一切頼らん我(オレ)には、無意味だ」

そもそもアルトリウスは、真祖を殺すために真祖になった。そのため、真祖が何故強者なのかを知りつくしている。当然その対処法も、対処法に対する対処法も。

己が弱点を知りつくし、その弱点を放置しない究極の努力家であるからこそ、戦場であろうと慢心できる。

「気に入らぬのならば、口ではなく行動で示せ。何時でも受け入れよう」

それだけ言いアルトリウスは、闇の転移門（ゲート）を開いて世界樹広場から消える。それに魔法先生・生徒問わずざわめく。しかし近右衛門は驚愕により言葉を発することもできない。

エヴァンジェリンを押さえつける以外の、学園結界を総動員してなお当然のように魔法を扱うアルトリウス、その異常性に。

第二十九話・舞台裏『逃げるなら……いや、遅いか』（後書き）

エヴァンジェリンが学園結界によって魔力を失っているから弱体化している→魔力を失うことこそが魔に属する者の弱体化ではないかと考えて、こんな設定を捏造。

純粋体術面ではちょっとだけ本気でしたが、戦術面では一割も実力を出していません。本気で戦うとどうなるかというと……

1．軽く亜音速に達する虚空瞬動を使用しながら広域殲滅魔法クラスの中位魔法と第五階位前後の呪式の乱れ打ちと気で強化した武術

2．闇の魔法（マギア・エレベア）を使用した光速思考状態（誤字に非ず）で無詠唱上位古代語魔法と第七階位呪式の乱れ打ち

3．軍用爆薬が炸裂したかと見紛うほどの気もしくは魔力の瞬間的な放出

……マジで麻帆良を一人で滅ぼせます。この域に至ると＜術＞は意味を失う為、大雑把な蹂躙劇になります。

第三十話「死の少女、発覚」

「さて、ここに――と」

本日最後の問題のための解説をしている最中、チャイムが鳴り授業終了を告げる。この授業が今日の最後の授業であるため、１－Ａは一気にざわめき始める。

が。それを許す我（オレ）ではない。

「黙れ、授業中だ。チャイムで授業が終了するなどと幻想を抱くな」

「「「ええ～～！」」」

横暴だ～などという声も聞こえるが、それがどうした。

「この問題が終われば終了だ。そうだな、今後の参考に言おう。その日に想定した分を終えれば、例え授業時間が半分残っていようが我（オレ）はその時点で授業を終了する」

今度は正反対に、おお～！　と歓声が上がる。だが、他クラスならばともかく、この１－Ａではありえんだろう。

一日に想定しているのは、授業時間の七割があれば説明を終了できる程度でしかないが、騒がしい者が多く、理解度の低い者の揃っているこの１－Ａでは、どうあがいても授業時間をオーバーする。

これでも、説明を？い摘んで省略しているのだから。

だが、出席番号順であてている以上、最終問題はスムーズに終わりそうだ。

「さて。最後の問題は、出席番号１９番、超鈴音」

「Ｘ＝２ネ」

「正解だ。分からなかった奴はいるか？　……さすがにいないようだな」

我（オレ）の授業では、分からんことがあればその時点で挙手して質問するよう徹底している。そして、分からんことが無くなるまで授業進行を停止する。

そのせいで想定分に圧倒的に届かん場合はやり方を改める必要があるが、少なくともここ三日で進行に支障が出てはいない。

「では本日の授業を終了する。日直、号令」

「起立、気をつけ、礼！」

「「「「ありがとうございました！」」」」

「続いてＳＨＲだが、連絡事項のみ告げる」

本日の連絡事項を告げている中、視界の隅に妙なモノが映る。風もなければ教室に歪みがあるわけでもない。それなのにあまりにも自然に転がるビー玉サイズの消しゴムが。

僅かながら何らかの力を感じるため見渡せば、そのような力を発している可能性のある場所を特定した。

誰も座らない、誰もいない席。出席番号一番、相坂さよの席から。

否、正確には、そこに存在する幽霊からか。

学生証の番号をよく見ればわかる、欠番。出席番号2番の明石裕奈が『０１ＪＨＡ００１』、２００１年度本校女子中等部Ａ組入学の『1番』となっていることに。

相坂さよは幽霊だ。それも、半世紀は昔から。キティとは別の意味で、中等部に縛られた存在。

「連絡事項は以上。さようなら」

「「「「さようなら！」」」」

無駄に元気よく挨拶し、それぞれがそれぞれの生活に戻る。まだ入学して早々であるこの時期は、初等部からどこに行くか決めているなどしていない限り、部活動もない。主に友人関係のまとまりで教室から出ていくなりしゃべるなりしている。

そのような中、本当の意味で一人浮いている相坂は、消しゴムを転がし続けている。今は教室の後ろを転がり続けており、もうすぐ左後ろの隅だ。

（これは少々居残った方がよさそうだな）「絡繰。少々いいか？」

「何でしょうか、ノースライト先生」

茶々丸にしばらく教室から出るように頼み、効果を弱くした人払いの結界を張る。魔法抵抗の低い者は少しずつ教室から出てゆき、抵抗の高い者は人が少なくなるにつれて自発的に教室から出てゆく。

そうこうするうちに消しゴムは相坂の席に到達し、それを見て相坂はぐっとガッツポーズをして喜ぶ。その頃には教室に残るのは我（オレ）と相坂、キティの三人だけだ。

「何をした、アラン」

「マクダウェル、まだ生徒が残っている。その名で呼ぶな」

『？　ええと……あれ？』

こちらの会話に気付いて相坂がきょろきょろと周囲を見渡す。まだ生徒が残っていると発言されたにもかかわらず、自分を除けば二人しかいない教室を。

そして言葉の意味に気付いたか、相坂の眼が大きく見開かれ、こちらに詰め寄る。

『わ、私が見えるんですか？　見えてるんですか！？』

「……なるほど、相坂がいたか。すっかり忘れていたぞ」

キティも我（オレ）の言葉の真意に気付いたようだ。

『見えてるんですよね！？』

「先程まで相坂の行っていた行動。魔法行為の一種に分類されるであろう。見逃すには惜しい人材だ。副担任としても、授業に参加できない生徒はいない方がいい」

『何か言ってください！』

「本音はどうなのだ？」

「どのような魔法使いになるか、興味が湧いた」

『え、魔法使いって……』

相坂を無視し、こちらの会話を続ける。

「相坂に肉体を与えるとなると、人間に限りなく近い人形を作成するのが一番だ。だがあいにく、人形制作スキルは所持しておらん」

「ったく、分かった。私が最高級の人形を作ってやる。生体人形も作れなくはないからな。だが、魂を入れる人形ともなると、材料が足らん」

「魔術的材料は我（オレ）の伝手で揃えよう。肉体の材料は……原料から呪式的に作成するか」

限界まで人間に酷似した人形を作成し、そこに相坂の霊魂を憑依させる。その後生体活動を開始させれば、成長も老化もする人形として相坂は存在できる。

万一死んでも、霊魂を傷付けられさえしなければ、体を作り直すことで再活動できる利点もある。

『一体何の話をしてるんですか！』

「ん。ああ。教えてやれ、ノースライト先生」

丸投げか。こちらはそれでも大丈夫だが。

「既に肉体を失い霊魂と化した相坂さよを、蘇生させる方法の模索。そう言えばいいか？」

『え、ええ、えええ！』

突如叫ぶ相坂。その顔は困惑が多くを占めるが、徐々に綻びてゆく。それもそうか。死して半世紀もたてば、そのような希望とは無縁であったはず。

不確定であろうと飛びつきたくなるのも当然か。

「だが、材料が入手できたとして、人形作成にどれほどかかる。魔力は配給するとしてだ」

「ノースライト先生から最大限配給があると仮定して、人形作成に最低で二ヶ月は見ろ。悪ければ半年ほど。相坂の遺伝情報でもあれば期間は縮まるが、半世紀前の人物のＤＮＡなど入手できまい」

『え～、そんなにかかるんですかぁ～？』

「うるさいな！　これでも短い方だ！」

『そんな言い方しなくても――――！』

相坂とキティが口論を始めたが、ひとまずは無視だ。とりあえず現状から人形作成に二ヶ月はかかる。だが、ＤＮＡが手に入れば制作期間は短くなる。

理由は分かる。相坂の魂を込める以上、相坂の肉体であることが理想。相坂の霊魂を参考に肉体を作り上げるよりも、遺伝情報から元の肉体を構成するならば手間は省ける。

ん？　ならば。

「ＤＮＡについては、クローン作製とかそういった部類の話だな？」

「――五十程度の青二、ん？　ああ、そうだ」
「つまり、一過性の物であろうと、相坂の肉体があればそれでいいのだな？」
「ああ……何をする気だ」
少々粗っぽい方法だが。これならば参考肉体は簡単に作ることができる。
「エーテル体に相坂を憑依させる。そうすればもちろん……」
「生前の姿に変形する、か。くくく、それならば一週間でいけるぞ」
エーテル体はスライムのような魔力物質。ただし、疑似生命を付与していないエーテルでないと憑依は難しくなる。
在庫は――あっただろうか。一つ分はあるだろうが、万一を考えると二つ分か。そうすると足りない可能性が出てくるな。
『すごいです、ノースライト先生とマクダウェルさん！』
「だが、学園長に確認を取らねば。後々バレて糾弾されるのは避けるべきだ」
「ふん。あのじじいに許可を取る必要はないだろう。ところでノースライト先生？　私の呪いはどうなっている？」
登校地獄の呪いか。あの呪いの正体を知った我（オレ）からすれば、どうすれば十年を超える長きに渡って呪い続けることが出来るのかが不明だ。
「そちらの許可は取る気はさらさらない。元々三年の約束ならば、解除しても問題ないだろうからな」
にたりと、意地の悪い笑みを浮かべる。知った時の学園長の顔は

見ものだろう。あの腹の内の読めない表情が、苦虫を数百は同時に噛み潰したように歪むであろう様は。

「マクダウェルの家に行くぞ。そこで解除と人形の生成を同時に行う」

「くくく、ようやくこの鬱陶しい呪いから解放されるのか。くははは！」

高笑いするキティを置いて、相坂を連れて教室から出る。そこには、先程追い出した茶々丸がいた。

軽い遮音結界を張り、今のうちに伝えておくべきことを伝える。

「ああ、茶々丸。今晩キティの家に用事ができた。食事の用意は必要ない。以上だ」

「情報記録終了。かしこまりました、グランドマスター」

先日の訪問以来、マスターであるキティのマスターであることから、茶々丸はプライベートでは我(オレ)のことをグランドマスターと呼ぶようになった。

我(オレ)が絡繰を茶々丸と呼ぶようになったのもその時だが。

「相坂。茶々丸の後を追って、キティの――マクダウェルの家に先に行っていろ」

『キティって……あ、そういえば一緒に過ごした期間があったんでしたっけ。なら親しいのも納得です』

そう納得し、茶々丸の後ろを憑いてゆく。

確か今宵は、キティも我(オレ)も夜の警備はないはずだ。我(オレ)は契約で不定期でもよく、キティは封印の影響で毎日は出られないからだ。

さて、このクラスは魔法適合者が多い。どこまで到達できるか楽

しみだ。

少々退屈な書類仕事を終え、学園長室へと向かう。キティの解放云々は秘匿するが、キティの協力のもとで相坂さよの蘇生（とは少々違うが似たようなこと）を行う許可を得なければならんからな。

「というわけだ。許可は？　答えは『はい（日）』『Ｙｅｓ（英）』『Ｊａ（独）』『Ｏｕｉ（仏）』『Ｓｉ（伊）』から選べ」

「全部肯定じゃの。そんなこと言わずとも、許可は出すわい」

すらすらと証明に許可証を書き、確かに許可を出したことを明文化する学園長。これで、大義名分は揃った。後に正義馬鹿どもに何か言われようと、学園長の許可の前には無に帰す。

「この人形作成時の費用は、経費で落ちるか？」

「物によるわい。不要な機能まで追加してそれを落とせ、と言われても困るでの」

それも当然か。経費の件はどうでもよく、相坂の肉体の作成さえ許可されれば、こちらは一向に構わんからな。

「以上だ。では、数日後を楽しみにしていろ」

許可証を受け取り、学園長室を出る。そこには、見慣れた顔。

「あのさ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「……学内だ。教師には敬意をはらえ、長谷川千雨」

認識阻害結界を張り、会話の内容が正確に伝わることを阻害し、そのうえで会話を行う。
正義馬鹿どもに、千雨のことがばれると厄介すぎる。裏を返せば、ばれなければどうという事はないのだが。

「これでいいだろう。何の用だ？」
「いや、あのアーティファクトで魔法を使う事は出来るのかなと思っただけでさ」

千雨のアーティファクトは魔杖剣。正確には魔杖王錫だが、咒式のサポートを行う為に存在している代物だ。そして魔法はそもそも、精霊に語りかけることで使用できる。作用機構が違いすぎるが故、魔杖剣では魔法補助はできない。

「何を馬鹿な。魔杖剣は咒式構築は行えても魔法発動は行えん。魔杖剣では、精霊に語りかけることが出来ないではないか」
「あ～、そうじゃなくてな。魔法サポートの魔法陣とか、ならできるかなって。私の勘違いだったらだめかもしれないけどな」

がしがしと頭をかきながら言葉を紡ぐ千雨。しかし、魔法のサポートを行う魔法陣？　ああ、そういうものもあったな。使わんからすっかり忘れて……ん？
待て待て待て。もしもそれが可能だとすれば――――いや、だが……まてよ……？

「……！！　少し待て千雨。その発想はなかった。数日の

うちに答えを出す」
「ど、どうしたんだよ、急に」

ああ、我もこの世界の魔法使いの思考に囚われ過ぎていた。機械では魔法は使えない？　それを覆した代物が、この麻帆良にあるではないか！　ああ、なんて馬鹿だ、我は！

「く、くく、くはははははは！　ああ、我も年を取り過ぎ、固定概念に固執し過ぎていた」
「なんか、漫画とかでよく聞く言葉だけどさ。『新しい世代を作るのは若者だ』って。そんな感じなのか？」
「ああ、その言葉はしっくりくる。若いからと、弱者だからと馬鹿にはできんことを我は良く知っているはずだったのにな」

しばし自嘲し、冷静さを取り戻す。こんな簡単なことを思い出せんとは、思いつかんとは。若いうちに真祖になって脳も若いままだと思っていたが、存外耄碌していたか？

「ではまた明日。ＨＲで会おう」
「あ、ああ。また明日」

若干引き気味な千雨は置いて、歩み去る。
まずいな。麻帆良に来て以来、やらねばならんこととやりたいことが多すぎる。木乃香の護衛に刹那の武術指南に教師としての仕事。千雨の強化にキティの解放。そして相坂の疑蘇生に此度の新魔法。楽しみで楽しみで仕方がなさすぎる。

「研究三昧で色のなかった日々よりは……こうも多くのことがある方がよほどいい」

独り言ちて口の端を釣り上げる。まだ数日しか経っていないが、本当にいいところだ、ここは。

第三十話「死の少女、発覚」（後書き）

実際は、人付き合いがなさすぎたのが原因。普段は人里から離れた森や山の中にすみ、稀に人里に下りるという生活を数百年続けていた、という設定。

真祖だからと人付き合いを減らしていたから心が摩耗するんだよ。

第三十一話「無限登校地獄」（前書き）

今更ながら、エヴァンジェリンは三年ごとに学校を転々としている可能性があることを知ってしまいました。本校女子中等部にずっといると、タカミチとクラスメートという原作設定が矛盾する。何故気付かなかった。

……ま、まあ。偶然の二連続だったという事で。

第三十一話「無限登校地獄」

相坂の肉体用の魔術的素材、聖銀（ミスリル）・緋緋色金（ヒヒイロカネ）・超重金属・魔道金属（コン）・消結晶（エンイレイサー）が必要になるのは後だが、ダイオラマ魔法球内部での作業となれば、持っていかねばなるまい。仮体用のエーテルが十分量あればいいが……

「エーテルは十分に……あるな。作成の場として１２０倍程度のダイオラマ魔法球があればいいか」

キティが持っているはずのダイオラマ魔法球の５倍速。外の１時間が内の５日となる。キティの物との大きな違いは、ほとんどいつでも出入りできることか。

全ての材料をカバンへ入れ、キティの家に向かう。学園長の許可を得ているため、見つかろうが咎められることはない。だが既に現在時刻１８：５１……１９時前。ゲートで転移した方がよさそうな時間ではあるな。

影のゲートでキティの影へ飛ぶ。

「待たせたな」

『わ、これが魔法ですか～。ノースライト先生、こんばんは～』

「こんばんは、相坂」

転移した我（オレ）を出迎えたのは、キティではなく相坂だった。キティはイヤホンをつけゲームに熱中していた。

「キティ」

「こんばんは、ようこそいらっしゃいましたグランドマスター。マスター、グランドマスターがいらっしゃいましたが」

「ええい、何故ここで出てくる!?　背中のスイッチなど押せないではないか!」

茶々丸も声をかけるが、一切気付く様子はない。赤いキマイラから逃げるのに必死なようだ。

「鎌鼬の刃」

風系初歩魔法で真空の刃を作り、イヤホンを中途で斬り落とす。音が途絶えたことに腹を立てたか、怒りの形相でキティは振り返る。

「何をする、このボケ……あ」

だが、威嚇用の笑顔を浮かべた我(オレ)を見て、その罵声は尻すぼみに消えてゆく。さらに嗜虐的な笑顔を浮かべ、黒炎を手に生じることで威圧感を強めてやる。

「そうかそうか、我(オレ)をボケと評するか。で、どのような死にざまが望みだ?　そうか焼死か」

「あ、謝る!　謝るからその笑顔と黒炎は消してよアラン!　お願いだから、ね!?」

ただの闇属性の炎なのだが、『蝕みの焔』と勘違いしたようだ。まあ、ミスリードを誘う為にそうしたのだから、間違えてくれなければ意味はない。

しかし、一瞬とはいえ昔の口調に戻ったな。懐かしい。

「ならばすぐに気付け。ああ、壊れたイヤホンの代金は後で払ってやる」

闇属性の炎を消し、嗜虐的な笑みを呆れた風に変えて言い放つ。
どちらに安心したのかは知らんが、安堵の溜息をキティはつく。

「そのまま動くな。呪いを解呪する」

キティが脱力した瞬間、莫大な探査咒式と探査魔法を用い、登校地獄の呪いを一種の術式として可視化する。
さて、この程度はどうとでもなる。問題はここからだ。

「登校地獄の術式を展開」

狂った呪いを正すために、本来の登校地獄を付近の虚空に描く。
さあ。間違い探しの時間……は？
なんだ、この無茶苦茶な術式は！？　登校地獄の術式だけではないな。あと2つ、連動するように存在している。
待て。まずは登校地獄の術式はどこだ？　そこの異常を解呪すれば……

「大丈夫か、アラン」
「話しかけるな。集中させろ」

キティの気遣いも雑音でしかない。再び集中し、術式を比べる。
――中核の術式か。さすがにこの魔法を中核に据えることまでは間違えなかったか、ナギよ。では、この術式の誤りを正していこう。

「始動式、異常なし。次式、異常なし、異常なし、異常なし」

……ん？

「異常なし、異常なし、異常なし……最終式異常なし。登校地獄の

呪いに異常なし、だと？」

どういう事だ？　登校地獄に異常がないのならば、何故キティは麻帆良に縛られている？

連動している術式如何によっては、登校地獄が狂った可能性も否めんが。そちらから検証しよう。

「連動する魔法術式の解析を開始」

術式をコピーし、何を起こす魔法かを推測する。

まずここは吸収か？　さらにこれは流動で転換に至る……これに近似した術式を見たことがあるな。確か呪式の……呪式士殺しか？

「＜石骸触腫掌（サルマク）＞及び＜溶髑解牙（オティス）＞の呪印組成式を展開」

接触対象から魔力を強奪することで、施術者が死ぬか呪式を解除するか、双方の魔力が尽きるまで蝕む特殊な呪式。この世界流に言うのならば、魔法使い殺し。見比べれば、それに近似した術式が使われている。

ナギの馬鹿のような魔力でかけられたから解けないのではないな。常時キティから魔力が配給されることで、解呪に抵抗できるのか。キティを超える魔力の保持者など、あまりいないだろうからな。

「だが、これでは……」

永久機関になろうとも、永続はしまい。登校地獄の絶対解呪条件の一つである『卒業』は消えていない。キティが卒業した場合、最終式が始動して解呪されなければならない。

そもそも登校地獄は、引きこもりや不登校を矯正するために開発された呪いだ。卒業を迎えて解呪されなければ、欠陥としか言いよ

うがない。卒業後も学校に通わせる意味などないのだから。
では、一体何が卒業後も学校に縛りつけているのか。

「……これか」

最終式が起動する条件部位以前に、我(オレ)ですら解析不可能な正体不明の術式が関わっている。その術式の流れを見るに、この術式に設定されている解呪条件が満たされない限り、登校地獄をループさせている、可能性が非常に高い。
否、バグの塊であるかもしれんな、これは。適当な魔法行使の影響でいい加減な魔法が組み上げられ、本来ならば機能できないはずの術式が暴走を起こしているかもしれん。

「キティ。現状では解呪は不可能だ」
「な、何だと！」

キティの怒りを無視し、バグの解析に挑む。これはこうでそうなり、あれはそうだからこっちに繋がり、だがそれでは矛盾して……これか。だがそうだとすればこうで、ここからこう動くからこれはこうで……また矛盾か。だとすればこちらのこれが作用しここが抑えられ、その操作にこれが使われ、だとするとこれは……全く関係ないか。だとすることこちらも同じく無関係となり、この道筋が生まれて……また矛盾か。
高速思考と分割思考をフルに使用しても、数分程度で解けるほど容易な術式ではないな、これは。

「この登校地獄だが、維持魔力にキティの魔力を使用している。また、正体不明の術式が無限ループを引き起こしている。よって現状では、キティ以上の魔力で無理を通すしか解呪方法はない。そして、そのようなことをすれば、学園側に知られることとなる」

「なん、だと」

打ちのめされたようにふらりと崩れかかるキティ。それを片手で支えつつ、更なる解析を続ける。

正体不明の術式は、様々な魔法を組み合わせて動かそうとし、失敗したが故に更に組み合わせで無理やり起動させた感が強い。これほど無茶を通した術式であると、維持は不可能に近い。

通常ならば。

だがこの術式も、魔法使い殺しの術式から魔力配給されるように設定されている。この常時配給が無理やりな術式を維持している。そして魔法使い殺しの解除方法は主に3種類。

行使者の死亡。行使者の解除。外部からの強制解除。

「ナギを探し出し、殺すか連れてくるか。もしくは麻帆良を敵に回してでも強制解除、か」

「まて、ナギを探し出す、だと!?　ナギは8年前に既に死亡している!　探し出すことなど不可能だ!」

「検索します……ナギ・スプリングフィールド。8年前にイスタンブールにて死亡」

キティと茶々丸は口々に言う。だが、この術式を知る我(オレ)からすれば、それは知らぬが故の戯言に過ぎん。

「これが維持術式だが、これは行使者が死ねば崩壊する。現在も起動している時点で、ナギ・スプリングフィールドは生存していなければならない」

「く、くくく、くははははははははは!!」

突如としてキティが笑いだす。だが目は反転し、その笑いには怒りが滲んでいる。否、滲むを超えて、既に狂気の域に達しつつある。

「ははははは！　１２年だ。１２年も放置しておき、それでいて死んだと思えば生きている！　ならば何故ここに来ない！！」

封じられている筈の魔力が、キティから噴き出しているような錯覚に陥る。溢れ出しているのは怒気だが。

「知るか。現状で解呪したければ、学園長に申請しろ。秒単位で消し飛ばしてくれる」

キティは、こう見えても我（オレ）の初めての従者だ。それをこうも苦しめる呪いなど、少々本気を出してしまいそうになる。

「相坂の肉体を作るまではこれで我慢しろ。契約執行　８６４００秒　アルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライトの従者　エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル」

『８６万、ですか？』

「１０日分だ。１週間かかると言うのでな、十分な余裕を持たせたのだが？」

『な、なるほど……』

キティが使用する分を配給し続けようと、この体に宿る魔力が尽きることはあり得ない。現在の魔力量は１０万を超す。本来のキティの２００倍ほどか。丸１年配給しようと、尽きることはありえん。

「ダイオラマ魔法球、１２０倍だ」

千雨に送った魔法球よりやや小さい魔法球を机に置く。ほぼ工房だけであるため、内部体積が小さくて済んだ一品だ。

「起動」

一言呟き、魔法球へ飛び込む。

キティの『製作される体は裸だ。いくらアランでも見せられるか』との不満そうな声と、真っ赤になった相坂の『は、裸……覗かないでください！』との羞恥の声もあり、ダイオラマ魔法球内部で９日、研究をし続けていた。

「これが我の上級火炎魔法（メラゾーマ）だ」

主にネタ方向で。偶然見かけた『ダイの○冒険』から魔法のヒントを得、こうして実用レベルに押し上げてみたのだ。

魔法名は『皇翔鳳閃（カイザーフェニックス）』。鳥の形をした炎が対象に襲いかかることをイメージした一品。使用魔力量は『燃える天空』と同程度。それを１点に集約している時点で、どれほどの威力かは想像できるであろう。

「行k（フォイエ）」

「やめんか！」

解き放つ瞬間、キティの『雷の斧』が飛んできた。対処が面倒なので、手元の『皇翔鳳閃』を、鈍器を叩きつけるが如く激突させる。
上位古代語と同程度の魔法は、中位程度の魔法と激突し、砕け散る。安定性をもう少し考慮せねば、実用性はないか。

「完成したのか」
「『完成したのか』ではない！　一体ナニを放とうとした！」
「『燃える天空』級の新作魔法だが」
「阿呆が！」

このような場合、下手に隠すよりは正直に告げた方が怒られないという統計があるのだが。やはり御伽話と現実は違うか。
我(オレ)からの莫大な魔力配給をいいことに、ほぼ無制限に『魔法の射手』を乱射するキティ。それを片端から反魔掌で適当に弾き……火属性の気を纏わせてみるか。
新技完成。『反魔炎掌(フェニックスウィング)』とでも名付けるか。元ネタ的に。『カラミティエンド』など『岩』の手刀で十分故、『天地魔闘の構え』が可能になった。

「あ、お久しぶりです、ノースライト先生」
「相坂か。意外と似合うな」
「ありがとうございます」

はにかんだ表情を見せる相坂は、藍染の着物を朱の帯で締めている。確かキティは日本が好きだったか。ならば着物をいくつか持っていても不思議ではあるまい。

「ところでアラン。女性物の服がなかったが、どうするつもりだったのだ？」

「呪式で作る気だったが。変身では常にそうだからな」

『反魔炎掌』で『魔法の射手』を弾きながら答えれば、口の端を引き攣らせたキティが飛翔し立体的に移動しつつ、さらに『魔法の射手』の量を増やしてゆく。

2分ほどそうしていたが……さすがに飽きたな。きゅっとして。

「どか～ん」

「何を、ぉ？　ぎゃっ」

魔力配給を瞬時に極限まで絞り、キティを墜落させる。他人の魔力で調子に乗るからそうなるのだ。まあ、キティのことも考えて、お姫様だっこで受け止めてやったが。

顔を真っ赤にするキティを尻目に、重要な案件を考察する。

相坂の衣食住関連、どうにかせねばならんな……

第三十一話「無限登校地獄」（後書き）

最近執筆の暇がありません。
先週は大体、月：２１時　火：１７時　水：１７時　木：２１時　金：２１時　土：１６時に大学より帰宅。
研究室は楽しく忙しいです。

第三十二話「麻帆良の休日」

相坂の復活から二夜明けた土曜日。我（オレ）は本日授業がないため、Ｈ Ｒなどは全てタカミチに押し付けて、学園都市内を歩いている。

先日、相坂の衣食住はどうなるのかと学園長に質問したところ、『外部編入に当たり、手続きに手間取り入学が遅れた』ことにして、『二人部屋を一人で使用している１－Ａ生徒がいるため、彼女と一緒にする』そうだ。『彼女』が誰かは知らんが、それは我（オレ）の関与することではない。

重要な衣だが、全て学園長のポケットマネーから出るから勝手にすればよいらしい。この全ては、『学園で過ごす際に発生する出費』であり、これらは学園長が肩代わりするようだ。真意を知るため無断で読心を使用したところ、どうやら学園長の初恋が相坂らしい。惚れた弱みか。

話を戻そう。この買い物に、お目付役として我（オレ）が抜擢されたのだ。これは任務のため教師の仕事は免除された。

「まだ買うか」

「当然です～。服なんて持ってなかったんですから、たくさん買いますよ～」

「そうか」

学園から支給された制服姿の相坂の言からすれば、実際は荷物持ちとしての意味合いが強い。７割はそうだろう。２割は保護者がいることを店員にアピールするためで、残り１割がお目付役だ。

（レナかアルトリアならば理解できるかもしれんが、男性脳である我（オレ）にはどうにも理解が難しい。否、女性脳でも執着が少ないと呆れられたか）

魔法世界に溶け込んでいる女性の我(オレ)を思う。クラリス・ネイ・グーミリア・シャルテットはメイド。服が少ないのは当然だし、おしゃれしていなくとも不信には思われない。マリアムはアリアドネー騎士団の団員。こちらもそこまでおしゃれに気を使う必要はない。エルルカは摩訶不思議な魔術師を自称しているため、やはりおしゃれしていなくともよい。だが、ミカエラとジェルメイヌだけはそうはいかない。元々ジェルメイヌは男勝りの設定だがそれでも限度があり、ミカエラは普通の女性。おしゃれに興味がないは許されない。『ミカエラ』の苦労を思い出し、それに合わせて女性のおしゃれに対する意識を引き出す。

（これでは足りないわね。倍とは言わずとも、5割増しで欲しいわ、か。ミカエラが言うのであれば、そうなのだろうな）

どこまで女性の性格をトレースできようと、基本は男であることを実感する。そこに失笑し、荷物の一部を空間圧縮して相坂を追いかける。そうでもせねば一部荷物が転げ落ちてしまいそうだ。

「下着類は知らんが、私服はこれで全てか？」

「はい、これ以上買っても、置く場所がありませんから～」

食事休憩を含め5時間強。ようやく解放される段階に至った。衣服はそれほど（と言うよりも全く）重くないのだが、さすがに嵩張る。バランスに気を使う必要が出来たのは恐ろしく久しぶりで、少々懐かしい。

「おや、もしかしてノースライト先生か？」
「お、本当アルね」
「本日は見かけなかったでござるが、買い物でござるか？」
「その声は、龍宮に古に長瀬か」

背が比較的高い龍宮と長瀬は見えるが、荷物のせいでもう一人は見えん。だが、この二人と共にいることから１－Ａ。そして、その中で『アル』と語尾に付けるのは古しかいない。

「ノースライト先生、この人たちは誰ですか～？」

同じ１－Ａの生徒であるというのに、『出会ったことがないかのように』相坂は我(オレ)に尋ねる。これは我(オレ)の指示の一つ。今まで相坂は学校に来ていないことになっている相坂が、一方的にクラスメートを知っていてはいけないとの配慮で、そうするように指示したのだ。だが、よく見れば龍宮は笑いが堪え切れないような雰囲気が見て取れる。そういえば龍宮は魔族の血を継いでいたか。幽霊だった相坂のことが見えていても不思議ではない。

「龍宮真名と古菲と長瀬楓。全員、これから相坂が過ごすことになる１－Ａの生徒だ」
「あ、そうですか～。初めまして、相坂さよです」
「さよ殿でござるか。拙者が長瀬楓でござる」
「私は古菲アルよ～」
「ふふ、そして私が龍宮真名だ。これからよろしく」

互いの自己紹介の途中、不意に携帯が鳴る。両手が塞がっているため取り出せんが、こんな時のためにイヤホンとマイクは接続してある。カチッとな。

『おお、アルトリウス君』
「学園長か。何の用だ」
『さよ君の学生証が出来たのでの。買い物が終わったのなら学園長室に取りに来るよう伝えてほしいんじゃ』
「了承した。以上か？」
『以上じゃ』

再びスイッチ操作で携帯を切る。和気藹々と話している相坂には悪いが、会話に割り込ませてもらう。

「相坂。これらを学生寮に置いたら、学園長室に行くぞ。学園長からの指示だ」
「そうですか～。それでは、明後日また会いましょう」
「ではな。ああ、長瀬に古。宿題を忘れぬように」

相坂は丁寧に礼をして、我(オレ)は馬鹿二人に忠告して、三人組と別れる。背後から苦言が漏れるが気にすることはない。宿題程度、しない方が悪い。
では少々急ぐとしよう。学園長ならばいくら待たせようと我(オレ)の良心は痛まんが、相坂の良心が痛みかねん。

「そういえばノースライト先生。魔法でぱぱっと移動しないんですか～？」

ぎりぎりまで近づいて相坂は小声で提案する。だが、それは我(オレ)には取れん案件だ。同じく声を殺して相坂に忠告する。

「魔法など存在しない。それが世間の常識だ。魔法使いしかいない場合ならばともかく、非魔法使いも多くいる現状で使用するのは不

可能だ」

実際には、認識阻害でも張ればどうとでもなる。が、それは緊急時だったり距離が離れすぎている場合だったり、あまり時間をかけたいと思わない時限定だ。麻帆良程度ならば転移の必要はない。

楽をするのも悪くはないが、楽をしすぎるのも問題だ。

「そうでしたっけ。ノースライト先生とエヴァンジェリンさんが普通に魔法を使っていたから、忘れていました～」

「我(オレ)らは特殊な部類だ。それをよく認識しておけ」

「わかりました～」

は～いと手を上げる相坂と共に、女子寮へと向かう。そういえば、相坂の部屋はどこだったか。聞いていなかったな

「相坂。寮室の番号は知っているか？」

「ええと、ちょっと覚えてないですね～。あ、でも、同室の人の名前は覚えてます～」

寮はリュミスの寮であると聞いているからな。同居人の名を出せばリュミスに聞けばすぐに分かるな。

「長谷川さんです」

……なんだと？

「……長谷川千雨か？」

「はい、長谷川千雨さんです」

これは、偶然と見るべきか、仕組まれたとみるべきか……偶然だ

な。これでもしも仕組まれているのであれば、千雨が我(オレ)の従者であると知られているという事。即ち、どこかで大反発が起きることとなり、必ず我(オレ)の耳に入るはずだ。

さて、ここで選択肢がある。千雨とさよが互いを従者であると知るようにすべきか否か。すれば互いの負荷が減り、しなければ千雨のことがばれる危険性が下がる。

……しばらくは傍観だな。教えることはいつでもできるが、忘れさせるのは骨だ。

「先に言っておくが、同居人だからと言って魔法のことを教えるのはタブーだ。特に千雨は現実主義者(リアリスト)で、非現実(オカルト)は信じぬ方だ」

「分かりました～」

ちょっと落胆したように返事をする相坂。その間にパクティオーカードを取り出し、千雨に念話をつなげる。

『こちらアルトリウス。応答せよ』

『マジカル☆プリンセスちうた……げふん。千雨だ。何の用だ』

今までコスプレしていたな。そしてその勢いのまま念話をつなげたな。取り繕ってもその光景は目に浮かぶぞ。

『今日から貴様の部屋に新しい住人が入ることは知っているか？』

『ゑ？　マジかよ！？　聞いてない！』

『マジだ。十数分あれば我(オレ)と共に寮に着く。それまでに部屋を片しておけ』

『わ、わかった！　ところで、私が魔法を使う事も、魔法があることも知られたらまずいんだよな！？』

『そうだ。一般人には知られてはならない』

『イエッサー！』

念話を切り、伝えなかったことを思う。
千雨は現実主義（リアリスト）だが魔法は非現実（オカルト）ではなく現実（リアル）だと知っている。
相坂は魔法を知らせてはいけない一般人ではなく逸般人だ。
嘘を言ってなどいない。ただ必要ないが故、言わなかっただけだ。

「そういえば相坂は、コスプレは好きか？」
「こすぷれ、ですか？」

何それ？　と言いたげに首を傾げる相坂。
そうか。さすがに６０年も世間から切り離されれば、その手の事情は知らんか。

「コスチュームプレイの略で……着せ替え人形は分かるか？」
「はい～、いろんな服を着せて楽しむものですよね？」
「それを自分が行い楽しむものだ」
「楽しそうですね！」

目がキラキラと輝く。どうやら相坂は、千雨の同類のようだ。
もう一度千雨に念話するか。

『千雨、朗報だ。相坂はコスプレが好きなようだ』
『どこ情報だよそれ！？　いや新人から聞いたんだろうけど、マジで聞いたのかよ！？』

少々怒鳴るような念話が返ってくるが、無視だ。

『その趣味を隠すか隠さないかは、貴女次第です』
『どこぞの芸人の様な口調でごまかすな！』

ぎゃんぎゃん喚く千雨の念話を脳裏からはずし、黙々と寮に向けて……着いてしまったな。

『今寮の前に着いたぞ』
『地獄に堕ちろ！』

最後まで暴言を吐いてから念話が途切れる。確かに唐突だったのは悪いと思うが、知らせただけ有情ではないか。

「あら、アルト。その子は？」
「久しいな義姉よ。今日付けでこの寮に入ることとなった相坂だが、話は届いてないのか？」
「ああ、相坂さよちゃんね。初めまして、この寮の寮監をしているリュミスベルン・ノースライトよ」
「初めまして、相坂さよです。ところで、お二人は姉弟なんですか？」
「義理のね。部屋は千雨ちゃんと一緒だけど……この子はどちら側？」

どちら側、と来たか。正直に言ってしまうとせっかく隠しているのが台無しだな。

「こちら側だ。《隠している》千雨と違ってな」

仕方なく、多少の念話を交えて会話する。リュミスは馬鹿ではない。この一言で言いたいことは分かるだろう。

「そう、《隠さなければならない》千雨ちゃんと違って、ね。分かったわ」
「今の会話で分かると思うが、リュミスもこちら側だ。何かあれば

相談すると……否、最もよく知るのはキティ故、キティに相談せねばならんことが多いか？　ちょっとしたことならばリュミスでも構わんが」

相坂に話を振る。近くにいるほかの寮生に聞かれようと、おそらくここだけではちんぷんかんぷんだろう。

パパラッチ朝倉がいない以上、根掘り葉掘り聞かれるような事態はあるまい。この数日で記者魂を開花させていることは確認済みだ。

「はい。では、部屋に荷物を置いてきますね～」

「我（オレ）はここで待っている。リュミス、相坂を頼む。それとこの後学校に戻るのでな、荷物を置くだけにとどめよ」

「なら、私が置いてくるわ。二人は学校に行きなさい」

リュミスは我（オレ）から荷物を全て受け取る。まあ、彼女も人外だ。この程度は嵩張ろうとも負荷にはなるまい。

相坂をちらりと見ると、少し申し訳なさそうに、だがはっきりと物言う。

「で、では、お願いします～。帰ったら片付けますので、置いておくだけでいいですので～」

「分かったわ。千雨ちゃんにも伝えておくわ」

そして学園長室に着いた。途中描写はなしだ。なにも無さ過ぎて書くのがつらい（作者談）。

「さて、これが紗夜ちゃんの学生証じゃ。確認しとくれ」

「はい。……って、あれ？」

相坂が疑問の声をあげる。ふと横からのぞきこめば、学生証の番号は『０１ＪＨＡ０３１』で名前は『相坂紗夜』。

『紗夜』と書いて『さよ』と読ませるか。知らん者なら『しゃや』と読みかねんが……『月』と書いて『ライト』と読む人物よりはましか。

「すまんの。既に番号を詰めておった関係で、番号は最後になってしもうた」

「じゃなくて、名前のほうです～。こんな漢字ではないのですよ～？」

「相坂さよは、６０年前に死んでおる。『さよ』と『紗夜』は別人であることを示すためなのじゃがのぅ……」

微妙な方法だが、誤魔化しにはなっている、のか？　我（オレ）からすれば、そのような小細工などせんでもいいというのが実情なのだが。

「そのあたりの不平不満は、全部学園長にぶちまけておけ。我（オレ）は帰る」

「ふぉふぉ。ではまたの」

「また月曜日～」

そしてその日はそこで別れた。

月曜の質問タイムをどう乗り切るか考えておけと言うのを忘れていたことを思い出したのは、日曜の深夜になってからだった。

第三十二話「麻帆良の休日」（後書き）

番外編である『もしまど』を削除しました。
そして、別シリーズとして連載する予定です。

第三十三話「アルトリウスの華麗なる一日」（前書き）

今回書いていて、キティとアルトの口調に大差がないことに気付いた。
どっちがどっちだか把握できなくなりそうですが、気合でカバーしてください。

第三十三話「アルトリウスの華麗なる一日」

紗夜が受肉してから早9日。千雨の新たな魔法といった従者関係から、刹那の鍛練についての話とそれを聞かれたせいで古と長瀬からつけ狙われるようになった等、ちょっとしたことがあったが。

「ここがこうであるからこうなり……故にこうなれば……こうか。シミュレート開始」

その合間にキティの登校地獄の呪いの解析が佳境を迎えていた。術式の欠片を無理やりまとめ上げた奇妙な術式だが、どのような効果を付随しようとしたかはある程度絞れた。それは、学園都市麻帆良からの外出禁止と、記憶改編。

記憶改編は3年経った場合に魔法関係者以外からキティに関する記憶を失わせるもの。本来ならば学生ではないキティの記憶を留めることに意味はないと、術式を追加したのかもしれんな。

外出禁止は……おそらくは、キティに付き纏われて気が滅入ったナギが、自分を追いかけることができんようにするために追加したのだろう。

そして、それらを組み合わせる際に不具合が出て、仕方なくチートじみた直感で新たな術式を追加し弄り改良した結果、無限ループという本来ならば付けるつもりのなかった機能が発生したのだろう。

というのが我(オレ)の推測だ。

「シミュレート終了。無限登校地獄の解析完了」

まあ、ナギの意図などどうでもいい。結局はこれを解けるか解けないか、という問題にすぎん。だが……解析が完了したが故の、新たな疑問が生じる。ナギはこれをどう解くつもりだったのか、とい

う点だ。
　このループの条件が、『3年経過』なのだ。おそらくは記憶改編術式の発動を考えてなのだろうが、『卒業による解呪条件達成』よりも前に『3年経過による記憶改編とループ』が起動し、卒業が卒業として認められなくなってしまっている。故に、自然解呪は理論上不可能。外出禁止も4～5年あれば勝手に解呪される程度の術式なのだが、3年ごとに更新されるため、弱化したキティではどうしようもないだろう。
　その上、ご丁寧にも術式修復用術式が複数存在し、外部からこの術式に手を加えれば、即座に元の術式に戻そうとする。

「まあこれも、『魔法使い殺し』を破棄しさえすれば終了なのだろうが……分かってやってはいないだろうな」

　目の前の仮想術式を再度起動し、電源たる『魔法使い殺し』を削除するシミュレーションを行う。さてどうなるか。念のため、周囲にキティの魔力が存在するように、我(オレ)の魔力を飽和させる。

削除1秒後：修復術式起動　『魔法使い殺し』を修復しようとする
削除3秒後：バグ術式一部停止　術式崩壊開始
削除6秒後：修復術式完全崩壊　半端に修復された『魔法使い殺し』も崩壊
削除7秒後：登校地獄の呪い正常化

　ふむ。現状でのシミュレーションが正しければ、『魔法使い殺し』さえ削除すれば登校地獄が正常化すると言う事だ。
　おおっと、キティの魔力を封じている学園結界の考慮を忘れていたな。再構築後、再シミュレート開始。

「……魔法使い殺しさえ削除すれば、術式は正常化する。だが、学

園結界が……」

キティを封じている個所が崩壊する確率が４９．７３％。全体が崩壊する確率が１．２４％。何らかの不具合が発生する確率が３１．６７％。一切変化しない確率が１７．３６％。

実に８２．６４％の確率で学園結界に影響が出るという最悪の計算結果が出た。では停電時に、予備電源を切ることで結界を沈黙させた状態で解呪を行った場合は……

「ふむ、こちらならば８８．３６％の確率で影響が出ないか。数法系咒式士でない以上、演算に１０％の誤差が出ると仮定しても、８割は安全か」

無限登校地獄の正常化を行うには、条件が増えたわけだ。まずは、キティが電気仕掛けの学園結界によって魔力を封じられていることに気付くこと。そして、それを知った上で予備電源を落とす状況。

両者を満たすのは、物語が正常ならば2年後。ネギ・スプリングフィールドが麻帆良にやってきたその時だ。

「これが分かっただけでも解析は煮詰まったと言えるだろうな。寝るか」

真祖になろうと、やはり気分をリフレッシュするには寝るのが最適だ。現時刻２９時３分。どうせ日よう……ん？　２９時……午前５時、だと？

「はあ、刹那の鍛練の時間か」

本日は5時半からの約束だ。我(オレ)個人の理由で止めるわけにはいかんからな。

だるいが、行くか。

右腕を伸ばす。そして手の上に刹那が手を乗せ、鉄塊が落ちてきたような、異常な重みを加えてくる。否、『術』の基礎中の基礎。初歩である歩法の膝抜きにより、こちらが対応する前に全体重をかけてきたのだ。まだ完成度が低いため一流が相手ならば対応されるが、もう少し昇華させれば一流でも対処が難しくなるであろう。

しかし一月以上会わなかったが、しっかりと鍛錬は続けていたようだな。

「ふむ……腕を上げたな」

「ありがとうございます」

だが、我（オレ）には通用しない。同じく『術』を学び、より極めている我（オレ）には、高々数年の修行では追いつけんし追いつかせん。

膝抜きを習得したとなれば、次に進みたいところではあるが。本格的に『術』を教えるわけでもなし、不要だろう。膝抜きの応用を教えれば、それだけでも十二分に強さを発揮できる。鍔迫り合い……は無理だな。膝抜きの応用も含まれるが、体を割ることはまだ教えてない。無重剣くらいか。

竹光を構える。刹那が使用することを考え、野太刀サイズの竹光を、だ。

「刹那」

「はい？」

刹那の視線が我（オレ）に固定された瞬間、真下に膝を抜く。その一瞬だけ重力から解き放たれた我（オレ）は、流れるように太刀を振るう。おそらく、今の刹那になら真髄を捉えられるであろう。

「それは、あの時の……無重剣？」

「原理は分かったか？　今なら理解できると思考したが」

もしも理解できたのならば。瞬間的なブースト法であるが故、あらゆる武術（剣術含む）に応用が利くこれを授けるのも是と考えている。

大きな欠点を挙げるのであれば、中途半端な完成度で使用すれば、ただ隙を晒すだけという事だろう。

「もう一度お願いします」

「Ｊａ」

再び無重剣を繰り出すが、その際にただ太刀を振るうでなく、百裂桜花を使う。京都神鳴流も使用できることをアピールするために。

「今のは……膝抜きで真下に落ちた？　それにしても百裂桜花をあれほど速く行えるとは……」

「正解だ。そして、無重剣は行動のブーストに用いられる」

「ですが、真下に膝を抜いた以上、ほんの一瞬しか加速できないのでは？」

「そこまで理解できたか。それも正解だ」

だが無重剣は、その一瞬で全てを決める技。その程度出来ずして、何が『術』者だ。

「今の刹那には荷が勝ちすぎるであろうが、慣れれば問題あるまい。

本来ならば転ばしと割りも教えたいところであるが……人生は短い。そして京都神鳴流の人間に『術』をそこまで教える義務はない」

『術』は技術の一環ではあるが、未だ我も進化を続けるような余りにも奥が深い代物。京都神鳴流を覚えることに邁進する人間が、片手間に習得できるようなものではない。

「次回は実践的な鍛練に移る。夕凪を忘れ……るはずがないか」

夕凪は使用しないと伝えていたのだがそれでも持ち出した以上、ほぼ常に手元に置いていると考えるべきだろう。

世間には銃刀法というものが存在するのだが……無視か？

「今日はこれで終わりですか？」

「少々眠いのでな。ではまた明日、学校で会おう」

「はい。本日はありがとうございました」

刹那の返答を背に、ふらふらと職員寮に向かう。否、ここからならばキティのログハウスの方が近いか？

――ログハウスだな。遠かろうと、昼からの予定を鑑みれば、そちらのほうがましだ。

「起きてください、グランドマスター。そろそろお時間です」

「む、そうか？」

キティのログハウスで休眠を取って少しした頃であろうか。突然

茶々丸に時間だと叩き起こされた。今日我(オレ)に用のある客が一名いるが、もうそんな時間か？

携帯を確認すれば、正午過ぎ。７時には寝ようとした故、５時間弱寝ていた計算か。そして、客が来る予定は１３時。彼女は３０分ほど前に行動することを基本としている。ならばそろそろ来てもおかしくはないか。

「はい。その前に昼食をお召しになると思いますが、何かリクエストはありますか？」

「食べられるのであれば何でも構わん」

「では、既に出来ているものがございますので、そちらをお召し上がりください」

香りから何となく気付いていたが、既に出来ていたか。この香りは……チャーハンだろうか。

果たしてチャーハンだった昼食を喰らい、客を待つ。まあその客とは。

「先生～、こんにちは～」

キティと我(オレ)の弟子にしてどちらかの従者となる相坂紗夜なのだが。

蘇生から今日までは魂の定着具合を見るために空けていたのだが、完全に定着したことが判明したが故、今日より本格的に鍛えることとなった。

時間同期用のマジックアイテムは紗夜には渡さない。その体は人とほぼ同じ成長する人形であるが、成長も加齢もある程度操作できる。その程度出来ずして、我(オレ)とキティの弟子は名乗らせない。

まあ、無理なら人形を取り換えるだけだ。スペアのボディはいくつかあるのでな。

「よく来たな、相坂。今日から私自ら徹底的に魔法を教えてやる。光栄に思え」
「はい！　よろしくお願いしますマクダウェルさん」
「私のことは師匠（マスター）と呼べ」
「分かりました、師匠（マスター）！」

既にキティと紗夜が邂逅しているか。ちなみに我（オレ）は二階の踊り場にい、キティたちは玄関付近。原作で言うところの『風邪と花粉症のキティが落ちた場所』と『ネギがいた場所』だ。飛び降りてキティの横に並ぶ。
紗夜は軽く驚くが、キティは驚かん。それも当然だが。

「さて、私の弟子となるからには最強になってもらわねばならん。その一環として仮契約（パクティオー）を行う。相手は……アランだな。癪に障るが」

嫉妬か。だが、既に千雨と仮契約（パクティオー）していることを知られれば、さらに不機嫌になるのだろうな。魔力が封じられている現状では、そこまで脅威ではないが。そして魔力が封じられている以上、契約した従者である紗夜に魔力を送ることが出来ない。これでは本末転倒になりかねんが故、我（オレ）が主（マスター）となるのだろうな。

「我（オレ）の意思を無視か」
「拒絶するのか？」
「まさか」

ごく短い会話と肩をすくめるジェスチャー。それだけで十分伝わる程度には、互いに年を積み重ねている。女性に年齢の話はタブーというが、キティには当てはまらない。我（オレ）の１００ほど年下。それでいい。

「最速の仮契約（パクティオー）は接吻（キス）になるが、いいか？　嫌ならば別方法で行うが」
「あ、いいですよ～」

見る見るうちに顔を近づける紗夜。長い時を生きるほど羞恥は弱くなるが、当然のようにキスを行うか。否、顔が若干赤いか。
接触前に呪光で仮契約（パクティオー）陣を描く。書き忘れればもう一度となり、おそらく勢い任せですらできなくなるだろう。

「カードはやはりアーティファクトか。来れ（アデアット）と唱えてみな」

キティの言う通り、出てきたカードはアーティファクトカードなのだが……何故かどこかで見たことのある鎌を構えた紗夜の姿が描いてある。
ああ、見たことがあるが。さすがに予想外もいいところだ。おい天使。さすがに調子に乗り過ぎではないか？　魔杖剣はギリギリ許すとして、全く別系統の道具をここで出すとは。

『……さらに凄まじい物が別の場所で生じている』

第十八天使。貴様見ているな!?
もういい。ネタなど全て吹っ切ろう。いちいち相手にしていられるか。

「ほう、鎌のアーティファクトか。少し振ってみろ」
「はい、わかりました～」
「何？　すこし待」

待て、とは言い切れなかった。紗夜がヒュオンヒュオンと鎌を回しだしてほんの僅かの後、体の自由が奪われたのだから。否、完全

には奪われていない。だが、全身が麻痺したかのように硬直し、まともに動かせん。

（これが、死神の笛か）

そう、『死神の笛』。鎌の形をしているが、笛。その本来の役目は、振ることによって発生する特殊な音波による行動の束縛。おそらくは、音を聞いた時点でアウトという、少々物騒な代物。

「そろそろおやめください」
「え～？　どうしたんですか？」

茶々丸の言葉で紗夜が笛を振るうのを止めてから、次第に感覚が取り戻される。意外とえげつないアーティファクトだな、これは。

「相坂紗夜。これ以後、許可なくアーティファクトを使用するな」
「え、どうしてですか～、師匠（マスター）？」
「キティ。使い手にはフィードバックしないようだ」
「らしいな」

紗夜ののんきな声から、使用者である紗夜は麻痺しなかったようだ。まあ、それもそうか。使用者が麻痺していては、もはや用なしに近い。

利点は敵の完全無力化。茶々丸は動けたが、人間ならば確実に行動が不可能になる。動けない人間など、単なる的に過ぎん。

欠点を挙げるのならば、周囲にいる味方すら麻痺するため、特殊な対策をしない限り、紗夜は1人で戦わなければならなくなる点か。

「それは、使用者以外の『人間』の行動を束縛する。言いかえれば、未対策であれば敵味方問わず行動を封じる。危険性が高すぎるわ」

「おそらくは、音だろうな」

元ネタを知るが故の、単純な推理。

《アルトさん、今大丈夫か？》

《千雨か。何用だ》

《あぁ、術式がうまく動かなくて。イメージを送るけど》

我（オレ）の知る死神の笛であるならば、聴覚を封じればどうにでもなる。だが、これはアーティファクトだ。聴覚から作用しているわけではなく、体の神経系に直接作用している可能性も否めない。そうだとすれば、音そのものの遮断を以ってしてのみ効果から逃れられる。

で、この術式はおそらく自動誘導術式だろう。不備のあるＤ－８９位置を調整し、千雨に返す。

《これで動作が正常化するはずだ》

「何故そう言える」

キティの疑問ももっともだ。

ついでに、同じ元ネタの魔法を構築できる術式を思考。空間魔力の収束式だ。これがあれば、組み合わせ次第でＳＬＢの構築も不可能ではあるまい。

《お、ありがと。また分からなくなったら聞くから》

「キティの仮契約（パクティオー）時に告げたが、それが理由ならば」

《いつでも聞け。ついでにこれも持って行け。収束術式だ》

バッグに入れていたある漫画を取り出す。十日ほど前に完成させた魔法をより細かく作りこむためにわざわざ借りたものだ。

「これだ」
《収束術式って……まさか、ＳＬＢの基礎術式か！？》
《そうだ。どう使うかは千雨次第だ》
「これは……はっ、無茶苦茶もいいところだな」

キティに見せたのは『ダイの大〇険』。それも、ちょうど死神（キルバーン）が魔法使（ポップ）いに死神の笛を使用する場面。驚くのも無理はない。我（オレ）も驚いたのだから。

「異世界型特殊道具（アナザーワールドアーティファクト）とでも名付けるか？　我（オレ）の従者は何故か皆、この世界にはない物が現れるのでな」

『内なるナリシア』然り『電神の錫杖』然り『死神の笛』然り。既に亡くなった従者だが『知覚眼鏡（クルークブリレ）』が出たこともあった。
先程の空耳が真ならば、我（オレ）の遍在が契約した相手に、同じく異世界型特殊道具（アナザーワールドアーティファクト）が現れている可能性が高い。
全く、厄介事は尽きそうにないな。

第三十三話「アルトリウスの華麗なる一日」（後書き）

千雨が念話してから少々文が慌ただしいですが、並行思考の賜（たまもの）です。

雑談

アーウェルンクス以外のシリーズもあったんかい！　てかセクンドゥムの死因はフェイトの『リライト』で、フェイトが人形っぽかった理由は目的がインプットされていなかったから？

出るのが遅い！　セクンドゥムの死因はナギとの戦いだとか、テルティウムはセクンドゥムの遺志を継いでいるとか、ブラコンセクストゥムが八つ当たりでネギと戦おうとするとか、そんなことも考えていたのにぃ！　ちなみにその脳内世界において、セクストゥムがセクンドゥムを呼ぶ時の二人称は『あにさま』。

少々時間（キングクリムゾン）を飛ばします。具体的にはネギが来る3～4か月前までの1年半ほどを。

キャラ紹介（前書き）

最新話で新たな能力が判明した時、この記事が更新されることがあります。
最新話を見てから見ることをお勧めします。
現在、第３４．５話までの情報まで載っています。

追記
原作キャラの一部も載せることにしました。
位置を移動しました。が、移動方法が分からなかったので、いったん削除し、再投稿の形をとっています。

キャラ紹介

名前：アルトリウス・ノースライト→アルトリウス・レナ・アリステル・ノースライト
通称：アルトｏｒアラン（イニシャルのＡ．Ｒ．Ａ．Ｎ．から）
見た目：金髪緑眼　Ｆａｔｅの旧セイバーｏｒ緑眼のギルガメッシュ
身長：１８２ｃｍ
体重：６８ｋｇ
年齢：２０歳で真祖になった。現在大体７００歳
家族構成：姉　レナ・ノースライト　婚約者　アリステル・シュナイダー　義兄？　リロイ・シュルツ
出身：原作時点でのオーストリアに存在していた村
始動キー：イグネ・ナチュラ・レノヴァトール・インテグラ
魔法属性：火・氷・闇・光
得意呪式：化学練成系と電磁光学系。
二つ名：黒炎の死神（ブラックデス）・進化し続ける怪物・金色の夜叉・沈黙者（サイレンサー）・顔無き者（ノウフェイス）
賞金：元１２００万ドル
モットー：進化を止めた生物に、生きる価値など無い
魔力量：約５５００００００（全体）　約１１００００００（主人公的なアルトリウス）
判明している従者：エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル　リュミスベルン・ノースライト　長谷川千雨　相坂紗夜

異能

時間操作：対象の時間を操作する。自己にかける場合は時間への停滞と加速から遅延。他者にかける場合は加速から遅延、時間の停止、時間逆行。異常に魔力を使うが、効率化の末、通常使用が不可能でなくなった。だが、まず使われない。時間と空間は表裏一体であるため、時間操作能力の応用で空間操作が可能である。

空間操作：一定空間の広さを変更する。彼のバックに入っている物の量が、バックの体積を超えているのはこのせい。

魔力量成長：真祖化までは年に１％ずつの成長。真祖化してからは年に５％まで成長することが可能になった。

補足：一般魔法使い（生まれたころのアルトリウス）の魔力量を１とした時、ネギが３００、エヴァが５２０（真祖化前は６５）、ナギが５５０、木乃香が７００。真祖になると魔力量は八倍になる設定。

特殊技術

呪式（じゅしき）：この世界では使用されていなかった、魔法の一種。『されど罪人は竜と踊る』の世界で使用されている。

並行思考（マルチタスク）：同時に複数のことを考えることを可能とする技術。詠唱中の多彩な行動や、呪式の多重並行発動、多重遅延魔法が可能になる。

二重詠唱（デュアルスペリング）：声帯をばらばらに動かすことで二つの詠唱を同時に行う。基本は同位の魔法を使用する際に使用するが、『魔法の射手』と『燃える天空』のようなランクの違う魔法を並行して詠唱することも可能。同時無詠唱ができるため、お遊び及び示威行為でのみ使用される。

習得武術

術（名称不明）：アフリカでワイヨリカ族に習った、二足歩行生命体の不安定さを利用する身体操作技術。人間の動きを根本から変え

るため、『術』の才能があるものでも、数年で習得できるような簡単なものではない。力よりも技を重視しており、技で力をねじ伏せる。知れば知るほど奥が深く、人間の寿命では極めることは不可能であると言われている。本来はアルティメット・ファクターの世界に存在する体術だが、「ワイヲリカに似たような＜術＞を研究しはった先人が歴史上のどこかにおったんやろうな」とのことなので採用。

京都神鳴流：１５０年ほど昔に京都に訪れた際に習った、江戸時代末期の京都神鳴流。全身の力を余さず利用する『岩』・気による遠距離攻撃を可能とする『空』・形なきものに干渉する『魔』の三つの技と、気を別のエネルギーにする『変換』を基礎とする武術である。そのため、本来は武器を選ばない。

七夜体術：退魔家系の一つ、七夜一族に伝わる特殊な体術。暗殺術でもあるため、気を用いた強化を一切行わない。瞬間的な超加速と壁や天井すら利用した立体的な移動がメインであるため、狭い部屋の中や森のように、障害物が多いほど強みが出る。

呪式に関する設定

呪弾：呪式の基となる呪式置換物質を開放する。物理干渉能力者なら不要。それ以外の存在はほぼ確実に必要。

法珠：事象誘導演算機関。人の意識と呪力（この世界では魔力）を仮想力場へ誘導。位相変異現象を励起。呪式発動を正確に制御する演算機能。十分な演算能力があれば無くてもよい。

刀身：呪印組成式を描き、呪式を増幅する。杖で代替可能。十分な力があれば杖も要らなくなる。

『近距離戦闘でも使用できるくらいに高速かつ正確・精密に展開するためには、どうしても魔杖剣の補助が不可欠（原作まま）』なだけで、魔杖剣は無くても何とかなる。呪弾があれば大抵の（才能のある）人間は最低ラインの呪式の使用が可能。物理干渉能力者は呪弾も不要。物理干渉能力を持つのは一部人外か人外の血を引く者。

ごく稀に人間が持つこともある。

オリジナル魔法

『氷葬の棺』：呪文は『全てを抱擁す　氷雪の女王　彼の者に　命散らす凍える吐息を』。この世界に始めからあったことになっている、永久凍結魔法。生きた人間であれば簡単にレジストできるため、食糧保存程度にしか使えない悲しい魔法。そもそも『こおるせかい』が上位に存在する時点で戦闘では確実にいらない子。

『蝕みの焔』：呪文は『地獄の深淵より来たれ　無明の主　灼熱の王　我が望むままに荒れ狂いたまえ　全てを浸蝕し飲み干し焼き尽くし　平穏なるこの世に旧き時代の煉獄を再び生み出さんがために　魂をも焼き焦がす悪意の黒炎を今ここに』。真祖殺しのためだけに生み出した、本当の意味でのオリジナル魔法。闇の特性である『蝕み』と火の特性である『燃焼』と『高熱』を組み合わせた最凶最悪にして災厄の魔法。闇に蝕まれた場所を魔力配給がある限り焼き続ける。この炎も一種の闇であるため、炎に炙られた場所にも闇が感染して広がる。闇そのものが高熱を放つため、少しでも焼かれればどんどん広がり、内側から焼かれる地獄を味わうことになる。焼かれる対象が焼き尽くされるか魔力配給が止むまで炎は消えない。欠点として、燃やす対象を選べない。炎が上に昇る特性上、下方向や水平方向への延焼は遅い。

『光輝なる炎』：呪文は『来れ火精　光の精　光を纏いて　燃やせ栄光の焔』。『雷の暴風』や『闇の吹雪』と同位に位置する、光と火の魔法。これもこの世界に元からあったことになっている。見た目は白く輝く炎の津波。

『裁きの天雷（インディグネイト・ジャッジメント）』：呪文は『契約に従い　我に従え　光の帝王　雷の女帝　満ちよ天光　我は此処に在り　開け黄泉の門　彼は其処に在り　出でよ審判の神雷　終焉を具現せよ』。無論オリジナル魔法。テイルズオブシリーズおなじみの魔法から。『千の雷』よりも上位の雷属性の魔法として開発するが、自身が雷に強い適性がないため、

使用することなどめったにない。
魔法の射手改：呪文不明。『蝕みの焔』の常時魔法配給という特性から考えた、常時魔力配給型魔法の射手。長時間のチャージができ、強固な結界にあたっても砕け散らず、魔力配給される限り推進し続ける。
『皇翔鳳閃（カイザーフェニックス）』：呪文は『我が命に答えよ　炎の巨鳥　帝王の威光を身に纏い　陽光より出でて　雑種共を灰に帰せ』。ダイの大冒険の大魔王バーン様のメラゾーマをこの世界の魔法で再現したもの。もちろんオリジナル魔法。ダイの大冒険を読んだ際に作ってみたくなって作った代物。

オリジナル呪式
＜反魔禍界絶陣（マギカ・モダイ）＞：数法量子系呪式第五階位。呪式干渉結界から発展させた魔法干渉結界。魔法術式に干渉し、構造を崩すことで魔法を弱体化。過ぎれば破壊することも可能。
＜他化軆身（ルーセ・フェル）＞：生体変化系呪式第三階位。体を他人に変化させる。真祖の回復能力でも元には戻らないため、戻るのにもこの呪式は必須。アランは自分自身を含む幾人かを登録している。
＜重加崩倒（ベ・タン）＞：重力力場系呪式第三階位。重力子を大地に追加することで重力加速度を増加させる呪式。名前はダイ大から。
＜蝙喉蝠（ラ・キュラ）＞：生体強化系呪式第二階位。可聴域より上の音を発声可能にする。名前は某吸血鬼から。
＜重剛堅膂法（バキルト）＞：重力力場系呪式第四階位。肉体の重力子（グラビトン）を増加することで見かけ上の筋肉密度・重量・硬度を増加する。名前はドラクエから。

名前：リュミスベルン

通称：リュミス
種族：古龍
見た目：龍形態は樹龍の鱗が金バージョン・人形態は巣作りドラゴンのリュミス
身長：龍形態で１２１ｍ・人形態で１７３ｃｍ
体重：龍形態は計測したことがないため不明・人形態は重力を軽減しているため可変
年齢：魔法世界の始まりと共にあったとか
始動キー：不要
魔法属性：万能
得意呪式：重力力場系
二つ名：黄金女帝（ゴールドエンプレス）・名無き者（ネームレス）

異能
呪式（じゅしき）：アランの項を参照。
死の吐息（ブレス）：龍の吐く各種吐息。気の属性変換の一種であるため、種族によって得意・不得意属性が生じる。リュミスは万能であるため、大抵の属性の吐息を吐ける、ことを最近知った。基本は慣れている火属性。さらには魔法や呪式を吐息に乗せることで、『され竜』の竜に似た吐息を使用できるようになった。

武装
龍牙長剣（トゥースソード）：リュミスベルンの牙を削りだして作成した剣。各種吐息に耐える抵抗性、障壁や骨ごと相手をかみ砕くことができる硬度と粘り強さ、自分の一部であるため気が通りやすく強化が容易いなど、使い勝手がかなり良い。剣の重さと鋭さに加え、リュミスの重量と怪力で対象をぶった切る。見た目は真っ白い約束された勝利の剣（エクスカリバー）。
龍鱗金鎧（ドラゴンメイル）：リュミスベルンの鱗を削りだして組み上げることで作成した金色の鎧。古龍の強靭な鱗をそのまま使用しているため、防御能力は凄まじい。見た目はセイバーの鎧を金色にした感じ。ギルガ

メッシュ型はアランが所持（使用する気はない）。

アーティファクト
逆鱗の宝玉：人化の呪式が込められた首飾り型宝珠。既にこのアーティファクトが無くとも人化はできるが、重量操作などの細かいところを補佐するのに都合がいいため、好んで使用している。見た目は竜？恋の『恋するドラゴン』の逆鱗。

名前：エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
アーティファクト
内なるナリシア：さる呪式士が作り上げた、最高傑作の魔杖剣。守に秀でており、真祖の攻の能力と合わせてエヴァンジェリンが使えば、ほぼ敵なし。だが肝心のエヴァンジェリンが使用することが稀なため、お披露目の機会はあまりない。ナギに封印されたのも、パクティオーカードを別荘に飾ったまま忘れたためである。

その他特記事項：無し

名前：長谷川千雨
種族：人間
基本使用魔法：呪式
得意呪式：電磁雷撃系・数法系

異能

物理干渉能力：呪弾を用いずとも呪式が使用可能になる。この能力はヒト（亜人含む）から外れたものであれば所持している可能性は高いが、ヒトで持つ者は少ない。むしろ激レア。完全魔法無効化能力よりは多いが。
抗精神汚染：認識阻害や人払いなどの、精神に働きかける魔法を自動でレジストする。記憶消去や記憶改竄にもある程度効果はあるが、幻術には効果がない。

アーティファクト
電王の王錫：呪弾装填不可能な魔杖錫杖。上部のほぼ全体が宝珠であり、され竜世界の情報屋・ヴィネルのように、電子世界への潜り（ダイビング）こみを目的とした呪式が盛り込まれている。また、さまざまな西洋魔法補助術式が盛り込まれており、一部西洋魔法を簡易発動できる。さらにまだ能力はあるが、現状では不明。

戦闘方法
純粋な後衛職。戦闘に出るのはいいが先頭に出ることはやめた方がいい。だがコンピューターを用いた電子戦は、条件次第で茶々丸以上。補助魔法陣を多用する事で、『リリなの』のモノマネが出来る。

名前：相坂紗夜
種族：亡霊
基本使用魔法：西洋魔法
始動キー：コギト・エルゴ・スム
魔法属性：影・火（死・鬼火のイメージ）

異能

騒霊現象（ポルターガイスト）：手を触れずに物を動かす力。物質を動かす力に魔力を使用しているので、ある種の魔法であるとも言える。彼女は浮遊術をこれで行うことができる。

精霊同調：原因不明だが、精霊との親和性が非常に高い。そのため、他人よりも少ない魔力で西洋魔法を使用できる。また、闇の魔法で精霊との同化も可能になる。

アーティファクト

死神の笛：鎌の形をした笛。刃は付いているけれど、鎌ではなく笛。回すことでヒトには聞こえない特殊な音を発し、生物の魂に干渉する。音を聞いている間は魂と精神の指示がちぐはぐになり、体の動きが麻痺してしまう。対処法は音を聞かないことだけであり、聴覚を閉ざした程度では逃れることは出来ない。

戦闘方法

西洋魔法を基軸に、ポルターガイストで不意を打つ。アーティファクトで相手を混乱させるも良いが、非生物系には効果がない。闇の魔法で精霊と同化するが、その時の形態名はクトゥルフ神話からとられている。

第三十四話「さあ、カウントダウンだ」

そろそろコートが欲しくなる秋の終わり。我（オレ）は学園長に呼び出された。

既に教師生活も2年目後半だが、木乃香に魔法を教えるようなことにはなっていない。詠春には啖呵を切ったものの、『偶然』木乃香が魔法を知るような事態に陥ることがなく、知らないが故に教えられないからだ。

学園長は木乃香に魔法を教えることを推していたからな。少々無茶でもいいから教えろとでも言いたいのだろう。そうでなければ、呼び出す意味はない。

「何用だ、学園長」

「おお、来てくれたか、アルトリウス君」

学園長室には学園長だけでなく、タカミチとしずながいた。魔法先生であるタカミチと学園長ならばいざ知らず、一般教師であるしずなまでいるとなると、魔法関連の話ではなさそうだな。

「高畑先生と源先生がいるのならば、２－Ａ関連の話か？」

「ふぉふぉ、そう言う事じゃ。実は2月に一人、先生が来ることになっての。教育実習生から始めるが、そのクラスとして２－Ａを受け持たせようかと思っておるのじゃが」

なるほど。もうネギ・スプリングフィールドが来るのか。忘れていたぞ。

「……ふむ。担任である高畑先生と副担任である我（オレ）、お目付役に源先生と言ったところか？」

「ところがのぅ、タカミチ君は出張が多いのは知っておるじゃろう？　じゃから、ノースライト君を担任とし、その教育実習生を副担任にしようと思っとるのじゃが」
「すまないね。僕のせいで負荷が増えてしまう事になるけど」
タカミチの戯言は放置するとして。確かにタカミチは出張が多い。無論一般教育者としての出張ではなく、魔法使いとしての出張だ。元紅き翼（アラルブラ）の構成員であるタカミチは、引っ張りだこ。アスナ……神楽坂明日菜の件がなければ、教育者などやってはいないだろう存在だ。
ああ、そう言えば。神楽坂明日菜は未だ黄昏の姫御子としての記憶を思い出さん。この麻帆良の地の認識疎外のせいなのだろうが。
「構わん。教育者として、後輩が増えるというだけのことであろう？　ならば受諾しよう」
「そうですか。それではよろしくお願いします」
「こちらこそ」
しずなと礼を交わし、学園長室から出ようとする。が、僅かな魔力放出の気配から、足を止める。
「ノースライト先生、それではお先に失礼します」
そして足を止めた一瞬の隙に、しずなが部屋を後にする。今のは魔法行使。それも強制的な人払い。一般人の眼の前で行使するなど本来ならば許されざる行為。
十分にしずなが離れたことを確認し、教師としての仮面を外す。ここから先は、魔法使いとして対応させてもらおう。
「では今一度問おう。何用だ、学園長」

「あ、アルトさん。ちょっと、息苦しい」
「当然だ。我(オレ)の足を止め、一般人を退室させるためとはいえ魔法を使用した。是非を問わねばならん」

高々0．1％。大戦時のナギの全力の2割程度しか魔力放出していないというのに、これか？　落ちたな。
魔力放出を切る。学園長はまだ余裕そうだが、タカミチがまともに喋れなくなるのは痛手だ。

「さて、何用かと言われれば、こう答えよう。その先生というのがナギの息子での。魔法先生として自信を付ける」
「却下する」

何を頼もうとしたかを察し、予め切り捨てる。どうせ戦ってわざと負けろとでも言うつもりなのだろうが、そのようなことをする義務も義理も存在しない。

「ここに我(オレ)がいる理由を忘れているようだな。我(オレ)は近衛木乃香を守る契約の下、麻帆良に教職員としている。ナギの息子とやらの教育のためではない」
「しかし、戦友の子じゃぞ？」
「それがどうした」

この雑種が。その程度も察せぬほど耄碌したか？

「そもそも、ナギ・スプリングフィールドは戦友などではない。一時的な主を共有した間柄にすぎん。我(オレ)は契約に基づく以上協力して戦いはした。だが、一度たりと戦友と思ったことはない。『馬鹿な友人』程度には思いはしたが」

そう、我にすれば、ナギ・スプリングフィールドはちょっとした友人に過ぎない。まだクルトやタカミチ、アルビレオの方が戦友にふさわしい。

「そして、その友人の頼みならば、もしかすれば依頼の片手間程度に育ててやる可能性も否めん。だが、貴様のような友人でも依頼人でもない雑種に、踏み台として扱われるのならば答えは否だ」

現在の依頼人は近衛詠春。依頼内容は『近衛木乃香を護衛せよ。万一魔法が知られた場合は、東洋呪術を教えてほしい。だが教職員としての仕事を優先して構わない』だ。

同時に実行可能な依頼ならば、受けることもある。だが、どこまで行っても『こともある』止まり。暇な時であろうと、依頼を受けぬこともあるのだ。

「しかし、ナギの息子だと？　我の記憶が正しいのならば、１０に満たぬのではないのか？」

詠春から聞いた話と、その頃からの経過時間を鑑みれば、９か１０。原作からずれている可能性もあるが。

「数えで１０じゃの」

結果から言えば、原作通りか。

「論外だ。我は子守などする気はない」

本当に論外だ。その程度のことに我を狩りだそうとするなど、愚かの極み。

「ではな。ああ、我(オレ)が大戦の関係者であることなどは公言するな。餓鬼ほど英雄志望思考が強い。五月蠅いようであれば、半殺し程度は行うつもりだ」

我(オレ)はＭＭに仕える義務も義理もない。むしろ、ＭＭに反逆する側。別にＭＭの怒りを買おうと知ったことではない。

「英雄の子？　親の七光りでやっていけるほど魔法世界は甘くない。女王の子？　自覚がない時点で意味がない」

「っ！？　それ以上は、アランさんでも許しません」

許さない？　く、くくく……ああ駄目だ、笑いが抑えられん。

「くはっははは！　『許しません』とは、何とも面白いことを言うな、タカミチ？」

「何が面白いことですか！？」

「最強種である真祖に勝てる。そんな幻想を抱かせて魔法世界に送り込めば、早死にする。まさか、その程度も分からなくなったか？」

悔しそうにタカミチが口の端を噛む。ガキの頃から魔法世界にいたタカミチだからこそ、魔法世界の厳しさは知り尽くしている。今の魔法世界の基本となる法は弱肉強食。自らの強さを誤認し、過大評価する者は、長生きできん。

「だったら君が」

「なるほど、真祖の吸血鬼に育てられた立派な魔法使(マギステル・マギ)い(ハイ・デイライトウォーカー)か。ふ、子供じみた御伽話にも登場せんぞ？」

そう言われて、ようやくこの馬鹿どもも我(オレ)の素性を思い出したようだ。大戦時の英雄である以前に吸血鬼であることを、軽んじてい

るとしか思えない。そもそも、真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）として戦い、負けろと言おうとしたのはそちらではないか。

正義に固執し、正義のためならば仕方ないと洗脳された屑ほどどうにもならん者はないな。やはり清濁併？でき、確固たる目的のためならば悪と呼ばれようと気にも留めないクルトの方が、これよりは使える。

だからといって、目的のためならば手段を選ばん雑種では駄目だが。

「では、今度こそさらばだ」

学園長室を出て、職員寮へ向かう。その途中、周囲に誰もいないことを確認し、見えないがずっと付いてきていたカメラをちらりと一瞥し。

「貴様、見ているな」

一言呟き、強烈な指向性咒式妨害電波（ジャミング）を用いて機能を停止させた。おそらくは超の作品だろうそれも、この至近で喰らえばひとたまりもあるまい。

超Ｓｉｄｅ

『貴様、見ているな』

「あらら、撃墜されたネ」

アラン専用ステルスカメラだったのだが、ばれていないと思って

いたのは私だけのようだった。もう少しステルス性を上げるか……
駆動音を落とす方が先決かな？

「でもまあ、アルトリウスさんなラ、この程度では怒らない筈ネ」

未来のアランを知るならば、この程度はお茶目で済まされると答えは出せる。まあ、怒られても大丈夫かな。

それよりも、茶々丸の強化プランをどうにかしなければ。ＡＩを法珠にすることが完了した現在、それにより可能となった咒式兵装を万全にするにはどのようにすべきか。

「持続しないカラ、防性咒式兵装は可能だガ、攻性咒式兵装はまたく上手くいかないネ」

魔力を自前の物にすると、内部魔導機関で使用する燃料がすぐに尽きるため、長期間使う事が出来ない。だからといって外部配給にするならば、配給者を誰にするか問題になる。茶々丸の妹達も、既にＡＩは生産されているが、ボディや組み込む咒式に関してはまだまだ。

Ｔ－ＡＮＫ－α３は咒式を組み込む気はなく、魔道兵装を効率よく使用するためにリソースをつぎ込めるが……

さてはて、どうするかな？

長谷川Ｓｉｄｅ

『貴様、見ているな』

「ち、撃墜されたか」

突然ＰＣの画面が暗転する。超の作ったカメラにハッキングを仕掛け、アルトさんの動向を確認していたけれども、そのカメラが撃墜されては意味がない。

「大丈夫ですか～？」

「ああ。ったく、超のカメラなら大丈夫だと踏んだんだがな」

あえなく発見されて、撃墜されてしまった。いや、もしかしたら、初めから気付いていて、私がハッキングしていることもお見通しの上で、あえて放置していたのかもしれない。

そういう人だ、アルトさんは。

「どうします？　私たちも動きますか～？」

「いや、私は動きようがない。そっちには動いてもらうかもしれないがな」

基本的に私は表立って動けない。紗夜は一部魔法先生にばれているが、私はまだ一般人だと思われているのだから。魔法使いとして動かなければならなくなったら、私ではなく紗夜に頼むしかない。

――ああ、紗夜が私と同じアルトさんの従者だと知ったのは２年になってすぐだ。一年間同じ寮にいてばれていないのならば合格だ、と。騙されていたと憤慨すればいいのか、信頼されていたと誇ればいいのか。

「それにしても、１０歳の先生ですか～。大丈夫なんですかね～？」

「無理に決まってんだろ。ガキに先生が出来てたまるか」

悪態をつく。普通ならば馬鹿げていると言うが、この場合は馬鹿だろと言うぞ。いくらなんでも、社会を知らないガキに、先生が出

来る筈がない。このクラスで一番頭がいい超が先生になっても、私は反発するぞ。

「ネギ・スプリンなんとかだったか？　今度可能な限り調べておくぞ」

「そうですね～」

……気を取り直し、ＰＣに別情報を映し出す。この間入手してほしいと頼まれたから、ハッキングによって入手した情報だ。セキュリティはあったが、今の私にすればそれほど固いものではなかった。

「学園結界。大停電時に予備電力に切り替わるその一瞬だけ、完全に結界がない瞬間がある、か。この程度なら、その時にハッキングすれば結界を丸ごと消すことも、改変する事も自由自在だな」

この結界がなくなれば、昔の私の目的も達成できなくもない。だが、別の理由からそれはできない。

昔の、ほんの3年前の私ならば、躊躇なく消し去っていたんだろうな。

「電子機器関係は私には無理ですから。お願いしますね～」

「任せろ」

実行するのは来年度の1学期に行われる大停電時。私自身に直接返るものはないが、自称『正義』の連中には苦しんでもらおう。

私が苦しめられた、1割でもいいからな。

第３３．５話「千雨の日常・ハンティング編」（前書き）

結構やっつけ。
後悔と反省は少ししてる。
そしてナンバリングを微妙に変更。原作開始直前ではなく、２年に上がった直後に起きた出来事としました。

第３３．５話「千雨の日常・ハンティング編」

長谷川Ｓｉｄｅ

私が非日常の一部を日常としたその日に貰ったダイオラマ魔法球。
アルトさん曰く『世界樹発光級の魔力が満ちているが故、一部術者にすれば天国（ごくらく）に近い環境』だが、『その魔力に適応進化した獣の巣窟故の天国（あのよ）に近い魔境』。一度暇つぶしに散策をしたことがあるんだが、あれは死ねる。魔法で強化された野生生物の宝庫なのだ。
結界である外周から徒歩１分で、稀に食獣植物が自生する森となる。通常の樹木さえ、並の刃物が通らないほどの固さを誇っていたりする。そして、そんな森に住まう動物もおかしい。まず、魔力による身体強化は当然。種族によっては属性変換すら行ってくる。より遠方に住まう獣ほど魔力恩恵が強くなり、世界樹付近になれば、弱い龍種を仕留められるほどの強さまで持っていたりする。
常人ならば踏み入れない、踏み入れば文字通り死ぬ世界。修業を始めたばかりの私は、外周からに３歩出たあたりで挫折した経験がある。
だが、今は違う。

「久しぶりに逝きましょうか～、千雨さん」
「字が違うぞ、紗夜」

魔力の使い方を覚え、咒式を覚え、術式を使用できるようになった私は、結界付近程度ならば生き延びることが出来る。紗夜がいるのならば、森の中に入っても安心できる。
後衛寄りの私と、前衛寄りの紗夜。互いの欠点を補える、最高のパートナーだ。

「アデアット」

アーティファクトである黒金の鎌が出現し、服装が変化する。呂色の筒袖の単衣のようなものと漆黒のズボンと濡烏のブーツ。どことなく死神のような服装というか、モチーフは死神と死神（キルバーン）。和装チックにしたかったらしく、私が考えてやった一品だ。

「コギト・エルゴ・スム　来たれ火の精霊８柱　私の手に集え。さらに『掌握　形態（モード）・灼熱魔人（クトゥグア）』」

さらに闇の魔法（マギア・エレベア）で火の精霊を直接取り込む。紗夜に、闇の魔法（マギア・エレベア）の適性はない。魔法の射手１矢を取り込めれば運がいい方と言えるくらいには。心に闇がなさ過ぎて、闇に依存する闇の魔法（マギア・エレベア）は全くと言っていいほど使えない。

だけれども紗夜には、精霊にひどく好かれるという特徴があった。水と油が混ざらないように紗夜は魔法と馴染まない。でも精霊は紗夜と良く馴染む。普通は馴染みすぎると弊害があるらしいが、好かれているから馴染むせいか、弊害なしで取り込める。

名前がクトゥルフなのは、クトゥルフ神話をモチーフにした小説を読んだからららしい。

「んじゃ私も。アデアット」

アーティファクトと共に服装が変化する。星光の殲滅者の防護服（シュテル・ザ・デストラクターバリアジャケット）に多少のアレンジを加えたものだ。呪式の属性から考えれば雷刃な魔法少女の防護服（テスタロッサ・バリアジャケット）じゃないかって考えたけど、さすがにあの露出はないよなぁ……

「特定音域に対する遮音結界展開……っと」

術式を展開し、遮音結界を張る。西洋魔法である以上、最終的には意思を以てして精霊に干渉しなければならないのだが、術式展開を魔杖錫杖『電王の王錫』にすべて任せることで、発動を容易にしている。法珠様々だ。

ああ、特定音域ってのは、紗夜のアーティファクト『死神の笛』の音域だ。これもアルトさんが実験したらしいが、音を聞かないように聴覚を閉ざしたけど体が動かなくなったらしい。音を聞くことではなく感じることが条件らしいと、当たりを付けたところ的中。それ専用の術式を開発し、私の『電王の王錫』に組み込んでくれたのだから頭が上がらない。

「っしゃ、行くか」

「はい～」

騒霊現象（ポルターガイスト）の応用で空中を滑るように紗夜の横を、電磁反発を利用してすっ飛ぶ私。どう飛んでるのかイメージできない奴は、円環少女（サークリットガール）を読めばいいんじゃないか？

「あ、左です」

紗夜の声に左を見ると、巨大な蜂がいた。とはいえそこまで大きくもない。高々３０センチメートルほどの電気を撒き散らしている、爆雷蜂だ。

現実的に考えれば異常な大きさだが、ここでは有情な大きさだ。私が挫折した時は、５０センチほどの鉄鋼蟻の群れがいたからな。

「こっちに関心は無しか。無視すっぞ」

蜂と聞くと、近づくだけで群れで襲ってくるイメージがあるが、それはミツバチやスズメバチのような、群れで動く蜂だけだ。世界

の蜂の大半の種類は、こちらから手を出さない限り襲ってくることはない。巣を壊されようと襲わないような蜂もいるほどだ。

「森に入ってみるか。ちょっとだけな」

「無理ですってこんなの～～！！」

「ふっざけんなあぁぁぁぁぁぁ！！」

森に入ったのはいいが、絶賛逃走中だ。いや、無理だって！　体長8メートル近い、鬣を燃やした獅子なんて！！　木々が邪魔して無けりゃ、とっくに追いつかれてる！？

「戦えよ紗夜！　火ならてめえの属性だろ！？」

「無理無理無理！　私より上の熱量持ちなんですよ、あれ！　同質だからこそ、弱い方は打ち消されるんです！　そう言う千雨さんなら、足止め程度出来るでしょう！？」

「足止めのために足止めてたら殺されるんだよ！　後衛職なめんな！　前衛がいない状態で戦うなんて不可能だよ！　てか、『死神の笛』使え！　生物相手なら無敵なんだろう！？」

「高熱で音が歪んで、効果がありません！」

くそっ！　森を出たら、結界までの数十メートルで追いつかれっぞ！？　どうす……！？

「避けろ！」

咄嗟に＜電加添砲（レイル）＞で私と紗夜を突き飛ばしつつ、＜磁界反障楯（ハルパ）＞で即席の電磁障壁を作る。そこに、金属並みの強度を誇る樹木を破砕しつつ、燃える獅子が突っ込んでくる！

「ＧＹＵＲＯＯＯＯＯＯＯ！！」

「あぶね！？」

電磁障壁で速度を殺された獅子は、ギリギリで私たちに危害を加えずに止まる。中途半端に止められたせいか、倒れた樹木に押しつぶされた状態で。

「チャンス！　収束砲準備！」

『電王の王錫』から、収束の術式を呼び起こす。あまり多くない魔力を一点に収束し、砲撃とする白い悪魔の十八番。ただし、私はそこにアレンジを加える。

「電磁雷撃系呪式第五階位＜雷霆散它嵐牙（アガロス）＞を術式に追加……！」

リリカルな魔法少女アニメ的に言えば、魔力変換資質：雷。３００万ボルトの雷撃を生む呪式を、収束術式によって撃ち出す。射出まで７秒！

完成まで残り４秒。獅子が倒木を押しのけて立ち上がる。

完成まで残り２秒。危険と判断したか私に狙いを定め、鋭い爪を振り上げる。

完成まであと1秒。振り下ろされた爪は私を切り裂くことなく、空中で縫い止められたように制止する。受け止めたのは、紗夜の騒霊現象（ポルターガイスト）の盾。実際には、見えない腕で無理やり押し返しているイメージらしいが、今はどっちでもいい。

「よくやったなぁ紗夜！」

「しくじらないで千雨！」

しくじらねえよ！　受けろ、我流砲撃魔法！

「スパークバスター！」

指向性収束雷撃咒式、スパークバスター。今考えれば同階位の＜電乖鬩葬雷珠（マーコキアズ）＞でもよかったんだな。あっちの方が殺傷能力高いし。

「ＧＹＵＲＵＯＯＵＵＵ……」

呻くような鳴き声を最後に、獅子は沈黙する。

緊張を解き、魔力吸収咒式を獅子の死体に打ち込む。消費した分を回収するためだ。これから帰る間にも、また襲われる可能性があるからな。

「これ、どうしましょう～。持ち帰って剥ぎ取りでもしますか～？」

「あ～、いいかもしれねえけど、使い道ねえぞ？　このまま放置でいいだろ」

既に鎮火している鬣なんかは対火性に優れた素材かもしれないが、それで何か作るのかと言われても別に何も考え付かねえ。皮や牙や肉だって、持ち帰っても宝の持ち腐れだ。そう、腐り始めたこの獅子のように……え？

もう腐り始めてる？　そんな異常はあり得な……まさか！？

「荒廃した腐花（ラフ・ラフレシア）か！？　逃げっぞ！」

「はい！」

世界最大の花を咲かせる寄生植物ラフレシア。それがこの魔法球内部で自己進化したのが荒廃した腐花（ラフ・ラフレシア）。腐敗性魔力を以ってして死んだ動物の肉を腐らせ、その腐汁を啜ることで生きる特殊食獣植物。腐敗性魔力に中てられ過ぎれば、生きた動物すら危うくなりかねない。

急いで森を脱出し、結界内に逃げ込む。振り返っても、追いかけてくる輩（やから）はいない。

「助かりました～」

「全くだ」

どうして生きていられるのか分からないほど、今回の敵は強かった。やっぱアルトさん抜きで探索なんてするもんじゃないな。次はアルトさんも誘わないとな。

私と紗夜の間で、全く同じ意見が出て、二人で笑いあった。

後に聞いた話だと、このダイオラマ魔法球の生物は、魔法世界の『通常の』魔獣よりも強いらしい。

ふざけんな。

第三十五話「原作1時間目を開始する」

明日菜Ｓｉｄｅ

少し前から同じ夢を見る。最初の頃はぼやけた映像が限界だったけど、昨日から映像がはっきりとしている。

高畑先生をさらにダンディーにしたようなおじさまが、私を守って倒れる。隣には二十歳前くらいの青年。周りには、たくさんの怪物。

まるで出来の悪い無音映画のように音はなく、ただ淡々と物語が進んでゆく。そして、夢の終わりに金髪の男性が現れ怪物を倒し、私の耳元で何かを囁く。

その瞬間、音が蘇る。

『ク　ス　迷宮　、　　よ』

でも、なんて言ってるのかは分からない。そしてその声を聞いた瞬間、浮上する感覚があり。

「……また、あの夢？」

目が覚めた。どうしても最後の言葉をきかなくちゃいけない気がするのに、何故かきちんと聞こえない。思い出そうとすればするほど、手のひらから水がこぼれるように、記憶が抜け落ちてゆく。

「今日初めて聞いたけど……迷宮だっけ？」

ずきりと、頭が痛む。この夢を見て、思い返そうとすると必ず頭痛が襲う。

でも、この頭痛は嫌ではない。この痛みの先に、私が忘れてしまった5歳以前の記憶があるような気がするから。

「おはような～。目、覚めた？」

「あ、おはよう木乃香……」

1年の時にやっていた新聞配達のバイトは、今はやっていない。学年で一番頭が悪い私に、ノースライト先生がバイト禁止を告げたからだ。

そんなんのは社会に出てから返すのが普通だ、なんて言ってたけど、早めに返すことの何がいけないと……！？

「あ、れ？」

そう言えば夢の最後に出てくる男性、ノースライト先生に似ているような気が……

そんなことないわよね？　少なくとも8年前の記憶の筈だから、先生だってその頃は15歳くらい。出てきた男性は、今の先生とほとんど変わらなかったように思える。

「そうよね、そんなことないわね」

うん、気のせいね。8年前に会ったことがあるとか言ってたけど、今から姿が変わらないなんてありえない。真祖の吸血鬼じゃないんだから。

「さてと、今週は遅刻ゼロ週間だっけ。遅れないように行くわよ」

「はいな～」

後で思い返せば、このときの私は既に記憶を思い出しつつあったのかもしれない。
『真祖の吸血鬼』なんて、魔法に関わっている人間しか知らないんだから。

紗夜Ｓｉｄｅ

「新任の先生、遅いですね～」

遅刻ゼロ週間なのに、先生を待っていたから遅刻しましたなんて、笑えない事態になりそうです。
走って遅刻しない最後の電車が次に来ますから、もしそれに乗っていないようなら、アルトさんに確認しなければいけないですね。

「名前はネギ・スプリングフィールド。イギリスはウェールズ出身。年齢は数えで１０歳。特徴は紅い髪」

あれからいろいろと調べてもらいましたから、魔法世界の英雄は、名前程度なら知っています。そして新任の先生（ネギ・スプリングフィールド）のお父さんがナギ・スプリングフィールドで、紅き翼（アラルブラ）のリーダーで英雄のひとり、だったっけ。

「ん～、本当に乗ってくるんでしょうか～？」

どっと学生の波が押し寄せる。あの電車が今日遅刻せずに済む最

後の便だし、これは確認を取らないとまずいかなぁ？

「って、あれ～？」

人波の合間に、棒のような何かがひょこひょこと見える。弓道部の弓や薙刀部の薙刀、剣道部の刀袋とも違う。棒に直接布を巻き付けたそれは、魔法使いの杖のようにも見えますね。

「あれですか～？　ごめんなさい～」

ちょっと騒霊現象（ポルターガイスト）で人波に隙間を作り、潜り込みます。飛べば早いんですけれど、魔法使いのルール違反ですからやりません。

そうやって人を押しのけて進むと、１０歳くらいの紅い髪の男の子が杖を背負っていました。この女子校エリアにわざわざ来るんですから、間違いないですね。

「あ、やっぱり～。ネギ・スプリングフィールドさんですか～？」

「あ、はい。確かに僕はネギですけれど」

「初めまして～、麻帆良本校女子中等部２－Ａの相坂紗夜です～。スプリングフィールドさんの案内に来ました～」

しっかりと挨拶します。マスターに初対面の人は名字で呼ぶよう徹底して教えられていますから、そこは間違えません。自分よりも幼い子供でも、忘れてはいけません。

「あ、初めまして。僕はネギ・スプリングフィールドです。今日からこちらで教師をします」

うん、子供は素直が一番です。魔法使いの修行できたと聞きましたが、それでも子供は子供ですから。

「それじゃあ行きましょうか～。はぐれないでくださいね～」
「は、はい！　あ……は、は……」

突然魔力が生じます。見れば、スプリングフィールドさんがくしゃみをしそうになっていますけれど……その程度で魔力が乱れるんですか？　駄目駄目ですね。
魔力暴発で何が起こるか分かりませんから、射線から少し外れましょうか。さて、何が起こるんでしょうか。

「はっくしょん！」

突風が生じました。それにこれは……武装解除でしょうか？　近くにいた女子の服が、一部破れてしまっています
ん～、本当に魔法学校を卒業したんでしょうか？　私でも、もっとしっかりとしてから社会に出るべきだと思うんですけど。

「あれ、相坂さん？」
「あ、おはようございます、高畑先生～」

この状況をどうしようかなって考えていたら、後ろから高畑先生に声をかけられました。高畑先生は、私の体がマスターによって作られた人形であると知っている魔法先生。そして、マスターやアルトさんに悪い感情を持っていない魔法先生の一人。
体質のせいで魔法詠唱が出来ないそうですが、それでも学園上位の実力者で、ナギ・スプリングフィールドと同じ紅き翼（アラルブラ）に所属していた英雄の一人……だけど、魔法が使えないから偉大な魔法使い（マギステル・マギ）にはなれなかった人。
そして、私たちの担任の先生です。

「ヤッホー、タカミチ～！」

減点ですね。公私混同は避けるのが、社会人の基本ですよ。まあ私は、死んでいた期間も含めれば、社会人どころか７０過ぎのおばあちゃんですけど。

「ネギ・スプリングフィールドさんです～」

「ああ、大丈夫だよ。知り合いだからね。久しぶりだね、ネギ君」

「あ、遅刻しそうなんで、先に行ってもいいですか～？」

「ん、そうだね。それじゃあまた後でね、相坂さん」

「はい！」

高畑先生とスプリングフィールドさんが和気藹々と話し始める前に許可を取って、中等部に急ぎます。魔力でちょっとだけ身体能力をブーストしても、この場合は許されますよね。周囲には無自覚に気でブーストしている生徒もいますし。

「いっそげ～、いっそげ～」

口ずさみつつ、時速３６キロ程度で駆け抜けます。明日菜さんは無自覚なのに６０キロとか普通に出しますから、麻帆良では普通です。

千雨さんは呆れるかもしれませんが。

アルトリウスＳｉｄｅ

始業の時間ぎりぎりに紗夜が来た。ナギの息子の出迎えを頼んだ

のは我（オレ）だから、例え遅れようと叱責の対象にはできん、のだが。そもそも、何故当日の、時間ぎりぎりに麻帆良入りする。ネギは郷に入っては郷に従えという言葉を知らんのか？　日本では時間厳守が基本中の基本。むしろ１０分前行動が出来なければ失格だ。

「相坂。確か新任の先生を迎えに行くよう指示されていた筈だが。彼は今、学園長室か職員室か？」

　尋ねる。原作では学園長室に明日菜と木乃香が一緒にいた、はずだが。紗夜を迎えによこした影響でずれた可能性も否めん。

「分かりません～。高畑先生が途中で引き受けてくれましたから、駅前で別れました～」
「……駅前だと？」

　時計を確認すれば、既に始業の時間を過ぎている。おそらく急いだであろう紗夜がぎりぎりなのだ。未だネギはここに至る道中だろう。屑タカミチと共に。
　タカミチは屑ではない？　２－Ａの担任でありながら、連絡もなしにＨＲに遅れるような存在は屑で十分だ。

「了解した。今の会話で分かると思うが、新任の先生が――まあ教育実習生だが、２－Ａに就任する。朝倉」
「はい！」
「騒がないことを条件に、朝のＨＲを教育実習生への質問をまとめる時間にすることを許可する」
「さっすが！　それじゃあ――」

　にわかに騒がしくなり始めたクラスが、周囲のクラスに影響が出るほどにならんように抑え込む。１時間目は我（オレ）の担当する数学（シラバス）。講

義実施要綱に影響が出ない程度ならば、我(オレ)が授業を変えることも可能。

そう考えていた時間があった。

「――遅い」

（まずい、まずいって！）↑朝倉

（ノースライト先生、結構怒っているな）↑龍宮

（勘弁してくれよ……）↑長谷川

（す、少し怖いです～）↑宮崎

（大丈夫ですわ、のどかさん）↑雪広

（あんな機嫌悪い先生は初めてやわ）↑近衛

（ごめんなさい～、私が連れてきてれば～）↑相坂

既に9時を過ぎた。４５分しかない貴重な授業時間が、３０分も残っていない。

ここまで遅いと、職をなめているとしか思えん。たとえ立派な魔法使い(マギステ・ル・マギ)になるための修行だろうと、許されるものではない。

「それじゃあネギ――」

「全員、席に戻れ」

外からしずなの声が聞こえる。ネギと言った以上、ネギ・スプリングフィールドもいるのだろう。それ故、現在席を離れている全員に、着席を求める。

我(オレ)が苛ついていることを察したか、全員無言で素早く席に着く。

そしてシンとなった空気を破るように。

「し、失礼します」

ガラリと戸をあけ、ガキが入ってくる。なるほど、見た目はナギ

を子供にすればこうなる、といった感じだ。唯一、その表情がナギと違い、不良系ではないが。

そして、教室がざわめく。まあ一部以外は、新任の先生が数えで１０歳のガキであることを知らんからな。致し方あるまい。

てくてくと教室に入ってくるガキ。だがな、席に着かせたのは別に貴様のためではないぞ。

「は、初めま」

「さて、授業を始める。新任教師の挨拶等は、２時間目にする。２時間目はその先生が担当だからな」

まるでそこに誰もいないかのように、我（オレ）は授業を開始する。

いじめ？　そのようなことはない。ただ授業時間が押し過ぎているから、仕方なく始めるだけだ。

「せ、先生」

「どうした朝倉、文句でもあるのか？」

「い、いえ、ありません……」

睨むことで黙らせる。また、教壇の前で何が起きたか理解できていないガキを窓際の椅子に追いやり、授業を開始する。

１時間目終了まであと２０分を切っているのだ。あまり手間をかけさせるな。

「授業は以上だ。本日できなかった分が多すぎるため、残りは宿題とする。日直、号令」

「き、起立～、礼～」
『ありがとうございました』

宮崎のどかのどこか間延びした――と言うよりは遠慮がちな号令で、1時間目は終了だ。全く、ガキが来るのが遅すぎたせいで、当初の予定の半分も進まなかったではないか。

「さて、お待ちかねの新任教師の紹介だ。とっとと来い」
「あ、はい」

偶然だが、本日の我（オレ）は2時間目を受け持ってはいない。このガキが馬鹿をしないためにも、居残る必要があるからな、ちょうどいい。

「ええと、初めまして。今日からこのクラスの副担任になります、ネギ・スプリングフィールドです。担当はまほ、英語です。よろしくお願いします」

おい、ガキ。担当は魔法だと言おうとしたな。頭を短刀で刺されたいか？　七夜体術には暗器がちょうどいいのでな、常に手元に置いているぞ。

「朝倉、質問は好きにするがいい。ただし、他のクラスの邪魔になるようなことになれば、その時点で停止をかけるぞ」
「大丈夫ですって！　それじゃあ……」

しばらく見ているが、特に妙なことにはなりそうにないな。
これ以上の面倒は見切れんからな。良かったな、ガキ・スプリングフィールド？

「そう言えばアスナさんとこのかさん」

「なによ！」
「ほえ？」
「学園長から聞きましたが、しばらく僕はあなたたちの部屋に泊まることになるそうです」
なるほど。確かに職員寮に空きはなかったな。だが、一人部屋である職員も数名いる。このガキの泊まる女子寮の二人いる部屋よりは十二分以上にマシな部屋が。
だがまあ、我（オレ）にすればそのようなことは比較的どうでもいい。木乃香が危険にさらされた瞬間、このガキの首を刎ねれば済むことだ。
＜リュミス。ネギ・スプリングフィールドが木乃香の部屋に泊まることになったようだが、通達は来ているか？＞
＜何いきなり念話を……って、それ本当？　私は何も聞いてないわよ＞
＜完全な学園長の独断か。今のうちに話をつけておけ＞
＜分かっているわ。ところで、万が一、ネギ・スプリングフィールドが木乃香を害するようなことがあった場合はどうするの？＞
＜適当に処分しろ＞
＜了解よ＞
ガキの知らんところで、着々と進む処刑計画。ああ、別にアスナは巻き込まれようと気にすることはない。巻き込まれているうちに記憶を取り戻すだろう。
そんなことをしているうちに、アスナが肩を怒らせ教室から出て行こうとする。おいおい。自習に限りなく近いとはいえ、今は授業中だ。
「神楽坂。どこへ行こうというのだね？」
「学園長のところよ！　ちょっと抗議してくるわ！」

「それは構わんが神楽坂。現在は授業時間だ。後7分で授業が終わる故、それ以降にしろ」
「……分かったわ」
我(オレ)の説得に応じ、しぶしぶ教室から出ていくことを諦めるアスナ。
だが、何かを思い出したように我(オレ)の下に来る。
さて、何の用なのか。
「そういえばノースライト先生に、お兄さんっています？」
「否、亡くなった姉と義理の姉がいるが、兄はいない。何故だ？」
「あ、ううん。ちょっと夢で先生によく似た人を見た気がするから、もしかしたらと思って」
思った以上に、封印は解けかけているようだな。このままなら数日とせずに、何事もなくとも思いだすかもしれん。
「記憶の迷宮が崩れ落ちるまで、あと僅か、か。」
「迷宮……崩れ落ち……え？」
目を瞬(しばた)かせ、頭を軽く押さえるアスナ。まさか、既にキーワードも知りつつあったか？　だとすれば、少々早まったかもしれん。
「どうした、神楽坂。頭痛か？」
「え、そんなことあるわけないじゃない」
我(オレ)の言葉の上での心配をはねのける。それでこそ神楽坂明日菜だ。
あの無表情で無感情なアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアとは違う、馬鹿だが快活で心優しい、新しいアスナ。
ここでチャイムが鳴る。7分とは意外と短いものだ。

「では、2時間目を終了とする。神楽坂、学園長室に行くなら早く行け」
「ありがとうございます！」

勢いよく頭を下げ、ツインテールを跳ねさせるアスナ。その際、ガキの手を引くのを忘れない。ガキを忘れたら、話し合いにならんからな。

見れば、木乃香がアスナの後を付いていく。見守るつもりか刹那も付いてゆき、真名は苦笑いしながら見送る。

「使い物にならんな、あれでは」
「辛辣ですね、マスター」

キティの酷評も知らず、ガキは生きる。

今日も平和だ。

第三十五話「原作1時間目を開始する」（後書き）

途中のガキ・スプリングフィールドは誤字ではないです。
アルトの中でのネギの二人称がガキになったため、ファミリーネームを追加してガキ・スプリングフィールドです。

ここで皆様にアンケートです。

四番目（クゥアルトゥム）・火の『フューリ・アーウェルンクス』
五番目（クゥイントゥム）・風の『サージ・アーウェルンクス』
六番目（セクストゥム）・水の『プライ・アーウェルンクス』
自身のネーミングセンスが低いため、名前が悲しいことになっている気がします。
『もっといい名前があるぜ！』と言える方は、感想に追記していただけると幸いです。

第三十六話「初日の魔法ばれはテンプレ」

授業が全て終わり、授業をしていた２－Ｄから担任として２－Ａに戻る。ガキは何故か２－Ａしか受け持たないらしいが、子供だからと言い訳でもするつもりか。まったくもって無様すぎる。

麻帆良に教師としてきたのか、修行としてきたのか。はっきり言おう。あのガキはどちらにもなっていない。

修行が先生など、一体何を学べと言うのか。魔法先生としてというのも間違いだらけだ。魔法先生は、魔法使いの街を守るために教師になった者を指す。修行のためならば、魔法使い未満であるガキは魔法先生に慣れない。ならばただの先生だろうが、それでは魔法使いとしての修行にはならん。

おそらくはＭＭの眼の届く範囲でＭＭの息がかからないよう工夫しようとしたのだろうが……お粗末が過ぎる。そもそもくしゃみで武装解除が暴発したと紗夜から聞いた。そんな魔法の隠匿がまともにできんガキでは、『魔法使い』も『魔法先生』も『先生』も、どれも名前負けだ。

「“英雄に仕立て上げられる道しか存在しない哀れな道化師。それが貴様だよ、ネギ・スプリングフィールド”」

蔑みを込めて呟く。ただ周囲に流されることしか知らず、それに疑問を持つことさえしなかった雑種。それがネギ・スプリングフィールドという名のガキの正体。

周囲を少し見れば、自分が優遇され過ぎていることに気づけたはずだ。貴族のように、隔離されて育ったわけではない。メルディアナにいたのならば、他の魔法生徒と自分を比べる機会もあったはずなのに、気付こうとしなかった。

禁書庫に入れることに疑問は？　何をしても怒られなかったこと

に疑問は？　魔力制御すらできないのに首席に成れたことに疑問は？
　これならば、馬鹿みたいな勘と天賦の才のみで只管突き進んだナギの方がまだ遥かにマシだ。少なくとも自らの意思で考え、自らの意思で進んでいた。思考するふりをして思考停止し、周囲に流されるだけのガキとは、夜空の月と水面の月ほどの差がある。
　それが、遍在にて情報収集した結果我（オレ）が得た、ガキの印象だ。

「“今から思考を切り替えさせるのも骨が折れるが……勝手な思い込みである『綺麗な正義』や『父親の幻影』さえ汚さねばどうとでもなるか”」
「“確かにそうね。あなたの行動が未来を決める”」
　我（オレ）のドイツ語の呟きに、割り込むようにドイツ語で語りかける声。
　そうか、彼女ならば。

「“――超か。そうか、貴様ならドイツ語もできるか”」
「“そこまで流暢に喋られると、さすがに厳しくはあるけれどね”」

　軽く肩をすくめる超鈴音。そう言いつつも、それなりの流暢さで語りかけてくる。

「“さて、何の用だ。貴様の頭脳ならば、態々我（オレ）に聞かずともいいだろうが”」
「“喋る場所は考えることね。ドイツ語を聞きとれる人に聞かれれば大変なことになることくらい予想はつく筈よ”」
「“そうだな、誰も聞きとれんと見くびり過ぎていた。礼を言おう”」
「そうダ。放課後にスプリングフィールド先生の歓迎会をやることになたネ。その旨を伝えにきたのだたヨ」

突然日本語に戻し、会話を始める。聞かれるとまずいことを聞かれないようにする程度の脳は、超にはある。ガキならば、何の躊躇いもなく『魔法』と人前で言うほど馬鹿であろうが。

「了解だ」

……ん？　歓迎会前に何らかのイベントが……くそ、原作知識など、もはや『何かあったような』程度にしか思い出せんのは痛手だ。

「“そうだ、アルトさん。茶々丸の後続機が完成したのだが、預かってもらえないかな”」

「“そのようなことはキティに言え。ところで、そのガイノイドに名はあるのか？　なければこちらで付けるが”」

独語で会話する。茶々丸がガイノイドであることを知る者は工学部と魔法使いのみ。普通の先生や生徒に聞かれることは極力避けねばならん。

「“考えていないね。妙なものでなければつけて構わないよ”」

「“そうか”」

会話はそこで途絶える。教室が近いことと話題がほぼないことが重なった結果だろう。くそ、この後あったイベントは何だ？　妙に引っかかって仕方ない。

紗夜Ｓｉｄｅ

ＨＲが終わり、歓迎会まで少し時間があったので、ちょっと図書館島に行っていくつか本を借りてきました。

その帰りに、一人で持つにはちょっと多い本を抱えて、誰かがふらふらと歩いているのが見えました。少し駆けよって横から覗き込めば、のどかさんでした。大丈夫でしょうか？

「のどかさん。大丈夫ですか～？」

「は、はわ！　紗夜さん、驚かせないでください」

横合いから声をかけただけですけれど、想像以上に驚いていました。でも、階段が近いのにそんな驚いて大丈夫でしょうか？

そう思っていたら、ふらっとよろめく、のどかさん。って、そっちは落ちてしまいます！

「あ――」

「のどかさん！？」

慌てて手をのばしますけど、ちょっと慌て過ぎたのか、のどかさんごと私も落ちてしまいました。でも、こうなったらもう慌てる意味はありません。ちょっとのどかさんにばれてしまいますけど。

（騒霊現象（ポルターガイスト）でクッションを作って、そこに落ちれば何とかなるはず）

騒霊現象（ポルターガイスト）は大別して二種類あります。物を支える平面の力場と、空間に作用する立体の力場が。平面力場は何かを押すイメージで使うもので、立体力場は何かを包み込むイメージで使うもの。

今回は立体力場で私とのどかさんを包んで、落下とは逆方向に、均等に力を加えます。そして私が下になり、のどかさんに衝撃があ

まり伝わらないように工夫します。この体が壊れても、魂が傷付かない限り私は何度でも復活できますから。幽霊って、こういうときは便利ですよね。

あ、でも、のどかさんの心に傷作っちゃうかな？

「きゃあぁぁぁぁぁ！！」

のどかさんの悲鳴と一緒に落ちてゆく。けど途中で、ふわりと奇妙な浮遊感。視線だけで周囲を見渡せば、杖を持ったスプリングフィールド先生が駆けてくる。

そう、魔法を使ったんですね。私が騒霊現象（ポルターガイスト）を使えなかったら、確かに二人して大けがの可能性があったわけですから、ここは素直にお礼を言うべきですね。『緊急時の魔法行使』に引っ掛けることもできる状況ですし、罪には問われないでしょう。

「あでぼっ！」

私たちを抱きかかえるようにスプリングフィールド先生は受け止める。最後の一瞬はかっこよくなかったですけれど、それでも十分役に立ってますね。今までのマイナス点を、ほんのちょっとプラスにするくらいには。

まあ、悪くはないんですけど――

「あ、あんた……」

――ごく普通の一般人に見つかるのはマイナス……いえ、緊急時ですから、プラスマイナスゼロくらいで。私がいなければ、私が逸般人じゃなかったら、危険だったことに変わりはありませんから。

まあ、この時のことを聞かれたら、魔法生徒の一人といってごまかしましょうか。今遠くでやり取りされている明日菜さんとの会話

を聞く限り、問答無用で記憶操作されそうですし。

「あ、大丈夫ですかのどかさん～？」

「え、あの……はい」

スプリングフィールド先生のおかげで、けがを負わずに済みましたか。魔法ばれも起きていないようですし、明日菜さんは運が悪かったと思うしかないですね。

あ、魔法の強風。また武装解除でしょうか。やっぱりマイナス点をつけましょうかね？

「本を半分持ちますよ～。次は怪我するかもしれませんから～」

「あ、ありがとうございます」

「お礼はいいですよ～。クラスメートでしょう～？」

ちょっと本が重いので、こっそりと騒霊現象（ポルターガイスト）を使います。アルトさん曰く、『イカサマは見抜けない方が悪い』だそうですから。まあ、今までばれたことなんて一度もないですけど。

幽霊だったころから、存在そのものが薄かった私の力は、隠匿性が高いそうで。そうだとしっかり認識しないと、アルトさんも見失いそうだとか。地味なんて言わないでください。

エヴァンジェリンＳｉｄｅ

夜、私の家であるログハウスにアランを呼び、愚痴をぶちまける。そうでもしなければやってられん！

「ええい、本当にあのボーヤはナギの息子なのか！？」

気乗りしなかった放課後の歓迎会にわざわざ参加してやり、そこでのボーヤの痴態に怒りが爆発する。人前で魔法を当たり前のように行使するなど、常識の欠片もない！

「押さえろ、キティ。磨けば光る素質が多かろうと、放置されれば錆びてくすんで見る影もなくなる」

「それほどまでにボーヤの今までが酷いと？　あれは酷いなどと言うレベルをはるかに超越しているぞ！？」

私の怒りはそうそう治まりそうにない。魔力素質だけを見れば、そこらの魔法使いなど霞むほどの力の保持者。なのにやっていることは、５つの子供でも守るようなルールの違反。

そもそも、魔力の制御すら碌にできないくせに、どうすれば飛び級かつ首席で卒業できるというのだ！　私が育てた弟子だったら、基礎の修行からやり直しだ！

「だが、これを読めばその怒りが些事と化す」

「む、これは……」

アランが手渡した資料を読む。メルディアナで特例として禁書庫の閲覧が許可された事例から始まり、明らかな成績の水増しまで。最後にはメガロメセンブリアからの、ナギと同じ１０歳で卒業させるようにとの通達。

「ははっ！　こんなバカげたことをし続けていたのなら、見逃してもらい続けたのなら、あんな人物になる！　ボーヤは父（ナギ）の幻想を追い求める道化（ピエロ）として育てられたのか！」

「同感だ。だが我（オレ）は同情などせん。ガキは他者と見比べることすら

怠った愚者だ」

ボーヤの故郷の村は悪魔により、数名を除き全員が石化している。それはトラウマとしてボーヤの脳裏に焼き付いているだろう。なのにボーヤが研究していた魔法は攻撃魔法。故郷を救う事も可能な魔力を持ちながら、進もうとするは復讐の道。

ああ、これではまるで、私たち悪の魔法使いと同じではないか。

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）や父（ナギ）の幻影に固執しているだけで、一皮むけば悪の魔法使いだぞ、ボーヤは。メルディアナから攫って、私たちが育てた方が大成したんじゃないか？」

「くくく。そもそもが、大抵の正義の魔法使いとやらは、正義の名の下に横行する悪だ。それを理解していない時点で、否、理解できないよう洗脳されている時点で、ＭＭ元老院の腐敗度が分かる」

確かに言われればそうだな。旧世界の魔法学院は、メガロメセンブリアの直轄組織だったな。魔法学院入学後は、ただメガロメセンブリアの好きなように育てられ……？　ならば、何故ここにいる？　私がメガロメセンブリアの元老院ならば、直轄組織に入れずに手元に置く。その方が確実に自らの物と出来るのだからな。

アランは笑う。おそらく、それなりの答えを得ているのだろう。

「最後の抵抗だろうな、一人の少年の人生を無茶苦茶にされんための。既に手遅れに近いが、歪んだ正義を正確に知ることさえできれば、まだ元の道に戻れるかもしれん」

「ほう、アランはあのボーヤを弟子に取ると？」

「まさか。土下座されようが取る気はない」

尋ねるが、秒の逡巡もなく返される。それも当然か。アランは興味のないものにはどこまでも無関心だ。それがたとえ他人の命の危

機であろうと。

「キティはどうする？」

「そうだな。僅かでも見込みがあるのであれば、育てるのも悪くはないな」

その僅かな見込みも、現在はないが。だがまあ、何らかの要因で激突し、一矢報いることが出来るのならば、見込みは発生するかもしれん。

その『何らかの要因』は、既に存在する。『桜通りの吸血鬼として行動しネギ・スプリングフィールドと戦え』などと馬鹿げた通達がジジイからきている。『その間に登校地獄の呪いを解いても良い』とも言われているため、馬鹿げていると知っていても参加せざるを得ない。

アランですら、登校地獄の呪いは解呪が難しいらしいからな。

「そう言えばアラン。まだ登校地獄の呪いは解けそうにないのか？」

「研究は煮詰まった」

首を左右に振り、溜息と共に言葉が吐き出される。くそ、アランですら駄目か。ならばもう一つの方法、ボーヤの血を可能な限り吸い上げ、それを鍵として解くしかないな。

まったく、厄介な呪いを遺して逝く。

第三十六話「初日の魔法ばれはテンプレ」（後書き）

煮詰まった：結論を出す段階に至った状態
行き詰まった：先に進むことが出来ない状態
使用方法を間違えないように注意しましょう。ちなみにアルトリウスは前者の意味で言いました。

2，3，4時間目はスルーします。いちいち書いてるとすすまな…
……いえ、なんでもないです。

第三十七話「貴様はこの人物のことを覚えているのか？」

ガキが来てまだ5日目だが、もはや呆れてものが言えん。

初日から魔法ばれ（紗夜談）に人前での読心術（我確認）。2日目には生徒を貶す発言（紗夜談）に惚れ薬の作成（超カメラ情報）に惚れ薬騒動（千雨談）。3日目には女子寮大浴場で魔法使用（千雨談）。魔法使い云々以前に、人として終わっている個所すらある。特に惚れ薬はそれだけでオコジョ刑が確定するほどの犯罪なのだが。それを知らんとは、本当に首席だったのか疑わせる。実際は首席でも何でもないのだが。

個人的には木乃香をもっと巻き込めば我としても動きやすかったのだが、そこまで期待するのも間違いか。だからといって傷つけるような状況に至れば、抹殺確定だが。

昼休みも半ばを過ぎたあたりの職員室。ガキとしずな先生が隣の席で会話していることを尻目にゆったりと時間を過ごしていたら。

「ネギセンセー！」

「ノースライト先生っ～～！」

「どうした、和泉亜子に佐々木まき絵。叫ばずとも聞こえる」

我が2－Aの生徒が飛び込んでくる。ガキが来てから厄介事だらけだと言うのに、さらに厄介事か？

「こ、校内で暴力が……」

「見てくださいこのキズッ！」

「え、ええ！？　そんなひどいことを誰が！？」

ちらりと傷を見るも、どれも軽傷だ。校内暴力と言うには大げさが過ぎるが……比較的軽症だった二人が来た可能性が否めんな。あ

りえんだろうが。

「この程度でいちいち騒ぐな。で、相手は何処の誰でどのような状況だったのだ？　スプリングフィールド先生は飛びだすな」

勝手に動こうとしたガキの首根っこをひっ捕まえて、二人に事情を聴く。冷たいとかそういうわけではなく、現状認識を出来ずに動くことの愚かさを知るだけだ。

「高等学校の生徒が私たちの使っていたコートに乱入してきて、私たちを追い出そうとしてきたんです！」

「それに抵抗したら、ボールをぶつけてきて実力行使に……」

「どこの高等学校か分かるか？」

「えっと……ウルスラです」

とりあえず分かったことは、ウルスラ――正式名称『麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校』の生徒が２－Ａの使っていたコートに乱入し、実力行使でコートを奪いに来たという事だ。

しかし、ウルスラか……そう言えば知り合いがいたな。ウルスラの生徒であるのならば、まず逆らえん知り合いが。シスターシャークティー以上に逆らえん生徒が。

今年の秋、とある理由で再会した際にアドレス交換をしたのだが、連絡を入れるのは初めてだな。

「和泉亜子。スプリングフィールド先生を連れて現場に向かえ。佐々木まき絵は手当てが必要な生徒が多いと思うのならば保健室へ行き救急箱を借りてこい。以上だ」

ガキから手を離し、その生徒に連絡を入れる。さて、気付いてくれるか……

『お久しぶりですね、ノースライト先生。何かご用でしょうか？』
「ああ、すまんな。本校女子中等部にそちらの生徒が来て、我(オレ)のクラスの生徒と喧嘩になったそうでな。君の一声で全て収められるのではないかと思ったのだが」
『そうですね。確かに私がその場に行ければ直ぐにでもとめられますが……申し訳ありません。今私は動けないので……こちらから数名派遣しますか？』
「否、それには及ばん。こちらで止める。忙しいところすまなかった」

彼女は本当に一瞬で、全てを収めることが出来る存在だったのだが……いないのならば本校(こちら)女子中等部の教師がどうにかするしかあるまい。

「急ぐか。ガキに任せるとロクなことにならなさそうだ」

どうせ魔法とか魔法とか魔法で物事を解決しようとするのだから。否、それならば、わざと放置して木乃香に魔法ばれを……それこそ馬鹿げているな。クラス全体を巻き込むのはさすがに気が引ける。

「――高等部の年増の方々はお引き取り願えます？」

……おい。到着して聞いた第一声が、相手を貶める発言と言うのはどういう事だ。それも、とりようによってはかなりまずいことになる言葉を。
致し方あるまい。我(オレ)が少々きつい灸をすえてやるか。

「ほう。それは我(オレ)のような一般教職員に対する挑戦状かね、雪広あやか？」

「の、ノースライト先生!?　いえ、そういうわけではありませんが」
「フフフ。ミルクくさい子供のくせに――」
「高校生。売り言葉に買い言葉は分かる。だが、年上ならば大人らしい対応をして見せろ」
「「……」」

２－Ａの生徒もウルスラの学生もだんまりだ。まあ、この程度で反論できなくなるような低能ならば、操るのも容易い。とはいえ、そこまでする必要もないが。

「両者ここまで。この件はシスターシャークティーに報告させてもらう」
「え、そ、そんな！　そこまでする必要はないでしょう!?」
「少なくとも先に使用していたのが中等部の学生である以上、使用権は中等部側にある。それを力ずくで奪おうとした時点で酌量の余地はない」
「くっ……覚えてなさい！」

捨て台詞と共に去る聖ウルスラ高等部生徒一同。だが、その目に諦めはない。おそらくはあと一度か二度は突っかかってくるだろうことは容易に想像できる。
やはり、彼女に協力を要請して……電話か。それも都合のいいことに彼女からの。

「どうした」
『こちらの用事が終了しましたのでご連絡を。それと、先程は何もできなかったので、その謝罪を――』
「謝罪は不要だ。同様のことが起こらぬよう尽力してほしい」
『ありがとうございます。こちらも全力を尽くすことにしたします』

ではな、と一言呟き通話を終了する。さて、これで決着すればよいのだが。

それから30分経たない5時間目。まさかこんなに早く行動するとは思ってもみなかった。暇人共が。

＜それで、現状は？＞

念話で情報を提供する千雨と紗夜に確認をとる。

＜ネギ先生は高等部に捕まった。で、ネギ先生を賭けて中等部と高等部でドッジボール対決だ＞

＜あ、向こうが名乗りましたね～。麻帆良ドッジ部『黒百合』だそうです～＞

＜ほう、その情報はありがたいな＞

ようやく彼女に渡す情報は揃った。クラスと所属グループ、そして授業妨害行為。これでもう逃げ場など与えん。

＜貴様らは参加しないのか？＞

＜まさか。私はインドア派だし、ネギ先生が捕まった方が、気が楽になる＞

＜私は幽霊ですし～、加減が出来るか分かりませんから～。マスターも参加してませんよ～？＞

＜そうか。こちらは助っ人を連れてそちらに向かうとしよう＞

＜わかった＞＜わかりました～＞

念話を終了し、携帯にて連絡を入れる。本当にウルスラが自習になっているのであれば彼女も自習中であり、この電話に出ることが出来るはずだ。

『……一応自習中なので、電話は控えてもらえるとありがたいのですが』

なるほど。自習だという事に間違いはなかったようだな。

だからといって、許すわけではないが。

「すまんな。そちらの生徒が再びこちらに来たのでな。それも授業妨害だ」

『っ！？　それは緊急事態ですね。ウルスラの恥となる前に……いいえ、もう遅いかもしれませんが、それでも止めないよりは止めた方がいいでしょう。私が向かう事にします』

「助かる」

特殊生徒会長である彼女が来るのであれば、この馬鹿げた諍いは一瞬で終わる。なぜならば彼女は、ウルスラの生徒の８割以上から慕われる存在なのだから。

『誰が首謀者か分かりますか？』

「名前は知らん。が、２－Ｄの生徒で、『黒百合』と名乗った」

『ウルスラのドッジボール部ですね。確かに大会が近いとはいえ、中等部に迷惑をかけていいものではないでしょうに』

「全くだ。ああ、場所は女子中等部屋上なのでな。迎えに行った方がいいか？」

『お願いします。一応は部外者なので』

「では、本校女子中等部前にて待つ」

通話終了。ウルスラの生徒会長は我（オレ）の就任している二年間で３人いるが、特殊生徒会長になったのは彼女以外にいない。歴代では十名ほどいるらしいが。

本校前で待つこと数分。彼女がやってきた。

「お久しぶりですね、ノースライト先生」

「久しいな、聖ウルスラの特殊生徒会長（エルダーシスター）、宮小路瑞穂」

「そうですね。特殊生徒会長（エルダーシスター）就任後に偶然出会ってそれ以来ですから、半年ぶりですね」

特殊生徒会長（エルダーシスター）。それはウルスラの通常の生徒会長選出選挙と言う名の全校人気投票で、６割以上の得票率を出した場合に呼ばれる称号。その中でも彼女は、実に８０％オーバーの得票率という歴代最高の人気を叩きだした。

それはすなわち、ウルスラの学生の８割以上が宮小路瑞穂という人間を認めている証拠でもある。妹制（スール）の果てであるこのシステムに喧嘩を売るウルスラの生徒はまずない。それ即ち、彼女一人でウルスラを動かすことが出来ると言っても過言ではない。

「行くぞ。二度と喧嘩が売れぬよう厳しく指導せよ」

「分かっています。恥の上塗りなどさせませんので」

そのような他愛もない会話をして屋上へと向かったのだが、その頃には既に決着が付いていた。

ドッジ部の人間が、年下の素人に敗北するという形で。

「一体何をしているのですか、貴女がたは」

「「え、特殊生徒会長（エルダーシスター）……！？」」

「「何故、ここに？」」
「何故も何もありません。我がウルスラの生徒が本校女子中等部に迷惑をかけている。そのような話を聞き、確かめに来たのです」
「め、迷惑なんて……」
「ならば何故、貴女がたは中等部の屋上に来ているのですか？　高等部に空いている場所がなかったなどとは言わせません」

さすがは8割の生徒に好感を持たれている人物だ。先生などよりも、よっぽど力になる。我（オレ）やタカミチが止めようとしたところで、聞く耳持たんであろうことは容易に想像がつく。だが、そんな生徒を、確実に押しとどめてしまえているのだから。

そこからは早い早い。あっという間に事態を鎮静化させてしまった。宮小路を連れてきた我（オレ）に怒りの視線を向ける者はおらず、おそらくは彼女に迷惑をかけてしまったことの負い目が強いことを想像させる。

「以上です。では戻りますよ」
「「「「お姉さま（イエス、アワシスター）の言う通りに」」」」

まるで練習したかのように息を合わせて返事をするウルスラの生徒。その光景に呆気にとられる２－Ａ。

「ふむ、我（オレ）もまだまだだな。ここまで簡単に止めることなどできん」

そして我（オレ）は素直に感心する。これがカリスマか、と。

「一体何者なのだ、彼女は？」
「ウルスラの今代の特殊生徒会長（エルダーシスター）だ」
「……１４年も生徒をしていたが、本物を直に目にしたのは初めてだ」

「そうか」

先代の特殊生徒会長（エルダーシスター）は5年前らしいからな。5年おきに誕生するとしても3～4回しか拝めん事になるからな。

というより。

「我（オレ）のアドバイスがなければ、本校女子高等部所属だった娘だ」

「――どうでもいい情報だな」

「確かにどうでもよかったな」

そんなどうでもいい会話をしている間、ガキは宮小路に尊敬のまなざしを向けていた。確かに年上の存在だろうが……一応は生徒なのだから、そこのところは考えろ。

だがまあ、少しでも真人間になるのであれば、それに越したことはない。せいぜいがんばれ、ガキが。

第三十七話「貴様はこの人物のことを覚えているのか？」（後書き）

Q：宮小路瑞穂って誰？

A：第二十六話時点で本校女子中等部３－Ａの生徒で、キティのクラスメートだった女の子です。

エルダーシスターの設定とかが無茶苦茶なのは作者の知識不足。原作のウルスラに妹制（スール）が存在するとは思えませんが、この作品ではあったことに。うん、どれだけ批判されても文句は言えないぜ。

第三十八話「やはり2－Aは最下位道まっしぐら」（前書き）

これから先、ドイツ語であり混乱するであろう箇所は“”でくくることにします。それに伴い、2話前にも変更を入れています。

第三十八話「やはり２－Ａは最下位道まっしぐら」

さて。学業を行う上で、必ずと言っていいほど付随するものが存在する。それは既に来週に迫っているのだが、我が２－Ａは全く気にする様子がない――――そう、それとはテストだ。それも、期末テストだ。

ごく一部の天才は直前の見直し程度で上位に位置することが出来るほどだが、残りの大半は平均以下。そして５名は下から数えた方が早いほどの馬鹿。そのような中、ガキに与えられた課題がある。

＜最終課題は期末テストで最下位脱出だと？　あのボーヤでは無理に等しいな＞

＜当然だ。放任主義のタカミチはともかく、我(オレ)がテスト対策をしてやると言ったにも拘らず、一切行動せんお気楽共の集いだ。どうにもならん＞

＜そう言う事だ。アランの頑張りすら無効化して万年最下位では、手の施しようがないな＞

２－Ａ以外は頻繁に質問に来る。なぜならば１年の中間テスト時点で、我(オレ)は授業でやったことの応用を多く出題したからだ。勉強不足ならば赤点が確定するが為、それ以降は授業中の不明点は全て聞くように生徒が心掛けるようになったからだ――２－Ａ以外は。大事故二度言ったぞ。

２－Ａの天才は聞く必要がない。残りは聞こうとしない。木乃香や紗夜などの一部は聞きに来ることもあるが、それも疎(まば)ら。ちなみに別の教科についても不明点は２－Ａ限定で聞いてやると言及したのだが、未だに聞きに来たのは木乃香および我(オレ)の従者のみ。

＜で、失敗すれば強制送還か？　あのじじいのことだ。別の策もあ

りそうだが、そこのところはどうだ？＞
＜これは『正式な先生』にするための課題だ。失敗すれば、教育実習生を続けさせるのであろう＞
＜まあ、そのあたりが妥当か＞

キティと念話で会話しているが、現在ＨＲ中だ。本来ならば担任である我（オレ）が教壇から離れ、教育実習生であるガキに明け渡すことなどまずない。だが、正式な先生になりたいとガキが我（オレ）に懇願したが故、本日に限り完全に明け渡している。先程は、ＨＲを利用して勉強会にすると言っていたな。このクラスに勉強意欲がなさすぎるのも問題であるが故、これもまた良い機会だろう。自己中心的な発言であることを除けばだが。
だが、なんだこの胸騒ぎは。このガキが、また何かやらかすとでも……ありえるな。

「はーい、提案提案」
「はい！　桜子さん」
「では！！　お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

……ガキからではなく、２－Ａの馬鹿どもから騒動の種が出てくるか。それにしても、これはバカレンジャーこと神楽坂明日菜・古菲・長瀬楓・綾瀬夕映・佐々木まき絵を晒し物にする気か？　そして、我（オレ）の存在を忘れているとでも言うのか？

「椎名桜子」
「げ！？」
「『げ』とは、自分が何をしたのか理解しているようだな。その上での『野球拳』発言か……」
「あ、あの……」

今更取り繕おうとしているが、無駄だ。校内風紀を乱そうとした以上、言い逃れなどさせん。そうだな……

「反省文を４００字詰め原稿用紙で――５枚以上が妥当か」

「え、そんな！」

「反論でもあるのか？」

「……いえ、ありません」

教壇に立つのがガキ一人であるが故油断したな。もしも我（オレ）も前にいたのならば、このような発言はなかったはずだ。

「スプリングフィールド先生。妨害して悪かった」

「え？　でも野球（ベースボール）を取り入れた勉強法ならいいんじゃないんですか？」

「……そうか、野球拳を知らんのか。負けた側が一枚ずつ服を脱ぐ遊技、と言えばさすがに理解可能か？」

ガキの顔が赤くなり、直後に青くなる。何も知らずに許可を出していたらどうなっていたのか想像でもしたのだろう。

多少追い打ちをかけるか。

「スプリングフィールド先生。もしも分からないことがあれば、自分の判断を信じずに相談しろ。下手に許可を出して警察沙汰、は避けたいであろう？」

「は、はい……」

しゅんとなってしまったガキは置いておこう。復活まで待てば、せっかくの勉強会発言が無意味となる。

「超・葉加瀬・雪広・宮崎・朝倉・近衛・柿崎の上位７名はスプリ

ングフィールド先生と共に勉強会の先生側となれ。神楽坂・古・長瀬・綾瀬・佐々木の下位5名は我(オレ)が直々に勉強を監修する。以上だ」
「「「「「「は～い」」」」」」

本来ならば千雨も上位に食い込むのだが、先生側には回せん。目立つことを嫌うが故平均付近まで点を落としているからだ。紗夜はニア上位であり、超などに教わる方が得策だ。

「綾瀬。少しやる気を出せば貴様は上位とは言わんが中の上まで行けるのに、何故やる気を出さん」
「……勉強なんてしても意味ないです」
「出来たアル」
「古、そこは日本語では意味が違う。漢字だからといって中国語を同一視するな。綾瀬、確かに勉強に意味はあまりない。社会に出たときに役に立たん勉強がほとんどだ」
「ならばどうして頑張って勉強なんかしなければならないのでしょうか」
「これでいい？」
「神楽坂、まずは単語を一つずつ訳せ。その上で日本語になるよう組み立てろ。で、勉強しなければならん理由だったか。まずは変わりつつあるとはいえ日本が学歴社会だからだ」

これが一番だろう。より良い学校を出たものがより良い企業に就職する。そして高卒よりは大卒、大卒よりは院卒を取る。この考えが基礎にある以上、勉学に励まねばならん。

「そして社会に出た際に必要とされるスキルには、基礎として最低でも中学レベルの知識は必須となる。綾瀬は将来の決まった夢はあるか？」
「ないですが……」

「ならば勉学に励め。やりたいことを決めたとき、必須知識が欠けていれば諦めなければならんぞ」

大枠が決まっている面子では……千雨はプログラミング、雪広は親の後を継ぐ、葉加瀬は機械工学、朝倉は新聞記者、か。それぞれがそれぞれの方面に必要な知識とスキルを身につけている。

だが、中学生に将来を見据えろなどと言っても理解できまい。そして理屈屋であるが故に勉強の必要性に疑問を抱く綾瀬は、好き嫌い以前にやる気がでんのであろう。

「一部のように、決まった将来を見据えろなどとは言わん。だがいつか、やりたいことを見出した時に嘆きたくなくば、それなりの勉強は必須だ」

多少不満そうではあるが頷く綾瀬。このような理屈屋は、目的さえ明確に出来ればそれに向かい邁進できる。千雨も似たような部類であるが故、多少は理解できる。

「もし目的が見出せんのであれば、目的を見出すことを目的にしてみろ」

「……わかったです」

まだうまく理解できていないようであるが、やる気さえ引き出せれば、バカレンジャーなどすぐに脱出できるほど綾瀬は頭がいい。

「長瀬、逃げるな」

綾瀬との会話の隙に逃げようとした長瀬に、七夜体術で追いつき捕まえる。目を離すとこれだから、武闘派バカレンジャーは……・

「瞬動でござる……か？　どちらにせよかなりの手誰と見たでござる」
「勝負するアル！」
「全教科平均が６０点を超えれば受けてやろう」
「「……」」
「黙るな、バカどもが」

ちなみにこの２人は、平均が４０点を超えれば褒められるレベルだ。実際問題６０点は少々高い壁となる。
ああ、この二人もある意味進路は決まっている、のか？　一般人が基準にしてよい進路ではないだろうが。

「“千雨と同じで咒式を知ればのめり込むであろうが……そうそう教えられるものでないのが難点か”」
「何を言っているですか？」
「気にするな、独語の独り言だ」

ついつい声に出してしまったが、理屈屋は理論が第一である咒式との相性はいい――咒式適性があれば、であるが。だがまあ、よほどのことがない限りこれ以上弟子を増やすつもりはない。

「そうだな……綾瀬は図書館探検部に所属していたな。何故所属している」
「なぜ、ですか。単純に本が好きなだけです……あと、トレジャーハントのわくわく感を感じたいからかもしれないです」
「なるほど。トレジャーハントならば……考古学方面が妥当か」

京都にいた一年弱の間に、そのような話を聞いた覚えが……ああそうか。確か神鳴流剣士の一人が恋した相手に、考古学方面に行った東大生がいるとか。詳しい名前は聞いてはいないが、探せば

すぐにでも見つかるであろう。
閑話休題（どうでもいいことだな）。

「考古学者を目指すのであれば、最低でも日本史に世界史に地理に……英語を含む外国語。この辺りは習得する必要性があるな。逆を言えば、あれば進むことが容易になる」

歴史を知らねば考古学はできん。地理も考古学には必須要素となる。日本国内に留まることは有り得んので外国語もなければ話にならん。

「そう考えれば、勉強意欲は出んか？」
「……」
「聞くまでもなかったか」

ほとんど表情に変化はないが、つまらなそうな目に若干ながら光が入っているように見える。やる気を出すことには成功したようだな。

元よりやる気の無さが得点につながっていた、典型的な『やればできる』タイプだ。どのような形とはいえやる気さえ出せれば、今回の場合は5教科中文系の2教科……うまく誘導すれば3教科は得点上昇が望めそうだな。

「古。受け取れ」
「これは何アルか？」
「読めばわかる」

一冊のテキストを放り投げる。それをキャッチしペラペラとめくる古。その表情がある種の驚愕に変わる。

「これは……」

「今回の試験範囲の中国語訳だ。同じ中国人として超に教われば、それなりの得点上昇につながるであろうな」

古菲の得点の低さは、日本語を読めないことに起因する。それを克服するための我(オレ)の完全書き下ろしの特性教科書だ。中国語はそこまで得意ではないが、辞書さえあれば中学生のテスト範囲を訳すくらいはどうという事はない。専門用語はあまりないからな。

「謝謝。這様的話我能努力（ありがとうございます。これで頑張れます）」

「我支援著貴女人（応援するぞ）」

頭を下げて中国語を口走り超の下に行く古に、同じく中国語で返す。これで事情があるが故に点数が低い2人は救済できた……はずだ。少なくともこれからも同じように指導すれば、バカレンジャー脱却も夢ではない。

だが残りの3人はどうにもならん。全員が全員、純粋な勉強不足が原因だ。長期的に――それこそ二ヶ月以上時間があるのであればそれなりに延ばせる可能性もあるが、高々3日ではどうすることもできん。

明日菜をアスナにすれば変えられる可能性……などないな。箱入り娘と言うより箱入れられ娘だったアスナに、勉学が出来るとは思えん。無であるが故に咸卦法を習得できるような娘だったからな。

さて、そうなるとクラスのメンバーでフォローするしかないのだが……実際のところ、これまでの結果からして、クラス平均を4点上昇させられれば、それだけで最下位など脱出できるのだ。そう、たったの4点だ。

最高クラスの4点上昇はあまりに難題であるが、最低クラスの4

点上昇であればそれなりに容易だ。それも、皆々揃って点数が低い理由が勉強不足――それなりに焚きつければ、それだけで最下位脱出など可能なのだ。今まではどれだけ焚きつけようと動かなかったのが原因だったのだが。

「何用だ」

携帯がワンコールを告げるか告げないかのうちに取る。直前に見えた発信者は『近衛近右衛門』。学園長の名だ。

『おお、すまんの。ＨＲが終了し次第ワシの下に来てほしいのじゃが』

「了承した」

学園長は何か企んでいる場合には、電話越しでは重要な点を話そうとしない爺だ。現状での会話は時間の無駄と断定し、最低限の会話だけで終了する。まだ何か言うつもりであれば、直後に掛け直す筈だ。

さて、何を言ってくるのやら。

第三十八話「やはり２－Ａは最下位道まっしぐら」（後書き）

テスト編で気になったことがありちょっと計算してみた。

原作では最終的に1位になった時、２－Ａのクラス平均は８１．０点でした。実際どれほどの点数だったのかを計算してみましょう。

２－Ａは３１人なので平均点合計は２５１１点となります。遅刻組８人の平均点合計は５９７点だったので、遅刻組を除く平均点合計は１９１４点。３１人で割ると６１．７点となるので、確かにブービーの６９．５点に負けています。そしてこの１９１４点を、遅刻組及び幽霊なのでテストを受けられない相坂さよを除く２２人で取ったことになります。上位３人が満点で朝倉・柿崎の平均が９０点だったと仮定すると、１４３４点を１７人が取ったことになるので、１７人の平均は８４．４点……早乙女が８１点で実力が中堅やや上位だったから、ちょっと厳しいか？

少し方向を変え、相坂さよは休学扱いとし、３０人で計算します。８１．０点を３０人で取ったので、平均点合計は２４３０点。遅刻組の点を引いて１８３３点で、３０人で割ると６１．１点。やはりブービーに負けています。そして先程と同じく上位５人の平均点合計が４８０点とすると、１３５３点を１７人で取ったことになります。すると１７人の平均は７９．６点。地下組の勉強と同じくらい地上組も勉強していたとすれば、ありえなくもない値に。

結論。相坂さよはクラス名簿には存在しているが、『欠席』ではなく『休学』扱いにされている様子。それならば、何とかなるかもしれない。

そしてもう1つ。クラス平均が69．6点に届けば、2－Aは最下位でないのでネギの残留が確定します。69．6点を30倍すると2088点。遅刻組以外で1833点を取っているので、遅刻組の平均点合計が255点に達すれば残留決定です。遅刻組上位が91点・95点・81点だったので、合計267点……あれ？　この時点で残留決定だ。

結論。地底図書室に行かせずに真面目に勉強させれば、最下位脱出などできていた。あくまで最下位脱出だが（数学の採点を見る限り、水増しの可能性大のため）。

最後に、作中の『たった4点』発言は、超と葉加瀬を100点、雪広を95点、朝倉と柿崎を90点、近衛と早乙女と宮崎を原作通り、紗夜を85点、バカレンジャーの平均を20点、残り17人の平均を65点と仮定した試算結果で、平均が65．5点だったためのものです。

第三十九話「魔法の本に頼るのは軟弱者だけだ」（前書き）

前回の感想が1件。寂しくて泣きそうです。

第三十九話「魔法の本に頼るのは軟弱者だけだ」

千雨Ｓｉｄｅ

今日は久しぶりに大浴場に来ている。騒がしいのが好きじゃない私は普段、部屋付きのシャワーを使っている。だけど今日はゆっくりと浸かりたい気分だったため、時間を多少ずらして入っている。

「あ〜、今日も疲れた」
「確かに憑かれましたね〜」
「……紗夜。ちょっとイントネーションが違わなかったか？」
「そんなことないですよ〜」

紗夜が憑かれたと言うと、シャレにならない。今も現役の幽霊なのだから。
幽霊は死んで生じるのだから、現役と言っていいのかは知らないが。

「にしてもＨＲのあれはなぁ……」
「桜子さんのミスですよね〜、完全に〜」

野球拳なんて言うからいけないんだ。普段は偉そうで上から目線だが温厚で平等なアルトさんだって、叱るときは叱る。
特に１年の時には、クラスメートの半分は処罰を受けている。大半が宿題の増量程度で済んでいるが、片手では数えきれないくらいの回数は反省文を書かされているというのに。

「アルトさんや新田先生がいない時に騒ぐから、ああいう時に対応できねぇんだよ」

「そうですよね～……ん、声――――」
「――――」

紗夜の目配せを受け、無言でパクティオーカードに触れる。この学園は人目さえなければ、いつ襲撃を受けもおかしくない。霊地としての格の高さもそうだが、関東魔法協会の総本山――言い換えれば、日本の西洋魔法使い組織のトップなのだから。

そしてさらに言えば、関西呪術協会の長の娘である近衛がいるって言うのも問題だ。魔法協会と呪術協会は昔から仲が悪い。さらに２０年前の魔法世界での大戦で、本来なら全く関係のない呪術協会の人間が何人も犠牲となっている。そのせいで関係がさらに悪化。さて、そんな敵対組織と言い換えられるほど不仲な組織に、自分の所属する組織の跡取りがいる時、どうする？　答えは当然、取り返しにくるに決まっている。

そのため、霊地麻帆良が欲しい奴が、魔法使いに恨みを持つ奴が、呪術協会の強硬派が。人数はまちまちだが、ほぼ毎晩のように襲撃してくるのだ。

だからこそ私たちは、入浴中だろうとパクティオーカードだけは手放さないように言われている。就寝時には枕の下に入れるようにも言われている。０に限りなく近い確率で、運悪く襲撃されても生き延びることができるように。

「――――でござる。それゆえ――――」
「――――です。だから――――」
「なんだ～、クラスメートですね～」
「この時間に来るなよな……はぁ」

バレる前にカードをタオルで包んで隠す。少なくとも長瀬がいるってなら、多少の時間稼ぎは出来るだろう。隠しているつもりなのかもしれないが、全く隠せていないからな。忍者だってことは。

入ってきたのは主にバカレンジャー。つーか、何故この時間に来る。私たちはかなり早めに来た筈だぞ。

「おや、長谷川殿と紗夜殿か？」
「こんばんは～」
「お早い入浴だな。私らもだが」

長谷川に古に神楽坂に佐々木に鳴滝姉妹か。長谷川一人ならまだしも、古もいて武闘派が二人ならどうにかなるか。
パクティオーカードをあまり遠くにやらないように注意しつつ、しっかりと湯船につかる。

「あら、みんな早いわね」

シミ一つない、綺麗で張りのある肌。大きい胸にくびれのある腰。そんな抜群のスタイルを隠すことなく、むしろさらけ出して大浴場にリュミスさんが入ってきた。いつ見ても女性として羨ましくなる。
同時に、強い安心感が出る。アルトさんは最強種とも言われる真祖だが、リュミスさんは同じく最強種の一角である龍種。その中でも最上位の古龍で、さらに最強らしい。今までリュミスさんに勝てたのはアルトさんだけと言うからその強さはよくわかる。
そのままリュミスさんはさっとかかり湯を済ませて湯船に体を沈め、私たちの方を見る。

＜紗夜ちゃんに伝言よ＞
＜伝言ですか～？＞
＜アルトさんからだろうな。なんですか？＞

そして念話をつなげてくる。アルトさんやリュミスさんは、一般の魔法使いよりも種として上位にあるため、ある程度近ければパク

ティオーカードの念話機能なしに念話することが出来る。
そしてその間は、その回線を使って私たちからも念話できる、んだが……リュミスさん、少し怒ってるか？　声に苛立ちが混じっているような。

＜アスナちゃんたちに付いていってほしいらしいわ＞
＜？　あいつら何かすんのか？＞
＜それは話を聞いていればわかるわ＞
＜そうなんですか～＞

やっぱりちょっとイラついているな。いつもの包容的な雰囲気があまりない。

＜もしかして怒ってます～？＞
＜ええ。こんな馬鹿げたことを考えた学園長にね＞

麻帆良のぬらりひょんこと近衛近右衛門学園長は、悪ふざけが過ぎることが多々ある、らしい。今回も何か悪ふざけがあり、その結果バカレンジャーに何らかの被害が及ぶ可能性が出たってとこかな。
そりゃリュミスさんが怒るわけだ。子供好きで、この寮にいる生徒を自分の子供のように、とまではいかずとも可愛がってるリュミスさんが、何らかの被害が出るようなことを了承するとは思えない。

＜ええと、人形は置いて逝ってもいいんですよね～？＞
＜なるべくなら実体で行ってくれるかしら＞

やっぱりイントネーションが……って、今回は本当にその意味で言ったのかよ。怖いからやめてほしいんだが。

＜ほら、その話が始まるみたいよ＞

＜ん？＞

リュミスさんに指摘され、意識を少しバカレンジャーに向ける。
さて、何が話し合われるんだか……って、近衛とかが増えてんな。
そしてバカレンジャーが全員揃ったな。

「アスナー、アスナー、大変やー。実はな噂なんやけど、次の期末で最下位を取ったクラスは解散らしいんやわ」
＜あ、それはしてほしい＞
＜千雨ちゃん。一つのクラスの解散は、全クラス再編成とほとんど同じ意味よ。出来るわけがないでしょう？＞
＜それでもこのクラスから離れられるんなら大歓迎だ＞
＜ストレス溜まってますね～。千雨さん～＞

どう考えてもクラス替えが出来ないのは分かっている。それでもこの非常識を集めて濃縮したようなクラスからは抜け出したい。

＜貴女も十分非常識よ、千雨ちゃん？＞
＜表に出してねえだろ＞

非常識は表に出してはいけない。麻帆良だからどうにかなっているだけで、場合によっては迫害対象となる。小学校時代の私が周囲と違い常識的（ノーマル）であったが為に非常識扱（アブノーマル）いされていたように。

「そのうえ特に成績の悪かった人は留年！　どころか小学生からやり直しとか……！」
＜それはさすがにないだろうが、近衛。お前も馬鹿が感染（うつ）ったか？＞
＜中学校は義務教育ですからね～＞

頭を抱えたくなってきた。日本の法律で、小中学校は義務教育と

なっている。詳しくは覚えていないが、事故などで長期休学していたとかがない限り、まず留年などありえない。授業を半ばボイコットしているエヴァンジェリンですら進学しているのだから。

「実はその図書館島の深部に、読めば頭が良くなるという『魔法の本』があるらしいのです」

＜魔法の秘匿はどうした、麻帆良学園！＞

＜でしょう。しかも図書館島地下はトラップだらけなのよ＞

＜これは確かに、付いていかないと危険そうですね～。生命と秘匿の両面で～＞

そう言い、風呂の湯をかき分けて紗夜が離れてゆく。私は特に何もしないっつーか出来ないけど、あいつらと一緒で紗夜は大丈夫だろうか……？

まあ、私よりも前衛寄りの紗夜だからな。そうそう危険な状態にはならないだろう。

「私は先に上がるぞ」

「はい～」

わざわざこちらに振り返ってお辞儀までする紗夜。私だったら、振り返らずに手を軽く振る程度で済ませるけどな。

さて。紗夜が帰ってくるまでダイオラマ魔法球にでも籠るか。ちょっと前に見せてもらった皇翔鳳閃（カイザーフェニックス）を元に魔法術式を考案したからな。そこまで多くない私の魔力でも、これならアルトさんの結界を超えられるかもしれない。

アルトＳｉｄｅ

「動き出したか」
「そのようだね」

岸から図書館島裏手を窺っていた我（オレ）とマナは、バカレンジャー＋αが動き出したのを確認して目を離す。ライフルのスコープで確認していたマナと違い、我（オレ）は横目にしていただけだが。

ああ、マナと我（オレ）は度々チームを組む仲だ。長距離狙撃は魔法でいいのであれば、我（オレ）にもできる芸当なのでな。狙撃距離は中途に障害物がなければ、２ｋｍ程度。電磁光学系のレーザー狙撃は利便性が高い。

「それにしても意外だね」
「何がだ」
「いや、アルトさんだったら、魔法の本を探す暇があれば勉強しろと言いそうだからね。いや、あの場にいたらそう言っていただろう？」
「当然だ。『頭の良くなる魔法の本』のことを『出来のいい参考書の類』と評していたが、そのようなモノが本当にあるとして、それで本当に頭が良くなると思えるか？」

我（オレ）はそうは思わない。特にバカレンジャーのほとんどは、勉強不足による低得点層だ。参考書があれば得点が取れるのは、それを以ってして『勉強する』人間だ。おそらくはあの馬鹿共は、参考書を手に入れたらそれで満足して勉強すらしないだろう。

綾瀬はやる気を出させたが故まだ分からんが、古はそもそも日本語が駄目であるが故の低得点だ。参考書が日本語に時点で無意味となる。

佐々木も部活に集中し過ぎていたが故の低得点。これはまだ参考書が手に入れば、勉強する可能性の高い人間ではある。他の部活型人間より圧倒的に低得点であるのには目を瞑るが。

だが明日菜と長瀬は駄目だ。特に明日菜は理解度が低すぎる。小学生に中学生の勉強を教えるようなものだ。どう足掻いても絶望しかない。

「ひとつ聞いていいかい？」

「なんだ？」

「『出来の良い参考書』は、確か大浴場での会話だったと思うんだけど、どうしてアルトさんが知ってるんだい？」

やや怖い笑顔で聞いてくる。笑顔は脅しの為の物だと聞いたことはあるが、こういう表情を見る都度思い知らされるな。だからといって恐れはしないが。

「リュミスと紗夜は我（オレ）の従者だ」

「ああ、聞いたのか」

マナは紗夜がさよだったころを知る人物だ。まあ、魔眼持ちで魔族のハーフでもある以上、幽霊が見れても不思議でもなんでもないからな。

マナは納得し、侵入者への狙撃を開始すべくスコープを覗く。それを正面に見つつ、横目でバカレンジャー＋αの様子を見る。侵入するメンバーはバカレンジャー5人、木乃香、ガキ、紗夜の8名。地上での連絡要員に早乙女と宮崎。そして、侵入メンバーを監視する男子中学生――我（オレ）の遍在の変身体――だ。

夜も女子寮にいる限りは、リュミスに任せられるが故このようなことはせん。平日の昼間は学校にいるが為不要。休日の昼は事件を起こしても大規模になりにくい以上軽い監視で済ませる。

だが、夜に寮から出るのであれば、監視の必要が出る。

「“可能ならば巻き込め、ガキ。修学旅行までに教えたいのでな”」

「どうしたんだい、突然ドイツ語だなんて。しかも誰を巻き込めばいいのか分からない言い方をするね」

「く、独り言だ」

マナも傭兵として世界各国を、魔法世界を含めて渡っていた。ドイツ語が分かっても当然か。迂闊に独り言が出来んな、これでは。

「今聞いたこと、高級餡蜜3つで秘匿しろ」

「5つだ。3つは少ないね」

「良かろう、ならば5つで手を打とう」

こういうところは扱いやすくていい。そして、だったらもっと吹っかければよかったと言わんばかりの顔をするな、マナ。そこまで見越しての3つ発言だからな。

電磁光学系咒式第四階位＜光条灼弩顕（レラージェ）＞を3重展開。近赤外線の収束レーザー光線を1時46分29秒方向、2時27分24秒方向、11時1分9秒方向にそれぞれ射出、全弾命中確認。

「さすが」

「どうという事はない」

さて、馬鹿共の殲滅を続けるとするか。面倒なことに殺害は禁じられているが故、股関節を撃ち抜いて行動不能にしているだけだが。

そういえば＜光条灼弩顕（レラージェ）＞の軌跡を見ているような描写がされ竜にはあったような気もしたが、そんなことあるわけないな。近赤外線は可視領域外だからな。

さて、木乃香は頼んだぞ、禊（オレ）。

禊Ｓｉｄｅ

なんだかアラン（ぼく）に頼まれごとをされたような気がするなぁ。多分、合ってるんだろうけどね。

「『やれやれ』『人気者は辛いぜ』」

音も気配もなく、図書館探検隊の後ろをついてゆく。うん、途中で佐々木ちゃんが落ちそうになったけどリボンで持ち直したり、本棚が落ちそうになったところをくーちゃんや長瀬ちゃんがどうにかしたり、ネギ君が落下しそうになったり、神楽坂ちゃんが意外な優しさを見せたりしながら、魔法の本（メルキセデクの書 レプリカ）の偽物が安置されている場所まで到達した。

「『まあ結局は落ちちゃったわけだけど』『僕の役目は監視だからね』」

ツイスターゲームをやらされた挙句、良く見えなかったからか間違った場所に手を付いちゃったみたいだけど。それで全員地下に落とされたみたいだけど。直前に風の魔法で落下速度は落ちたみたいだし。

「『僕は悪くない』」

これなら怪我はないだろうと納得して、帰ろうとする。だけどまあ、負完全な僕は、運も悪いみたいだね。

「ふぉ、何者じゃ！？」
「『ん、僕？』」
動く石像（ゴーレム）という名の学園長に見つかってしまった。ああ困った。
螺子伏せなければ帰れないじゃないか。
納得してくれればそれでいいんだけど、納得してくれるかな？
「『僕は球磨川禊』『ある人に頼まれて彼女たちを監視していただけだよ』」
人畜無害な顔で、括弧付けて話す。うん、気味悪く出来ました。
これなら疑問に思う事なく帰してくれるはずだ。
「ある人じゃと！？　そ奴は何者なんじゃ！」
「『ん～、何者か？』『じゃあ今日中に考えてメールしようかな』」
実際しないけどね。メアド知らないし。知ってたとしてもしないけど。
「『僕はもう帰りたいんだよね』『邪魔しないでくれるかな』」
「駄目じゃ！　侵入者の可能性がある以上、ただでは返せん！」
その巨大な石槌を振り上げ、こちらに迫る石像（学園長）。仕方ないなぁ。
しょうがないなぁ。
「『だったら』『その心も体も』『螺子伏せるだけだ』」
目を細め、表情を変える。その本性をさらけ出したような、本来の表情（かお）に。

巨大な一螺子（マイナス）を取り出し、各所に螺子込む。ちょうど、安心院（あんしんいん）さんを封印したように。却本作り（ブックメーカー）も大嘘憑き（オールフィクション）もないから、実際は封印なんて不可能だけど。

「ふぉおおおおおおおおおお！？」

「『それでは皆様』『ご唱和ください』」

螺子を全身に受けて、よろよろと後退する石像。そこには先程彼自身が空けた大穴が。

間違ってもバカレンジャーたちを潰さないように注意して、石像を穴めがけて蹴り飛ばす。

「『Ｉｔ’ｓ　ａｌｌ　ｆｉｃｔｉｏｎ！』」

「ふぉおおおぉぉぉぉぉぉぉ……」

悪は滅びた！　７億人いる悪平等（ノットイコール）は滅びないけどね！

「『ぬるい友情・無駄な努力・むなしい勝利』『それがジャンプ愛読者である一十三（マイナス）組の信条だよ』」

最後に穴の底、地底図書館を見るつもりで覗き込み。

「『がんばってね、相坂ちゃん』」

エールを送って地上に帰還した。

第三十九話「魔法の本に頼るのは軟弱者だけだ」（後書き）

パクティオーカード無しの念話は、修学旅行編においてキティが行っているため、別にオリ設定ではないです。

第四十話「試験勉強など、授業をしっかり受ければ最低限で済む」

図書館島地下にバカレンジャー＋αが向かって一夜明けた土曜日。
紗夜情報で、果たしてしばらくは帰れそうにないことが判明した。
まあ、あそこには変態（アルビレオ）がいる。命が失われる心配は不用であろう。
そういえば最近会っていないな。今度会いに行くか。

「今日の欠席は相坂紗夜・綾瀬夕映・神楽坂明日菜・古菲・近衛木乃香・佐々木まき絵・長瀬楓の7名と糞ガキ――失礼、ネギ・スプリングフィールド先生か。連絡事項は『明後日から期末テストだから、それに向けてきちんと勉強するように』とのことだ。以上、朝のＳＨＲを終了する」
「そんなことを言っている場合ではありませんわ！」

ビシィ！　と効果音を出しそうな指の指し方をする雪広。教師を指さすとはどういう事だと言うのがいいのかもしれんが、今の彼女にそれを言っても意味がないであろう。

「そうだな。どのような理由があろうと教師が無断で学校に来ないことは大事であると考えるべきだな」
「そんな意味でもありません！」

もはや悲鳴に近い。１０歳のガキなどそこらを探せばいくらでもいるのに、何を慌てているのか。

「ではどのような意味だ？　真逆、最下位ならばクラス解散と言う戯言（たわごと）を信じているのか」
「最下位ならば、ネギ先生が辞めさせられるという事です！」
「ああ、そのような妄言もあったか」

「妄……言、ですって？」

はぁ……雪広も墜ちたものだ。否、子供が絡むとまともな思考が出来なくなる悪癖か。この程度、考えれば直ぐに分かると言うものだ。なぜならば。

「妄言だ。本当にネギ・スプリングフィールドが教師を辞めさせられるのならば、その前に我（オレ）と高畑教諭が辞めさせられる。二年間担任をしていながら、最下位をキープし続けた無能としてな」

この程度はすぐに思いついてもいいものなのだがな。１ヵ月程度しかいない人間が、その前２年分の負債を押しつけられて辞めさせられるなど、どこの笑い話だと言うのか。

では実際どうなるのか。その答えとあり得ない未来を語ってやる。やる気を削がれたままなのは、こちらとしても厄介なのでな。

「実際は、ネギ・スプリングフィールドが正式な先生になれないだけだ。まあ、正式な先生になればこの本校女子に居続けるであろうが、教育実習生のままでは別の学校へ赴任する可能性も――」

「こうしてはいられませんわ！　皆さん！　あのウルスラにネギ先生を渡してはなりません！」

「「「おおー！！」」」

「……阿呆だ」

「――まぁ、今回くらいは本気を出してやるか」

「ツンデレのような言葉を言い放つマスター……保存完了」

乗せられる雪広とクラスメート。額に手を当てる千雨。しぶしぶやる気を出そうとするキティと、それを観察する茶々丸。

一致団結（？）するのはいいことだ。目的が可笑しくともな。

「では、これより大勉強会の続きを開始する。そうそう、ネギ・スプリングフィールド及びバカレンジャーと近衛と相坂は、図書館島地下にて司書の保護の下での勉強合宿中だ。安心して勉学に励め…　…そうだ」

にやりと笑う。原作では確か学園長が得点に色をつけていたように思えた。その状況下においてでもいいが。

「万一ないとは思うが、バカレンジャーに０．１点でも平均点が抜かれた生徒は、春休み中の課題を増してやろう」

『うげ』だの『嘘っ！？』だの『そんなまさか』だの言っているが、報酬よりは罰則の方が人間を縛るには効率的だ。ついでに報酬で動かそうとすると、その行為に対して興味を失いやすいという統計結果もあるのでな。

「安心しろ。我（オレ）は数学以外もできるのでな。数学だけと言わず、全教科プレゼントしよう」

読心は使用していないが、このときのクラスの心が一つになった気配だけは感じた。

曰く、『それだけはごめんだ』と。

「さて、馬鹿話はこれで終いだ。昨日と同じく、成績上位が下位の者に教える形で勉強せよ」

雪広を始めとして、クラス全体が積極的に動き出す。魔法使いとしても先生としても未熟の一言に尽きるガキだが、不思議と生徒からの評価は高い。

普段とは違うざわめきに包まれる２－Ａ。本来ならば、普段のテ

ストもこれくらい熱心にしてほしいものだ。

紗夜Ｓｉｄｅ

地底図書室に落ちてからもう1日は経ちます。ですが、未だに私たちはここから動けていません。

落ちている間に周囲を観察していましたから、ここが相当な深さであることは察せました。階段があっても、外に出るのに1時間や2時間では足りないだろうことも。

＜バカレンジャーの方々も、ここではしっかりと勉強していますよ～。夕映さんも、今までとは比べ物にならないほど頑張ってますし～＞

＜そうか。では明日の昼前、滝の裏に向かえ。エレベーターに通ずる螺旋階段があるはずだ＞

＜滝の裏ですか～？＞

＜そうだ。場合によっては、アーティファクトなしでの戦闘も許可する＞

私は、この人形そのものが魔法発動媒体。全身をくまなく破壊されない限り、魔法が発動できなくなることはない、のはいいんですけど。戦闘、ですか。多分ここに落とした石像（ゴーレム）は学園長でしょうし、それが襲いかかってくると考えて間違いないんでしょうね。

＜分かりました～＞

＜では連絡はこれで……と。もし魔法の本を手に入れても、通

常手段では持ち出せんように細工されているはずだ＞
＜ん～。と言う事は、もしも手に入れたとしても、エレベーターを動かすことができなかったりするんでしょうか～？＞
＜おそらくはな。ではな＞

念話の終了を確認し、一息つく。ここにいる人たちに魔法のことを知られるのは得策ではないので、気を張って見られていないか確認しながらの念話だったので、結構疲れました。
明日は、お昼には逃走劇を開始。もしも魔法の書を手に入れてしまったら、さりげなくなくすこと。万が一追いつかれたりした場合は、魔法の秘匿を意識しつつの戦闘。今日はもう寝た方がいいかもしれないですね。おやすみなさい。

そして翌日、湖で私と夕映さんと木乃香さん以外が水浴びをしている時。湖に沈んでいた石像（ゴーレム）がとうとう動き出しました。
ただしその全身に、いくつもの螺子がねじ込まれた状態で。

「螺子だらけなんて、何があったんでしょうか～」
「のんきなこと言ってんじゃないわよ！」

明日菜さんに怒られますが、螺子のせいで明らかに石像（ゴーレム）の動きが遅いですから、あんなのはただの的じゃないですか。
ネギ先生は魔法を使おうとしていますが、まだ魔力を封印していることを忘れていませんか？　というか、普段から魔法に頼っていることが分かる発言を繰り返し過ぎですね。学園結界のおかげである程度誤魔化されていますが、魔法を知る者からすれば、致命的を通り越していますよ。

「大丈夫ですよ～？　さっき、滝の裏に出口らしきものがあるのを見ましたから～」

滝だっていくつもありますから、どの滝かは調べておきました。ここからそれほど遠くない滝に巧妙に隠されていましたけど、問題はその扉の問題です。別に洒落でも言葉遊びでもなく、問題が問題です。

「ふぉ！？　ま、待たんか～！」

螺子の傷に障らないようにするためか、思ったよりもさらに遅い速度で追いかけてくる石像（ゴーレム）。よほどのことがない限り、追いつかれないでしょうね。

そのよほどのことと言うのが。

「『問１　英語問題　ｒｅａｄ（リード）の過去分子の発音は？』です」

扉に書かれた問題ですが。私や木乃香さんやネギ先生ならば簡単な問題でも、バカレンジャーの皆さんにすると結構難しいでしょうね。

「嘘ー！　魔法の本さえあればー！」

「いきなり言われてもー！」

その魔法の本は、石像（ゴーレム）の肩付近にありましたよ？　螺子の陰に隠れるように。それが発覚する前に出口の情報を教えましたから、誰一人として気付いていないようですけど。

「ムムッ……！　答えは［ｒｅｄ］アルね！」

ピンポーン！　と軽快な合成音と共に、扉が開く。なーんだ、結構できるようになったじゃないですか。

「螺旋階段ですか～。石像（ゴーレム）に追いつかれる前に頂上まで辿り着け、でしょうね～」

「どこのＲＰＧよ！」

「い、急ぎましょう！　ネジのせいで遅くなっているとはいえ、追いつかれたら終わりですよ！」

ネギ先生の叱咤で、全員が弾かれたように駆け上る。途中で同じようにいくつもの問題がありますが、猛勉強したバカレンジャーの前には簡単すぎたようです。見る見るうちに突破していきます。

そんな快進撃も。

「あうっ」

夕映さんが転んだことをきっかけに止まってしまいました。足首が妙な方向に曲がったようにも見えましたが、大丈夫でしょうか？

「あ、足をくじきました」

やっぱりそうですか。そんな風に見えましたよ。

男を見せたネギ先生が背負うものの、魔力での強化が一切ない１０歳の子供では、１５歳の女の子を背負うのは無理がありました。数歩と歩かないうちに潰れてしまいました。

もっと石像（ゴーレム）がこちらを追い詰めているのであれば、魔法使用を選択肢に入れられるんですが――この状況下なら、楓さんが連れていけば全く問題ないんですよね。隠せていない忍者ですから。

「拙者に任せるでござる。ニンニン♪」
「ありがとうです楓さん」
「ではレッツゴーですね～」

螺旋階段の対岸の上方に、ちらりと扉のようなものが見えましたから。あれがエレベーターなのだとしたら、２０～３０分あれば到着するんじゃないでしょうか。

そして３０分ちょっとしたところで、作業用と書かれた１階直通のエレベーターに到着しました。後半の問題が難しくて、足止めされる時間が長引いたのが原因ですね。それでも石像（ゴーレム）は遥か下方においてけぼりですが。

「みんな、急いで乗ってくださいっ！」
「紗夜さんも早く来るです！」

私以外の全員が乗ったのを確認し、完全無詠唱の魔法を使用します。それは『魔法の射手　影の１矢』。本来ならば強いパンチ程度の威力しかない魔法の矢も、込める魔力量や使用属性、術式によっては高威力にできます。私はばれないようにあまり魔力は込めませんでしたが、その分術式にはこだわりました。とはいっても、アイスピックのように先端を尖らせただけですけど。でも、考えればわかりますよね？　高々強いパンチ程度の威力でもアイスピックの鋭さを持つと言う事は、アイスピックの先端を向けて思い切り殴ることと同じであると。

それを、石像（ゴーレム）の足元に射出します。元々ここの足場は木の根が這い出る程度には脆くなっている。そこを超重量級の石像（ゴーレム）が歩いており、さらに一点に強い衝撃が与えられればどうなるか。

「ふぉ！？　ふぉおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」

階段が崩れる音と共に石像（ゴーレム）の悲鳴が上がり、破砕音と共に悲鳴が遠ざかってゆく。

さようなら、学園長先生。地上に帰るまでは忘れません。

「ごめんなさい～。石像（ゴーレム）がどれくらいまで来てたか確認しようとしてました～。落ちたみたいですけど～」

主に私の――いえ、追い詰めようとした学園長の自業自得ですね。

「あぁ、良かったわ」

「そうやね。でも急がんとあかんえ？　テストまで時間がないんやから」

「あ～、ごめんなさい～」

木乃香さんに言われて、思い出します。脱出した後にテストも受けなくちゃいけないってことに。私はよくても、５人は微妙ですから。

エレベーターに乗り、携帯で時間を確認する。現在時刻は１７時半。テストは明日の１時間目からですから、勉強できる時間は１５時間も残されていません。

前途多難……ではないですね。四面楚歌……も違いますし。袋の鼠でしょうか？　まあ、窮鼠猫を噛めばいいんですよね。

アルトリウスＳｉｄｅ

期末テスト初日。９時から英語のテストが始まるのだが、開始２

0分前になってもまだ9名学校に来ていない。バカレンジャーと近衛木乃香と早乙女ハルナと宮崎のどかと糞ガキだ。特に最後の先生もどきは屑だ。先生のくせして学校に無断遅刻するとは、社会を馬鹿にしているとしか思えん。我々教師には会議というものが存在するのだが？

なお、紗夜は既に来ている。昨日は帰ってすぐに自室に戻ったので、他の落下組とは別行動なのだ。なんでも、ちうのホームページに一昨日は参加できなかったため、昨日は参加したかったらしい（＊注：紗夜はネット上では『しゃや』と名乗っており、ちうの友人扱いになっている）。

テスト前日であろうと自分のペースを守り抜く。ある意味では凄い奴だ。

「ふん、来たか」

開始5分前に、ようやく遅れた9名が現れた。この時間は既に遅刻扱いで、別教室でのテストとなる。

我（オレ）は、1時間目は試験官ではないのでな。見回りついでに様子を見に来たのだが……これはどういう事だ？

「皆々揃って妙に眠そうだな。徹夜でもしたか？」

追い込みで徹夜をするのはよくない。本番のテスト中に眠気が襲い、まともに受けられなくなるのもあるが……最大の理由は、人間は寝ている間に記憶の整理をすることにある。二重の意味で徹夜はテストに合わん。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

ガキが何やら魔法を使用している。触媒からして、気分転換（リフレッシュ）系の

魔法か。本来ならば教職員のテストへの介入は禁じられているが故、このような行為は魔法の秘匿面も含めて停止させなければならないのだが。

「花の香りよ（フラーグランティア・フロメリス・アミーキス・ウィゴーウムーターリターテウラーム・サルーターレム）　仲間に元気を　活力を　健やかな風を」

魔法の秘匿を鑑みれば、我（オレ）は地底図書室に行かせるべきではなかった。止めなければならなかった。が、木乃香に偶然でも魔法がばれればいいと、学園長の案を採用した。それはエゴだ。ならば。

「目には目を、歯には歯を」

「『活力全快（レフェクティオー）』」

「エゴにはエゴを」

今回ばかりは見逃してやろう。

テストの結果だと？　学園長が遅刻組のテストを回収するのを地味に阻止し、しっかりと我（オレ）ら一般教師陣が採点してやった。その結果、2位と2点以上の差をつけて1位となった。もちろん、急激に得点を伸ばしたバカブラックこと綾瀬夕映以下の点数を取った者もいなかった。

まさかここまでやるとは思わなかったぞ――と言うか、普段からきちんとやれ。

第四十一話「それぞれの一日・麻帆良編」（前書き）

短い、ｇｄｇｄ、時間がない。
大学があると早くて帰宅が２０時とか、ありえん。

第四十一話「それぞれの一日・麻帆良編」

さて、自力で期末テスト1位を取った我が２－Ａだが、それにより、ガキが正式に先生に就任したことが終業式に発表された。
こういったことを言うのは始業式ではないかと内心思いつつ、あくまで一教師として式を終えた。
そして今は春休みで、そろそろ1週間経とうとしているのだが。

「暇だな」

さすがに学校がないため生徒はそれほど騒ぎを起こさず、さらに最近の研究は行き詰まりと煮詰まりでやること無し。術式の効率化も粗方やり尽くし、最近では０．１％の効率化ですら月に一度あればいい方。大抵は悪化する。
従者や弟子は、それぞれの予定が入っているため、本当にやることがない。致し方ない、体を軽く動かすか。

「ハンドレッド・ハンドレッドと洒落込むか」

元々が鉛の亡霊（レッドファントム）の訓練の一環である１００ｋｇ荷重・１００ｋｍ走（ハンドレッドハンドレッド）。通常の魔法剣士では気も魔力も封印すれば不可能に近い芸当であるが、我（オレ）は基礎身体能力を鍛えることを是としているため可能だ。
気による強化も、魔法や魔力による強化も、どちらも大切な要因ではある。だが、基礎身体能力が向上すれば、それらの効率が低かろうとどうとでもなるのだ。最後に物を言うのは、基礎体力だ。
思い立ったが吉日。魔力は最低限の認識阻害のみでそれ以外は封印、気は一般人に毛が生えた程度に。本来ならば無強化でいきたいが、体を動かすことが目的ならば、そこまでする必要はない。１００ｋｇのザックは用意した。ウォーミングアップも済んだ。それで

は――

＜アルトさん～、今暇ですか～？＞

――いけなかった。紗夜からの念話が入ったせいで。

まあ、暇つぶしにはなるか。

＜暇つぶしを考えていたところだ＞

＜なら～。ダイオラマ魔法球の探索をするんですけど～、一緒に来てくれますか～？＞

昨年の探索では、鍛え方が足りなかったが為にすぐに引き返したと嘆いていたな。今回はリベンジマッチか。多少の手伝いはしてやれるが、本当にリベンジなのだとしたら、あまり手は出さんようにせねばな。

＜滞在期間はどれほどを予定している？＞

＜およそ1時間（はんつき）ですよ～＞

＜そうか。今からか？　すぐに行けるが＞

＜そうですね～。すぐに来られるなら来てください～＞

＜了解した＞

無駄に重たいザックを影に放り込み、代わりに服などを詰めたザックを取り出す。そしてパクティオーの強制召喚から派生させた強制転移で、千雨と紗夜の部屋に跳ぶ。

跳んだ先では、死神ルックの紗夜と魔法少女チックな千雨がいた。既にアーティファクトを装備しているとは、なかなかやる気だな。

全くの余談ではあるが、このダイオラマ魔法球内部の生態系や樹海には、記録も記憶も役に立たん。1日で1年も経つがため、数日の放置で地形は変わり生体系マップも書き換えられ、1年もあれば

一部生物は莫大な魔力の影響で進化していることすらある。

「待たせたな」
「そうでもないですよ～」
「んじゃ、行くぜ」

3人でダイオラマ魔法球に触れ、ゲートを起動する。さて、多少過激な暇つぶしの始まりだ。

などと考えて突入したのが既に1週間ほど前、外での30分ほど前の話だ。

「二人とも、十分成長しているな」

まだまだ武装に頼るきらいはあるが、紗夜は前衛としてはそれなり、千雨は後衛職としては完璧だ。共に英雄級には負けるであろうが、戦争も知らん正義モドキ程度であれば一蹴できるであろう。

特に、千雨は恐ろしい。我(オレ)の通常展開程度とはいえ魔法障壁と干渉結界を全て撃ち抜く魔法を開発してきたのだから。並大抵の障壁突破魔法では撃ち抜けん自慢の防御であったのだがな……まあ欠点を挙げるのであれば、式の展開が遅すぎることか。避けないことを前提に撃たせたが故に防御を抜かれたが、実際の戦闘であれば回避もしくは展開する前に千雨を撃墜すればいい話だ。

それを補うのが紗夜の『死神の笛』なのだが。対策なしではほぼ確実に命を落とす必殺の連携だ。ああ、リアルチートであるラカンならば、もしかすれば動けるかもしれん。否……案外、千雨の魔法を受けてピンピンしているかも知れんな。

「我（オレ）の『皇翔鳳閃（カイザーフェニックス）』を参考に、か。このように応用するとは思わなんだ」
「っしゃあ！」

本当に凄いとしか言いようがない。あれはただ純粋に大魔王のメラゾーマを再現したいが為に編み上げた術式。その結果、燃える天空の魔力と熱量を圧縮すれば名実ともに“カイザーフェニックス”と言えるであろうと考えただけの代物だ。

それから『圧縮』の式を抽出し、応用可能な代物に押し上げた千雨は、術式に関しては間違いなく天才だ。プログラミングとほぼ同じである数法系を学ばせたのは正解であったな。そういえば数法系術者と言えば、陰陽術師と同じく式――呪式的には護法鬼――がいたな。呪式的に魔物を捕獲し使役する『護法災鬼』と、数式存在であり必要に応じて実体化させる『護法数鬼』が。

千雨の魔力で使役するのであれば、ある程度弱い方がいい。強すぎて魔力が尽きては話にならず、だからと言って弱すぎては時間稼ぎもできん。それを千雨に話したのだが。

「ここの魔物は強すぎて、私じゃ使役しきれねえよ」
「それもそうか」

それ以前の問題だったようだ。術式的には使役し切れても、ここの魔力にて生まれ育まれた魔獣では、千雨の魔力が持たんな。

カイザーフェニックスと言えば、同作品のメドローアも再現しようと努力したものの、そちらは失敗に終わった。実際問題、熱量のプラスとマイナスが激突してゼロに戻ろうと、対消滅エネルギーなぞ生じんのが理由である。普通に熱量同士が打ち消し合って平均温度と化し、変化していた魔力が撒き散らされるだけだ。それすら越えて理論上完成させた、熱量の不確定性により物質を崩壊させる疑

似メドローアも、存在していられる時間は半秒に満たない。使用前に虚無に還る魔法など、存在意義は欠片もない。

「紗夜も、扱えぬ魔法をよくぞそこまで昇華させたな」

「お世辞でもうれしいです～」

紗夜には魔法使いとしての適性に乏しい。精霊に非常に好かれるという点だけで見れば、魔法使いとしては羨ましい天性の資質を持っている。だが、そこで止まってしまった。理由は簡単で、魔力の運用が非効率すぎるのだ。おそらくは騒霊現象の使用時に魔力運用に妙な癖がついたからと考えているが、その影響で『雷の暴風』程度の魔法発動がやっとというありさまだ。

だが、それを紗夜に克服させた。まず第一点に、精霊に好かれるという点を考慮した強化に入った。通常は『魔法の射手』ならば1矢に1柱の精霊を使役する。だが紗夜は、一般魔法使いの3倍近い効率で精霊を使役できる。ならば同じ効率ならば、1矢につき3柱の精霊をつけることが出来るという事だ。そこから、魔法発動にありえない数の精霊を持ちこんだ人海戦術を行う事にした。

もう一点は、質の向上。高位呪文を唱える際、通常精霊ではなく高位精霊を使役することは当然だ。『えいえんのひようが』ならば『氷の女王』を使役するように。そうでなければ出力不足甚だしい。ならば、通常の魔法使いでは非効率であるが為に行わない馬鹿げた手法――同じく『魔法の射手』で言うのであれば、氷の矢を使用するのに『氷の女王』を使役するという事だ。

この二点の強化――否、凶化により、『魔法の射手』が、「時間と数を犠牲にすれば、片手間の我と同程度まで引き上げられる」と言えば、その異常さが分かるであろう。攻撃魔法ではない初歩である『火よ灯れ』ですら、『煉獄の主』を使役することで『紅き焔』以上の威力を引き出せるのだから。

「世辞ではない。我（オレ）の助けなくして――」

ちらりと、先程二人が打倒した魔物を見る。雷撃と火炎に毛皮を焼かれ、腹に大穴を空けられ、首を刎ねられた魔獣を。

「――あれを打倒できるのであるならな」

それは体高2メートル強の『氷毛狼』。その俊敏性と持久力故、一般魔法使いではまず倒しきれずして餌食となる、おそらくはこのダイオラマ魔法球でも１０指に入るほどの凶悪な肉食魔獣だ。それを2対1でコンビネーションがあったと言えど、打倒して見せた一点こそが重要となる。

「我（オレ）が認めよう。貴様ら二人を従者に出来たことが誇りであると」

全く、従者の成長が速くてかなわん……とはいえ彼女らも、この魔法球内部での訓練時間は既に年単位であるであろうからな。1年時は互いを知らないが故にあまり使用出来ず、2年になってからも長期使用することはなかったが、ネギ・スプリングフィールドが来、そのあんまりな状況を見て危機感を感じたようだ。この春休みに入って数日は、ほぼ毎日のように入り浸っていたと聞いている。

春休みはまだ1週間もある。これからどこまで成長するか、見物だな。

第四十一話「それぞれの一日・麻帆良編」（後書き）

アスナが１００歳以上であることを最近知りました。
てことはさ。アスナはアリカの妹じゃないってことか？
ここでは姪ってことにしたけど、それすら大間違いだよね？
アリカは長命種ではないはずだから、血縁だったとしても叔母か大叔母のはず。
実際どうなんでしょうか。マガジンをしっかり読んでいた方、答えてください！

第４１．５話「それぞれの１日・魔法世界編」（前書き）

お久しぶり、半月ぶりです。
大スランプに陥りました。短いです。

第４１．５話「それぞれの１日・魔法世界編」

ラカンＳｉｄｅ

「うおおぉぉぉ！！」

思い切り右腕を天へ突き上げ、左手を地に振り下ろす！

「『震天（シェーイク）』！」

右腕を手刀で振り下ろす！

「『裂空（スプリット）』！」

左手を鉤爪状にして振り上げる！

「『斬光（スラッシュ）』！」

大きく反時計回りに円を描き、両腕を交差させる！

「『旋風（ウィンド）』！」

掌を外に向け、両腕を大きく左右に開く！

「『滅砕（クラッシュ）』！」

両拳を握り、甲を下に肘を曲げて脇を締める！

「『神罰（パニッシュ）』！」

そして気合と共に、両掌底を突きだす！

「『活殺撃（ディヴァイドエンド）』！！」

様々なポーズにより溜められた俺様の気が砲撃となって突き進み、正面にある山を消し飛ばす！

「か、完成したぜ……これぞ『震天裂空斬光旋風滅砕神罰活殺撃（シェイクスプリットスラッシュウィンドッシュパニッシュディヴァイドエンド）』！！」

……次行ってみよう！

「おい、俺様の出番はもう無いのか！？」

ああ、（魔法世界編までは）もう無いぞ。

テオドラＳｉｄｅ

「暇じゃ」

「暇で結構ッス。戦争が起きて人死にが出るよりはましッスよ」

「そうじゃな、シャル」

ここ数ヶ月、戦争終結によるごたごたもそれなりに片付き、少な

くとも妾には重責が向かなくなってきていた。
同時に暇が襲いかかってくるようにもなってしもうたのじゃが。

「暇なら、これならどうッスか？　月1のリチャード・C・オルフェウスからの招待状」
「リチャードのぅ……」

リチャード・C・オルフェウス。表向きは魔法世界のあらゆる事業にM&Aを行う事業家にして国家規模の資産を保有する人物。じゃが、本人が公式の場に出てきたことがないため、陰では様々な噂が飛び交っておる。
曰く、リチャードは個人ではなく数名から十数名の人間の連名である。曰く、代表がリチャードである一つの組織である。曰く、いくつもの組織や個人がリチャードの名を騙っているだけである。
そして妾は、その正体を知っておる。否、国家の上部に位置している者の一部のみ、その正体を知る権利があるという方が正しいかもしれぬの。
そして、招待状が手元にあるのは、上位のバッジ持ちだけ。

「そうじゃの、最近は忙しくて行けぬことが多かった。久方ぶりに行こうかの」
「了解ッス」

懐からバッジを取り出す。見た目は『フラメルの十字架』に似ているが、大きな違いは巻きついているのが蛇ではなく棘のある蔓であり、顔に相当する個所に大輪の花が咲いていることかの。色は十字架が金で植物が銀。これが妾の立場の証明をするため、胸元にバッジを付ける。
シャルは白十字に赤い花のバッジを付け、招待状に魔力を通し、転送用の魔法陣を起動させる。いつも思うのじゃが、招待状一枚一

枚にこの細工をするのは骨ではないのかのぅ？

「行くッスよ」

「分かっておるわ」

魔法陣をくぐると、そこはいつも通りの広めのホールであった。周囲を見渡すが、やはりどこにも扉や窓の類は存在しない。唯一の出入り口は転送魔法陣のみの、ある意味では厳重なセキュリティ。いや、脱出のみならば、ゲートを使えば何とかなるかもしれんな。

「お、久しぶりじゃねえか、テオドラ！」

「叫ばんでも聞こえるわ、リカード」

妾に話しかけてきたのは、妾と同じ『金十字に銀』のリカード。その横には同じく『金十字に銀』を付けたセラスとクルトの姿もあった。

クルトがここに来るのはとても珍しいの。普段ならば代理でネイを差し向けるのじゃが。

「私とて、自身が来なければならないと思う事もありますよ」

そうかの？　そうとは思えんのじゃが。クルトが来るなど、天地が返らなければありえんと思った妾はおかしいのかのぅ。

「それはそうとして、貴女が来るのも珍しいですよ、テオドラ皇女」

「妾は暇つぶしの気も強いがの」

「そうは言うがな、テオドラ皇女よ。我々にすれば、情報は命と言えるのだぞ」

突然会話に割り込んできたのは……なんと言ったかの？　……

……おお、そうじゃ。デュミナスだかデュナミスじゃったな。まず話すことがないから忘れておったわ。

「我々は世界の敵（コントラムンディ）。そこを理解しているのか？」

「理解しているとも。最も被害が多くなるであろう帝国が、それを理解せんのはおかしいであろうが」

ここの最大の存在理由は、メガロメセンブリアの汚点が特に多く話し合われることであろう。妾も初期の頃は憤慨しておったわ。メガロメセンブリアが亜人に対して人権を主張しなかった、最大の理由を知った頃はの。

今ではそこまで憤慨せん……見切りをつけたと言うても過言ではない。

「では話し合おう」

「そうじゃの。では現状の帝国は……」

カインＳｉｄｅ

「――――以上が本日の報告となります」

デュナミスによるＲＣＯ主催の『パーティー』の報告を、楯の上に金の薔薇が金の十字に絡みついた『薔薇十字』があるバッジを付けた僕が受ける。あ、楯の部分は『騎士』のイメージだよ？

「んん、久々に帝国から来てくれたんだね。ぼかぁそれだけでも嬉

しくてしかないね！」
「……それだけでしょうか？」
「まさか、それだけじゃないって君も分かってるくせにぃ♪」

ぼかぁ表面上はおちゃらけてるけどね。きちんと考えているんだよ？　なんたって連合の騎士である『紅き翼（アラルブラ）』の頭脳の一人にさせられていたんだから。

「まぁ、それもそうですな。では今回の『パーティー』の成果の報告を終了します」
「それでいいんだぞ☆」

さてさて、久しぶりの連合からの状況報告は本当にうれしいなぁ。１４ヵ月ぶりの参加なんてなると、情報が多いからね。細かいところも見逃せない。
ここはボクの腕の見せ所サ。薔薇十字騎士団（ローゼンクロイツオルデン）の１０（総長）＝１、カイン・ナイトロードのね。
それじゃあ、世界とか救っちゃうぞお！　なぁんて、ね。

第４１．５話「それぞれの１日・魔法世界編」（後書き）

余談

『震天裂空斬光旋風滅砕神罰活殺撃』とは、ＴＯＤ２のロニとＴＯＧｆ（テイルズオブデスティニー　テイルズオブグレイセス）のマリクの秘奥義にして、テイルズで最も長い漢字のみの技。

ちなみに二位はロニの『震天裂空斬光旋風滅砕神罰攻撃』。

ルビの『シェイクスプリットスラッシュウィンドクラッシュパニッシュディバイドエンド』は、マリクが『震天裂空斬光旋風滅砕神罰活殺撃』を発動する時の音声の一つ。

第四十二話「あくまで、王族ですから」

??Ｓｉｄｅ

「ねえ、結界に引っかからないの？」
「はは、彼の術式は完璧だからね。大丈夫だろう」
「当然だな。あいつはそういう奴だ」
「じゃあ、彼に会いに行きましょうか」
「遅れるなよ、ポンコツ」
「ポンっ……私のどこがいけないというのよ！」
「全部だ」
「痴話喧嘩も大概にすることだよ」
「「痴話喧嘩じゃない！」」

アルトリウスＳｉｄｅ

「む……？」
「……ん？」

新学期を翌日に控えた春休み最後の日。キティのログハウスで今晩の『桜通りの吸血鬼』襲撃計画を練っている際に、ふと違和感を覚えた。ある種、我（オレ）も結界に囚われているのでな。キティと同じく、結界を何者かが通過すればすぐに感づく。

だがこれは、結界を何者かが通過した……のか？　反応が薄さ故、通過と言うよりは結界が揺らいだようにも感じる。少なくとも魔力を持つ何者かが結界に何らかのアクションを起こしたことは

確定とみていいだろう。

「大きさ的にはヒトと同等。数は3。だが反応が薄いか？」
「キティも同じ感覚か。隠蔽系の何かを付与したか……」
「魔力を僅かに持つ誰かが来訪したか、と言うところか」

怪訝な表情でキティは言うが、我(オレ)も似たような表情だろう。この麻帆良の結界は、純然たる人には反応しない。我(オレ)やキティのような魔に属する存在であれば、これほどまでに薄い反応はありえん。

ならば自己の力を隠蔽して侵入したか、ハーフやクォーターが来訪した可能性も否めんな。面倒ではあるが、無視するわけにもいかんのが今のキティだ。

「仕方ない、調べるか。全く……厄介な呪いだ」
「まあ、頑張るがいい。我(オレ)には義理はありとて義務は無し」

茶々丸の用意した紅茶を一口すする。ほのかな甘みと香りが心地良い。それなりに紅茶を入れられるようにはなってきているが、茶々丸には敵いそうにない。才能が欠片しかないとこういう面では損ばかりだ。

まあ、ダイオラマ魔法球内で特訓すれば、すぐにでも追いつけるであろうが……それをすれば虚無感に襲われるのでやらん。

「グランドマスター。お客様です」

などと考えていたら、茶々丸が来客を告げに来た……ん？
キティへの客ならばともかく、我(オレ)にだと？
我(オレ)がここに来ることを知っているのは、従者か学園長くらいのものだ。学園長はいちいち会いに来ることはなく、従者ならばサプライズでもない限り連絡は入れる。そして、茶々丸が『客』ではなく

『従者』と言う。ならば、一体誰が来たというのか。

「誰だ？　特徴は？」

声にやや険を入れて茶々丸に問い質す。たとえ襲撃であろうと我（オレ）は負ける気は微塵もせんが、念には念を入れてもおかしくはあるまい。

「男女三人組で、ルイ、ベル、リオンと言えば分かると」

「……は？」

「ルイ、ベル、リオンです。それと、このような物を預かりましたが」

差し出された茶々丸の手には、山羊を模った銀細工があった。山羊の銀細工でルイ、か。なるほど、奴らか。何をしているのだ、トップツー。

「通せ。それとキティ、侵入者は捜しに行く必要はなくなったぞ。向こうから来たからな」

「は？」

キティがぽかんとした表情を浮かべる。それもそうであろうな。侵入者が自らこちらに来るなど、本来は有り得んからな。

だがまあ、奴らの性格を知れば、それもまた致し方ないとさえ思えてしまう。

「お通ししました、グランドマスター」

「なるほど、ここで教職に就いているという噂は本当だったか」

「久しいな、アラン君。それともアルトリウス君の方がいいかね？」

「久しぶりねって、あら、そんなに怖い顔しないで」

最初の発言は黒髪の美少年。男にしてはやや長い髪とその手の本が文学少年に見せている。
次は長い金髪をオールバックにした美形紳士。スーツに山羊の銀細工が光っている。
最後の紅一点は短い銀髪の美少女。金の瞳が怪しげな光を放っているようにも見える。

「……ああ、久しぶりだな」

そして、3人ともが我(オレ)の知り合いだ。こんなところで会う筈もない知り合いなのだがな。

「ルイ・サイファーにベール・ゼファーにリオン・グンタ」

美形紳士がルイ・サイファー、紅一点がベール・ゼファー、美少年がリオン・グンタ。
我(オレ)とキティ以外の魔法先生・魔法生徒を全てかき集めようと、この3人には勝てん。否、タカミチや学園長クラスでもなければ、リオンにすら勝てん。こいつらは、なぁ……

「知り合いか、アラン」
「そうだ。ルシファー、ベルゼブブ、ダンタリオンと言えばキティにも分かるな」

全員が全員、悪魔。それも内2人は超上位の『大魔王』で、残りも侯爵位だが実力は大公クラスの化物。我(オレ)も手を抜いたままでは、勝つことが困難なほどの存在だ。
そんな彼らが何故地上にいるか。それは……単なる暇つぶしだろう。

元よりルシファーは放浪癖があり、自らの治める魔界の大陸内のみならず、他の大魔王の治める大陸にまで足を延ばすこと数知れず。地上に遊びに出ることもよくあること。ベルゼブブは魔界よりも地上が気に入っており、お気に入りであるダンタリオンを引き連れてよく地上に出てくる、らしい。

この情報は前に出会ったときにダンタリオンが愚痴っていたのを聞いたものであり、真実かどうかは定かではない。

ちなみにこの大魔王2人の魔界での実力は2位と3位。魔界の創造主とされる魔界神を除けばトップ2。それなのに放浪とは不真面目にも思えるが、大魔王クラスは召喚されることもまずない挙句、魔界でもやることがあまりないらしい。

結果、放浪しない他の大魔王も、結局は暇を持て余していることが多いのだとか。

「なあ、アラン。これはじじいに連絡を入れるべきか？」

多少冷や汗をかきつつ、キティが声をあげる。そんなの勝手にしろ、と言いたいのだが、な。

「連絡はせんほうがいい。下手に正義馬鹿が動けば、麻帆良が消滅する」

「ははは、そこまではしないさ。街の一角が消し飛ぶくらいは御愛嬌だがね」

「貴様のことは言っとらんわ、ルイ。ベルが動けばどうなる？」

「ふむ、確かに、麻帆良程度ならば瞬く間に壊滅するかな」

はっきり言おう。大魔王最強のルシファーが動くよりも、次席のベルゼブブが動く方が被害は大きくなる。なぜならば、ベルゼブブの最も得意とする戦法が、超広域壊滅だからだ。まず挨拶代わりに球半径３００メートル程度が消し飛び、終いには半径が１０キロメ

ートル超の破壊が乱打されることとなる。
その圧倒的壊滅が、空間を食い散らかしたように見えるが故、『暴食』の二つ名を頂いているのだから。

「本気のベル君を止めたくば、アラン君でなければ駄目だろうな。そこの真祖の娘が封印から解き放たれれば、善戦は出来るかもしれないがね」
「そうか？　僕の見立てでは、広範囲にばらまいた攻撃で倒したと勘違いしたベルが、『なぁんだ、この程度なのねぇ』などと言っているところに、そこの真祖の全身全霊の一撃が当たって相打ちと見たが」
「あんたはどっちの味方なのよ、リオン！」
「もちろん僕は『秘密侯爵』だからな、事実と真実の味方だ」

痴話喧嘩ならば、外でやってほしいものだ。

「さて、何故この地に来たのか。答えてもらおうか」

少しイラついたような声で、キティが割り込む。それもそうか。自宅に突然最上位悪魔が現れ、自分勝手に過ごせば、よほどのお人好しでなくばイラつくのも当然。
我(オレ)も、他人の家であるが故どうとも感じていないが、自宅であれば追い返していた可能性もある。

「簡単なことだ。最近貴様がやった悪魔大量虐殺について聞きに来た」

リオンが本を捲りながら答える。しかし、悪魔大量虐殺？　そのようなことは……確かにあったな。ガトウが死んだときか。

１０数年程度ならば最近で済ませられるのは、長く生きてきた悪魔ならではか。我（オレ）にしても、１０年程度ならば最近とは言わずとも、少し前と言う。

「ああ、ガトウが死んだときの話か。ついイラっときたのでな、帰還不可にした上で全滅させてやった」

「なるほど。やはり貴様だったか」

納得したように頷くリオン……待て。我（オレ）だとは判明していなかったのか？

「あれだけの悪魔を一度に屠れるのはアラン君だけだと言ったではないか」

「それでも事実の確認をしておきたかったんでしょう？　子供なんだから」

「全力を出しても見た目が僕以上になれない貴様が言うか（ぼそっ」

「……ぁあ？」

リオンとベルの間に、絶対零度の緊張が走る……否、ベルから濃密な魔力が漏れ出し、小規模な竜巻を発生させている。リオンは手に持つ物を本から双剣に変え、こちらも臨戦態勢。我（オレ）とルイが咄嗟に多重結界を展開せねば、部屋はおろかログハウスが塵芥と化していた可能性も否定できん。

「静まりたまえ。『初めに闇ありき』」

大魔王筆頭の力の一端を垣間見られる闇属性の『初めに闇ありき』。それは一寸先も見通せぬ、濃密な闇の狂乱。『初めに』と付いている通り、手始めに使用する力試しの攻撃に過ぎん代物。だがそれでも、並の魔法使いでは耐えきることのできぬ『開幕にして終幕』

の一撃だ。
まあ侯爵級悪魔ならば耐えるのは不可能ではない上、ルイも手加減しているようだが……なのだが……結界による狭隘な閉鎖空間にそれほどのエネルギーを叩きこんだとなると、威力は跳ね上がるはずだが？

「「きゅ～～」」

荒れ狂っていた『初めに闇ありき』が失せた結界内に、ぼろぼろになったベルとリオンが転がっていた。もし万が一封鎖された結界内でなく、屋外でこれを受けたのならば、頭を冷やす程度で済んでいたであろう。

「ちょうどよく気絶したかな。それではこの二人を連れて魔界に帰るとしようかね」

ほい、と気が抜けるような声とともに二人を背負ったルイは、全員纏めての送還を始めていた。

「もう帰るのか？」
「私は、ほとんど見知らぬ他人の家に長々といるほど、厚顔無恥ではないつもりなのでね。まあ、偶然出会えたらその時かな」
「そうだな。我らの時はほぼ無限。またいずれ会えるであろう」
「次来る時は、連絡くらいはよこせ。貴様一人ならば、歓迎くらいはしてやる」

キティも、特に害はないと見たか、暴走しかけたベルとリオンはともかく、ルイは許容すると妥協したようだ。

「連絡手段などないから、また突然の訪問になるだろうがね。では」

その一言と共に、３人の悪魔はログハウスから消えていなくなる。
世界は狭く、だが広い。次に出会うは１年後か、１０年後か。運が悪ければ１００年会えないこともあるであろう。

だが、このときの我（オレ）は予想もしていなかった。
まさかあんなに早く再会するとは、な。

第四十二話「あくまで、王族ですから」（後書き）

悪魔の、王族ですから。むしろ大魔王。
魔界神（１人）＞大魔王（７人）＞魔王（３０人）＞魔界貴族（多数）＞魔界住人（無数というか残り）
魔界神と大魔王は名と設定は存在します。
今回出てきたのは

名前：ルシファー
人界名：ルイ・サイファー
種族：悪魔　七大魔王が一位　傲慢
見た目：悪魔形態でヤギ頭　人間形態でメガテンのルシファー（紳士）

名前：ベルゼブブ
人界名：ベール・ゼファー
種族：悪魔　七大魔王が二位　暴食
見た目：悪魔形態で蝿型　人間形態でナイトウィザードのベル

名前：ダンタリオン
人界名：リオン・グンタ
種族：悪魔　侯爵
見た目：悪魔形態不明　人間形態でＴＯＤのリオン・マグナス（普段は双剣の代わりに本を持つ）
備考：大魔王ベルゼブブの直下にしてお気に入り

です。人界名は自身が名乗ったものと付けてもらったものが存在します。よく放浪するルシファーとベルゼブブとダンタリオン、そして今回出ていませんが欲したマモンは自分から。それ以外は付けて

もらっています。そしてヘルマン伯爵と同じく魔界での本名の方もいらっしゃいます。今後出てくるかどうかは別にして。

第四十三話「桜通りの吸血鬼、初戦」（前書き）

「もしまど」に専念したとはいえ、まさか一カ月もたつとは予想外でした。

第四十三話「桜通りの吸血鬼、初戦」

大魔王の麻帆良訪問などという、バレればそれだけで麻帆良に激震が走るような事態から一夜明け。新学期が始まり、２－Ａの連中も３年生となった。

「３年Ａ組！」

「「「「ノースライト先生＆スプリングフィールド先生！！」」」」

騒がしいのはいつまでも変わらんな。まあ全員が全員、たった数週間で変わるような人間だとは思えんが。

「えと……改めまして。３年Ａ組の副担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の３月までの１年間、よろしくお願いします」

「改めるまでもないが、アルトリウス・Ｒ・Ａ・ノースライトだ。今年も１年、貴様らの担任を務めることとなった。今年が貴様らの中学生活最後の年だ。悔いの無いようにとは言わん。だが、後悔の無いように過ごすことだ」

言いながら、ざっとクラスに目を通す。昨晩キティが襲撃した佐々木まき絵以外、誰一人として欠席はない。このクラスは、事件に巻き込まれん限り、遅刻早退はともかく欠席は珍しい。特にキティはよく早退しているが、登校地獄が解呪されん限りいつまでも卒業できんのだから、我（オレ）は我の授業（すうがく）がボイコットされん限りは大目に見ている。

「さて。本日、身体測定が存在する。例年通り測定機材はこのクラスに運び込まれる。各自服を脱ぎ、測定を迅速に済ませることだ。

あまりに遅くなれば他クラスに迷惑がかかること、常に念頭に置くように」

質問は？　と問いかけるが、誰一人と反応しない。

「ああそうだ。佐々木まき絵が来ていないようだが、誰か知っている者はいるか？」

「まき絵は、今日身体測定アルから、ズル休みしたと違うか？」

古が少々能天気な発言で返してくる。だが、それで済ませるのは教師として失格だ。

「それはそれで良くないのだが。連絡できんほどの重病・重傷である可能性を否定してはいかんのでな」

携帯をポケットから取り出し、佐々木の携帯へ電話する。佐々木のルームメイトが事情を知らん以上、直に連絡を入れる以外に方法などないのだから。どちらにせよ、連絡がつながらんことは知っているが。

そして操作をする片手間、未だに教室から出ようとしないガキに声をかけてやる。我（オレ）のせいだなどと言われたくないのでな。

「スプリングフィールド教諭、いつまで教室に残るつもりだ？　よもや、女生徒の裸がみたいなどと妄言をぬかすか？」

「へ？　あ、ああ、そうですね！」

ようやく気付いたガキと共に教室から出る。同時に携帯からコール音が伝わ……らず、電波の届かないところにいるか電源が切れているとアナウンスがある。ち、電源を切っていたか……。

「電源を切っている、か。ありえんとは思うが、事件に巻き込まれていなければいいが……吸血鬼の噂もあると言うのに、厄介な」
「え、吸血鬼ですか？」

職員室に向かいながらの独り言に見せかけた言葉に、ガキが反応する。原作に会ったこの戦いを契機にキティの封印を解くのだからな。うまく思考誘導をしてやらねば。

誘導せずとも、このガキならば突っかかっていくであろうが、念には念を入れておこう。

「ん？　ああ、スプリングフィールド教諭は聞いていないのか？最近、女子寮で噂になっているらしいのだが」
「いえ、聞いたことないですけれど……女子寮の噂なんてどうして知っているんですか？」
「義姉が寮監なのでな。なんでも満月に近くなると、寮の桜並木に黒い布に包まれた血まみれの吸血鬼が出るらしい。通称、『桜通りの吸血鬼』だ」
「あ、あはは、さすがに吸血鬼だなんて……いるわけないじゃないですか。フィクションじゃないんですから」

やや視線を泳がせながら、そうガキは反論する。我（オレ）らが魔法使いでないが為、隠さねばならんと思い込んでいるが故の言動であろうが、明らかに騙しきれてない。

まあ、このガキの顔を立ててやるか。

「確かに『吸血鬼』部分は根も葉もない噂であろう。だが、そのような噂が立った以上、何らかの因果は存在する」
「ええと……例えば、そんな恰好をした不審者は目撃された、とかですか？」
「物分かりがいいな」

これで、佐々木まき絵の件を吸血鬼事件と結びつけやすくなったはずだ。と、和泉亜子が息を切らして走ってくる。佐々木まき絵を見つけたか……偶然知ったか。どちらでも構わんが。

「せ、先生、大変や！　まき絵が、まき絵が……！」
「慌てるな、和泉亜子。見たこと、聞いたことを簡潔に話せ」
「は、はい。まき絵が、桜通りで寝とるのを見つけて……」
「……今は何処だ。保健室か？」
「そ、そうや。でもどないすればいいのか分からのーて」

ちらりとガキに目配せする。その意味を悟ったか、大きく頷いてガキは早足に保健室へと向かう。

「和泉亜子。佐々木まき絵に外傷、若しくは着衣の乱れ等は有ったか？」
「あらへん。ただ寝とっただけや」

キティの吸血後、誰かにナニかされるようなことはなかったか。認識阻害等で隠蔽するよう指示して正解だったようだ。

「ならば大丈夫であろう。噂の『桜通りの吸血鬼』が不審者でありその被害者であった場合、それですまなかった可能性も無きにしも非ずなのでな」

我（オレ）の言葉に、最悪の場合を想像したか和泉亜子の顔色が悪くなる。安心させるためだったのだが、少々失策だったか。

「すまなかった。少々言いすぎたか」
「い、いいえ」

「まあ、風にあたるために外に出て、そのまま寝てしまったのかもしれんからな。クラスにこの件を伝えてこい。『桜通りで佐々木まき絵が寝ているのが発見された』と言えば、そこまで不安には思われんだろう」

「『桜通りでまき絵が寝ているのが見つかった』やね」

クラスで誰かが吸血鬼の話をした場合、キティは多少なりと煽るらしいからな。『桜通りで倒れていた』だけでも十分に噂になるであろう。夜遅くに外に出ることを控えようと考えるようになるはずだ。そして、プラン通りに進めば。最終的に、大停電日にネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが激突する。

失敗しそこまで行かなければ、致し方ないが大停電を利用して登校地獄を解呪するだけだ。『ネギ・スプリングフィールドに実戦経験をさせるため』と言うお題目の下に学園長が指示をした、大停電の決戦に至れんが為少々上から言われるかもしれんが、知ったことではない。

わざわざ3年になるまで待ってやったのだ。どうであろうと強行させてもらおう。

「“さあ、物語の幕は上がった。今回の物語の題目は『吸血鬼退治』。果たして少年は悪の吸血鬼に打ち勝つことが出来るのか？”」

「“『その結果は、まさに神のみぞ知るだろう』”……かナ？」

「“『おそらくそれは、神すらも想像できぬ戦いになるであろう』”だ」

数人の3－Aの生徒が保健室へと向かっているのをバックに、超鈴音が我(オレ)の下に歩いてきた。

「“現在噂になっている、『桜通りの吸血鬼』のご主人さん。茶々

丸の妹の作成を手伝ってくれないかな？”」
「“どの部分を手伝えばいいのかは知らんが、一応我（オレ）は貴様の協力者だ。いいだろう”」
「“することはとても簡単ね。妹達の疑似人格を正規の人格にする……つまりは引き取って育ててほしいだけだからな”」
「“その話はエヴァンジェリンに通せ。我（オレ）は手伝わん”」
「“そのエヴァンジェリンからの依頼ね。もう拒否権なんて存在しないよ”」
「“根回し済みか。ならば引き受けるしかあるまい”」

キティが我（オレ）に押し付けるのであれば、我（オレ）は引き受ける以外の道はない。大方厄介払いであろうが、主人（マスター）なのだからそのあたりはきちりとせねばな。

千雨Ｓｉｄｅ

新学期が始まったその日の夜、私は自室でＰＣに向かっていた。
現在の私たちの副担任にして魔法先生、ネギ・スプリングフィールドの力量を知るために。
キーボードをいじり、Ｅｎｔｅｒで実行。すると、ノイズとピンボケが多いが、紗夜の顔が映る。

「うし、起動できたぞ」
『え・と～。聞こえ・・か～？』
＜ノイズはあるが、聞こえてるぞ＞
『あは・～。よ・・たで・ね～、ち・・さん～』

超や葉加瀬が作った小型カメラをさらに改造し、超小型カメラにしてみた。最終的には滞空回線を作ってみたいんだが、現状ですら集音機能に無理があったか、どうしてもノイズが酷い。カメラもピントがあまり合わず、ボケてしまっている。

バレるかバレないかでいえば、今ですらまずバレないだろうけどな。

＜それじゃ、帰還してくれ。桜通りから高速で離れられたらどうにもならんけどな＞

『は・は～い。って、そ・・したら』＜こっちの方がいいですよね～？　ノイズがあるんだったら～＞

＜ああ。つっても、もう話すこともあんまねえけどな＞

＜それじゃあ～、今から戻りますね～＞

念話を止めて、傍らのベッドを見る。まるで眠っているかのような紗夜の肉体がある。無論寝ているわけではない。紗夜の本体は霊体で、普段は成長も老化もする人形に収まっているにすぎない。今はいわば幽体離脱状態で、カメラの設置の為に外に出ている。

「ただいま～」

「早いな、おい」

「『幻影猟犬（ティンダロス）』ですぐに戻ってきました～」

「……あの反則か」

あれは酷い。攻撃には転じ難いが、逃げの一点では最優秀と言わしめた形態。説明はまた今度な。片手間に解説できるようなモノじゃないんでな。

……私は誰に向かって言ったんだ？

アルトリウスＳｉｄｅ

眼下で、キティが宮崎のどかを襲う。そしてガキに止められる。
アルトリウスの最小の遍在である1千分の1の我（オレ）であるが、それでも所持魔力はナギの１０倍はある。これ以上分割できんのが玉に瑕ではあるが、限界であると割り切るしかあるまい。
残りの1千分の１９は哨戒中だ。今日は我（オレ）のシフトなのでな、致し方なくこうした――等と言っているうちに、キティが逃げたか。

「ガキが。裸のままの少女（のどか）を置いて追いかけるとは……クラスメートに預ければ安全などと思うとは、間抜けにもほどがある」

今は確かに周囲に人目はない。だがそれは、単に偶然に過ぎん。この辺りは女子寮の区域であるが為、滅多に男性は通りかからん。だがそれが、男と会わんこととはイコールでは繋がらん。
変質者がうろついている可能性、この麻帆良では命の危険があるが故ありえんが、麻帆良でなければその可能性も考慮し、責任持って送り届けねば貞操が危ない。

（良い魔法使いと悪い魔法使いがいるだって？　世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろ）
「救えんな。魔法使いも人である以上、善も悪もある。そこに目を向けられんとは……魔法使い云々以前に、人としての基礎教育が成っていないな」

遥か下方の発言を拾いつつ、首を軽く左右に振る。本当に魔法使いに悪がいないのであれば、貴様の父親は英雄なんぞにはなれんのだが？

まあの馬鹿は、英雄の称号を笑って蹴り飛ばすような奴だったが――今は一体何をしているのであろうな。生きていることは確実らしいが。

「……ん？　この探査魔法を無効化してガキに接近するのは、明日菜か？　否、今は生徒扱いせんが故、アスナか」

魔法完全無効能力者（マジックキャンセラー）であるアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。現在王のいないウェスペルタティア王国の、王位継承権保持者。そういえばガキも継承権持ちの王子だったな。

亡国の王位に価値があるかは知らんが。この頭のまわるバカなら、都合のいい人形になること請け合いだが。

「む、飛んだか。ならばこちらも、高度を上げねばな」

今の高度では、発見される恐れもある。遍在に関しては、我（オレ）以外のほぼ全員が知らんトップシークレット……でもないが、バレて試そうとする馬鹿が現れんとも限らんのでな。重要機密扱いとしている。知っているのは、奴と奴の人形くらいのものだ。

とりあえずは現在の高度３００フィート（約９１．４４メートル）から、１０００フィート（約３０４．８メートル）まで上昇するか。

「ほう、精霊召喚（サモンエレメンタル）か。それも８つ同時とは、相当だな。これはもしかすれば若干の評価修正をする必要性が僅かなりともあるかもしれんな」

魔力量としては十分以上。さらには召喚した精霊を自己の形に変

化させている。これが演習等であれば、見習いとしては満点を与えられる。だが、ここが一般人もいる場所であることを考慮し、常識の欠如等を含め赤点ギリギリになるか。空を飛ぶまでなら良くとも、目立つ精霊召喚を、認識阻害なしで使用するな。ここは風属性や闇属性による、視覚的に目立たない魔法を使用するべきだったな。

「風花・武装解除（フランス・エクサルマティオー）！」

「武装解除か。確かに満月とはいえ、麻帆良の結界と登校地獄の呪い。両者に蝕まれたキティでは、武装がなくては何もできんからな。選択としては間違いではないな」

武装解除して安心したのか、ガキはそれ以上の攻撃行為をしない。馬鹿が。わざと魔法薬に頼り、実力を下方認識させているかもしれんのにな。我（オレ）も大昔だがやったことのある手段だ。

わざとゆっくりと詠唱し、調子に乗って無防備に攻めてきたところに無詠唱魔法や体術を用いて仕留める。正義を盲信した自信過剰な雑種共は、意外とあっさりと引っかかる。

さて、マントを失ったキティでは、そこまで遠くまで行けんが……

「なるほど、誘いだしたのか」

キティの落ちた付近に、既に茶々丸が待機していた。キティの下へと屋上間を跳びつつ接近する。もう少し撃墜が遅ければ、茶々丸とキティが合流していたのか。

ならばなおさら、捕縛か攻撃を急ぐべきだったな。見習い程度が一人では……

（パートナーのいないお前は我々二人には勝てないということさ）

「それもどうかと思うが、まあ、あの程度のガキで従者がいないのは致命的だがな」

我（オレ）は違う。我（オレ）は無詠唱を完全にマスターし、体術でもトップクラス。さらには攻撃を受けた程度では詠唱を止めず、詠唱しながらの格闘すらこなせる化物（フリークス）だ。否、今の紗夜ならば、魔法と格闘の両立も可能か。

千雨？　あれは呪式士だ。呪式士は例え後衛であろうと、格闘と呪式を両立して初めて一人前だ。呪式を使うから動けませんなど、言い訳にならん。

「アスナが接近しているか。待機しておくべきか」

風の転移門（ゲート）にて、先程まで茶々丸がいた場所よりも上、給水タンクに立つ。さて、此度はどのような出で立ちにするか。金龍鱗の鎧に髪を逆立たせてギルガメッシュでもいいが……ローブと仮面のアランとするか。

影の倉庫から当時の衣装を引っ張り出し、装着する。

「コラー！　そこの変質者共！　ウチの居候に何すんのよ！」

「はぶぅっ！」

「ふむ、さすがは魔法無効化（マジックキャンセル）。キティの障壁程度ならば抵抗もなく完全に無視するか」

吸血を開始したキティに、ちょうど追いついたアスナの回し蹴りが炸裂。障壁を完全破壊してキティの顔を思い切り打ち抜いた。

我（オレ）の障壁も、本気で練り上げて数瞬耐えるのが限界だ。放出系ならば無効化限界速度を超えて無理を通せるが、障壁系はそうもいかん。

通常は障壁と放出ならば、同量の魔力で練られているのであれば障壁に分がある。が、魔法無効化能力者（マジックキャンセラー）相手となれば結果は反転する。障壁は固定術式で、放出は流動術式。この差がはっきりと出る

のだから。
　分かりにくければ、障壁をガラス板・放出を水流・無効化を巨岩と思えばいい。ガラス板ならば水流を止められるが、巨岩が飛んでくれば砕けるしかない。そして水流は、少量ならば巨岩で流れを変えられるが、十分に多ければ巨岩を押し流すことも可能となる。
　まあ、我（オレ）ほどの狂った量の魔力を持たん限り、まず無理だが。

「ふん……無事か、キティ」
「え、ええ！？」
「誰よアンタ！？」
「な、アラン！？　何故ここにいる！？」
「こんばんは、グランドマスター」

　キティの真横に移動しキティの無事を確認した瞬間、四者四様の返答が返ってきた。
　ガキは突然の乱入者に混乱、アスナは反射的な喧嘩腰の確認、キティは現在哨戒中の我が此処にいることに驚き、茶々丸は普通に挨拶をしてきた。

「下がれ、キティ。此処は引き受けよう」

　ちなみに今、我（オレ）は少々声を低めに変えている。そうでなくば、口調と声で誰か丸わかりだからだ。

「ぐ……引くぞ、茶々丸！」
「かしこまりました、マスター」

　涙目になりながらも素直に下がったキティと、それに従った茶々丸が屋上から飛び降りた（キティは飛べんが故、茶々丸に支えてもらっている）が為、此処に残されたのは我（オレ）とガキとアスナの三名の

み。

「……ネギ・スプリングフィールド」
「あ、貴方は誰なんですか！？」
「アランだ。一つ忠告しておこう」

会話を遮るように挟んできたガキに、親切にもこの姿での名を告げ、さらに続ける。

「従者（パートナー）を探すならば、覚えておくことだ。貴様と共に在ることは、死に近づくことに同じと」
「！？　どういうことよ、それ！　なんでネギについて行くと死に近づくのよ！」
「ククク……子は親を選べんが、そのガキの親がある種『最悪』だったというだけだ」

そう。『災厄の女王』アリカ・アナルキア・エンテオフュシアと『英雄』ナギ・スプリングフィールドの子供であるという事実こそが大問題。反アリカ派にすればアリカの息子であるネギやその従者は生かすべきではなく、『英雄』の後釜を探す者にすればネギの従者はネギの行動を束縛するのに重要となる。さらにはウェスペルタティア王国の非公式な第一王子であることも最悪に最悪を重ねる。政治的利用価値を求めた馬鹿な政治家どもにすら狙われるのだから。

「死が近いことは貴様にも言えるのだがな、アスナ・ウェスペｒ……否、神楽坂明日菜」
「……」
「っつ！？　また……！」

黄昏の姫御子としての本名により、あれより2年経とうと何故か未だに解けていない記憶封印に対し、揺さぶりをかける。アスナの

記憶復活も、木乃香の魔法バレと同じく早めであれば好ましい物ではある。
　これから先、面倒事に巻き込まれる前に戦力を増やしておかねばならん。それにはまず、最もガキの傍にいるアスナから変わってもらわねばならんのでな。

「早く古き貴様と会いたいものだ……ではな」
「ま、待ってください！　僕の父さんが最悪ってどういう事ですか!?」
「知りたくば、我(オレ)に認められることだ」

　それだけ言い、闇の転移門(ゲート)にて自室へと帰る。
　我(オレ)が認めるほどになれば、教えてやろう。貴様の母である元女王アリカのことも、英雄ナギのこともな。
　紅き翼(アラルブラ)内の暗黙の了解？　知るか。我(オレ)は紅き翼(アラルブラ)になど属していないのでな。

紗夜Ｓｉｄｅ

「まだまだ全然駄目駄目だな」
「ダメですね～」

　荒い画像をずっと見ていましたが、封印されて弱ったエヴァンジェリンさんにすら押されるようでは、評価は悪いですね。
　同じ西洋魔法使いとして見れば、術式はめちゃくちゃ、詠唱は遅い、詠唱中に攻撃を受ける可能性を考慮していない、制御が不安定、威力は魔力量頼り、何より首席卒業に浮かれてか自信過剰。たぶん

今の私と戦えば、一方的な戦闘（ワンサイドゲーム）で私の勝ちですね。

「ま、私は動かないからな。後は任せるぞ」

「そうですか～」

つい最近まで、私たちは動くことを許されなかった。理由は単純で、万一の時に対処できないならば、アルトさんの従者と名乗らない方がいいと判断したらしいです。ですがアルトさんから認められた以上は、別に名乗ろうがなにをしようが、自己責任でいいと言われましたから。

私は最初から関係者の立ち位置でしたが、これからは従者を名乗れます。

「私が動くのは、この戦いだろうな」

カタカタとキーボードを操作して、千雨さんはとある計画を出す。超さんの計画する、世界樹の大発光を利用した、世界規模強制魔法認識儀式。

これは、動くというより動かざるを得ないんじゃないでしょうか？　学園全体が戦場になりますよ？

「ま、そうとも言うな」

それから数分キーボードを叩いてから、ＰＣの電源を落とす。世界樹の発光までまだまだ時間は有りますからね。余裕は十分です。そうそう事件なんて起こらないでしょうから。

学園祭までに事件が2回、それも片方は大事件にまで発展することを、今の私たちが知らなかっただけなんですけどね。あはは……はぁ。

第四十三話「桜通りの吸血鬼、初戦」（後書き）

実は今月6日は一周年だったり。

第四十四話「エロオコジョ襲来、狙われる茶々丸」（前書き）

４００日記念ＵＰ
だからと言って何かあるわけではないですが。

第四十四話「エロオコジョ襲来、狙われる茶々丸」

昨日の今日では、流石にガキには刺激が強すぎたようだ。明日菜に荷物のように担がれて登校した……否、ただのお荷物か、物と精神の二重の意味で。

この程度で堪えるな、とはさすがに言えん。１０のガキには重すぎるが故。だが、真にナギを目指すのであれば、この程度は乗り越えなければ無意味。彼奴は１０でメルディアナを中退し、１５には一時的かつ疑似的だが、戦争を超えて魔法世界を救った。この程度を乗り越えられんのであれば、ナギの道を進むことは諦めることを勧める。

「はぁ……パートナーかぁ」

「「「「「……！？」」」」」

＜馬鹿だ！？＞

ザワリと空気が動き、千雨からの辛辣な念話が飛んでくるが……

……反射的に殴り飛ばしてでもその口を閉ざさせようとした我（オレ）は間違っていないと信じたい。そもそも、魔法の秘匿に最も重要なのは、このガキの息の根を止めることだと提案したい。それとも闇打ちするか？　既にこのガキがおらずとも世界（ネギま）は動く。

――――やめるか。無意味にも程がある。

「スプリングフィールド教諭。その言葉にどのような意味があるかは知らんが、今はＳＨＲ中だ。集中せよ」

「あっ、すみません……はぁ」

……我（オレ）にも限度はあるのだぞ。職務怠慢で新田教諭にでも突き出してやろうか？　一度死んでやり直せとまでは言わんが、精神的に

は生まれ変われ。
結局ＨＲが終わるまで元に戻ることはなく。落ち込んだままうわ言のように『パートナーかぁ』等と呟きながら職員室へと消えてゆく。
魔法秘匿意識が欠片もないとは、ある意味恐れ入るな。

「……ん？」

麻帆良結界に何者かが侵入したな。侵入者にしては小さいが、それでも見逃すわけにはいかん代物だ。おそらくは今屋上でサボっているであろうキティは、これから侵入者捜しで忙しくなるだろう。
二限は我（オレ）の数学。キティが一度たりとサボっていない唯一の授業である。まあこの仕事があるのであれば、校欠扱いにできるのでな。実際には既に二度ほど出席していないのだが。

「さて、授業を始める。全員席に付け」

そのようなことはどうでもいいか。だが朝から侵入者とは……侵入者は馬鹿なのか？　秘匿の欠片もない……否、学園都市の平日の朝ならば、住民の大半である学生がおらず人目は減る。ある意味では秘匿できると踏んだか？

放課後となり、未だに落ち込んでいるという邪魔以外の何物でもないガキは無視し、我（オレ）もキティと同じく侵入者を探すことにした。
薄れた原作知識にはこのようなことはあったか無かったか……既に判別がつかん。関連事項から推測するにも、時系列は順序が限界で何時かは既に思い出せん。だが、少々引っかかる

「まあいいか。思い出せんと言う事は、それほど重要ではないということ」

＜アルトリウス、少しいいかしら＞

＜ん？　どうしたリュミス＞

リュミスからの念話とは珍しい。緊急の用事というわけでもなさそうだが、一体何用だろうな。

＜オコジョ……それもオコジョ妖精をペットとして飼いたいなんて、ネギ君が言ってきたのだけれど。どうすればいいのかしら、これ＞

＜……飼いたいのなら飼わせろ＞

＜そう、分かったわ。なら許可を出しておくわ＞

なるほどなるほど。この麻帆良に侵入したのはあのオコジョ妖精――名は何だったか知らん――か。そのようなイベントもあったかもしれんな。

まあ最悪の場合は、我特製の“ｇｉｆｔ”でもやるか――ん？　あれは確か、脱走していたのではなかったか？

＜千雨＞

＜何ですかアルトさん＞

＜つい先ほど、ガキがオコジョ妖精を飼いたいと言ってきたらしいが、何か知らんか？＞

＜ん～？　そういやさっき、風呂に入ってるときになんか騒ぎがあったな……調べた方がいいか？＞

＜ああ。オコジョ妖精の素性を、可能な限り調べろ。手段は問わん＞

ネットやプログラミングに関しては、千雨に勝てる人間は片手で数える程度しかいないはずだ。筆頭は超や葉加瀬、神戸兄妹くらいか。

少し調べさせれば、奴の素性などすぐに丸裸だ。

＜『かもくん』なんて呼んでいたからな……『カモ君』で、それが愛称だとすれば、検索ワードは『カモ』と『オコジョ妖精』か？＞

＜否、ガキが特に騒がずに飼うなどと言っている以上、知り合いだろう。ガキの故郷、イギリスに焦点を絞れ＞

＜『カモ』『オコジョ妖精』『イギリス』……お、ヒットした。何々、アルベール・カモミール。２千枚の下着泥棒で収監――現在脱獄中！？＞

判決、有罪（ギルティ）。

＜リュミス。最悪は潰せ。誰も文句は言わん＞

＜私からも頼む。信用できない＞

＜聞いていたわ。被害が出た場合、ネギ君に全ての罪を被ってもらうわ＞

この世には、友情では語れない物が存在する。『軽犯罪だから』『友達だから』なんて言葉で許そうとするなど許されない。それは極論、友人が弁護するのならば、殺人鬼であろうと許さねばならなくなる。

刑を決定するのは裁判官。罪を軽くするために東奔西走するのは弁護士。友人や家族の証言は、私情が混ざるため、一切考慮されん。

まあ何が言いたいかといえば。第三者が犯罪であると認識すれば、友人と言う第二者の庇いたては当てにならん、ということだ。

＜ああ、木乃香を巻き込みそうなら黙認しろ。巻き込んだ直後に滅殺する＞

＜は？　い、いや、一般人への魔法秘匿には人一倍気を使ってるんじゃなかったのか、アルトさん！？＞

＜木乃香は一般人ではない。だが、未だ関係者でもない。言うなれば逸般人……否、これは関係者を指すか＞
＜もしも『偶然』、木乃香ちゃんに魔法のことが知られた場合、私たちは木乃香ちゃんに魔法を……正確には東洋呪術を教えてくれって頼まれたのよ。木乃香ちゃんの父親の、詠春君に＞
＜本来ならば我(オレ)がうまく魔法関係に巻き込むつもりだったのだがな。偶然を装って魔法事件に巻き込むことが思いのほか難しくて、計画が頓挫していたところだ＞

我(オレ)とリュミスの交互の説明に、千雨は頭痛でも起きたかのような念話状況に陥る。

＜あんたら、馬鹿だろ＞
＜関西呪術協会の跡取りの木乃香ちゃんが、魔法に関わらないようにする詠春君よりはマシよ＞
＜ヤクザの一人娘に家のことを何一つ教えず、別の組の管轄に送り出しているような状況と言えばいいか？＞
＜大馬鹿だ！？＞

千雨は変わらんな。どれだけ力を得ようと、自衛と趣味の為にしか使わん。その趣味の範疇で我(オレ)を超える発想が出てくるのだから凄まじい。

茶々丸　Ｓｉｄｅ

ネギ先生にマスターが接触してから三日経ちました。どうやらネ

ギ先生に助言者がついたようなので、可能な限り人目に付かない場所は避けて帰るように指示されました。

しかし、猫に餌を与える場所は人目があまりない。それでは餌をしばらく与えないべきでしょうか？　しかしそれではガイノイドである私はともかく、生物である猫には厳しい。

結論。可能な限り早急に餌やりを済ませて帰宅。これしかないでしょう。

ですが、少々時間をかけすぎたようです。人目はなくても、街中で襲うことはないと油断したこともあったかもしれません。

「……こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん」

ですが現に私は、二人と相対しています。ネギ先生の肩にはオコジョ。そういえば今朝も肩にいましたね。なるほど、これがネギ先生の助言者ですか。

「油断しました……でもお相手はします」

「茶々丸さん、あの……僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「……申し訳ありません、ネギ先生。ですがマスターの命令は私にとって第一ですので」

邪魔にならないように後頭部に刺されているネジ巻きを取り外し、お二人と相対します。何かぼそぼそと相談しているようですが、私にはよく聞こえませんでした。

「では、茶々丸さん……」

「……ごめんね」

「神楽坂明日菜さん……いいパートナーを見つけましたね」

私のこの言葉が、戦闘開始の合図となりました。

「行きます！　契約執行１０秒間！　ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

神楽坂明日菜さんがこちらに駆けてきます。しかしその速度は、以前見た神楽坂明日菜さんよりも３０％以上上昇。これは――

「速い。素人とは思えない動き……！？」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　光の精霊１１柱――」

呪文より推測。該当魔法、魔法の射手（サギタ・マギカ）。数は技巧を凝らさなければ１１。

状況から推測。神楽坂明日菜さんと戦闘しながらの回避は困難。

「ううう……『魔法の射手（サギタ・マギカ）　連弾・光の１１矢（セリエス・ルーキス）』！」

避けられない。それが結論。

魔法至近弾多数を避けられるほどの運動能力を私は与えられていない。例え避けても、追尾式であるためほぼ無意味と予測。ですので、結果は避けられない。

「……仕方ありません」

グランドマスターからの提案で、超と葉加瀬が取り付けた新機能。まだ試作段階なので使用しないことが好ましいそうですが、現状を回避する手段はこれしかありません。

「すいませんマスター、グランドマスター。もし私が動かなくなったら、これからは私に代わって猫に餌を与えてください」

右腕を前方に。内蔵された回路に魔力を配給。残り４１３ｃｍ。

〖呪式兵装起動。魔力エネルギー配給開始。Ｋ－ＲＣＨ－α２起動に必要な魔力エネルギー残量６１％……５５％……４９％……４３％……３７％……３１％……エネルギー残量イエローゾーンに突入〗

警告を無視してさらに注ぎ込みます。これでは起動できません。まだ燃費が悪すぎるとは聞きましたが、これほどとは。残り２４１ｃｍ。

〖２５％……１９％……１３％……エネルギー残量レッドゾーンに突入〗

あと少しなので再度警告を無視します。計算上、残量が０にはならないはずです。残り１７２ｃｍ。

〖７％……３％……呪式兵装使用可能〗

「や……やっぱりダメーッ！　戻れ！！」

ようやく防御呪式＜反魔禍界絶陣（マギカ・モダイ）＞発動。術式干渉により９８ｃｍまで接近し、軌道を変え始めた追尾式魔法至近弾の全弾消失確認に――

〖Ｋ－ＲＣＨ－α２の起動状態の維持が困難となりました。５秒後にスリープモードに突入します〗

「あ……」

視覚（カメラ）と聴覚（マイク）が機能停止。発声機能（スピーカー）も停止。関節の駆動も不可能。三半規管（バランサー）はまだ生きているので、私が前のめりに倒れようとしていることは認識できます。

ですが今倒れたら、ネギ先生に破壊されるかエネルギー切れかのどちらかで、再起動不能に陥る可能性が予測されます……本当に申し訳ありません、マスター、グランドマスター、超、葉加瀬。

……そして、さようｎ

〜スリープモード突入〜

第四十四話「エロオコジョ襲来、狙われる茶々丸」（後書き）

Q：神戸兄妹って誰？

A：葉加瀬が原作で言及している、茶々丸のＡＩを作成したと思われるＭＩＴの天才日本人兄妹。赤松健作品の一つ、『Ａ・Ｉが止まらない！』の主人公。

Q：Ｋ－ＲＣＨ－α２って何？

A：Ｔ－ＡＮＫ－α３と同じ、絡繰茶々丸の製造番号です。茶々丸は試作機でＴｙｐｅ０。詳しい説明は妹達（シスターズ）が登場する話の時にでも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6291n/

二度目の転生はネギまの世界

2011年10月11日07時03分発行